



奈良文化財研究所 七十年の軌跡

創立七十周年記念

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所

研究支援推進部の活動



新築した本庁舎 南東面外観 (2018年)



新築した本庁舎 南東面外観(夕景) (2018年)

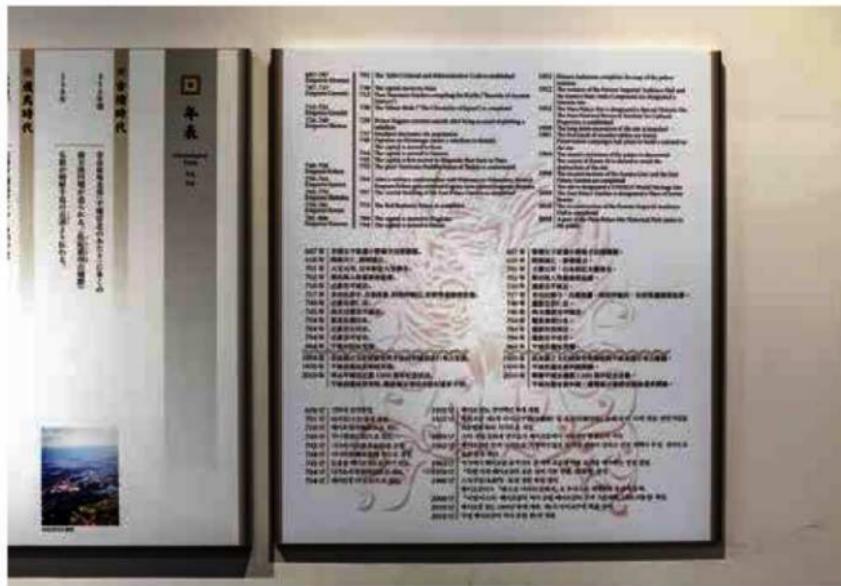
企画調整部の調査研究



西トップ遺跡でおこなわれた奈文研カンボジア事業 25 周年式典（2019 年）



カザフスタン共和国国立博物館でおこなわれた文化遺産国際協力拠点交流事業（2019 年）



平城宮跡資料館展示パネルの多言語化（2021年）



サーバールーム（2018年）



平城宮跡資料館秋期特別展「地下の正倉院展 式部省木簡の世界—役人の勤務評価と昇進—」展示風景（2016年）



平城宮跡資料館 夏のこども展示「ならのみやこのしょくぶつえん—土の中の花鳥風月—」ワークショップの様子（2019年）



平城宮跡大極殿院南門の定期的な高所撮影（2022年）



発掘調査の写真撮影機材（左：デジタル・右：フィルム）

飛鳥資料館の調査研究



前庭に設置した亀形石槽（酒船石遺跡）の複製（2020年）

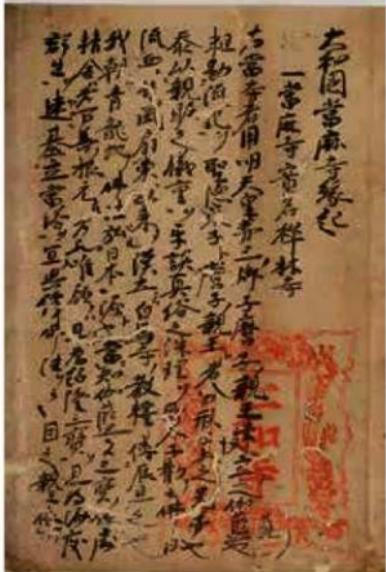


平成29年度秋期特別展「高松塚古墳を掘る—解明された築造方法—」（2017年）

文化遺産部の調査研究



三佛寺所蔵歴史資料の調査（納経堂の如法経 <妙法蓮華經卷第二 原寸大>）（2013年）



大和國當麻寺縁起（仁和寺所蔵典籍の調査）（2019年）



明治34年大極殿建標式の記録（岡崎家寄贈資料）（2019年）



北口本宮富士浅間神社の調査（山梨県 富士吉田市）（2015年）



料亭洲さき建造物調査（岐阜県 高山市）（2019年）



「京都中川の北山林業景観」の調査（京都府 京都市）（2018年）



「長良川中流域における岐阜の文化的景観」全観図の作成（岐阜県 岐阜市）（2013年）



「AR 宝幢・四神旗」の製作（2019年）



名勝法華寺庭園の実測（2017年）

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区の調査研究



藤原宮大極殿院東面北回廊および北面東回廊（飛鳥藤原第 195 次調査：北東から）（2018年）



藤原宮大極殿東面北回廊と大極殿後方東回廊（飛鳥藤原第 200 次調査：北東から）（2019年）



藤原宮大極殿院北側の遺構検出状況（飛鳥藤原第 208 次調査：北西から）（2021 年）



大極殿後方基壇 SX11650 の検出状況（飛鳥藤原第 208 次調査：北東から）（2021 年）



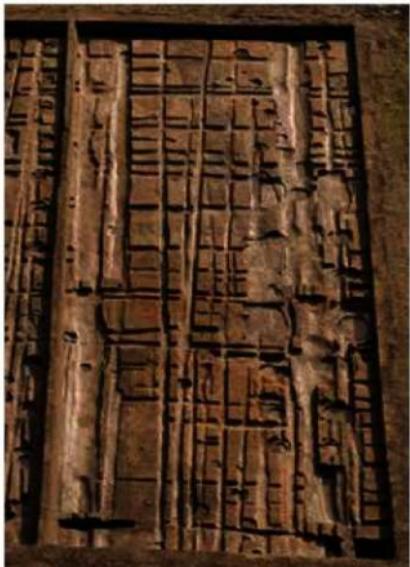
藤原宮朝堂院朝庭の状況（飛鳥藤原第189次調査：南から）（2016年）



大宝元年元日朝賀の様子復元（藤原宮大極殿院南門前で検出した幡旗遺構に、3分の1大に復元した幡旗を立てる）（飛鳥藤原第189次調査：南から）（2016年）



藤原宮東方宮街北地区の状況（飛鳥藤原第 183 次調査：北東から）（2014 年）



先行東一坊大路 SF3499 とそれに先行する道路
SF11320（飛鳥藤原第 183 次調査：北から）（2014 年）



大型据立柱建物 SB11300 の検出状況
(飛鳥藤原第 183 次調査：西から)（2014 年）



大官大寺南方の調査（飛鳥藤原第 203 次調査：北東から）（2020 年）



大官大寺南方の調査（飛鳥藤原第 206 次調査：北西から）（2021 年）



山田道の調査（飛鳥藤原第 194 次調査：東から）（2017 年）



木質遺物集中部（左）としがらみ列（右）（飛鳥藤原第 194 次調査：いずれも南東から）（2017 年）





漸田遺跡で検出した弥生時代後期末の大型円形墳丘墓（飛鳥藤原第 187 次調査：南西から）（2016 年）



キトラ古墳の石室南側で確認された遺構（飛鳥藤原第 173-8 次・第 178-6 次調査：南から）（2013 年）



2019年のシンポジウムで再検討した石神遺跡出土土器（上：南北溝 SD640 出土土器）（下：土坑 SK1285 出土土器）

都城発掘調査部平城地区の調査研究



平城宮東院地区の調査で見つかった大型掘立柱建物（平城第 633 次調査：北東から）（2021 年）



平城宮東院地区の調査で検出した厨関連とみられる大型の井戸（平城第 593 次調査：北から）（2018 年）



平城宮東方官衙地区の調査で検出した正殿とみられる大型基壇建物（平城第615次調査：北から）（2019年）



平城宮東方官衙地区の調査で完掘した基幹排水路（平城第621次調査：北から）（2021年）



平城宮いざない館の建設に先立つ発掘調査で検出した鉄鍛冶工房（平城第495次調査：南から）（2012年）



朱雀門に近い北側の調査で検出した鉄鍛冶工房の炉跡（平城第495次調査：南東から）（2012年）



奈文研本庁舎の建て替えに先立つ発掘調査で検出した秋篠川旧流路と一条南大路（平城第 530 次調査：西から）（2014 年）



秋篠川の旧流路の埋土からみつかった敷葉・敷粗朶（平城第 530 次調査：北西から）（2014 年）



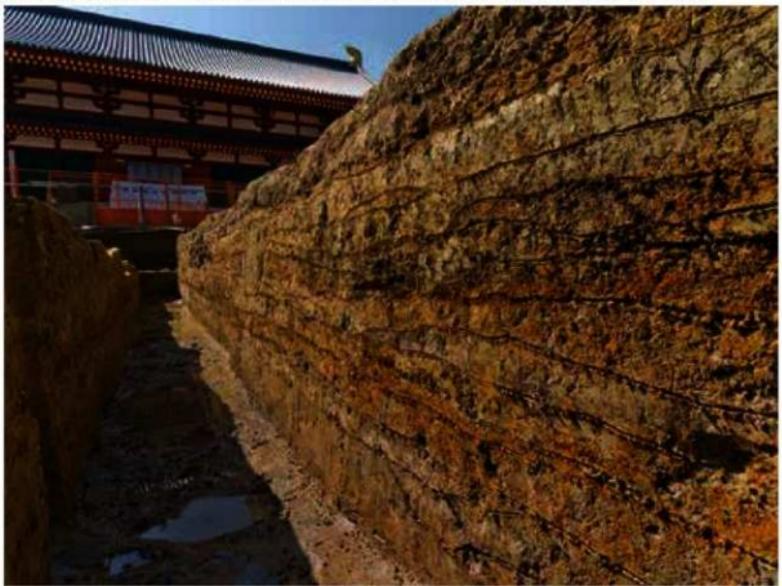
興福寺境内の調査で検出した鐘楼基壇（平城第 625 次調査：北西から）（2020 年）



興福寺東金堂院の調査で確認した東金堂の正面に開く回廊の門跡（平城第 640 次調査：北西から）（2021 年）



薬師寺東塔の解体修理に伴う発掘調査で検出した東塔基壇（平城第 536 次調査：北東から）（2015 年）



薬師寺食堂の調査で旧調査区トレンチで確認した基壇積み土の版塗（平城第 500 次調査：南から）（2013 年）



東大寺東塔の調査で確認した奈良時代の創建塔基壇（平城第 574 次調査：北東から）（2016 年）



住宅建設時に発見後、緊急調査をおこなった中山瓦窯の窯（第 523 次調査：南東から）（2014 年）



2017年に国宝に指定された「平城宮出土木簡」の一部

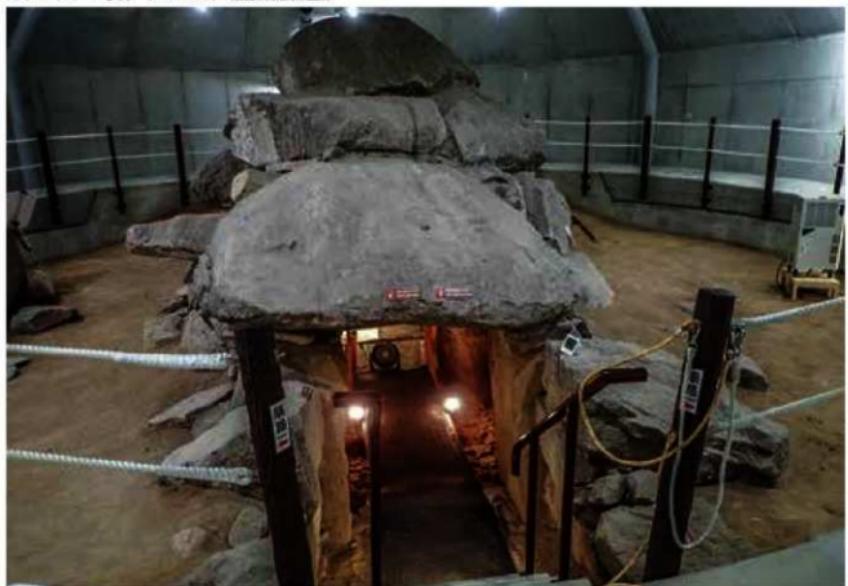


発掘調査の成果を反映させて完成した平城宮のコンピュータグラフィックス（2021年）

埋蔵文化財センターの調査研究



ガランドヤ1号墳（2020年）（日田市文化財保護課）



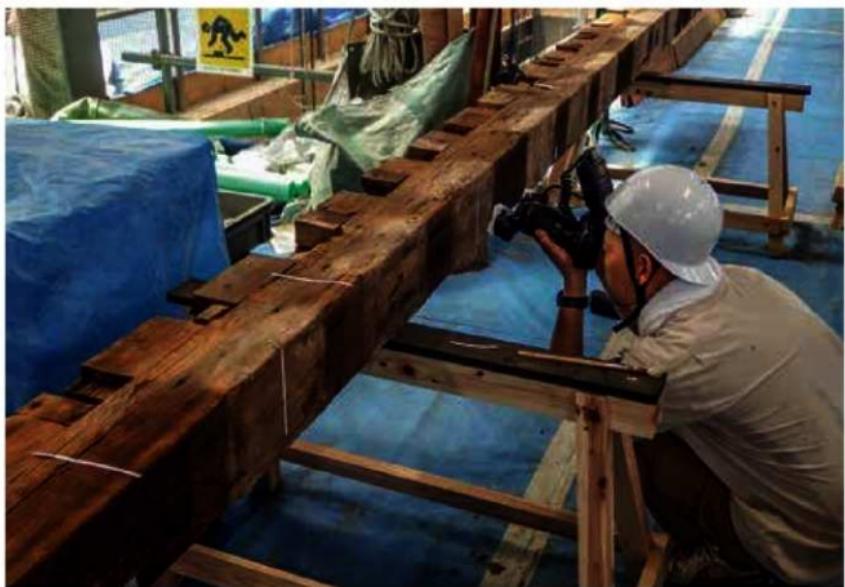
ガランドヤ1号墳保存施設内部（2022年）（日田市文化財保護課）



木製遺物の一時保管環境改善の効果（上：改善前 2014年 下：改善後 2015年）



高島海底遺跡 暴露試験回収の様子（2018年）（松浦市教育委員会）



年輪年代調査（薬師寺東塔）（2013年）



普及イベント「飛鳥の森を探る」の様子（2019年）



考古資料の三次元計測（2020年）



平城宮東院地区（平城第584次）調査での地質切取試料採取の様子（2017年）



東日本大震災の復興支援（2013年）



「研究員を展示！」のイベント（2019年）

復元された「大極門」



竣工した平城宮第一次大極殿院の大極門（2022年）



大極門の初重軒先（2022年）



大極門の正面（2022年）

奈良文化財研究所
七十年の軌跡
創立七十周年記念

はじめに

奈良文化財研究所は、文化庁の前身であった文化財保護委員会の附属機関として昭和27年(1952)に発足し、今年で70周年の節目を迎えました。設立の目的は、多様な文化財の宝庫である古都奈良の地において、彫刻・工芸・絵画・建築・遺跡庭園・古文書・考古などの専門家が共同して実物に基づく総合的な調査研究をおこない、その成果を文化財保護行政に反映させることにありました。発足時は美術工芸研究室・建造物研究室・歴史研究室・庶務室の4室、定員15名体制という小さな組織で、庁舎は現在、奈良国立博物館の敷地にある旧奈良県物産陳列所を改装したものでした。

当初は南都諸大寺の総合調査を継続的に実施しましたが、国土開発の波が奈良にも押し寄せると、平城宮跡・藤原宮跡などの国家的重要遺跡の保存が社会問題化したため発掘調査体制を整え、全国の埋蔵文化財問題に対処するため埋蔵文化財センターを設置し、飛鳥地域の保存に端を発して飛鳥資料館を開設しました。さらに、文化財保護法の改正などに応じて組織は拡充と変貌を遂げ、平成19年には独立行政法人国立文化財機構の一翼をになうこととなりました。現在の研究所は、企画調整部・文化遺産部・都城発掘調査部・埋蔵文化財センター・飛鳥資料館・研究支援推進部からなり、定員は81名、そのうち研究職員は58名で、研究職員の専門分野は考古学・文献史学・建築史学・造園学・保存修復科学・年輪年代学・環境考古学など多岐にわたっています。

この10年での特筆すべきこととしては、平成30年(2018)に懸案であった新庁舎が完成したのをはじめ、令和2年(2020)には庁舎内に国立文化財機構の文化財防災センターが開設され、研究所とも連携を強めていることがあげられます。また、遺跡の自然科学的調査技術の開発にも大きく貢献するとともに、木簡データベース・全国遺跡総覧など遺跡に関する電子情報の公開・充実を図るとともに、ブログ・動画等により広く市民向けの情報発信にも努めてきました。さらに、平城宮跡では大極門の復元、平城宮いざない館の展示・運営等で国営公園整備事業に協力し、高松塚古墳およびキトラ古墳では文化庁が行う調査・修理・整備・活用等の事業にも協力して、それぞれ大きな成果を上げています。

このような軌跡を振り返り、全研究職員の意見集約のもとに研究所の現状を冷静に把握し、自らに与えられた社会的使命(ミッション)に基づき、将来的な展望(ビジョン)と実現の手法(ストラテジー)を明確化する取組を進め、その成果を本書に収録しました。次の10年に向けて、時代の要請に的確に応えられる研究所として活動するため、所員一同、新たな挑戦と弛まぬ努力を続けていく所存です。

今後とも、皆様の変わらぬ御支援と御協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

令和4年11月

独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所長

本中 真

目 次

口絵

はじめに

目次

I. 奈文研の沿革とこの10年の概要

1. 奈文研の沿革	2
2. 新庁舎建設	5
3. 文化財防災の取り組み	7
4. 年表	8

II. 活動報告

1. 【研究支援部の活動】 研究支援の10年	10
2. 【企画調整部の調査研究】 (1) アジアにおける国際共同研究 (2) 文化財データベースの展開と文化財情報の多言語化 (3) 平城宮跡及び研究成果に関する教育普及への取り組み (4) 文化財担当者研修 (5) 文化財写真の10年 (6) 残存脂質分析を中心とした考古生化学的研究	11 14 17 22 25 28
3. 【飛鳥資料館の活動】 (1) あゆみ (2) 展示の取り組み (3) 魅力を増やす取り組み (4) キトラ古墳壁画関連 (5) 国際交流 (6) これから	31 31 33 33 34 34
4. 【文化遺産部の調査研究】 (1) 南都諸大寺・近畿地方を中心とした 古文書・典籍・歴史資料等の調査研究 (2) 文化財建造物の調査研究 (3) 文化的景観の研究 (4) 記念物の保存・活用に関する調査研究	35 38 41 44
5. 【都城発掘調査部 飛鳥・藤原地区の調査研究】 (1) 藤原宮の発掘調査 (2) 藤原京の発掘調査 (3) 飛鳥地域の発掘調査 (4) キトラ古墳の発掘調査	48 54 57 59
6. 【都城発掘調査部 平城地区的調査研究】 (1) 平城宮の発掘調査 (2) 平城京などの発掘調査 (3) 寺院の発掘調査	62 66 72
7. 【都城発掘調査部 調査成果の活用等】 (1) 平城宮・京 復元CG動画作成	79

（2）平城宮第一次大極殿院・東大寺東塔の復元研究.....	80
（3）国内研究拠点・研究会.....	81
（4）海外との共同研究.....	83
（5）出版物の刊行・公開.....	85
（6）展示・一般公開.....	88
（7）なぶんけんチャンネルによる情報発信.....	89
（8）その他.....	90
8. 【埋蔵文化財センターの調査研究】	
（1）環境調整による遺跡現地保存法の検討.....	92
（2）出土本製造物のより良好な保存手法の検討.....	98
（3）埋蔵環境下における金属製造物の腐食メカニズムの検討.....	101
（4）出土遺物の材質・構造調査.....	105
（5）年輪年代学の調査研究.....	108
（6）文化財の三次元計測.....	111
（7）遺跡探査の成果.....	114
（8）遺跡調査技術研究の動向と将来視点.....	117
（9）環境考古学の調査研究.....	121
（10）埋蔵文化財センターの10年	124
III. 奈文研 MVS	
奈文研MVS2022.....	126
IV. データ編	
1. 外国人研究者の招聘と来訪	
（1）招聘外国人研究者.....	134
（2）来訪外国人研究者.....	139
2. 研修事業	
（1）文化財担当者研修の実績.....	148
（2）各年度受講者数・累計受講者数.....	151
3. 主な出版物	
（1）奈良文化財研究所学報.....	152
（2）奈良文化財研究所史料.....	152
（3）研究報告.....	152
（4）埋蔵文化財ニュース.....	153
（5）飛鳥資料館図録.....	153
（6）飛鳥資料館カタログ.....	154
4. 講演会・現地説明会等	
（1）公開講演会.....	155
（2）特別公開講演会（東京講演会）	156
（3）現地説明会等.....	157
5. 飛鳥資料館特別展示・特別陳列	159
6. 組織の変遷・職員一覧	160
7. 歴代所長・副所長	171
8. 定員構成の変遷	171
9. 平城宮跡解説ボランティア登録者数	172

I. 奈文研の沿革と この10年の概要

1. 奈文研の沿革

(1) 構想・創立期

奈良文化財研究所（以下、奈文研）は、昭和27年（1952）に設立された。

文化財の宝庫である奈良の地で、各分野の研究部門が实物に即した、無形文化財、民俗資料、天然記念物を除いた他のすべての文化財を対象とした総合的研究を行い、その成果を文化財保護行政に反映させることが目的とされていた。このために次のような構想がなされていた。

- ① 無形文化財、民俗資料、天然記念物を除いた他のすべての文化財を対象とした総合的研究を行うために、美術部：絵画研究室、彫刻研究室、工芸研究室、工芸技術研究室、歴史部：古文書研究室、史跡考古研究室（繩文、弥生、古墳文化及び史跡の調査研究）、建造物部：建造物研究室、遺跡庭園研究室、ならびに庶務部の4部8研究室を設置し、一研究題目をこれらのさまざまな研究部門が共同して総合研究を実施する体制を構築する。
- ② 文化財の数量と質が他に抜きんでており、修理工事や発掘等の現場も近い奈良において、多様な文化財を対象とする实物に即した調査研究を行う。
- ③ 調査研究成果を文化財保護行政に反映させるために、当時の文化財保護委員会の記念物課、美術工芸課、建造物課とは極めて緊密な関係を持ち、研究機関としての独自の研究を行なながら、行政機関である文化財保護委員会にとって、文化財集中地区所在の唯一の附属研究所として、建造物の修理や指定のための調査、埋蔵文化財の緊急発掘調査、美術工芸関係あるいは名勝庭園、史跡の指定のための調査研究に協力する。

実際には、昭和27年の創立時、人員・予算面での制約から、美術工芸研究室（彫刻・工芸・絵画）、建造物研究室（建築・遺跡庭園）、歴史研究室（古文書・考古）、ならびに庶務室の4室が設置されたに過ぎなかった。とはいえ、奈良において、各分野の研究部門が实物に即した文化財の総合的研究をおこない、その成果を文化財保護行政に反映させるという研究所の方針にしたがって、「南部七

大寺の研究」を最も重要な研究テーマとして各部門が協力して取り組み、成果をあげることになった。

(2) 成長・安定期

昭和20年代の戦後復興期ならびに昭和30年代以降の高度成長期になり、種々の建設・開発事業が増加すると、埋蔵文化財を中心とする文化財の保存の問題が全国的な課題となり、それへの対応が奈文研に求められたことから、奈文研自体大きく変容していく。

発掘調査体制の充実 この時期、奈良県下においては、平城宮・京跡・飛鳥・藤原地域での史跡の現状変更申請や開発事業に対応するための発掘調査を実施する体制の構築が求められた。このため、文化財保護委員会は、これら地域での発掘調査に奈文研を当てるとした。この結果、奈文研のミッションに平城宮・京跡の発掘調査、飛鳥・藤原地域の発掘調査が加わることになるとともに、その実施のために、組織の充実が図られた。具体的には、昭和35年（1960）に平城宮跡発掘調査事務所、昭和38年（1963）には平城宮跡発掘調査部が設置された。ちなみに、設置当時の平城宮跡発掘調査部は、考古第1～第3、保存整理、史料の5調査室体制であったが、いくつかの組織改編を経ながら、昭和48年（1973）に考古第1～第3、造構、計測修景、史料の6調査室体制となり、定着した。また、昭和45年（1970）に平城宮跡発掘調査部に設けられた飛鳥藤原宮跡調査室は、昭和48年（1973）には飛鳥藤原宮跡発掘調査部となった。こちらは、当初は第1・第2調査室であったが、昭和53年（1978）には考古第1・第2、造構、史料の4調査室体制となつた。

埋蔵文化財センターの設置 開発事業に起因する埋蔵文化財保護の問題が激化する昭和40年代には、奈文研は、まだ脆弱であった地方の埋蔵文化財保護行政への支援・指導とその育成・水準向上に資することが文化財保護委員会・文化庁より求められた。このため、奈文研は、フィールドとしていた平城宮・京跡・飛鳥・藤原地域以外でも発掘調査をおこなうとともに、昭和41年（1966）からは、文化財保護委員会（のちに文化庁）とともに、「埋蔵文化財発掘技術者研修会」を開始した。昭和49年（1974）には、前年に文化庁が設置した埋蔵文化財対策調査会の報告「埋蔵文化財保護に関する当面の方策について」にもとづいて、埋蔵文化財調査に関する専門的な指導助言・専門職

員等の研修、埋蔵文化財に関する情報資料の収集整理提供、埋蔵文化財調査技術の開発などを目的とする埋蔵文化財センターが設置された。設置当初の埋蔵文化財センターの体制は、教務室、考古計画、測量の2研究室であったが、その後、教務室、研究指導部（考古企画、集落遺跡、遺物処理、測量、保存工学の5研究室）、情報資料室に拡充した。そして、埋蔵文化財センターが主催することになった「埋蔵文化財発掘技術者研修」は内容を充実させ、年間開催回数を増やすことにより、年間受講者数を飛躍的に増加させることになった。

飛鳥資料館の開館 この時期、開発事業の増加は、文化財ばかりでなく歴史的風土の保存問題も生じさせた。なかでも飛鳥地域については全国的に注目され、昭和45年（1970）には「飛鳥地方における歴史的風土及び文化財の保存等に関する方策について」が閣議決定された。これにもとづき、明日香村奥山に設置されることになった飛鳥資料館が、軒丸曲折を経て、奈文研に設置されることになり、昭和50年（1975）に開館した。

史跡の整備 昭和40年代に入り、平城宮跡をはじめ、遺跡を保護するために、史跡指定し、公有化することが全国的に進むと、史跡や遺跡を整備し、公園として活用する動きが重視されるようになった。史跡や遺跡の整備に必要な考古、建築、庭園などの調査研究部門を擁する奈文研は、大阪府百濟寺跡や宮城県高崎庵寺跡などで先駆的に指導をおこなってきたが、公有化が進む平城宮跡で整備を実践、その手法を確立するとともに、それを全国に展開していく役割が課せられた。遺跡の整備の研究は、昭和45年（1970）に平城宮跡発掘調査部に設置された、庭園研究の流れを汲む計測修景調査室ならびに、昭和52年（1977）に埋蔵文化財センターに開設された保存工学研究室が担当した。

国際的な交流と貢献 昭和43年（1968）、文部省の在外研究員制度を利用して研究員の海外への派遣が開始された。翌年、文化庁が招聘したデンマーク国立博物館保存科学部のB.B. Christensen氏が来所する。これが記録に残る最初の外国研究者の招聘・受け入れとなっている。こうして昭和40年代に開始された国際的な学術交流の中で、奈文研の研究の柱にもなる保存科学、写真測量、年輪年代学、遺跡探査などの欧米の先進的な研究や技術の導入が図られた。

1990年代以降には、中国社会科学院考古研究所（平成3年〔1991〕）、韓国国立文化財研究所（現・韓国国立文化財研究院（平成11年〔1999〕）などとの間で現在も継続する中・長期的な共同研究の協定書が締結され、従来の個人研究レベルのものに加え、機関間での学術交流・共同研究が進められるようになった。

これらの学術交流の一方、平成以降、国連教育科学文化機関（ユネスコ）などと協力しながら、文化的な面での国際的な貢献を積極的におこなっていくというの方針のもと、文化財保護に関する国際的な事業が進められていく。その嚆矢は、平成元年（1989）に開始されるワット・ラー遺跡（ラオス）の保存事業である。特に、平成3年（1991）に開発することになったアンコール遺跡群（カンボジア）に関する事業は、対象や事業主体などを変えつつ、奈文研の国際事業の中核として現在も継続しており、多大な成果をあげている。

以上、昭和30年代以降、わが国が高度成長などを経て経済大国となるなか激増した開発事業に起因する文化財保護問題への貢献が、奈文研には強く求められた。その結果、平城宮跡発掘調査部、飛鳥藤原宮跡発掘調査部、埋蔵文化財センターなど、埋蔵文化財に関する部門を中心組織、予算、人員が充実することになった。その半面、美術工芸、建造物、歴史の研究室への注力は見送られ、設立当初の大きな目的の一つであった美術、建築、歴史、考古等の各方面を総合した南都を中心とする社寺の研究や基礎的資料の収集、保存修理事業向上のための伝統的技術の調査研究などは停滞を余儀なくされた。これをもつとも象徴する出来事が、昭和55年（1980）におこなわれた美術工芸研究室の奈良国立博物館への移管といえる。そして、この時点で確立した研究所の組織体制は、平成12年度（2000）まで継続することになった。

このほか、平成に入ると、奈文研には、それまでに培われた文化財に関する経験や能力をもって海外の文化財の保護に対する貢献も求められることになった。

(3)独立行政法人化

国の行政改革のもと、平成13年度（2001）に、奈文研は東文研とともに独立行政法人化され、独立行政法人文化財研究所を構成した。

その目的は、文化財に関する調査及び研究並びにこれに基づく資料の作成及びその公表等をおこなうことにより、貴重な国民的財産である文化財の保存及び活用を図ることとされ（独立行政法人文化財研究所法第3条）、この目的を達成するため、次の業務をおこなうと定められた（同法第11条）。

一 文化財に関する調査及び研究を行うこと。

二 前号の調査及び研究に基づく資料の作成並びにその公表を行うこと。

三 文化財に関する情報及び資料を収集し、整理し、及び提供すること。

四 前三号の業務に関し、地方公共団体並びに文化財に関する調査及び研究を行う研究所その他これに類する施設（次号において「地方公共団体等」という。）の職員に対する研修を行うこと。

五 第一号から第三号までの業務に関し、地方公共団体等の求めに応じて援助及び助言を行うこと。

六 前各号の業務に附帯する業務を行うこと。

独立行政法人では、各法人の設置法のもと、5年間ごとの中期計画が定められる。平成13年度からの第一期中期目標では、文化財研究所は、我が国の文化財保護行政を遂行する上で必要な知識・技術の基礎形成に寄与するとし、次のことをおこなうとしている。

- ・不動産、無形を含む全ての文化財に関する基礎的・体系的研究
- ・文化財の調査研究方法の開発等に関する研究
- ・文化財を適切に保存し、効果的に活用するための調査・研究
- ・文化財の保存・修復に関する国際協力
- ・研究成果に基づく指導、助言、情報提供、公開、人材養成

この目的を実施するために、文化遺産研究部（建造物、歴史、道路研究室）、平城宮跡発掘調査部（考古第1～第3、造構、史料、写真資料調査室）、飛鳥藤原宮跡発掘調査部（考古第1～第2、造構、史料調査室）、飛鳥資料館、埋蔵文化

財センター（遺物調査技術、遺跡調査技術、古環境、保存修復科学、保存修理工学、文化財情報、国際遺跡研究室）それに管理部という体制となった。

また、平成18年度（2006）からの第2期中期計画では、

- 1 文化財に関する調査及び研究の推進
- 2 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進
- 3 調査研究成果の積極的な発信による社会への還元
- 4 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

という目的が定められるとともに、再度組織改編され、企画調整部（企画調整、展示企画、写真室、文化財情報、国際遺跡研究室）、都城発掘調査部（考古第1～第3、造構、史料研究室）、文化遺産部（建造物、歴史、景観、道路整備研究室）、埋蔵文化財センター（保存修復科学、環境考古学、年代学、遺跡・調査技術研究室）、飛鳥資料館、研究支援推進部となった。

平成19年（2007）、奈文研・東文研は、国立博物館（のちには、アジア太平洋無形文化遺産研究センターが加わる）とともに独立行政法人国立文化財機構を構成するが、上述した法律や中期計画上の奈文研の設置の目的や体制は、基本的に引き継がれていく。

独立行政法人化とともに、奈文研の設置の目的に、文化財の保存・修復に関する国際協力が明文化され、それに携わる国際遺跡研究室が設置されたのは、国立文化財研究所時代以来、奈文研が進めてきたカンボジア、中国、韓国、チリ（イースター島）等での国際的な協力を基礎としつつ、平成13年（2001）のアフガニスタン・バーミヤンでの大仏の破壊など、戦争、灾害、経済状況、文化財保護への関心の低さなどに起因する海外の文化財の危機に対して積極的に対応していくという国の方針を受けたものである。また、景観研究室の設置は、平成16年（2004）の文化財保護法改正により、文化的景観が文化財に位置づけられるとともに、重要文化的景観の選定による保護がなされるようになったことに対応している。

このように、独立行政法人化以降、奈文研の目的は、文化財保護をめぐる国の方針や施策をより一層反映するようになったといえる。

2. 新庁舎建設

(1) 新庁舎建設までの道のり

現在の奈良市二条町に所在する本庁舎は、奈文研にとっては3代目の本庁舎で、はじめて、奈文研のために新設された建物である。旧庁舎は1964年に建てられた奈良県立奈良病院を改修した建物で1980年から奈文研本庁舎として使用していたものの、老朽化が進み、耐震強度も問題となっていた(図1)。

本庁舎地区再開発に向けての準備は、2002年のワーキンググループを立ち上げはじめた。その後、敷地内の造構確認のための試掘やボーリング調査などをおこない、2012年には基本設計のための予算が認められ、建て替え工事への動きが本格化した。その後の動向は、下にまとめた通りである(表1)。

旧庁舎の解体に先立ち、仮設庁舎となるプレハブを平城宮佐伯門跡の東側に建設し(図3)、2014年1月には引越作業が完了した。2014年1月末、奈文研のOBを招いて旧庁舎のお別れ会を開き、旧庁舎に別れを告げた(図2)。

(2) 解体・発掘・情報発信

旧庁舎の解体は2014年3月からはじまった。年度が代わった2014年4月14日から、解体工事と並行して本格的な発掘調査を開始した。

表1 新庁舎建設までの道のり

平成14年(2002)	奈文研本庁舎地区再開発に関するワーキンググループの立ち上げ
平成18年(2006)	造構確認のための試掘調査(第400次 116-222)
平成23年(2011)	ボーリングによる土壤調査
平成24年(2012)	基本設計のための予算が認められる
平成25年(2013)	工事のための予算が認められる 本庁舎敷地内の試掘調査(第518次 729-9.13)
平成26年(2014)	仮設庁舎建設のためのボーリング調査 仮設庁舎建設、旧庁舎への移転。 本庁舎設置のためのボーリング調査 旧庁舎お別れ会(131) 解体工事ならびに発掘調査開始(第530次 2014.4.14-2015.2.18)
平成27年(2015)	設計変更のため追加の発掘調査(第546次 4.6-4.22。 第560次 10.19-10.30)
平成28年(2016)	鴻池組による建設工事開始 設計変更のため追加の発掘調査(第565次 3.22-5.16)
平成29年(2017)	配管箇所のため追加の発掘調査(第588次 6.5-6.15)
平成30年(2018)	新庁舎竣工記念式典(6.20)

解体工事と発掘調査の進捗については、奈文研ホームページに週1度のペースで「奈文研本庁舎発掘だより」を掲載し、周辺住民や一般市民への情報公開をはかった。この発掘だよりによる発信は、2015年2月18日に調査が終了するまで、39回を数えた。

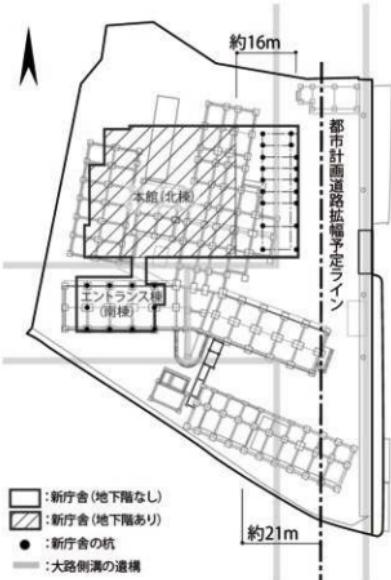


図1 旧庁舎と新庁舎、造構の関係

表2 建物概要

建物名称	奈良文化財研究所本庁舎
所在地	奈良県奈良市二条町二丁目9番1号
敷地面積	8878.94m ²
建築面積	2812.45m ²
延床面積	11387.06m ²
階数	地上4階・地下2階
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造(鉄骨造併用構造) 杭・直接基礎併用
最高高さ	14.899 m (15 m 高度地区)
発電機容量	105KVA
設計	株式会社日本設計、株式会社総合設備計画
監理	株式会社内藤建築事務所
施工	株式会社鴻池組、不二熱学工業株式会社、 株式会社トーエネック
工費	約60億円
工期	2016年5月16日～2018年3月30日

発掘調査の進展に伴い、重要遺構が発見されるたびに記者発表をおこない、その回数は4回に及んだ。1度目は敷葉・敷粗栄造構の発見について（2014年7月4日）、2度目は地震痕跡の発見（8月22日）、3度目は斜行大溝（運河）で見つかった切り株の発見（10月2日）、4度目は「奈良京」木簡をはじめとする発掘調査の成果について（2015年3月19日）である。なお、発掘調査の内容については、本書68~70頁を参照されたい。

（3）遺構の保存と新庁舎

このような重要遺構の発見を受け、奈文研は文化庁とも協議のうえ、条坊道路に関わる遺構については保存する方針を固め、設計変更をおこなった（図1）。本館（北棟）部分については、旧建物によってすでに壊されている部分があることや、数基の井戸を除いて、奈良時代の遺構が検出されていなかったことから、この部分については地下を建設し、遺構は記録保存することになった。

一条南大路の路面上に建設されたエントランス棟（南棟）は、遺構保護に配慮し、旧庁舎の基礎杭の位置に合わせて新たな基礎杭を打設した。新庁舎は設計変更より当初計画から大幅に床面積が縮小することになったが、重要道路の保存はかなった。この設計変更のための追加の発掘調査も必要となり、当初の計画から2年遅れとなる2018年3月によりやく竣工、6月には関係者を招いて竣工式が挙行された（表2）。

（4）遺構表示と景観に配慮したデザイン

特別史跡平城宮跡に隣接する奈文研新庁舎（図4）は、平城宮跡と一体の景観を生み出すような落ちていた色調と古代建築のような重厚さを意識したデザインとなっている。

本庁舎のエントランスは、平城宮佐伯門へと続く一条南大路が表現され、一条南大路と西一坊大路の道路側溝を玉石敷や石敷で表現し、古代都市平城京の大路の規模が体感できる仕掛けが施してある。また、地面をよく見ると、一条南大路を斜めに走る細い金属のフラットバーが2条埋設されている。これは平城宮への物資運搬用の運河とみられる斜行大溝の両溝肩を模式的に示している。

エントランス棟の1階ロビーには、発掘調査で出土した遺物や、切り取った敷葉・敷粗栄、土層転写した地震



図2 解体前の奈文研旧庁舎（2013.4.12撮影、東から）



図3 プレハブの仮設庁舎（2014.5.2撮影、西から）



図4 奈文研新庁舎（2018.5.1撮影、南東から）

痕跡などを展示し、一般の方々にも見ていただける展示スペースとしている。

新しい奈文研本庁舎は、平城京の重要な遺構を保存し、遺構表示をデザインに取り込むことで、遺跡と共存をはかる奈文研らしい建物となった。機能的にも国宝に指定された木簡を収める収蔵庫や、文化財用としては最大規模のCTスキャナを備え、日本屈指の文化財研究の拠点として、今後ますますの活用が期待される。

3. 文化財防災への取り組み

平成23年（2011）3月11日に発生した東日本大震災では、岩手県から千葉県に至るきわめて広範な地域で地震とそれにともなって発生した巨大津波により甚大な被害が生じた。国立文化財機構は文化庁の要請を受け、「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」を組織して文化財レスキュー事業を実施した。奈文研では、この文化財レスキュー事業に多くの研究員を派遣して、被災文化財の救援をおこなった。奈文研は、創立の趣旨にもある通り、寺社、遺跡、庭園等の実物に即したフィールドでの調査研究を総合的におこなうことをその研究スタイルとしている。このスタイルが文化財レスキューにおいても全所をあげて取り組むことができた一因ともいえよう。

奈文研が関わった文化財レスキュー事業において特筆されるのは、奈良市場冷蔵株式会社の全面的な協力による冷凍倉庫と被災資料の輸送の迅速な手配の確立、奈文研の大型真空凍結乾燥機をはじめ、全国の埋蔵文化財センター等がもつ真空凍結乾燥機による大量の水損紙資料の乾燥処置を実施できたことである。さらに奈文研では、乾燥処置後の被災紙資料のドライクリーニング作業も「書物の歴史と保存修復に関する研究会（書物研）」によっておこなわれた。

いっぽう、文化庁は平成23年4月に東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて通知を出し、復旧・復興事業の推進と埋蔵文化財の保護のバランスを図りながら、発掘調査を進めていった。奈文研ではこの発掘調査に研究員を派遣するとともに、発掘作業の効率化を促進するため地中探査、三次元測量、デジタル写真撮影等の最新の科学技術を用いた支援もおこなっている。

復興のための発掘調査によっては貝塚から膨大な量の動植物資料が出土し、その整理作業と調査研究に対する専門的な支援が必要となった。奈文研埋蔵文化財センターの環境考古学研究室において十年余りの時間を費やしてこれらの膨大な資料の整理と報告書の作成に大きな貢献をしたことも特筆されるものである。

文化財レスキュー事業は平成25年（2013）3月をもって終了した。事業の終了にあたっての事業報告会において、この文化財レスキュー事業で連携した救援委員会の枠組

みを維持し、次にくるであろう災害に備えようという申し合わせがおこなわれた。平成26年（2014）、国立文化財機構は文化庁からの助成金を受け、文化財防災ネットワーク推進事業を開始した。この事業は東日本大震災の文化財レスキュー事業で培われた多くの関係機関とのネットワークをより拡大して「文化遺産防災ネットワーク推進会議」を組織し、我が国の文化財防災体制の構築を団結することを趣旨としたものであり、奈文研もこの事業に参画した。

この事業における主要な取り組みは、災害時の活動ガイドラインの作成、地域防災ネットワークの確立促進、文化資源情報の収集と文化財防災への活用、保存科学および修復技術に基づく文化財レスキューの技術開発、普及啓発等である。奈文研では、この文化財防災ネットワーク推進事業において、中四国地方の地域防災体制の確立の促進、環境考古学調査マニュアルの作成、災害痕跡データベースの構築、被災資料の保存科学的研究、水損紙資料の応急処置等の研修等に取り組んだ。

平成30年（2018）のブラジル国立博物館の火災、平成31年（2019）のノートルダム寺院の火災、令和元年の首里城火災と衝撃的な文化財に関連する火災が相次ぎ、我が国においても文化財の防火、防災、防犯の必要性があらためて強く求められるようになった。このような背景の下、6年間にわたり実施されてきた文化財防災ネットワーク推進事業の成果を受ける形で令和2年（2020）10月に国立文化財機構に文化財防災センターが設置されることとなった。

文化財防災センターの本部は、奈文研の施設内に置かれている。本部所属の研究員に加え、国立文化財機構の2つの研究所と4つの国立博物館の研究員の中から文化財防災プロジェクトチームを併任し、文化財防災センターの事業に協力しており、奈文研からも13名の研究員がプロジェクトチームを併任している。また、西日本で大規模な災害が発生した場合には、奈文研は西日本ブロックの中核拠点を担うことになっている。奈文研では、考古学、歴史学、建築史学、庭園学、保存科学、情報学等の多様な専門家が共同して文化財保護のための総合的な研究に取り組んでいる。したがって、奈文研は歴史文化財の防災に留まらず、建造物、史跡、名勝等の不動産文化財の防災に対しても果たすべき役割は大きいといえよう。

4. 年 表

表3 奈良文化財研究所略年表

年	事 項	関連事項
昭和24年(1949)		法隆寺金堂焼失後、翌年文化財保護法が制定される。
昭和27年(1952) (4月)	奈良文化財研究所設立。	(3月) 平城宮跡が特別史跡に指定される。
昭和28年(1953)	春日野庁舎へ移転。	文化財保護委員会による平城宮跡の発掘調査始まる。
昭和29年(1954)	奈良国立文化財研究所に改称。 唐招提寺を皮切りに南都諸大寺の調査開始。	
昭和31年(1956)	奈文研による飛鳥地域での発掘調査開始(飛鳥寺・川原寺・飛鳥板蓋宮等の調査。~1959年)	
昭和35年(1960)	奈良市佐紀東町の平城宮跡に発掘調査事務所を設置。	
昭和37年(1962)		平城宮跡西南部の指定地域に電車検車区の建設計画が浮上し、保存運動がおこる。追加指定と遺跡国有化の方針決定。
昭和38年(1963)	平城宮跡発掘調査部設置。	
昭和41年(1966)		国道バイパス工事にともなう藤原宮跡の調査に奈文研協力。
昭和43年(1968)		文化庁が発足。その付属機関となる。
昭和44年(1969)	奈文研による藤原宮跡の継続的な発掘調査開始。	
昭和45年(1970)	平城宮跡資料館を開館。	政府が「飛鳥地方における歴史的風土および文化財の保護などに関する方策」を閣議決定、飛鳥地区的遺跡の調査・保存を国家的事業と位置づける。
昭和48年(1973)	飛鳥藤原宮跡発掘調査部設置。	
昭和49年(1974)	埋蔵文化財センター設置。	文化庁埋蔵文化財対策調査会設置。
昭和50年(1975)	飛鳥資料館開館。	
昭和55年(1980)	飛鳥藤原宮跡発掘調査部の組織充実・増員。 奈良国立博物館の仏教美術研究資料センター設立にともない、美術工芸研究室を移管。奈良市二条町2-9-1に庁舎を移転。	明日香特別立法の公布。
昭和63年(1988)	飛鳥藤原宮跡発掘調査部庁舎を橿原市木之本町94-1に新設。	
平成10年(1998)		平城宮跡を含む古都奈良の文化財がユネスコの世界遺産に登録される。
平成13年(2001)	奈良国立文化財研究所と東京国立文化財研究所の統合。独立行政法人文化財研究所となる。文化遺産研究部設置。	
平成18年(2006)	従来の組織再編にともない、企画調整部設置。文化遺産研究部を文化遺産部に名称変更。平城宮跡発掘調査部と飛鳥藤原宮跡発掘調査部を統合し、都城発掘調査部を設置。	
平成19年(2007)	独立行政法人国立博物館と統合し、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所となる。	
平成22年(2010)	管理部を改組し、研究支援推進部を設置。	
平成23年(2011)		(3月) 東日本大震災発生。奈文研は文化財レスキュー事業、復旧・復興事業にともなう埋蔵文化財発掘調査事業等に携わるとともに、被災文化財救援等に本格的に取り組む契機となった。
平成28年(2016) (5月)	新築本庁舎着工。	文化庁のキトラ古墳壁画保存管理施設開設。奈文研は飛鳥資料館を中心に施設の管理運営や壁画公開事業等に協力。
平成30年(2018)	(3月) 新築本庁舎竣工。(6月) 本庁舎竣工記念式典挙行。(9月) 平城宮跡内の仮設庁舎(2013年設置)から移転、業務を開始。	(3月) 国営平城宮跡歴史公園第1期間園。
令和2年(2020)		独立行政法人国立文化財機構文化財防災センター発足。奈文研内に本部を設置。
令和3年(2021)	都城発掘調査部の各研究室を平城地区、飛鳥・藤原地区に設置。5研究室体制から10研究室体制となる。	

II. 活動報告

1. 研究支援推進部

研究支援の10年

研究支援推進部は、管理的業務を中心とした管理部の体制から、各研究部・センターの特色ある調査・研究等を積極的・機動的に実現するための事務組織として2010年4月に改組設置された。この改組により、総務課、連携推進課、研究支援課の3課体制となり、新たな外部資金の獲得、外部機関・企業・地域等との連携及び広報業務の強化が図られた。

翌2011年には総務課の会計係と用度係を財務係に統合し、2013年には施設係を総務課から研究支援課へ移管するなど、研究所を取り巻く環境の変化に柔軟に対応できる体制となった。

現在、研究支援推進部の所掌は、総務・人事、会計・資産管理、施設・設備の維持管理をはじめ、研究所の運営・研究推進に係る企画（図5）、事業計画の策定、広報、地域連携、情報基盤の整備、資料の展示公開・活用や関係図書に関する事務等の広範な業務を担っている。組織運営においては、運営費交付金の削減に伴う自己収入の獲得が強く要請される状況において、研究員への積極的な外部資金獲得を支援するための情報提供や知的財産の管理・活用により、科学研究費助成事業や受託研究費、寄附金等、外部資金の安定した獲得に寄与し、組織運営を支えていくことが当面の課題である。

さらに、中国・韓国・カンボジア等のアジア諸国における文化遺産保護の国際協働、地方公共団体等の文化財担当者を対象とした専門研修の庶務、特別史跡平城宮跡地内の大極殿・朱雀門・平城宮跡資料館等を解説するボランティア組織の運営も継続しておこなっている。

また、文化庁からの委託により、平城宮跡と藤原宮跡地内の歴史的環境維持・整備業務、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区に設置されている「文化庁キトラ古墳壁画保存管理施設」の管理事務も担っている。

2020年10月には国立文化財機構に文化財防災センターが設置された。同センターの事業拠点が研究所内に設置され、同センターと連携し文化財防災の支援も行っている。

2022年、研究所が創立70周年を迎えるにあたり、これ

までの歩みを振り返り、①社会的使命を明確にし（Mission：ミッション）、②今後どのような姿を目指し（Vision：ビジョン）、③その実現のために何をおこなうのか（Strategy：ストラテジー）を本書において概要を公表した。

研究支援推進部では、研究所の目指すべき持続可能な事業展開とビジョンの実現を図るために取り組みとして、1) 持続可能なガバナンス体制の強化、2) 健全な研究所運営に必要となる働き方改革、人材育成の推進、3) 財源の多様化及び自己収入額の増額、4) 他の調査研究機関及び研究者との連携・協働を積極的に進めるための仕組の整備、5) 将来を見据えた持続可能な事業・運営の評価及び見直しを図るために仕組の整備、を進めることを明らかにした。

研究支援推進部は、所長の強いリーダーシップと各研究部・センターとの連携調整を深めることにより、社会情勢の変化に応じた諸課題に迅速かつ柔軟に対応し、国民のみなさまの信頼を得ることで、今後も戦略的かつ効率的な組織として研究所の発展を支え続けたいと考えている。

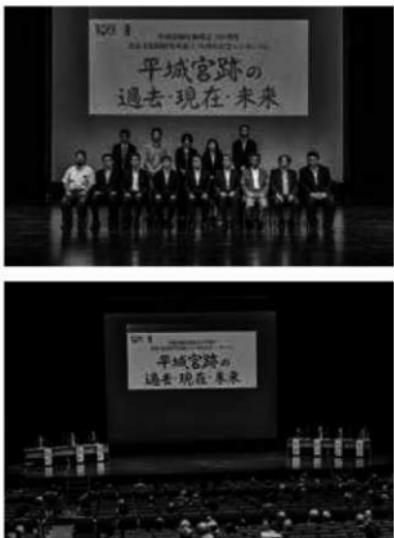


図5 平城宮跡史跡指定100周年 奈良文化財研究所創立70周年記念シンポジウム

2. 企画調整部

(1) アジアにおける国際共同研究

1) カンボジアにおける共同研究

経緯 1991年、カンボジア内戦が終結した。つづく1993年には、東京会議でアンコール遺跡保存修復に関する国際協力の必要性が確認され、東京宣言が採択された。これを受け、文化庁管下にあった奈良国立文化財研究所（当時）は、アンコール文化遺産保護に関する共同研究事業を開始することになった。1998年まではパンテアイ・クデイ遺跡周辺で遺跡探査を中心とした事業を、1999年から2001年にかけてはタニ窓跡群A6号窓の発掘調査をおこなった。

現地の文化財保護組織であるAPSARA（アンコール・シェムリアップ地域道路保護整備機構）との協議の結果、2002年からの新たな調査対象地に西トップ遺跡が選定された。西トップ遺跡はアンコール・トムの遺跡群の中でも遺跡存続年代が比較的の長く、仏教的な要素が濃いことがうかがわれるものの当時未調査であった遺跡で、アンコール・トムの中心寺院であるバイヨンから南西に500mほどの位置にある。西トップ遺跡の調査は、2003年の第1次発掘調査を皮切りに、考古学・建築史学・保存科学・美術史学的な方法による現地調査をそれぞれ実施した。調査によって、西トップ遺跡は中央祠堂・南祠堂・北祠堂の3塔と、その正面に仏教テラスが張り出し、これらの構造物をラテライト石列と結界石が取り囲む構造であることが判明した（図6）。

西トップ遺跡修復事業 2008年5月、中央祠堂東側破風部分の石材40個あまりが落下した。その前々年にカンボジア側により中央祠堂頂部に繁茂していた樹木が伐採されたため、樹根が抱えていた石材が不安定となったことにより崩落したとみられる。この石材落下に伴って、かろうじて均衡を保っていた中央祠堂上部の石材による構造物全体が不安定化した。急速、APSARAと協議を重ね、国立文化財機構第3期中期計画（2011年度から2015年度）より修復工事に着手することが決定された。修復にあたっては、中央祠堂と比べ小型の南北両祠堂から着手し、現

地カンボジア人スタッフの練度を高め、続いて北祠堂、中央祠堂の順に解体修復を進めることとした。

南祠堂の調査修復 南祠堂は軸部・上成基壇・下成基壇からなる。屋根に当たる屋蓋部はほとんどが失われ、軸部は南に約19度傾いていた。上面から順に1層ずつ平面図作成、石材番付、解体を繰り返し、軸部・上成基壇・下成基壇と解体を進めた。下成基壇最上面は砂岩敷石面であったが、不等沈下を起こしていた。基壇内を調査すると、基壇土が粗砂であることが判明した。この基壇土を発掘すると中央祠堂下成基壇の南階段が検出された（図7）。このことから、先行して中央祠堂が建立され、その後に南祠堂が中央祠堂南階段を覆う形で建立されたことが判明した。

南祠堂基壇の再構築 2014年10月から再構築に取り掛かった。再構築にあたっては、調査の結果判明した基壇内に充填されていた赤褐色粗砂層の地質調査をもとに決定した改良土を用いて版築をおこない、基壇土の強化を図ったうえで、南祠堂の再構築を完了させた。

北祠堂の調査修復 2016年2月、北祠堂の解体に着手した。北祠堂は全体が北側に傾き、軸部の倒壊が南祠堂と比べてより進んでいた。軸部の解体が終了したのち、基壇部の調査に取りかかった。基壇の築成状況などを知るために、南北にトレチを設定した結果、基壇土は南祠堂と同じ赤褐色の粗砂を中心とするものの、所々に灰色粘土を交えて、厚さ約10cmの整地を繰り返す築成方法をとっていたことが判明した。さらにこのトレチの底からレンガ列が検出され、基壇最下面に何らかのレンガ造造構が存在することが推定された。

レンガ造造構の発見 2016年7月に入り基壇部の解体を進めるとともに、トレチ調査を進め、レンガ造造構は一辺約2mの方形を呈する平面形であることが明らかになった。この内部の埋土を発掘するとともに、実測、3D測量等をおこなった。その結果、これまでのアンコール遺跡群では例を見ない特殊な造構を検出・調査することになった（図8）。レンガ造造構は深さ約1.5mを測り、その床面直上から、小玉、鎖状製品などの金製品174点、青銅製品29点、ガラス玉46点、石製品19点、水晶42点、焼骨片11点などが出土した。これらの遺物と同じ層からは多くの炭化物の出土も確認した。レンガ造造構の壁面、特に下半部は黒化し、被熱の痕跡とみられる。放射性炭

素年代測定の結果から、アンコール王朝最末期にあたる14世紀後半から15世紀初頭の年代が与えられることが判明した。これらのことから、このレンガ造遺構内で火を伴う行為ないし儀礼がおこなわれたのち、その上に北祠堂を建立したことが判明した。

北祠堂偽扉の再構築 レンガ造遺構の精査後、遺構保存のためにオリジナルの赤褐色粗砂を主とした改良土で埋め戻し再構築を進めた。再構築によって、北祠堂躯体部の東正面を除く3面の偽扉に如来立像があらわされることが判明した。西面と南面については、解体前の時点では如来立像の足部分のみ原位置を留めていたが、今回の再構築作業により全体が復元された。一方、完全に倒壊していたため元の図像を知り得なかった北面の如来立像も、散乱石材の詳細な調査によって全体を復元することができた。興味深いことに、北面の如来立像は、南面・西面とは様相を異にし、通常の立像ではなくいわゆる逆行仏に近い図像であることが判明した。

中央祠堂の調査修復 2018年1月より中央祠堂の解体調査を開始した。中央祠堂は他の2祠堂に比べて規模が大きく、屋蓋部から順番に慎重に外した。躯体部調査解体後の基壇部解体にあたっては、中央祠堂砂岩外装の内側に前身ラテライト基壇が存在する可能性に注意を払う必要があった。そのため、調査の手順として、砂岩外装のみを1/4ずつ解体し、露出したラテライト基壇の調査を順次おこなうこととした。

その結果、検出された前身ラテライト基壇も外装の砂岩基壇と同様に上成、中成、下成の3段構成であることが判明した。ラテライト基壇の保存状態を精査した結果、ラテライト基壇は解体せずにオリジナルを保存するため、必要な箇所に対して一部修復を施すことに決めた。このラテライト基壇に関しては、3D測量なども含めた可能な限りの記録保存をおこなった。

中央祠堂の再構築 中央祠堂基壇部の再構築は、下成基壇の砂岩外装から順に進め中成、上成基壇へと進めた。躯体部上部では東西南北四面にベディメント（破風飾）が存在していたことが古写真から判明していたが、奈文研調査開始時にはそのほとんどが崩落し、散乱石材の中に埋もれている状態であった。この中から、該当する石材を探し出し、中央祠堂ベディメントの復元作業を進めている。



図6 西トップ道路修復前全景（東から）



図7 検出された中央祠堂下成基壇南階段（南から）



図8 北祠堂地下レンガ造遺構（南から）

2011年から10年かけて進めている西トップ遺跡調査修復プロジェクトによって、上に述べてきたような、既往研究にはない様々な学術的成果を得て、アンコール研究に大きく寄与したといえる。また、同時に当調査修復事業に従事する現地カンボジア人専門家ならびに現地石工からの遺跡の調査修復に関する練度が向上した。今後もカンボジア人専門家の人才培养を念頭に置きながら調査修復を継続していく予定である。

2) ミャンマーにおける拠点交流事業

奈文研は1990年代から2000年代初頭にかけてミャンマー文化省（現在の宗教文化省）との間で研究協力を実施し、特に考古学分野における人材養成や技術移転を推進したが、その後は交流が途絶えていた。近年のミャンマー民主化に伴い、2013年度から3年間、東京文化財研究所が受託した「ミャンマーにおける文化遺産保護に関する拠点交流事業」のうち奈文研が考古分野での再委託を受け実施した研修が評価され、ミャンマー側から研修の継続が要請された。

2016年度、奈文研は文化庁より文化遺産国際協力拠点交流事業を受託し、ミャンマー宗教文化省考古・国立博物館局を相手国拠点とし、ヤンゴン大学考古学部の協力を得て、「ミャンマーにおける発掘調査法・遺物研究法等の考古技術移転を目的とした拠点交流事業」をおこなった。本事業では、①陶磁器の調査研究方法、②発掘調査方法の2つをテーマとし、現地研修と招聘研修を通して考古技術の移転を図った。①の現地研修では、モーラミヤインに位置するコー・ター窯跡出土青磁の調査・整理・記録・展示公開に至までの研修を現地でおこなった。招へい研修では遺物の整理方法、展示公開の事例を実践形式でおこなった。②の現地研修は、2014年にユネスコ世界文化遺産に登録されたビイのシュリ・クシェトラ遺跡にある宗教文化省考古・国立博物館局の教育機関である考古学フィールドスクールで実施した（図9）。招聘研修においては奈文研で専門的な測量研修等をおこなった。いずれも対象は若手から講師クラスまでの考古専門家であり、今後のミャンマー考古学の進展に期待したい。



図9 考古学フィールドスクールでの現地研修の様子

3) カザフスタンにおける拠点交流事業

2019年度から3カ年、カザフスタン共和国国立博物館を現地拠点機関として、文化庁からの受託による「カザフスタンにおける考古遺物の調査・記録・保存に関する技術移転を目的とした拠点交流事業」を実施した。本事業は、初年度こそ2回の現地訪問、1回の招聘事業により、各施設への訪問や、現地での多様な分野の専門家との対面での密度の濃い相互交流が可能であったものの、2年度目以降は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、事業展開の方針転換を余儀なくされた。実際に渡航することなく、また多人数を一か所に集めることなく専門的な知識や技術の移転をするという、全く思いがけない新しい試みの場となったのである。

現地の試料を用いた考古科学的分析の日本国内での実施や、相手機関のニーズに合わせて出土遺物の保存処理や科学分析に関するテキストや映像資料を作成するなどの試行錯誤を重ね、新たな国際共同事業のあり方を模索した。パンデミックという予期しない状況下でやむなく舵を切ったオンライン方式主体の研修事業であったが、実際におこなってみると、嬉しい誤算ともいいうべき発見があった。すなわち、広大な国土をもつ同地において、対面式よりも多くの参加者を広い地域から得られたこと、アドバイザリーとして世界各地から有識者の参加を呼びかけられたこと、育児休業中の専門家の参加などは、オンライン方式ならではの利点といえる（図10）。

なお、本事業による成果の一端は、YouTube「なぶんけんチャンネル」においても日・英・露の3カ国語で公開している。



図10 拠点交流事業でのオンライン研修の様子

(2) 文化財データベースの展開と文化財情報の多言語化

はじめに 文化財情報研究室（以下、情報研究室）は、文化財情報電子化の研究および必要なシステム構築についての研究をおこなうとともに、それらの成果を活用して遺跡・報告書抄録・写真などのデータベースの入力・校正をおこなっている。また2019年度からは文化財情報の多言語化にも取り組んでいる。

文化財情報研究室の役割 奈良文化財研究所（以下、奈文研）には、全国の文化財に関する情報を収集し、整理し公開する役割がある。奈文研内でも発掘調査や研究の過程で情報は蓄積されていく。そのため、情報研究室はそれらの多様なデータを安全に管理し、整理して公開できるよう支援している。さらに、一部の研究者だけでなく、国外の研究者や地方公共団体の文化財担当者、一般の方にもデータを利用しやすい環境づくりを目指している。情報研究室の所管業務には、①全国の文化財・遺跡情報の集約と発信、②所内資料のデジタル化、③各自治体の文化財担当者への研修、④文化財デジタルデータの研究利用と展開、⑤文化財情報の多言語化がある。

全国の文化財・遺跡情報の集約と発信 奈文研では多くのデータベースを管理・運営しているが、ここではとくに情報研究室と関わりが深いものを紹介する。これらはすべて、考古学や文化財の専門家だけではなく、他分野の研究者や一般の方も利用することができる。

遺跡データベースは、全国の遺跡情報を集約しているデータベースである。1988年より不動産文化財データの

全国センターとして構築が計画されていたもので、1996年11月上旬に公開した。抄録データベースは、発掘調査報告書の卷末に掲載される調査報告書の書誌情報と、遺跡情報、調査内容をそれぞれ要約した「抄録」のデータベースである。発掘調査報告書を作成した各機関がwebを通じて奈文研のシステムに登録していくことにより、抄録は順次追加されている。なお、2019年6月、抄録データベースは全国遺跡報告総覧へデータをすべて移行・統合することで、利便性が向上した。さらに、2021年度には遺跡データベースおよび抄録データベースの遺跡情報・公開されている全国の文化財情報を統合し、文化財総覧WebGISを公開した¹⁾。61万件のデータを搭載し、国土地理院が公開している地図やハザードマップなどを重ねて表示させることができる（図11・12）。全国遺跡報告総覧では、文化財報告書の全文検索とPDFダウンロードが可能である（PDF登録があるものに限る）²⁾（図13）。上記の他、文化財動画ライブラリー・文化財イベントナビ・文化財論文ナビでは、報告書PDFに限らず、動画・イベント・論文を利用者の関心やテーマに合わせて検索できる。近年は、年間に約1億ページ閲覧数・約200万件のダウンロード数があり、活発に利活用されている。全国遺跡報告総覧や文化財総覧WebGISは、学校教育や防災の面から活用が進みつつある。

所内資料のデジタル化 情報研究室では図面など調査記録類の電子化およびアーカイブも進めている。昨今はセキュリティ対策が非常に重要となるため、調査記録類のデータをデータベースプラットフォームに集約している。デジタルデータの保管については、研究支援推進部連携推

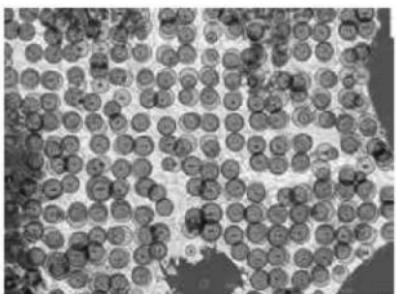


図11 関東平野の文化財分布状況

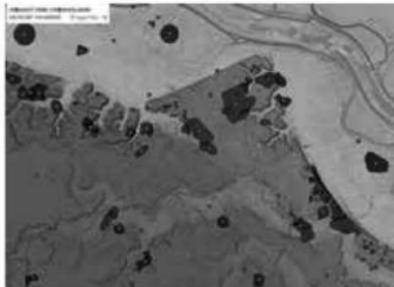


図12 地形図と遺跡の立地環境 (関東平野)

進歩文化財情報係とともに、ホットデータ（活用頻度が高い・小容量）とコールドデータ（活用頻度が低い・大容量）に区分して保存先を変えることにより、データを効率的に保管している。2021年には次世代の研究環境としてクラウドストレージを導入した。

各自治体の文化財担当者への研修 情報研究室で獲得した各種ノウハウは各自治体の文化財担当者への研修で発信している。情報研究室は隔年で文化財デジタルアーカイブ課程と遺跡GIS課程を開講している。GIS、オープンデータ、文化財の著作権処理などの各分野に精通した外部講師らによって練られたカリキュラムは毎年好評である。これまでの研修資料は奈文研研究報告『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用』として刊行し、Web上でも公開している。

文化財デジタルデータの研究利用と展開 奈文研は文化財のナショナルセンターとして、外国との情報収集・情報提供を重要視している。EUでは、2019年から多国間での考古学情報を統合し、相互連携によって多くの人が情報にアクセスしやすくなるシステムの構築を目指して「アリアドネプラス」というプロジェクトを進めており、奈文研もこれに参加している³⁾。文化財専門家の言語間における比較やデータ連携の準備が進んでおり、より積極的に日本の文化財情報を外国に展開することを目指している。2022年2月、日本の遺跡情報をヨーロッパ側のシステムと連携することに成功した⁴⁾。今後、海外においても日本の文化財情報の存在を知らしめることが可能となった。文化財情報を利用する上で欠かせないのが知的財産に関する理解である。コンテンツが重要なになって

いる時代にあっては、文化財専門家も知的財産権に関する知識が必要である。文化財報告書類の成果物には、著作権が設定されているが、正しい知識があれば、調査機関はデータの公開・活用範囲を今まで以上に広げ、より多くの人が再利用しやすい形でデータを提供でき、市民による活用が促進される。知的財産権への調査研究も進めている。

文化財情報の多言語化 特別史跡平城宮跡は、約1300年前の日本の中心地であり、天皇の住まいや官衙などがあった。奈文研は平城宮跡を1950年代から調査し、その成果を平城宮跡資料館などで展示している。多言語化事業ではこれらの施設への訪日観光客などの説明や来館客の満足度の向上を目指し、従来の解説パネルに加えて、総合的に多言語コンテンツを磨き上げ、体系的に連携させることで情報発信の強化を図っている（図14）。のために、2020年度の事業では「幅広く知ってもらう」、「展示品に興味を持てもらう」、「平城宮跡を体感し感動する」、「より深く理解してもらう」の4つの目標を目指し、①平城宮跡資料館のWebサイトの4言語対応、②多言語対応収蔵品データベースとその閲覧アプリの整備・開発、③多言語対応平城宮跡CG動画とARアプリの制作・開発、④アプリやデータベースと連携した多言語リーフレットの整備（図15）を進めてきた。その中でも、多言語対応収蔵品データベースを整備し、アプリを通じて利用できるようにしたことは、平城宮跡資料館への来館者に、より丁寧でわかりやすい解説や情報を提供するために必須的な事業であった。平城宮跡資料館では、多言語での解説の拡充を順次進めているが、館内の展示スペースには限



図13 全国遺跡報告総覧トップページ

平城宮跡資料館 特別史跡平城宮跡に関する多言語解説情報発信強化事業



図14 多言語化事業の全体構成図

りがある。そこで、より効果的な展示解説と情報発信を目的に、奈文研は収蔵品DBを公開し、タブレットやスマートフォンなどのモバイル端末で閲覧できる解説の提供を開始した。収蔵品DBでは500件ほどのデータが整備され、新たに撮影した展示品全品の写真および展示品の出土状況の写真や図面などが追加されている。アプリでアクセスできる展示品の解説は100件ほどあり、早稲田システム開発株式会社の「ポケット学芸員」という製品を利用している。展示品近くにある番号をアプリの検索欄に入力するだけで閲覧可能となっている。収蔵品DBは変化に応じて随時修正が可能であり、たとえ資料館の展示品が変更されても、アプリを経由し最新の情報を即時に来館者へ提供することができる。また、紙媒体でのチラシなどを手にする必要がなく、自分のスマホで情報を見られるため、より衛生的であり、さらに、印刷を省けるため、よりサステナブルな方法として、これから広く活用されることが期待されている。

また、多言語化チームは、自ら手がけた事業を事例に、経験や蓄積された用語対訳などをまとめた「文化財多言語化研究報告」という報告書を毎年に出版している。それは、反省点も含め、よりいい多言語化を築き上げていくための整理および自己評価の作業であり、また、情報を発信し、業務において蓄積したノウハウを積極的に広めようとするものである。「文化財多言語化研究報告」には文化財多言語化に関する書き下ろしの研究論文や、多言語化事業の報告、さらに、これからの多言語化の参考になる文化財関連用語の中国語・韓国語・英語対訳集などを掲載している。「文化財多言語化研究報告」はバウンダリレスな（境界を越えた）情報発信を実現するため、

オープンアクセス化して誰にでもアクセスできるようにしている。

今後に向けて　社会や技術の変化によって、文化財情報のあり方は時代によって変化していく。一方、文化財を未来に継承していくという使命には変わりはない。どうすれば、新技術を適切に取り込んで、文化財の継承に資することができるか、情報研究室では日々考え、実践している。

註

- 1) 文化財総覧 WebGIS の公開 (<https://repository.nabunken.go.jp/dspace/handle/11177/9628>) (2022年4月28日確認)
- 2) 全国遺跡報告総覧 (<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/>) (2022年4月28日確認)
- 3) ARIADNE plus (<https://ariadne-infrastructure.eu/>) (2022年4月28日確認)
- 4) 欧州考古学情報基盤 ARIADNE plus と全国遺跡データ連携開始：日本の遺跡情報を世界と共に (<https://repository.nabunken.go.jp/dspace/handle/11177/9897>) (2022年4月28日確認)



図15 多言語（中国語・韓国語・英語）対応リーフレット

(3) 平城宮跡及び研究成果に関する教育普及への取り組み

平城宮跡資料館での展示関連活動 企画調整部展示企画室では、平城宮跡資料館において毎年秋の「地下の正倉院展」や発掘速報展をはじめ、平城宮跡や奈良時代に関する調査成果およびそれに関する遺構や遺物を紹介する展示を開催してきた。いずれも都城発掘調査部との協同によるものが多い。なお、この10年間に開催した展覧会は表4の通り。

2013年より夏休みに合わせた時期に、子供など文化財にあまり詳しくない層を対象とし、埋蔵文化財に対して親しみを持ってもらうためのわかりやすい展示手法を様々試みた企画展を実施した。特に、2019年夏のこども展示「ならのみやこのしくぶつえん」展（口絵）は、当初東京オリンピック・パラリンピックの機運醸成や訪日外国人観光客の拡大にむけて日本の文化芸術の振興とその魅力発信のために開催された「日本博」に参画して開催したものであり、奈良国立博物館の「いのりの世界のどうぶつえん」展とコラボレーションした新しい試みであった。同じく2019年度は令和改元に合わせて「高御座－奈良朝の玉座－」展も開催し、2020年度にはコロナウイルスの蔓延を背景に現代と古代に共通する流行を取り上げた「古代のいのり－疫病退散！」展を開催した。その時々の時に合わせた企画として評価を得た。

近年では文化遺産部遺跡整備研究室と協同で開催した「奈良を測る－森羅の庭園研究と作庭－」（2021）（図16）や、文化遺産部歴史研究室・遺跡整備研究室と協同で開催した「未来につなぐ平城宮跡－保存運動のあけぼの－」展（2022）、埋蔵文化財センター・遺跡調査・技術研究室との協同で開催した「大地鳴動－大地の知らせる危機と私たちの生活－」展（2022）など、都城発掘調査部の成果にとどまらず奈文研各部署の調査活動やその成果を紹介するとともに、文化財全体への関心・理解につながるよう展示の幅を広げている。なお、後述する2021年冬の「鬼神乱舞」展、2022年秋には奈文研70周年・平城宮跡史跡指定100周年を記念した特別展「のこった奇跡のこした軌跡－未来につなぐ平城宮跡－」展は平城宮いざない館で開催した。

また、2020・2021年は、コロナウイルス感染拡大にと



図16 平城宮跡資料館 展示風景
（「奈良を測る－森羅の庭園研究と作庭－」展 2021年）



図17 ダウンロード専用ワークシート一覧 (IP画面部分)

もない、平城宮資料館も閉館を余儀なくされる事態となつた。開館再開後もハンズオン展示の中止、資料館解説ボランティアの活動自粛と余波は続くなか、インターネットやSNSを活用して展示内容および資料館の情報を積極的に発信する動きが出てきた。新設された公式YouTubeチャンネル「なぶんけんチャンネル」では中止したギャラリートークの代替として企画展ごとに展示内容を研究員が解説する動画のアップロードを始めた。2021年春には資料館ホームページが奈文研ホームページから独立し、展示情報によりアクセスしやすくなっただけでなく、資料館で配布しているパンフレット類をダウンロードできるようにしたほか、「おうちで資料館」・「資料館の達人」コーナーを新設し、ダウンロード専用の各種ワークシート（図17）を提供するなど、資料館に足を運ぶことができない客層を念頭に置いた教育普及面でのサービス拡充を図った。2022年春からは公式Twitterによる情報発信も開始し、若年層など従来とは異なるファン層の獲得を目指している。

表4 展覧会実績(2013-2022)

年度	展覧会名	会期	
春期企画展	「発掘速報展 平成2012」	2013年3月16日～	2013年6月2日 68日間
2013 夏期企画展	「平城京どうぶつえん －天平びとのアニマルアート－」	2013年7月13日～	2013年9月23日 63日間
秋期特別展	「地下の正倉院展－木簡を科学する－」	2013年10月18日～	2013年12月1日 39日間
夏期企画展	「平城京ピックリほはらんかい －奈良の都のナンバーワン－」	2014年7月12日～	2014年9月21日 62日間
2014 秋期特別展	「地下の正倉院展－木簡を科学する－」/ 「廃帝文化財センターの40年」	2014年10月18日～	2014年11月30日 39日間
ミニ展示	「発掘速報展 平城2014」	2014年12月6日～	2015年3月31日 84日間
夏のミニ展示 (ロビー展示)	「すごろく土器が見つかった！」	2015年7月11日～	2015年9月23日 64日間
2015 夏期企画展	「平城京ごめんずかん」	2015年7月11日～	2015年9月23日
秋期特別展	「地下の正倉院展－造酒司木簡の世界－」	2015年10月17日～	2015年11月29日 39日間
ミニ企画展示	「発掘速報展 平城2015」	2015年12月5日～	2016年3月31日 85日間
夏期企画展	「ナント！おいしい！？平城京！！ －奈良の都の食事情－」	2016年7月23日～	2016年8月31日 34日間
2016 秋期特別展	「地下の正倉院展－式部省木簡の世界－」	2016年10月15日～	2016年11月27日 39日間
春期企画展	「発掘された平城2016」	2017年2月4日～	2017年4月2日 50日間
春期企画展	「水野太造作品展 －草創期の奈文研を支えた写真家－」	2017年4月29日～	2017年5月31日 28日間
2017 夏のこども展示	「ナント！すぐできな！？平城生活♪」	2017年7月22日～	2017年9月3日 38日間
秋期特別展	「地下の正倉院展－国家宝平城宮跡出土木簡－」	2017年10月14日～	2017年11月26日 37日間
新春ミニ展示	「平城京の亥」	2018年1月4日～	2018年1月28日 22日間
夏のこども展示	「たんけん！なぶんけん」	2018年7月21日～	2018年9月2日 26日間
秋期特別展	「地下の正倉院展 －荷札本簡をもととく－」	2018年10月13日～	2018年11月25日 38日間
2018 新春ミニ展示	「平城京の亥」	2019年1月4日～	2019年1月27日 21日間
冬期企画展	「発掘された平城2017・2018」	2019年2月2日～	2019年3月31日 50日間
特別企画展	「高御座－奈良朝の玉座－」	2019年4月27日～	2019年6月2日 33日間
夏のこども展示	「ならのみやこのしきぶつえん」	2019年7月20日～	2019年9月1日 39日間
2019 秋期特別展	「地下の正倉院展－年号と木簡－」	2019年10月12日～	2019年11月24日 37日間
新春ミニ展示	「平城京の子」	2020年1月4日～	2020年1月26日 20日間
冬期企画展	「発掘された平城2019」	2020年2月1日～	2020年3月29日 22日間
ミニ展示	「古代のいのり－疫病退散！」	2020年6月16日～	2020年7月19日 30日間
夏期企画展	「奈良の都の考古学 －発掘された平城2019－」/ 「古代のいのり－疫病退散！」	2020年7月23日～	2020年8月30日 34日間
2020 秋期特別展	「地下の正倉院展 －重要文化財 長屋王木簡－」	2020年10月10日～	2020年11月23日 39日間
新春ミニ展示	「平城京の丑」	2021年1月5日～	2021年1月31日 24日間
特別展	平城宮跡舞鶴公園第一次大極殿跡南門復原整備工事 (於：平城宮いざない館) 記念「鬼神舞－謹る、祓う－鬼瓦の世界－」	2021年1月23日～	2021年3月28日 64日間
春期特別企画展	「平城宮跡保存運動のさきがけ －大極殿木建式20周年－」/ 「大地鳴動－大地の知らせる危機と私たちの生活－」	2021年4月29日～	2021年6月27日 9日間＊ *(予定)* ＊コロナウイルス感染拡大のため途中休館したため
2021 夏期企画展	「奈良を潤す－森羅の庭園研究と作庭－」	2021年8月7日～	2022年9月12日 32日間
秋期特別展	「地下の正倉院展－木簡を科学するⅡ－」	2021年10月9日～	2021年11月7日 26日間
冬期企画展	「発掘された平城2020・2021」	2022年2月11日～	2022年3月27日 39日間
春期特別展	平城宮跡史跡指定100周年・奈文研創立70周年記念 「未来につなぐ平城宮跡－保存運動のあけぼの－」	2022年4月29日～	2022年6月12日 40日間
夏期企画展	「大地鳴動－大地の知らせる危機と私たちの生活－」	2022年7月16日～	2022年8月28日 38日間
2022 秋期特別展	奈文研創立70周年 平城宮跡史跡指定100周年記念 「地下の正倉院展－平城木簡年代記（クロニクル）－」	2022年10月15日～	2022年11月13日 26日間
特別展	奈文研創立70周年 平城宮跡史跡指定100周年記念 (於：平城宮いざない館) 「のこった奇跡のこした軌跡－未来につなぐ平城宮跡－」	2022年10月29日～	2022年12月11日 43日間

近年の訪日外国人の増加にともない、全国的に博物館や美術館では多言語化へのニーズが高まった。そのような背景のもと、展示企画室は文化財情報研究室と協同し、2020年度から平城宮跡資料館の解説パネル、配布リーフレット、多言語化された平城宮復原のコンピューターグラフィック映像の制作など多言語化事業を実施した。この際、展示スペースに余裕がなく多言語の個別キャプションを追加することが難しかったため、個別解説は多言語対応収蔵品データベースにあるデータを連携させて展示品の写真や解説データをスマートフォンやタブレット画面に表示するアプリを導入し、提供を開始した。

また、ユニバーサルデザインへの社会的要請の高まりを受け、2021年度には資料館エントランスの視覚障害者用サインの改良や授乳室の新設などを実施した。

資料館来館者や平城宮跡来場者への教育普及サービスの一環として、1999年から解説ボランティアの展開を始めた。現在は展示企画室と研究支援推進部連携推進課が協同し、ボランティア活動の運営や研修・質問対応などに従事している。2018年の改組により、現在は曜日ごとに班分けされたグループで活動中で、2022年春に活動を新規開始した第7期のボランティア17名を含む総勢125名のボランティアが登録している。平城宮跡資料館の展示解説のみにとどまらず、復原された朱雀門や第一次大極殿、遺構展示館、東院庭園、2018年の開館後には平城宮いざない館展示室4も加え、平城宮跡の各拠点において積極的に解説活動に継続してきたことは特筆できる。ただし、2020年以降のコロナウイルス感染拡大により活動中断・縮小を余儀なくされているのが現状である。

このように、平城宮跡資料館は2021年に開館50周年を迎える、施設の老朽化といったさまざまな問題も抱えつつあるものの、平城宮跡に北西からアプローチしてくる来場客に対するガイダンス施設としての基本方針を固持しつつ、世相の動きに柔軟に対応しながらさまざまな教育普及活動を実施している。多方面への文化財活用がより一層強く要請されている昨今の世の中、単なる知識の伝達の場としてだけではなく、遺跡博物館としての平城宮跡内の各構造や各施設とを有機的につなぐ存在として、また平城宮跡や奈良時代をより魅力的に体感できるコンテンツを提供すべく今後も進んでいくことになろう。

国土交通省への学術協力 展示企画室では2018年3月に朱



図18 平城宮いざない館 展示室4「時をこえて」



図19 いざない館で開催した「鬼神乱舞」展(2020年)

雀門前ひろばにオープンした平城宮いざない館の学術面での協力について国土交通省からの委託を受け、遺物を管理している都城発掘調査部との調整を図りつつ、展示室4(図18)における展示構成の立案、所蔵・保管する平城宮・京出土遺物から展示資料の選定、貸出手続・輸送、展示パネル・解説の作成、展示作業などに従事した。さらに開館後も運営主体の平城宮跡管理センターから4カ年の委託を受け、展示中である奈文研所蔵資料の状態管理、教育普及に係るイベントの立案や監修、展示内容のプラッシュアップ、展示資料の外部機関への貸出、調査研究成果に関する外部からの質問や取材対応といった展示室4に関わる学芸業務を分担している。

2019年度から2021年度にかけては、国土交通省による第一次大極殿院南門(竣工後は大極門と呼称)の復原事業に伴う情報発信への協力を企画調整部と都城発掘調査部でおこなった。復原工事の過程ごとに学術研究の視点から計画・実施した写真撮影・記録、奈文研や国土交通省を含む各事業者が撮影した写真データの整理・分類といっ

たアーカイブ化業務、南門復原工事過程を一般公開する際の資料作成協力、復原整備事業の一般向けの解説資料の提供といった業務を分掌した。これらは、国土交通省飛鳥歴史公園事務所からの委託に基づいておこなったものである。なお、この学術協力の一環として、2020年度にはいざない館企画展示室において平城宮跡歴史公園第一次大極殿跡南門復原整備工事記念特別展「鬼神乱舞－譲る・祓う・鬼瓦の世界－」展を都城发掘調査部考古第3研究室の協力を得て開催した(図19)。いざない館での奈文研主催の展示は初めての試みであった。

「奈良時代を体験！」ワークショッププログラムの企画・実施

平城宮跡から出土した特徴的な遺物を取り上げ、研究員からのレクチャーを受けつつ、実際にその制作に携わることで奈良時代を体感するワークショッププログラム「奈良時代を体験！」のコンテンツを開発した。2019年度にはシリーズ第1弾として「木簡にかいてみよう」を企画、ワークショップを実施した。2020年度には第2弾として「人面墨書き土器を描こう」を企画した(図20)。いずれも企画監修は展示企画室が担当した。運営面では2022年度は奈文研が協力のもと平城宮跡管理センターが運営し、2022年度からは奈文研も単独実施を始めている。木簡や土器にただ文字や絵をかく体験だけで終わるのではなく、奈良時代の円面鏡や水差しのレプリカを使って墨を磨る、完成した人面墨書き土器を平城宮跡周辺にある復元溝に置くことで土器を流す行為を疑似的に体験するなど総合的な体験・体感ができるよう工夫している。また、その遺物についての知識や製作背景・時代背景を理解するためのワークシートを展示企画室で制作し、それに基づいて解説は展示企画室の研究員がおこなう。

コロナウイルス感染拡大の影響を受け、実施はいずれも2022年度開始となったが、平城宮跡歴史公園いざない館・平城宮跡資料館で定期的に実施するよう運用していく計画である。また、2022年7月には平城宮いざない館主催イベントに協力する形で、奈良県まほろば館(東京)において木簡製作体験ワークショップをおこなうなどの展開も試みた。

公式キャラクターの展開 平城宮跡史跡指定100周年を契機として、様々な層に平城宮跡をアピールし、関心を喚起するため、平城宮跡にちなんだキャラクター、キュートぐみ【宮都組】を制作した(図21)。展示パネルやグッ



図20 奈良時代を体験！ワークショップ(2022年)



図21 キュートぐみ【宮都組】(2022年)



図22 東院庭園 痛の宴(2018年)

ズ、平城宮跡資料館公式Twitterなどに登場させ、奈文研のみならず平城宮跡関係機関が活用できるよう展開を進めている。

平城宮跡現地の活用にかかる取り組み 2013年度から2018年度までの間、復元された東院庭園の活用を目的に、秋期に「東院庭園の宴」を実施した(図22)。史実に添ったテーマ設定に基づき、奈文研研究員がミニ講演をおこない、雅楽の樂曲演奏、天平衣装をまとった人々による宴の再

現を通じて、各年100～150名の来場者に奈良時代の宮廷の宴の雰囲気を味わっていただいた。日没後の18:30開演、20:00閉幕とし、協定先である奈良パークホテル提供の古代食、白酒またはお茶を有償でふるまつた。

上記取り組みでの課題を踏まえ、平城宮跡をフィールドとして全国の遺跡の活用上の課題克服に向けた実践的研究をおこない、さらには平城宮跡の遺跡博物館としての魅力を高め、奈文研の研究成果をより広く世に還元することを目的に、「平城宮跡の活用に関する実践的研究」を2019年度を準備期間として、2020年度より開始した。遺跡整備研究室が統括し、展示企画室、都城発掘調査部、連携推進課、研究支援課による全所的な体制を組み、I. 復元建物のある空間における歴史的文脈に基づく体験の提供（復元建物の活用）、II. 遺跡現地と遺物・情報の関係性の再構築（コンテンツの開発）、III. 遺跡のある地域との関係性の再構築（地域間交流）の3つのテーマを立て、以下のような様々な企画を実施した。

令和元年即位関連企画 2019年は令和改元の年であることを記念し、アプリ「AR宝輦・四神旗」およびリーフレット「大嘗宮跡」を作成した。アプリは2020年度に機能追加と多言語化をおこなった。

赤米献上隊の受け入れ 兵庫県養父市八鹿小学校が、平城宮跡出土木簡に因んだ体験学習として実施している赤米栽培の締めくりに、収穫した赤米を古代に倣って平城宮跡に持参する取り組みを、1990年よりおこなっている。2020年度より史料研究室の研究員が木簡について解説するとともに、贈呈式の場を推定宮内省地区に設け、地域間交流と復元建物のある空間の活用を兼ねた取り組みとして位置付け、継続している（図23）。

かりうちプロジェクト 奈文研研究員の研究により復元された「かりうち」をゲームとして普及させることを目指す取り組みである。2020年にかりうちキットを試作して、テストプレイを実施した（図24）。2021年にはキットを改良した上で、第1回かりうち対戦試合（11月3日、朱雀門ひろば、平城宮跡管理センター共催、NPO平城宮跡サポートネットワーク協力）を実施した。2022年度には、文化財活用センターのアウトリーチ事業とするため、普及用のキット製作、解説動画製作、ホームページ開設の各事業を進めている。



図23 赤米獻上隊の受け入れ（2020年）



図24 かりうちテストプレイ（2021年）



図25 100周年記念ロゴ（2022年）

平城宮跡史跡指定100周年記念企画 平城宮跡史跡指定100周年となる2022年、この記念年に平城宮跡で実施される様々な展示やイベントを、平城宮跡関係機関協同で広報、周知していくため、記念ロゴを作製した。ロゴは外部委託で3案作成したのち、奈文研所内投票により決定した（図25）。また、奈文研HP内に特設ページを追加し、各関係機関HPにバナー設置をいただいた。

(4) 文化財担当者研修

はじめに

文化財担当者研修は、文化財の保存・活用を推進し、国民への良質なサービスの提供を図るため、地方公共団体等の文化財担当職員の資質向上を目的とする研修である。奈文研では、昭和49年（1974）から本研修の前身の「埋蔵文化財発掘調査技術者研修」を主催しており、令和3年（2021）度には、累計受講者数が1万名を超えた（表5）。

1) 文化財担当者研修の沿革

文化財担当者研修は、昭和41年（1966）に奈文研が文化財保護委員会とともに始めた同委員会主催の「埋蔵文化財発掘技術者研修会」に端を発する。この時の受講者は12名だった。

昭和49年（1974）、奈文研に埋蔵文化財センターが設置されると、同センターが「埋蔵文化財発掘技術者研修」を主催した。同センターの組織が充実する中で、研修の開設課程数も増えるとともに、昭和57年（1982）には「埋蔵文化財担当事務職員特別研修」を開始し、事務職にまで研修対象を広げた。また、昭和55年（1980）、二条町の県立病院を改装した本庁舎に移転した際には、その看護師宿舎を改装した研修棟の供用を開始した。

このように研修をおこなう体制や施設が整った結果、平成11年（1999）度には、15課程、受講者314名に達した。なお、この年度受講者数の記録は、現在も破られていない（図26）。

平成18年（2006）、独立行政法人文化財研究所第2期中期計画での組織改変にともない、それまでの研修を引き

継ぐ「埋蔵文化財担当者研修」の企画については、各部局からの委員で構成される研修企画委員会で協議し、組織改変の際に新たに設けられた企画調整部の企画調整室

表5 奈文研研修の受講者数と全国の埋蔵文化財専門職員数

年度	受講者数単年度	受講者数累計	埋蔵文化財専門職員数
昭和 49 (1974)	31	31	
昭和 50 (1975)	43	74	898
昭和 51 (1976)	126	200	1044
昭和 52 (1977)	149	349	1209
昭和 53 (1978)	124	473	1435
昭和 54 (1979)	167	640	1703
昭和 55 (1980)	244	884	1930
昭和 56 (1981)	234	1118	2145
昭和 57 (1982)	252	1370	2392
昭和 58 (1983)	253	1623	2606
昭和 59 (1984)	268	1891	2783
昭和 60 (1985)	263	2154	2972
昭和 61 (1986)	275	2429	3232
昭和 62 (1987)	276	2705	3415
昭和 63 (1988)	280	2985	3649
平成元 (1989)	303	3288	4001
平成 2 (1990)	293	3581	4365
平成 3 (1991)	310	3891	4669
平成 4 (1992)	288	4179	4852
平成 5 (1993)	277	4456	5237
平成 6 (1994)	287	4743	5526
平成 7 (1995)	235	4978	5692
平成 8 (1996)	289	5267	6126
平成 9 (1997)	304	5571	6486
平成 10 (1998)	311	5882	6872
平成 11 (1999)	314	6196	7010
平成 12 (2000)	263	6459	7111
平成 13 (2001)	264	6723	7090
平成 14 (2002)	249	6972	7081
平成 15 (2003)	245	7217	7075
平成 16 (2004)	186	7403	6965
平成 17 (2005)	191	7594	6695
平成 18 (2006)	182	7776	6555
平成 19 (2007)	155	7931	6327
平成 20 (2008)	170	8101	6255
平成 21 (2009)	130	8231	6122
平成 22 (2010)	137	8368	5972
平成 23 (2011)	136	8504	5885
平成 24 (2012)	156	8660	5868
平成 25 (2013)	138	8798	5863
平成 26 (2014)	171	8969	5853
平成 27 (2015)	177	9146	5724
平成 28 (2016)	167	9313	5666
平成 29 (2017)	178	9491	5647
平成 30 (2018)	211	9702	5629
令和元 (2019)	199	9901	5592
令和 2 (2020)	32	9933	5483
令和 3 (2021)	139	10072	5457
合計	10,072		

（※文職員数は、文化庁文化財第二課 2022「所蔵文化財関係統計資料—令和3年度—」にもとづく）

図26 奈文研研修の受講者数と全国の埋蔵文化財専門職員数の変化

が委員会事務局として事務部門の研修係とともに実施のための調整をおこなうようになった。

平成21年（2009）には、埋蔵文化財発掘技術者研修以来おこなってきた初心者のための基本的な知識と技術の習得を目的とした一般研修を取りやめ、すべての課程を専門研修として専門化を図りつつ、その中で受講生の習熟度の度合いを配慮し、基礎課程、応用課程等を実施することになった。

平成23年度（2011）からは、地方公共団体にあって文化財を担当する職員は、埋蔵文化財ばかりではなく、建造物、文化的景観、歴史資料などのさまざまな文化財を取り扱っていることを踏まえ、文化財に関する多様で専門性の高い研修を提供するとともに、博物館・資料館等の専門職員も受講できるように研修対象を地方公共団体等の文化財担当職員とし、研修の名称も「文化財担当者研修」に改めた。

図26にみられるように、研究対象を文化財担当者とした平成23年度（2011）以前は、研修受講者と埋蔵職員数の変化の動向はおおむね一致しており、全国の埋蔵文化財の保護体制の充実に奈文研の研修事業が一定の役割を果たしてきたことが判明する。

2) 最近10年の状況

10年前、平成24年（2012）度に実施された文化財担当者研修は、12課程、受講者156名だった。この平成24年度を含む、平成21年（2009）度から平成25年（2013）度は、受講者がおおむね150名以下と、それまでの研修の歴史なかで、もっとも低迷した時期にあった。これは、不況下での地方公共団体の財政状況の悪化、発掘調査件数の減少、自治体の合併・団塊の世代の専門職員の退職などに起因する文化財担当者の減少、東日本大震災の発生など、さまざまな経済・社会的原因に加えて、平成25年（2013）には、新庁舎建設にともなう研修棟の閉鎖、仮庁舎への移転がなされたことから、研修を年度途中で中断したことが反映している。

こうした研修の低迷状況に対し、文化庁や地方公共団体の職員の声やアンケート等を参考としながら、各課程にできるだけ新たな知見や研究成果を反映させるとともに、「文化財防災・減災課程」、「近現代建築保存活用課程」、「史跡保存活用計画策定課程」など文化財をと

りまく社会情勢の変化に対応したもの、「遺跡G I S課程」、「報告書デジタル作成課程」、「文化財デジタルアーカイブ課程」などのデジタル技術をはじめとする科学技術の普及を背景にしたもの、「文化的景観調査計画課程」、「古文書歴史資料調査管理基礎課程」、「建造物保存活用基礎課程」など、埋蔵文化財以外の多様な文化財に関わるものなど、受講生のニーズに応じた魅力的な研修の開講に務めてきた（図27）。また、できるかぎり1課程の日数を5日以内とするとともに、2～3日程度の短期の研修の実施を試みた。これと同時に、文化財担当者が上司や財務部局に受講の希望を上げる際の説明に使えるよう、文化財担当者研修を紹介するパンフレットを発行し、都道府県を通じて市町村へ配布した。文化庁からも、令和元年（2019）から始められた文化庁主催の文化財マネジメント職員養成研修への参加資格のアドバンテージや令和2年度からおこなわれている埋蔵文化財担当者の区分においてⅡ種に区分する際の基準として奈文研の文化財担当者研修の受講をあげるなど、バックアップをいただいている。さらに、平成30年度の秋から、それまでの仮庁舎内の研修室・実験室に代わって、新築の本庁舎内の研修実験室、研修自習・準備室が供用され、より多くの受講者に快適な環境や充実した設備での研修を提供できる態勢が整えられた。

こうした努力もあってか、平成26年度からは文化財担当者研修の受講者数は回復基調となり、平成30年（2018）度には15課程、受講者211名に達した。受講者数が200名の大台を超えたのは、平成15年（2003）度以来、15年ぶりのことである。翌令和元年（2019）度は199名であったが、これは開講した課程が前年度よりも1課程少ない14課程であったことが影響している。

こうした中、発生したのが、令和2年度以降の新型コロナウイルス感染症の拡大である。これにより文化財担当者研修も大きな影響を受けることになった。

奈文研では、奈良県に緊急事態宣言等が発出されている段階には研修を中止することを基本の措置とした。また、開講時にもあっても感染予防の観点から、手指やマイクの消毒、検温、マスク着用、体調観察などの感染防止策の徹底のほか、対面研修の場合は1課程の定員を10名以下にし、これを厳守するなどの対策をとった。結果的に令和2年度（2020）に開講できたのは4課程だけであり、

受講者数は32名にとどまった。翌令和3年(2021)年度にも同様の対応策をとったが、奈良県に緊急事態宣言、まん延防止措置などが発出されなかつたことや、一部課程では、講師あるいは受講者在地のオンラインによるリモート研修などを実施したことから、予定していた全課程(13課程)を開講し、139名もの受講者を得ることができ、昭和49年(1974)以来の累計受講者数も1万名を超えた(10,072名)。令和4年(2022)には、状況をみながら、定員数の制限をゆるめるなど、従前の態勢にもどしていくこととしている。

3) これからの研修

今後とも、文化庁や全国の文化財部局、それに文化財担当者の意向を踏まえるとともに、文化財の調査研究の進展や動向を反映させた、受講者が魅力を感じる内容の研修をおこなっていきたい。

そうした中、近年、大学による調査が減少したことや、発掘調査などの現場経験をほとんどない新卒者が文



図27 堆積・地質学基礎課程 障地講義の様子



図28 文化財デジタルアーカイブ課程リモート講義の様子

化財担当者として行政に採用される事例が多くなってきており、平成21年(2009)に取りやめた一般研修のように、初心者の基本的な知識と技術の習得を目的とした課程の実施が求められるようになってきた。その重要性については十分理解できるものの、専門化を進めてきた奈文研の研修の流れと逆行するとともに、管下市町村の文化財行政に責任をもつ都道府県文化財部局との役割分担を図る必要性もある。また、なにより一般研修を取りやめてから長い期間を経ているため、再び一般研修を実施するとなると、カリキュラムの設定など、一から始める必要がある。このため、こうした研修の実施の可否については、引き続き検討していきたい。

新型コロナウイルス感染症対策をきっかけとして導入したオンラインによるリモート研修については、研修事業の今後の展開を考えた場合、極めて有望なものということができる(図28)。それと同時に実習や屋外での講義の場合の運用をどうするか、また、研修後の受講者の習熟度をいかに確認するのか、などの課題も浮上してきている。よりよい研修を持続的に進めるという観点も踏まえながら、方法の洗練と経験の蓄積に努めたい。

このほか、すでに実施している短期研修の充実や令和4年度から開始を予定している研修の地方開催など、新たな試みに積極的に取り組んでいきたい。

最後に、かつての研修棟のような研修用宿泊施設の設置を望む声があることは承知している。受講者を送り出す側の地方公共団体の経済的負担が軽減し、受講者の増加につながることも十分に理解している。しかしながら、旅館法等の関係法令や施設を維持してくれたため奈文研の経済的負担を考慮すると、奈文研がそれを設置・保有することは困難と言わざるを得ない。

やはり、将来にわたり研修制度を持続的に発展させていくには、研修の内容や枠組みを常に見直し、さまざまなニーズに応えることができる魅力的な研修とすることしか途はないといえる。そのような研修を目指し、努力していきたい。

(5) 文化財写真の10年

平成18年度（2006）に都域発掘調査部写真資料調査室から、奈文研の全所的な写真資料統括として企画調整部所属に組織変更を経た写真室では、発掘調査をはじめとする埋蔵文化財のみならず、奈文研の特性を活かした幅広い文化財分野を対象とした文化財写真の資料作成（撮影）や保存活用に至る調査研究を実施している。

平成24年度（2012）から令和3年度（2021）までの10年間はこれまでの撮影方法に変わる新しい技術導入にも積極的に取り組み、文化財写真の活用分野まで幅広く取り入れて写真室としての業務を実施してきた。

1) 写真撮影のデジタル化

文化財写真の分野では可視媒体としての安定性（劣化が目視できる）と白黒フィルムの高い保存性からフィルム写真が利用されてきた。しかし2000年代に台頭したデジタル写真の勢いは一般用途の爆発的な普及に伴い、フィルム写真のインフラ（フィルム供給・処理環境）を確実に破壊し2010年代に入ると業務用途でフィルム写真を使い続けることが困難な時代を迎えた。

こうしたデジタル化の動きはフィルムの価格高騰を招き、文化財保護に携わる行政機関やデジタル化を進める国策需要からその流れを加速させる要因となった。ただ、2010年代初頭の段階ではデジタル写真は文化財写真分野にとって不可視媒体であったり、保存性について実績・担保がない状態であったりすることで、性急なデジタル化を避けていた状況であった。

写真室では業務の一環として全国的な文化財写真のレベルアップと情報共有を目的に「文化財写真技術研究会」という研究会を中心的に運営している。この研究会にてフィルム写真の現状分析とデジタル写真の保存活用に取り組んだ結果、2012年度に（一社）日本写真学会と共に「文化財写真の保存に関するガイドライン」と題したデジタル写真での文化財写真撮影から保存活用まで示したガイドラインを発行した。このガイドラインでは各文化財分野に求められる写真資料についてデジタル写真での精度や利活用、デジタル画像の整理保存、長期の運用について事例を示しながら解説しており、文化財写真のデジタル化を促すものとなった。

発掘調査を中心とする埋蔵文化財保護行政では、財政上の理由からデジタル化に伴っての新規機材導入が困難なケースも多くあり、必要な精度を満たさない一般向けの安価なデジタル機材導入の動きも多く見られる。こうした動きに対して平成28年度（2016）には文化庁「埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について」（報告）の発行に協力し、発掘調査の写真記録におけるデジタル写真の精度や保存整理・活用についての標準を示した。

2) 発掘調査での記録写真

発掘調査の記録写真は奈文研が発掘調査に取り組んで以来、専任の職員が撮影をしており現在の写真室もその流れを引き継いでいる。遺跡撮影ではその場面ごとに要求される撮影角度や高度など状態に応じて様々なテクニックと機材を使用する。特に遺跡の様子を高所から俯瞰する高所撮影は、遺跡の様子を記録する上でも一般の方々に遺跡の様子を伝える活用の意味でも非常に有効な写真資料である。

最も高い位置から遺跡と周辺環境を記録する方法はヘリコプターなどの航空機から撮影する方法である。航空写真撮影についてはこれまでの実機搭乗撮影からドローンなどの無人航空機による撮影が進化した。従来からラジコンヘリ等での撮影は実施されてきたが、エンジン振動や安全性から精度面での問題があった。この10年で無人航空機の進化はめざましく、ドローンとして代表的なマルチコプターはそのペイロード（機材搭載量）の増大とGPSを利用した安全性が高く、高所記録写真撮影に十分利用できるものとなった。

次に高い位置から撮影する手段としてタワー足場の利用があげられる。これは建築現場のように建設中の建物に緊結した足場ではなく、単体で組みあげて移動することも可能なローリングタワーと呼ばれるもので、組み上げには時間と資材・人員など多くのリソースが必要である。2011年に発生した東日本大震災の復興において高台移転のための発掘が急務となり、全国から応援要員が多数集結し、発掘作業のみならず記録作業についても少ないリソースで迅速に進めることができた。タワーを使用する写真撮影と同様の精度、迅速な作業性を確保するために写真室では市販品を組合せて高所リモート撮影装置



図29 高所ポール撮影装置での遺跡撮影
(タワー組立の安全リスクや組立の省力化を実現)

を考えし、復興発掘の現場で実際に使用し成果を得た。この装置はもともと照明用の伸縮式ポール（最大高3.7M）の先端に電動式カメラ雲台を組合せ、必要な精度を満たした一眼レフデジタルカメラをWi-Fiリモート制御して撮影するものである（図29）。ポールには延長ポール（1本で約2m）も市販されており、延長ポール3本を組み合わせた状態で約10mの高さから撮影可能である。最大高だとこれまでのタワー4～5段分となり、タワー設営や高所作業の危険性を回避する手段としても非常に有効で、多くの調査機関から導入についての問い合わせがある。写真室ではさらに改良型のカーボンポールや強化型雲台などを試作し、現在では中判デジタルカメラを搭載した大判フィルム撮影に匹敵する精度での撮影を実施している。

3) 文化財各分野での記録写真

デジタル化が進んだ文化財写真では様々な従来の記録技術が進化することとなった。

壁画記録 古墳壁画では2011年度以前に解体発掘された高松塚古墳および壁画を剥ぎ取りしたキトラ古墳などの撮影でデジタルによる分割撮影を実施していた。この分割撮影画像は非常に精密に正対度を保った状態であり、



図30 2006年撮影分割画像のSMI解析成果
(標高投影や陰影処理で壁面状態を再現)

画像同士のオーバーラップも写真測量技術をもちいた活用を考えて大きく取ってあり、これらの画像をもちいる事でSMIなど三次元解析の新技術導入を試行することが可能となった。三次元解析された3D画像はレーザー測量成果と合わせて非常に精密に壁面の凸凹などを再現することが可能となり、利活用の幅が大きく広がった（図30）。

この技術は写真室として関わっている法隆寺金堂壁画へ応用し、内陣小堀飛天や外陣の焼損大壁などのアーカイブ撮影にて高精度分割撮影を実施し、その成果は陶板での精密再現にももちいられている。

赤外線 デジタル写真で使われるセンサーデバイスの特性を利用した赤外線写真については2000年代初頭に写真室で試行を重ね、報告書などの活用用途に使用可能な精度でその技術を確立し、木簡の記録写真撮影などに利用してきた。2010年代に入り、より高精度のセンサーを使用した製品が市販（改造対応）されてこの分野においても主要記録として使用出来るものとなった（図31）。

これを受け、従来大判フィルムでカラー・白黒・デジタル赤外線と撮影してきた木簡写真是2012年にフィルム写真を廃止して完全デジタル化を実現した。

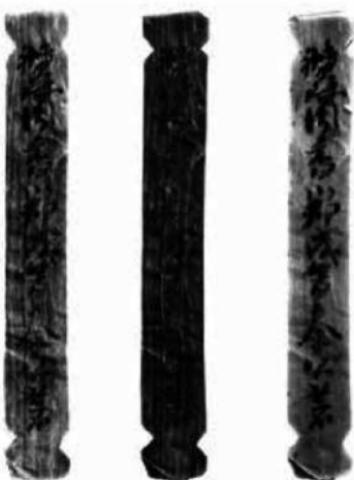


図31 木部デジタル撮影の高精度化
(左:白黒フィルム写真・中:デジタルカラー写真・右:デジタル赤外写真)

4) 奈文研写真資料の保管活用

奈文研では昭和27年（1952）の開所以来、文化財調査における写真記録を重視し積極的に取り入れている。これまで撮影されたガラス乾板やフィルム写真は全て登録資料としてナンバリングされて保管している。ナンバリングされた写真資料の整理方法は時代ごとにカード検索方式や一覧表ファイリング形式であったりするが、一貫して全ての情報を置き換える管理がされている。この情報はデータベースのメタデータとなり、ナンバリングされた登録番号とメタデータが紐付くことで情報をいち早く検索可能な状態となっている。平成30年度（2018）には研究所新庁舎にフィルム専用の保管庫が完成し、整理された写真資料の全点が収納されている。

写真フィルムは安定している媒体とはいえ、カラーフィルムなど色素を使用している媒体や、銀画像の白黒写真であっても支持体に分解性の酢酸原料が使われていたりと必ずしも保存性が高いとは言えない。奈文研では1994年度からフィルム写真の電子化（スキャニング）を写真資料の保存活用観点から進めており、それらの電子化した画像データは前述のデータベースに可視化した形で格納

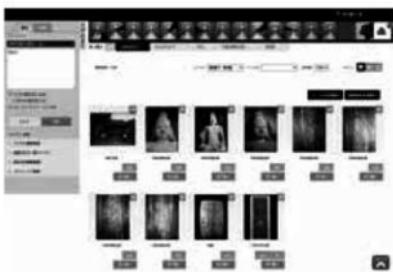


図32 総合マルチファイルデータベース
(検索対象は開所初年度の登録写真 10枚)

されている。写真撮影のデジタル化で述べた2012年度のガイドライン以降奈文研の写真撮影も本格的にデジタル化し、その画像整理にフィルム同様データベースで可視化して活用、データ本体は専用のストレージにて保管管理をすることとなった。

令和2年度（2020）には高精細画像本体を収納可能で多種多様なデータ形式を取り扱うことが可能な新データベースを導入し、フィルム資料から電子化した画像を整理するデータベースも一体化して総合マルチファイルデータベースとして運用をしている（図32）。また、このデータベースはシステムを二重化して平城地区・飛鳥藤原地区庁舎にそれぞれ設置、毎夜バックアップで災害などへの備えとしてデータを安全保管している。

5)まとめ

奈文研がおこなう文化財調査に必要不可欠な写真撮影を担当する企画調整部写真室では、全国的に数少ない文化財写真専門職員を3名配置し、奈文研の写真業務だけでなく全国の文化財写真についての底上げを業務としている。この10年は特にデジタル化が大きな転換点を迎えて、新たな技術とこれまでの技術を融合して将来に文化財の姿を伝える写真資料を引き継ぐことに取り組んできた。今後も更なる技術革新が予想されるが、高精度な文化財写真はそれを保管し活用することによって文化財本体の保存にも役立つものと認識し、引き続き業務に取り組んでいきたい。

(6) 残存脂質分析を中心とした考古生化学的研究

はじめに 考古生化学 (Biomolecular Archaeology) は21世紀に入り急速に発展した研究分野で、考古学の一分野でもありながら、近年ではこの分野の成果が国際学術誌 *Nature* の誌面を度々賑わせているように、科学界一般においても存在感を増している分野である。

生化学とは、生命現象を化学的に研究する生物学または化学の一分野で、細胞生物学、分子生物学、免疫学、遺伝学などとのつながりが強い。研究対象は生体物質全般であるが、特に顕微鏡でも見ることのできない極めて小さな物質、例えばDNAやタンパク質、糖質、脂質の特性やふるまいを化学的なアプローチによって理解しようとするところが特徴である。

これを過去の人間活動の探究に応用する「考古」生化学は、遺跡や遺物の中から上記のような非常に小さな生体物質を探し出し、分析することによって、過去の生体活動に関する情報を得ようとする研究分野である。日本では生化学分野でのノーベル賞受賞者も知られるように、質量分析計などの分析技術・装置の面では世界的に高い研究水準を維持しているが、そうした技術の考古学や文化財分野への応用という面では、欧米諸国の場合を押ししている現状は否めない。

このような考古生化学的研究手法の一つである残存脂質分析は、遺物内部に残された「脂質」を化学的に抽出し同定することで、その遺物がどのような対象物に対して使用されていたのかを明らかにし、当時の生活や食に関する直接的な手がかりを得ようとする分析法である¹⁾。脂質とは、動植物に含まれる油脂やワックス、タールなど、水に溶けない生体物質の総称であるが、この分析が特に脂質を対象とする理由は、脂質が糖質やタンパク質などの他の生体物質よりも化学構造的に安定しており、数百年から数千年という長い時間が経過しても分解がある程度に留まる可能性が高いためである。

「脂肪酸分析」の歴の遺産 脂質に注目して遺跡や遺物の性格に迫ろうとする研究は、前世纪にもおこなわれていた。「脂肪酸分析」の名で各地においておこなわれた調査結果は、同定不可能であるはずの絶滅動物の種同定にまで至り、かつこれが捏造石器に付着した試料の分析結果で

あったことから、信頼性を完全に失うこととなった。当時複数の研究者がこの分野の分析研究を進めていたが、ごく一部の研究者の不誠実な科学的行為のために、分析法自体に疑いの目が向けられることになったのは不幸な出来事であった。捏造発覚以前にも、奈文研による西隆寺の発掘調査で出土した土器埋納遺構に関する解釈において多くの批判がなされていたが、組織だった検証に至らなかった点は、反省点として繼承していく必要があろう。この後、日本考古学においては脂質・脂肪酸に関する研究が低調になっていくが、それとは対照的に、英国では次々に画期的な成果が蓄積されていくことになる。ヨーロッパ研究会議助成プロジェクト (PONTE: POrtery iNnovation and Transition in East Asia: bridging expertise across continents) 2013年、*Nature* 誌に掲載された英國ヨーク大学のオリヴァー・クレイグ博士による論文“Earliest evidence for the use of pottery”は、土器残存脂質分析を用いた研究の結果、世界最古級の繩文土器の用途が水産資源の加工調理に偏重して用いられていたという新知見を世に知らしめることになり、それまで主にヨーロッパや西アジアで用いられてきたこの方法が、東アジアの考古学研究にとっても有効であることが示された。奈文研では、東アジア考古学の専門家として、土器残存脂質分析の世界的権威であるクレイグ博士からの招聘に応じ、Marie Curie Fellowshipを獲得した庄田慎矢研究員（当時）に、2年間の研究休職が与えられた。前例がないとされた研究休職制度の適用を認める当時の理由書には、「21世紀における考古学の潮流は学際化が進み、ヨーロッパやアメリカでいわゆる考古科学が飛躍的な進展を見せており、そのなかでも英國ヨーク大学は世界水準の考古科学部門を有している。庄田研究員がそこで考古科学研究プロジェクトに主体的に関わることは、奈文研における考古科学分野の発展をうながし、奈文研が考古科学さらに考古学分野で日本国内での先端的役割を担うのに大きく貢献できるものと期待できる。<中略>古代都城研究において出土文字資料などの豊富な試料蓄積を背景にもつ奈文研が、新しい研究による分析結果を併用することで、他に類を見ない考古学的研究成果を世界水準で発信することが可能になる」と書かれている。このことは、次項で紹介するように、今まで現実となりつつある。

さて、PONTEプロジェクトを通じ、残存脂質分析をはじめとする各種の考古生化学的分析方法の多様なトレンディングの経験(図33)はもとより、実践的研究に基づいた、国際的に認知される重要な研究成果が次々と世に出されることになった。広範囲にわたる古手の縄文土器による調理対象の解明をはじめ、世界初となるキビの生物指標の土器からの抽出・同定、朝鮮半島狩猟採集民の土器による積極的な海産資源の利用、中国の新石器時代の土器からの澱粉質食料の調理加工の証拠や、東アジア最古となる蜜蜂の化学的証拠が確認され、さらにはロシアアムール河流域における最古期の土器の用途の地域差など、東アジア考古学の専門知識と考古生化学の分析技術を掛け合わせたことで生まれた成果は極めて大きかった。これらの成果が、*PNAS*や*Scientific Reports*など、考古学の世界にとどまらず広く科学界において国際的に評価の高い学術誌に論文として公表されたことも、特筆に値する。また、学生の教育や一般市民へのアウトリーチ活動に積極的に従事することで、日本の考古学や文化財に関する情報の海外発信にも貢献できたことは、その数年後からの国際遺跡研究室の活動につながる素地となった。

帰国・復職後も残存脂質分析を中心とする一連の共同研究をさらに進めため、庄田はヨーク大学に客員研究员として籍を残したが、翌2017年には名譽訪問研究员として、同施設へのフルアクセスを許されることになり、現在に至るまで密度の濃い共同研究が進められている。

最近の成果

上記の共同研究をもとにして、多種多様な研究課題が実施されている。主なものを見挙げると、科研費若手研究(A) 土器残存脂質分析を用いた縄文-弥生移行期における土器利用と食性変化の追跡(2017-21)、

同挑戦的研究(萌芽) 日本古代の乳製品加工に関する考古化学的証拠の探求(2017-18)、同学術変革領域研究(A) 植物考古学から探るイネ、雑穀、ムギ食文化の交流と変容(2020-24)、同基盤研究(A) 東北アジアの農耕化過程における食と調理の変化への考古生化学的アプローチ(2021-25)、公益財團法人浦上食品・食文化振興財团研究助成(2021) 縄文時代の食料加工技術の考古生化学的研究(以上代表者:庄田慎矢)、科研費基盤研究(A) 東ユーラシア東辺における古代食の多角的視点による解明とその栄養価からみた疾病(2020-24、代表者:三舟隆之)、同基盤研究(A) 「ボカシの文化」にメスを入れる(2021-23、代表者:高宮広士)、同基盤研究(B) 小規模島嶼群における文化適応と潜在性の考古学的研究(2018-22、代表者:新里貴之)、同基盤研究(B) 牛馬文化の渡来と変容過程の解明による新たな列島史像の構築(2018-21、代表者:植月学)、同基盤研究(C) 旧石器時代の食料資源充実に関する基礎研究(2021-23、代表者:保坂康夫)、同若手研究考古生化学から探る古代日本の土器利用(2022-24、代表者:村上夏希)などで、時代的には旧石器時代から古代まで、地域的には日本を含む東アジアから中央アジア・東南アジアまでを含む多様な内容となっているのは、この方法の汎用性の高さを示すものといえるであろう。

また、この手法を応用して様々な考古学上の研究課題を解決するために、「アフロ・ユーラシアの考古植物学(奈文研、2018年)」「古代ユーラシアにおける乳製品の加工と利用(国立民族学博物館、2018年)」「シンポジウム キビ(同志社大学、2019年)」などの国際シンポジウムを開催し、成果発信や情報収集、そしてさらなる研究課題の追求も進めた。



図33 ヨーク大学 BioArCh (ヘスリントンキャンパス S ブロック) の残存脂質分析実験室の様子 (by Coleen Morgan, licensed under CC-BY)

一方、2020年1月～3月にはオリヴァー＝クレイグ氏を日本学術振興会外国人招聘研究者として奈文研に招へいし（『考古生化学で探る農耕社会のはじまり』）、世界的に知名度の高い氏の研究内容を日本に紹介するとともに、これまでの共同研究の成果を整理し、今後の研究展開について協議した。

同年7月には、国際遺跡研究室に文化財科学を専門とする村上夏希アソシエイトフェローが着任し、土器残存脂質分析の方法と実践を学ぶと同時に、これまでほとんど試みられていないかった漆・石器や須恵器への残存脂質分析の応用を進めている。

2022年3月には、ヨーク大学および大英博物館において博士号を取得したエドワード＝スタンダール博士が日本学術振興会外国人特別研究員として奈文研に招聘し、研究課題「中央アジアの雜穀をめぐる料理と物質文化の考古生化学的研究」に従事している。スタンダール氏の指導教授であるカール＝ヘロン氏は庄田が初めて土器からキビの生物指標を発見した際の論文の共著者であり、その生物指標の研究を深めたスタンダール氏が庄田と共同で新たな研究課題に取り組むことは、日英間での学術交流をさらに確固たるものにすると信じる。

さて、帰国後から数年をかけて、技術補佐員やアシスタントの協力を得て分析手法・手順の改良を進めたが、そうした分析技術の海外移転に関しては、文化庁からの委託事業である文化遺産国際協力拠点交流事業の一環として、カザフスタン共和国国立博物館をはじめカザフスタン各地の研究者を対象に、実際に同国出土試料を分析しながら研修をおこなった事例があげられる（図34）。この他、現在では中国、韓国、ロシア、リトアニア、キル



図34 残存脂質分析に関する実地研修の様子（文化庁の委託事業）



図35 残存脂質分析実験室コーナーの出張展示（福井県立若狭歴史博物館）

ギス、カンボジア、インド、台湾などの試料を分析しているが、ゆくゆくはこれらの国々への技術協力・移転も進めていきたいと考えている。

アウトリーチ活動としては、2021年10月～11月に福井県立若狭歴史博物館において開催された、島浜貝塚発見60周年記念特別展「森と出会った縄文人－人と植物の歴史の始まり－」において、実験室コーナーの出前展示を実施した（図35）。この展示では、分析方法や成果の紹介ビデオの上映とともに、実際に分析に使用する機器や器具を、豊富なイラストとともに展示することで、難しくとらえられがちな化学分析の内容をできるだけわかりやすく紹介した。

以上のように、残存脂質分析は単に学術上の新しい知見をもたらすだけでなく、各種事業におけるキーメソッドとしての役割も演じている。今後も精力的に技術改良と教育普及を続けていきたい。

註

- 1) 庄田慎矢・オリヴァー＝クレイグ「土器残存脂質分析の成果と日本考古学への応用可能性」『日本考古学』43、79-89頁、2017。
- 2) 庄田慎矢「土器で煮炊きされた植物を見つけ出す考古生化学的試み」『アフロ・ユーラシアの考古植物学』クバプロ、220-233頁、2019。

3. 飛鳥資料館の活動

飛鳥資料館は奈文研の博物館施設として、飛鳥の歴史と文化を分かりやすく伝えることをめざしている。飛鳥は我が国の古代史を語る上で重要な地域であり、考古学的な新発見が報道をにぎわすことも多い。飛鳥資料館は奈文研の調査研究成果を軸としながら、考古学だけでなく、飛鳥時代や飛鳥地域に関わる様々な歴史と文化財を取り上げてきた。本稿では近年の活動を紹介しつつ、現状と展望を述べる。

(1) あゆみ

高度経成長期の1970年に飛鳥保存問題が国の政策として取り上げられ、同年12月に「飛鳥地方における歴史的風土及び文化財の保存等に関する方策について」が閣議決定された。飛鳥資料館は、この閣議決定に基づき明日香村大字奥山に設置され、1975年に開館した。常設展示は宮殿、寺院、古墳、石造物などのコーナーを設けた。

1997年には特別史跡山田寺跡出土の東回廊の部材を保存処理し、組み立てた状態で公開する常設第2展示室を開設した。奈良県山田寺跡出土品はその後、2007年に一括で重要文化財に指定された。同じく重要文化財の石人像と須弥山石¹¹、高松塚古墳出土品などとともに、当館を代表する展示品となっている。

(2) 展示の取り組み

飛鳥資料館は季節ごとに様々なテーマの特別展・企画展を開催している。開館当初から年2回を基本としていたが、独法化した2001年度以降には年4回、2011年度か

らは年5回以上となり、最も多い年度では大小あわせて8回に達した。しかし、回数を増やしても業務量増加のわりに来館者数や評価の面で手応えは少なかった。中期計画の数値目標があったため年4回以上の開催を維持したが、後述するキトラ古墳関連業務の増加、運営費交付金の減少、数値目標の見直しなどの状況を踏まえて、2021年度からの中期計画下では特別展1回、企画展2回を基本とし、ミニ展示1回をそれに加えている。適切な回数で魅力ある展示の実現を重視する方針である。

特別展・企画展のテーマは考古学や古代史に焦点をあてた展覧会から、奈文研の調査研究をテーマとするもの、実験的なテーマなど、多彩なラインナップとなっている。すべての展示に語るべき想いやエピソードがあるが、ここではいくつかを例示するにとどめる。2013年度の「飛鳥寺二〇一三」では飛鳥寺塔心礎埋納品や瓦の近年の調査を紹介し、奈文研のルーツであり最前線でもありますける飛鳥寺関係の調査研究を紹介した。「飛鳥・藤原京への道」は都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）設立40周年を記念したものである。2014年度の「はぎとり・きりとり・かたどりー大地にさざまれた記憶ー」では奈文研が飛鳥藤原地域の調査で採取した遺跡の柱穴や基壇などの土層はぎとりなどを一堂に集めた。これら採取資料を主役に据えた展覧会は全国的にも珍しく、オリジナリティの高い展示となった。2015年度は「はじまりの御仏たち」で押出仏や堆仏など仏教美術的な資料を展示し好評だった。飛鳥資料館開館40周年記念「キトラ古墳と天の科学」(図36)は文化庁と共に催し、キトラ古墳天文園を中心に東アジアの天文学や美術を紹介して話題となった。2016年度の「文化財を撮るー写真が遺す歴史ー」は文化財写真の歴史を紹介し、展示室の撮影体験コーナーや資料撮影イ



図36 開館40周年秋期特別展「キトラ古墳と天の科学」(2015年)



図37 秋期特別展「屋根を彩る草花一飛鳥の軒瓦とその文様」(2021年)

ベントの開催など、写真室の協力で魅力ある展覧会となった。2017年度の「藤原京を掘る－藤原京一等地の調査－」と「高松塚古墳を掘る」はどちらも発掘調査報告書の刊行をうけてその成果を紹介したもの。これまで報告書として学術的な成果が結実しても、それを一般の方々にわかりやすく紹介する機会はほとんどなく、一つの遺跡を深掘りする点でも意義のある展覧会であった。「高松塚古墳を掘る」では埴丘断面の土層はぎとりや地震痕跡レプリカ、石室模型などの大型展示品も好評だった。2018年度の「あすかの原風景」は飛鳥地域の地図を集めた展覧会で、ウォーキングイベントも開催した。考古学・古代史だけではない飛鳥の魅力を紹介した画期的な展覧会といえる。デザイン性の高いポスターや図録も話題となった。2019年度の「骨ものがたり－環境考古学研究室のお仕事」は奈文研埋蔵文化財センター環境考古学研究室が全面的に協力して実現した企画で、骨や貝などの資料を展示つつ、学問分野そのものや調査手法までも展示了した意欲的な展覧会である。研究員が展示の一部となって来館者に骨の同定をレクチャーする企画や、参加型のイベントを開催するなどして好評を博した。2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響で臨時休館し、春期特別展が中止となった。「飛鳥の石造文化と石工」は庭園の酒船石遺跡亀形石槽（石製複製品）設置にあわせて企画し、古代と現代の伝統的な石工技術や道具を紹介した。2021年度の「屋根を彩る草花－飛鳥の軒瓦とその文様」（図37）は奈文研が長年取り組んでいる古代瓦の研究成果をもとに、軒瓦の文様の変遷やルーツを紹介した。華やかな会場デザインも高く評価され、地味になりがちな瓦の展示において新たな魅力を提示した。

企画展は冬期に「飛鳥の考古学」として飛鳥地域での発掘調査成果を速報的に紹介する展覧会を2006年度から



図38 第12回写真コンテスト「飛鳥の木」作品展示（2021年）

続いている。明日香村教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、関連自治体との共催である。飛鳥で出土した遺物を飛鳥で展示する、貴重な機会となっている。

また、2011年度に「奥飛鳥の文化的景観」が重要文化的景観に選定されたことをうけ、2012年度から参加型の写真コンテストを開催している。当初は特別展・企画展とは別で作品展示をおこなっていたが、2014年度から基本的に夏期企画展として実施している。写真を募集する企画は飛鳥周辺でもいくつか開催されているので、奈文研の飛鳥資料館が開催する写真コンテストとしての独自性と意義を出す必要がある。そこで、歴史や文化を感じさせるテーマを設定し、紙焼き作品での応募に限定して、撮影から出力まで総合的な評価をおこなうことを当初から一貫しておこなっている（図38）。スマートフォンによる撮影とSNSが全盛の昨今、あえて撮影・現像・プリントといった一連の技術の結果として形となった作品を評価しているのが、写真室を擁する奈文研らしい特色である。このようなハードルにも関わらず毎回100名を超える応募者があり、文化財写真とは一味違う、知られざる飛鳥の魅力的な情景が切り取られている。

2021年度からは春期の「ミニ展示」として、展示する機会の少ない収蔵品や、研究員が見つけたちょっと面白いものごとを紹介している。小規模ながら、從来とは違う切り口が好評である。2022年度には飛鳥資料館に寄贈された瓦や仏頭模造品等を展示した。展示品は貴重な資料ながら展示する機会が少ないものが多く、ミニ展示の意義を感じさせた。

このほかに、常設展示の一部刷新や多言語対応なども順次進めている（図39）。

また、常設展示の一環として、飛鳥資料館には広い庭



図39 常設展示室

園があり、そこに須弥山石や亀石、猿石など、古代飛鳥の石造物の精巧な複製品を配置している。近年は高松塚古墳石室（2019年）、酒船石遺跡の亀形石槽（図40、2020年）、二面石（2021年）を作成し、野外展示を充実させた。須弥山から水が噴き出し、酒船石に水が流れる様子は、古代庭園の雰囲気を体感できる空間として好評を得ている。

（3）魅力を増やす取り組み

この10年で飛鳥資料館が力を入れてきた部分として、いかにして文化財の魅力を伝えるか、ということがある。取り組みの例を挙げれば、まずは展覧会のポスター類や会場の作成、図録といった目に見える部分に、デザイナーやプランナーなどプロフェッショナルの参画を増やした。もちろん予算などから限界はあり、外注する部分と手作りの部分との混合となるが、会場の雰囲気などは目に見えて向上し、アンケートでも好意的な意見が多い。また、ウェブサイトのリニューアルや、SNSでの発信といった取り組みも推進した。教育普及活動では、従来の講演会に加えて、ワークショップ（図41）や野外を歩く企画などもおこなった。また、ミュージアムグッズの製作も積極的におこない、瓦や木簡などを題材にした奈文研オリジナルの手ぬぐい、トートバッグ、エコバッグ、野帳などを製作した（図42）。グッズ製作ではあえて企画やデザインを外注に頼らず、研究員や補佐員たちが工夫することでモチーフの学術的な正確性を保つつつ、実用性・デザイン性・独創性を高めている。このほか、五尊像や瓦のぬりえ、牽牛子塚古墳ペーパークラフトなどを自作して配布し、多方面から文化財に親しみや興味をもつ機会の醸成を試みている。これらは飛鳥資料館のダウナーラー



図40 庭園の酒船石遺跡亀形石槽（石製複製品）（2020年）

ドコンテンツとしてもウェブ上で公開している。新聞等で紹介されたものもあり、グッズを買うために来館したという声も聞かれた。

（4）キトラ古墳壁画関連

国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区が2016年9月に開園した。公園内にあるキトラ古墳壁画体験館「四神の館」は地階が国土交通省による展示施設で、奈文研はその制作時に全面的に協力した。地上1階は文化庁のキトラ古墳壁画保存管理施設になっている。奈文研が文化庁からの受託事業として管理・運営をおこない、日常的な業務と公開活用関係は飛鳥資料館が主に担当している。壁画公開は年4回、それ以外の期間も展示室を公開し（図43）、ワークショップ、講演も実施している。また、仮設のプラネタリウムを用いたキトラ天文団の解説映像も毎回好評である。2021年度末まで壁画公開は21回実施し²⁾、延べ16万人が参加した。キトラ古墳壁画関係業務は新しく加わったものだが、いまや飛鳥資料館の主たる業務の一つといってよい。キトラ古墳壁画は公開できる壁画が



図41 夏休みイベント「つくろう！玉枕」（2017年）



図42 飛鳥資料館が作成したグッズ類



図43 「国宝キトラ古墳壁画の公開（第20回）会場風景（2021年）
5面と限られており、展示室も狭いため、造作を毎回変えてバリエーションを持たせたり、トピック的な話題を用意するといった工夫をしている。また、年末年始の干支にちなんだ企画展示なども開催している。2019年度にはキトラ古墳・高松塚古墳の石室ペーパークラフトを作成して公開参加者へ配布するとともに、その内部を小型ファイバースコープで観察するワークショップを開催して喜ばれた。2020年度にキトラ古墳天文園が日本天文遺産に認定された際には、記念ポストカードを作成した。2021年度からはオリジナルのクリアファイルを配布し、公開参加者に手渡しリフレットやチラシなどを携行する便宜を図るとともに、次回参加への動機付けも狙っている。

（5）国際交流

飛鳥資料館は2017年12月に大韓民国益山市にある国立弥勒寺址遺物展示館と学術交流に関する協約書を締結した。この協約は両館の学術・文化交流および文化財の調査研究、保存・展示などに関する協力関係を推進することを目的としたものである。その後、国立弥勒寺址遺物展示館は2020年1月に国立益山博物館として面目を一新した。しかし新型コロナウィルス感染症の影響で日韓の往来が不可能となり、学術交流は休止状態となった。協約は5年間を区切りとしているが、2022年4月には韓国側の館名変更にともなう文言修正のうえ、両館長の署名によって新たな5年間の協約へと更新された。古代の飛鳥と百濟の関係は深く、今後の学術交流や調査研究が期待されるところである。

（6）これから

2021年10月21日、飛鳥資料館の累計来館者数が500万

人を達成した。開館から46年7カ月での到達である。これまでご来館いただいた多くの方々と、ご支援、ご協力を賜った皆様にあらためて感謝したい。今後はより一層、魅力的な展示と企画に取り組み、600万人達成をめざしてゆく所存である。

これからの飛鳥資料館に関わる大きな動きとしては、一つは地元自治体が中心となって進めている世界遺産「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群（仮称）」登録に向けた活動がある。登録実現に向けて飛鳥資料館として協力するとともに、地域の展示施設として、世界遺産としての考え方や価値を分かりやすく国内外に発信することが求められる。

もう一つは、文化庁が進める高松塚古墳壁画の新しい保存管理施設の計画がある。展示や運営の具体的未定だが、重要文化財高松塚古墳出土品や前田青邨らによる高松塚古墳壁画模写を所蔵する当館にとって、この施設とどのように連携や役割分担するのかは今後の課題となるであろう。この施設が完成すれば飛鳥地域の観光や文化財関連施設にとって大きなインパクトとなるだろう。

上記の動きのほかにも、地元自治体や関係団体などによる様々な取り組みが進められている。これらは飛鳥資料館にとって、地域との連携、ハブとしてのミュージアム、インバウンド対応など、博物館をめぐる現代的な要請にも直結している。SDGsや、すべての人に開かれた施設としての環境整備といった側面も、当然のこととして意識していかねばならない。対応すべき課題は山積している。

飛鳥資料館には観光客と古代史ファンを中心に根強いニーズがある。この10年間、展示内容と見せ方の工夫には努力をしてきたつもりであり、来館者アンケートの高評価や好意的コメントには手応えもある。これからも研究機関としての調査研究をベースに、分かりやすい展示と多彩なコンテンツを提供して、飛鳥のゲートウェイとしての機能をさらに高めていきたい。

註

壁画公開は、のべ22回のうち第19回公開が新型コロナウィルス感染症拡大の影響で中止となった。

4. 文化遺産部

(1) 南都諸大寺・近畿地方を中心とした古文書・典籍・歴史資料等の調査研究

南都七大寺を中心とする古寺社の調査研究は、奈文研の本来の設立目的の一つであり、設立当初における最も重要な研究テーマであった。当時は美術工芸研究室・建造物研究室・歴史研究室の3研究室が共同して、美術史学、建築史学、文献史学、考古学の各分野から総合的な調査研究を進めたのである。1980年に美術工芸研究室が奈良国立博物館の仏教美術研究資料センターに移管されて以降は、部局間で連携を取り合いながら、各部局が個別に調査研究をおこなっている。

古文書・典籍・歴史資料においては、歴史研究室が担当して当初以来の方針を受け継ぎ、南都諸大寺・近畿地方を中心とする古寺社等の資料を、継続的に調査研究している。調書作成などの基礎的・悉皆的な調査研究を進めているので、この10年間の成果を中心に述べておく。

興福寺の調査 興福寺では、典籍文書の悉皆的な調査を毎年にわたって実施している。その成果はすでに、第1函～第80函は『興福寺典籍文書目録』第1巻～第4巻として公表しており、この10年間は、第5巻以降に収録する資料の調書作成・写真撮影を進め、二条家記録・井坊家文書等の調書を取り終えた。またその過程で明らかとなった中世資料の一部を、「興福寺二条家史料の抜書集」(紀要2017)・「興福寺蔵『明本抄』奥書の検討」(紀要2018)・「興福寺二条家記録『文龜三年引付』の紹介」(論叢2、2021年)



図44 唐招提寺の典籍調査風景

において紹介した。

唐招提寺の調査 唐招提寺では、1954年と1960年・61年に奈文研が総合調査を実施した。典籍・古文書はその総合調査を契機として継続して調査を実施し、「唐招提寺史料」第1(1971年)等を公表した。その後、調査は一時期中断していたが、独立化後の2001年度～2005年度に文化遺産研究部(当時)として総合調査を実施した。古文書・典籍・歴史資料の調査はその時に再開し、それ以後は継続的に調査している。この10年間は、宝蔵・新宝蔵・戒学院等に所在した未整理の典籍文書を把握・整理した(図44)。また宝蔵所在の典籍を、1960年代に奈文研が作成した調書と照合し、写真撮影・目録作成作業に取りかかっている。調査成果の一部は「唐招提寺授戒帳」(2013年)として公表した。これは、寛永8年(1631)～明治35年(1902)の唐招提寺での授戒を網羅した史料等を収録したものである。また宝蔵の鎌倉時代の木札を調査した成果を、「唐招提寺宝蔵の『諸人忌日料田畠施入目録』をめぐって」(『覚盛上人御忌記念 唐招提寺の伝統と戒律』2019年)として報告した。

薬師寺の調査 薬師寺では1980年以降、東京大学史料編纂所と協力して、悉皆的な調査を実施してきた。この10年間では、写真撮影(図45)と、第56函～第60函の調書作成をおこなった。そして第1函～第11函の書誌事項をとりまとめ、奈良文化財研究所・東京大学史料編纂所編「薬師寺文書目録」第1巻(2019年)として刊行した。また調査過程で得た知見の一部を「薬師寺僧の官位とその補任の様相」(紀要2016)として公表した。

東大寺の調査 東大寺では1970～80年代に未成卷文書の調査を実施し、「東大寺文書目録」第1巻～第6巻(1976～1984年)を刊行した。しかし東大寺図書館にはそれ以外にも、120函以上にのぼる未整理資料が存在していた。それらは新修東大寺文書聖教と名付け、2001年度より科学研究費補助金も充当して悉皆的な調査を開始し、現在に及んでいる。この10年間では第69函～第97函を調査



図45 薬師寺文書第9函

し、科学研究費補助金「南都における廃仏毀釈後の資料動態に関する調査研究」研究成果報告書として、「東大寺図書館所蔵 中村純一寄贈文書報告書」(2014年)・「東大寺図書館所蔵 新修東大寺文書型教調査報告書第46函～第77函」(2014年)を刊行して、それぞれの目録と研究報告を掲載した。また新修東大寺文書型教の中村純一寄贈文書中には、明治維新時の興福寺僧の日記があり、興福寺をめぐる神仏分離の様相が判明する好資料だったので、その内容を「廃仏毀釈 発見された奈良・興福寺僧の日記」(『月刊住職』第498号、2016年)として紹介した。

当麻寺の調査 2016年度より、当麻寺の経典の調査を開始した。未整理の一切経である。巻子本が貼り付いて開披作業が困難だったが、2019・20年度に修復専門家の助力を得て開披の要領を学んだ結果、当初よりは順調に進められている。現在、調書作成・写真撮影を進めているところである。

また2020年度より、当麻寺の堂舎に記された銘文の調査をおこなった。金堂・曼荼羅堂・曼荼羅堂柱にある中世の寄進状については、遺跡・調査技術研究室がひかり拓本を作成するなど、新たな技術を試して調査した。曼荼羅堂柱は建造物研究室により、建築部材としての調査もおこない。その結果、寄進状が記された場所の堂内での位置関係が判明した。また本堂に多く残る近世の落書きも、可能な限り調査した。そのうち曼荼羅堂柱の調査成果は「当麻寺柱とその銘文の調査」(論叢3、2022年)として公表した。

法華寺の調査 法華寺所蔵の資料については、「名勝法華寺庭園の保存活用にかかる調査研究」に関連して、2015～2017年度に近世の日記の調査・写真撮影をおこなった。その後、2018年度には発掘調査の関連資料として法華寺村絵図を調査し、その成果は「左京二条二坊十五坪の調査」(紀要2019)に報告した。2019年度からは、法華寺の土蔵内の資料について悉皆的な調査をおこない、歴史資料等の把握に努めている。

仁和寺の調査 仁和寺は、1958年より歴史研究室が御経蔵・塔中蔵の典籍・古文書等を調査し、「仁和寺史料」寺誌編1(1964年)・2(1967年)を刊行した。その後、調査は一時中断した時期があったが、「仁和寺史料 目録編〔稿〕」1(1998年)を公表し、独立化後の2009年度からは、御経蔵の典籍・古文書を継続的に調査している。その成

果として、悉皆的な目録としては「仁和寺史料 目録編〔稿〕」2(2015年)・3(2017年)・4(2021年)・5(2022年)を刊行して御経蔵聖教の第105函までの目録を公表した。併行して古文書の読解もすすめ、「仁和寺史料 古文書編」1(2013年)・2(2020年)を刊行して、中世～近世の古文書である、御経蔵第150函1号～515号の釈文を公表した。

三佛寺の調査 藏王権現を本尊とする山岳寺院として著名な、鳥取県三朝町の三徳山三佛寺の資料調査を、2010年度より実施した(図46)。藏王権現胎内文書、中世如法經、近世文書のほか、仏像や器物等を調査している。一部は、美術史学・年輪年代学・考古学・保存科学の方面からも調査した。その調査成果として、「大日寺瓦経の研究—三佛寺所在分を中心に」(『文化財論叢』4、2012年)・「三徳山三佛寺所蔵木造勝手権現像について」(紀要2014)・「三徳山三佛寺所蔵勧善文銅鏡の調査」(紀要2015)・「三徳山三佛寺所蔵江戸時代青銅鏡の調査」(紀要2016)・「封をする経巻一如法經の巻緒について」(『古文書料紙論叢』2017年)・「三徳山三佛寺の近代行場絵図」(論叢1、2020年)を公表した。また関連して、愛媛県横峰寺が所蔵する資料を調査して「石鎧山の縁起からみた藏王権現信仰」(紀要2015)に公表し、奈良の金峯山・鳥取の三徳山・愛媛の石鎧山の藏王権現信仰の関連を紹介した。

大宮家文書の調査 大宮家は、明治初年まで春日大社の常住神殿守をつとめ、現在は氷室神社の宮司に任じている。同家に伝わる大宮家文書は、中世以降の春日大社関係資料を多く所蔵しており、成卷文書・括文書・函文書等に分類されている。

当該資料の調査では、2003年度から2006年度は、奈良市の調査に歴史研究室員が協力して成卷文書の調査研究



図46 三佛寺の歴史資料調査風景

を実施した。その後、2007年度から2010年度は奈文研・奈良市の共同研究、2011年度から2013年度は両者の連携研究として、共同で成巻文書・括文書の調査研究を実施した。その成果として『大宮家文書調査報告書』(奈文研・奈良市教育委員会編、2014年) を刊行し、成巻文書・括文書の目録と研究成果を公表した。またその過程では、調査で得た見知の一部を「大宮家文書の原本調査から」(紀要2007) で公表した。その後、2017年度以降は函文書の調査研究を、奈文研・奈良市の連携研究として実施している。現在、調書作成・写真撮影を実施中である。

中村泰氏寄贈文書の調査 東大寺の調査で上記のように、新修東大寺文書型教の一部である中村純一寄贈文書の調査成果を公表したところ、中村純一氏のご子息である中村泰氏が所蔵する古文書を調査することとなった。中世以来興福寺の承仕を世襲した家の分家筋にあたり、資料は江戸時代の承仕関係文書から、近代に及んでいる。2015年度より現在まで調査を実施している。その過程で、2020年度に中村泰氏より奈文研に資料が寄贈された。また資料中に見いだした室町時代文書の写しを、「興福寺承仕関係文書から」(紀要2018) で紹介した。

平城宮跡保存運動関係資料の調査 平城宮跡保存運動関係資料は、2010年度にその調査成果を「明治時代平城宮跡保存運動史料集—棚田嘉十郎聞書・溝辺文四郎日記」(2011年) として公表した。その後、保存運動に関係した奈良の石崎家の資料を「平城宮跡保存運動のはじまりー石崎勝蔵関係資料からー」(紀要2012) に紹介した。また明治34年(1901) の大極殿への標木建設式関係資料が、当寺都跡村村長をしていた岡鶴家より2018年度に見いだされ、歴史研究室が調査を実施した。また佐紀町の溝辺家で保管していた木材が、明治34年・明治43年の大極殿標木であることを、2020年度に歴史研究室が調査して確認した(図47)。それらの成果は、平城宮跡資料館の2021年度春期特別企画展「平城宮跡保存運動のさきがけ」(4月29日~5月30日)、2022年度春期特別展「未来につなぐ平城宮跡—保存運動のあけぼの—」(4月29日~6月12日)において展示した。また2022年度展示では、同名の展示図録を作成した。そして上記の岡鶴家資料・溝辺家標木は、2021年度に奈文研に寄贈された。

その他資料の調査 天理市の個人所蔵の扁額を、2012年度に古文書学・建築史学・年輪年代学・保存科学の観点か

ら調査した。その結果、それが内山永久寺の真言堂に掲げられていた、宝治元年(1247) 制作の扁額であることが判明したので、その成果を「内山永久寺の扁額」(紀要2013) に公表した。

また、吉野山の舟知家が所蔵する金峯山寺関係の資料を、2017年度以降調査している。舟知家は住宅としては吉野建の民家で、その調査は建造物研究室が実施し、建造物としての成果はすでに公表している。

また、奈文研所蔵資料を調査し、資料の大部分が室町時代の讃岐国・真言宗寺院に関する資料であることが判明したので、「奈良文化財研究所所蔵『覚院城・萩原寺等関係中世聖教類』」(論叢2、2021年) として公表した。他機関による調査への協力 奈良県生駒市の中長福寺について、奈良県教育委員会が解体修理を実施した。その際、中世・近世の木札が確認され、調査依頼を受けて歴史研究室が調査した。特に中世の木札は、永仁6年(1298) の長福寺料田目録であり、中世における土地の所有権を考える上でも興味深い資料である。その成果は「生駒長福寺本堂と木札の調査」(『本簡研究』第39号、2017年) 等で公表した。

また協力依頼を受け、石山寺主催の石山寺文化財調査・文化庁主催の仁和寺聖教調査等に協力した。

文化財研修の実施 2012年度以降、文化財担当者専門研修で「古文書歴史資料調査基礎課程」を担当することとなり、2012年度・2014年度・2016年度・2018年度・2021年度に実施した。



図47 溝辺家寄贈の明治時代大極殿標木

(2) 文化財建造物の調査研究

建造物研究室は奈文研創立以来現在も継続する研究室で、主に建築史を専門とする研究員により、南部を中心とした古代建築等の調査研究のほか、全国各地の伝統的建造物調査、集落・町並み、近代化遺産・近代建築等の調査研究をおこなってきた。研究所独自の調査・研究に加え、国および各自治体の要望にも適宜応じ、各地の文化財保護行政にも協力し、報告書等を刊行している。近年は、上記の研究内容に加え、文化財の保存と活用に関する調査・研究や国際協力等にも積極的に取り組んでいる。また、発掘建築遺構の復原的研究にも携わり、都城発掘調査部がおこなう平城宮跡第一次大極殿院の復原研究や、東大寺七重塔の復原研究にも協力している。

以下、この10年間の成果について概要を述べる。

南部を中心とした社寺建築の研究 南都寺院の調査研究は、現在も建造物研究室の研究の柱の一つとして位置付けられている。特に2009年からは、法隆寺所蔵の古材調査を継続しておこなっている。法隆寺では、昭和大修理で取り外された古材を境内の収蔵庫に保管している。その整理作業は奈良県文化財保存事務所が法隆寺より委託されおこなっており、奈文研は県がおこなう整理作業と並行して、古材の調査をおこなっている。調査では、金堂の古材約3,000点を確認しており、それぞれについて実測などをおこなった。

2019年には、岡寺（奈良県明日香村）本堂の脇内陣で発見された背面壁の板図の調査を奈良県文化財保存事務所と共同でおこない、近世における岡寺本堂の造営に関する新たな見知を得た。

2017年からは、奈良県文化財保存事務所と協力し、奈良県内における社寺建築の把握を目的として、奈良県近世後期社寺建築悉皆調査をおこなっている。2022年3月現在、県内39市町村のうち34市町村について調査を完了している。この調査の中で、2018年には大和高田市藤森に所在する十二社神社本殿の建築年代が中世に遡ることを発見し、その後詳細調査をおこない、建築的価値をあきらかにした（図48）。2020年、十二社神社本殿は奈良県指定有形文化財として指定されている。

伝統的建造物および集落・町並みの調査 全国各地の伝統的建造物の調査では、社寺建築、民家建築、学校建築など、建築種別・年代に関わらず積極的に取り組んでいる。

近年は、2012年度に旧高槻市尋常高等小学校（岡山県高槻市）、2015年度に北口本宮富士浅間神社（山梨県富士吉田市）、松浦家住宅・佐藤家住宅（秋田県横手市）、2018年度に旧中村家住宅（長野県塩尻市、図49）、2020年度に料亭洲さき（岐阜県高山市）、松江神社（島根県松江市）の調査をおこなっている。なお、調査後、松浦家住宅・佐藤家住宅（2017年2月）、北口本宮富士浅間神社8棟（2017年11月）、旧中村家住宅（2020年12月）が国重要文化財に指定された。

伝統的建造物群保存地区は、1975年の文化財保護法改正によって制度化され、2021年8月現在、全国で126地区が重要伝統的建造物保存地区に選定されている。奈文研では、それ以前より集落・町並みの調査に取り組んでおり、現在も選定に向けた保存対策調査や、選定後の見直し調査などを各自治体の依頼を受け実施している。

この10年におこなった調査は、塩尻市平出地区（2012・2013年度）、若桜町若桜地区（2015・2016年度）、矢掛町矢



図48 十二社神社本殿の調査（奈良県大和高田市）（2018年）



図49 旧中村家住宅の調査（長野県塩尻市）（2018年）

掛宿（2017年度）、津山市城西（2017・2018年度・図50）、佐渡市小木町（2021年度～継続中）である。なお調査後に、若桜町若桜（2021年8月選定）、矢掛町矢掛宿（2020年12月選定）、津山市城西（2020年12月）が、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

近代和風建築総合調査 文化庁による近代建築に関する総合調査は、1990年代から近代化遺産、近代和風建築についての調査が開始され、奈文研はいずれも全国に先駆けて調査をおこない、これまでに多くの都道府県について報告書を刊行している。2011～2013年度には、兵庫県の近代和風建築調査をおこない、報告書を刊行している。

文化庁が主導するこれらの調査は2010年代にはほぼ全国の都道府県での調査が完了している。また、調査成果により特にその価値があきらかとなった建物は国の重要文化財等に指定されている。

地域文化財の把握と保存活用 文化財建造物の保護制度は、明治時代より古社寺を中心として始まり、徐々に、民家建築や町並みなどの建築種別を広げ、また同時に建築年代も近・現代へと保護の対象を広げてきた。その中で、文化財建造物については、保存をおこなうだけではなく、同時に建物の活用が諷われるようになった。1999年、文化庁は重要文化財建造物について、所有者等が文化財の現状と課題を把握し、所有者等による自主的な保存活用が促進されることを目的として、保存活用計画の策定に関する通知を示した。また、地域の活性化やまちづくりにおいては地域の歴史や分野を超えた文化財を把握することを目的とした歴史まちづくり法が公布された。さらに、2018年には文化財保護法が改正され、都道府県においては文化財大綱を、市町村においては保存活用地域計画を、

所有者においては保存活用計画を策定し、国の認定を受ける制度が設けられた。

以上のような保護制度の流れの中で、各地域においては、今後の文化財保存活用やまちづくりの基礎資料として、地域全体における歴史的建造物の把握が求められてきた。その具体的な目的や運用は各地域によって異なるが、奈文研では、このような近年の動向を踏まえた上で、歴史的建造物の悉皆調査を積極的におこなっている。また、保存活用計画の策定を目的とした建造物の詳細調査も継続しておこなっている。

地区全体の歴史的建造物の把握ための調査としては、前述の奈良県内近世後期社寺建築悉皆調査のほか、徳島県南部社寺建築調査（2019年度）、出雲市内神社建築調査（2016・2017年度）、湯浅町内歴史的建造物調査（2018・2019年度）、比叡山延暦寺建造物総合調査（2011・2012年度）、高野町内歴史的建造物調査（2019～2022年度）、松江市内社寺建築悉皆・詳細調査（2021年度）、生駒市歴史的建造物調査（2020年度～）などがある。調査では、各地域における建造物を悉皆的に調査した上で、必要に応じて個別詳細調査をおこなった。

また、保存活用計画の策定を目的として、2020年に犬伏家住宅（徳島県藍住町）、2018・2019年度に総業会館について調査をおこなっている。総業会館（大阪府大阪市）は、その後建築と合わせて製作された家具調度品についても調査をおこなった（図51）。

海外の建築遺産に関する調査 海外の建築遺産に関する調査も積極的に参加している。

2003年、文化庁文化財部とベトナム文化情報省（当時）との間で、伝統的集落および建造物の保存、修復、管理



図50 津山市城西の調査（岡山県）



図51 総業会館の調査
(大阪府・一般社団法人日本総業俱楽部(総業会館)所蔵) (2019年)



図52 カンボジア・西トップ遺跡の発掘調査

の分野における技術協力に関する協力協定が結ばれた。奈文研は、文化庁の要請を受け、ハタイ省ドゥオングラム村、トゥアティエン・エヌ省フォックティック村、ドンナイ省フーホイ村の集落調査に参加してきた。2011～2012年度は、ベトナム南部ティエンザン省カイペー地区の集落調査をおこない、集落の構造や個別建造物の調査をおこなった。なお、4地区の調査成果については、日本語の調査報告書に加えて、英語へ翻訳した報告書を刊行し、国内外への情報発信にも努めた。

ブータン王国は、近年まで外国人の入国を制限しておりその独自の文化が注目されていたが、一方で文化遺産の調査や価値付けなどは不十分であった。ブータン内務文化省から協力要請を受けた東京文化財研究所と岡山理科大などは、民家を中心とする伝統的建造物調査を2012年より実施しており、奈文研はこの調査に2016年度から参加し、文化遺産としての評価方法の構築について協力している。

このほか、企画調整部国際遺跡研究室がおこなうカンボジア・西トップ遺跡では、発掘調査や解体事業と並行して、建築の特徴や建築年代などの解明を目指して建築的調査をおこなっている（図52）。

日中韓建築文化遺産保存国際学術会議の開催 東アジア各国の建築構造、歴史的建造物に関する研究は、近年大きく進展している。建造物研究室では、2009年度から2013年度まで、中国文化遺産研究院、韓国国立文化財研究所と共に、東アジアの建築文化遺産とその保存に関して、建築文化遺産保存国際学術会議を3国を持ち回りで開催した。

2012年の第4回は、韓国で「建築遺跡の保存と活用」をテーマに開催され、建築遺跡の調査と研究、保存と整備の技術、保存と活用の3つのセッションに分かれ、各



図53 第5回日中韓建築文化遺産保存国際学術会議の様子

国から発表された。

2013年の第5回は奈良文化財研究所がホストとなり、「集落・町並みの調査と保存・活用」をテーマに開催した（図53）。3日間の日程のうち、2日間はシンポジウムを開催した。シンポジウムでは、集落・町並みに関する保存制度、調査と研究、保存の実例の3つのセッションを設け、各國の町並み保存について報告された。最終日はエクスカーションとして、重要伝統的建造物群保存地区である櫻原市今井町（奈良県）と、南丹市美山町北集落（京都府）を視察した。

日中韓3国による研究交流では、各國の建築遺産の性格や考え方の違いなどもあり、当初想定していた以上に多種多様な内容が取り扱われ、各國の建築遺産に関する研究手法、保護制度、保存と活用の手法などに関する情報をお互いに共有する機会となった。

伝統的建造物に関する資料の管理活用 文化庁から奈文研に移管されている文化財建造物に関する資料の管理活用についても継続しておこなっている。伝統的建造物を撮影したガラス乾板のデジタル化、保存修理工事の際に作成される保存図や摺拓本の整理、またこれらのデータベース化をおこない、将来の活用にむけての整理を進めている。

この他、自治体の開催する各種委員会、文化財建造物修理技術者への研修、自治体の文化財担当者等に対する研修等に協力している。

(3) 文化的景観の研究

景観研究室では、文化的景観の保護に関する情報の収集・整理・検討・公開を進めつつ、その概念および保存・活用のための基礎的・応用的な調査研究に取り組んでいる。また、文化的景観の具体的な事例に関する取り組みとして、地方公共団体からの受託調査研究等を通じて、保護措置の諸問題についても検討を重ねている。

1) 基礎的・応用的な調査研究

文化的景観研究集会 2008年度以来、シンポジウム形式で文化的景観研究集会を開催してきた（表6）。各回ごとのテーマのもと、文化的景観の概念や保護施策について報告・討論等をおこない、文化財・景観・まちづくりなど様々な分野に関わる行政担当者や研究者、コンサルタント等との意見交換の場として多くの参加を得ている（図54）。また、シンポジウムの他にワークショップやボスター・セッション、エクスカーションを実施した回もある（図55）。なお、これらの成果は研究集会報告書として出版した。

「文化的景観学」検討会 2012年度から2017年度には、文化的景観保護制度の創設から間もないため、研究・実践両面においてあまり多くの蓄積がないという認識のもと、分野を横断して文化的景観を論じる視点の体系化等を目的とし、9名の外部有識者（研究者、行政担当者）とともに「文化的景観学」検討会を開き研究を重ねた（図56）。文化的景観の概念・調査・制度等について継続的に検討し、その成果をまとめ、「地域のみかた—文化的景観学のすすめ」を出版した。さらに、四万十・岐阜の河川流域の事例について、「川と暮らしの距離感—四万十・岐阜」、宇治・金沢の都市域の事例について、「都市の営みの地層—宇治・金沢」を出版した（表7・図62）。

情報の収集と発信 全国での文化的景観の調査・保存・活用・整備に関する情報及び報告書等（調査報告書・保存活用計画書・整備活用計画書・パンフレット等）を、都道府県・市町村等の協力を得ながら継続的に収集し、国内における文化的景観保護の動向の体系的な把握を図っている。その成果は定期的に取りまとめ、「文化的景観資料集成」を出版している。その第1集として2009年度に出版した



図54 第10回文化的景観研究集会



図55 京都市中川地区でのエクスカーション



図56 「文化的景観学」検討会

表6 文化的景観研究集会の開催実績

開催年月	開催テーマ	開催場所	報告書刊行年月
2009年2月	第1回「文化的景観とは何か? -その輪郭と多様性をめぐって」	平城宮跡資料館	2009年12月
2009年12月	第2回「生きたものとしての文化的景観 -変化のシステムをいかに読むか」	奈良県歴史博物館	2010年12月
2010年12月	第3回「文化的景観の持続可能性 -生きた関係を継承するための整備と活用」	平城宮跡資料館	2011年12月
2011年12月	第4回「文化的景観の現状 -保護行政・学術研究の中間総括」	明日香村、平城宮跡資料館	2012年12月
2012年12月	第5回「文化的景観のつかい方」	近江八幡市、安土城考古博物館	2014年1月
2014年1月	第6回「計画の意義と方法 -計画は何のために策定し、どのように実施するのか?」	平城宮跡資料館、京都市岡崎地区	2014年12月
2015年11月	第7回「営みの基礎 -生態学からの文化的景観再考 -」	平城宮跡資料館	2016年7月
2016年7月	第8回「地域のみかたとしての文化的景観」	平城宮跡資料館、京都市中川地区	2018年3月
2017年12月	第9回「地域らしさを支える土木 -文化的景観における公共事業の考え方」	京都府立大学、東近江市他	2019年3月
2018年11月	第10回「風景の足跡 -考古学からの文化的景観再考」	奈良文化財研究所	2020年3月

「文化的景観保存計画の概要（Ⅰ）」に続いて、第2集と第3集を2015年度に出版した。これらには都道府県や世界遺産における文化的景観の情報も収録した。この他に、奈文研ウェブサイトにおいても各重要文化的景観選定地区の情報を公開している。

諸外国との比較研究 2011年度からは、文化的景観およびその保存・活用に関する調査・研究の一環として、諸外国との比較研究をおこなった。この10年間では、2013年度にヨーロッパ地域を対象としてフランス、また、2014年度にアジア地域を対象としてインドネシアにおいて、現地調査を実施した。諸外国との比較検討の観点からは、特に世界遺産における文化的景観に関わる諸資料等の調査研究を進め、ユネスコ世界遺産センターが刊行した文化的景観の書籍『World Heritage Cultural Landscapes: A Handbook for Conservation and Management』(World Heritage Papers vol.26) を翻訳し、2014年度に日本語版資料『世界遺産の文化的景観－保全・管理のためのハンドブック』として出版した。同年度には、「東アジアの文化的景観」をテーマに講演会も開催した。

2) 実践的な調査研究

2012年度以降、「京都岡崎の文化的景観」(京都府京都市)、「佐渡相川の鶴山及び鶴山町の文化的景観」(新潟県佐渡市)、「長良川中流域における岐阜の文化的景観」(岐阜県岐阜市)、「宇治茶生産の文化的景観」(京都府)、「京都の文化的景観」(京都市) (国57)、「京都中川の北山林業景観」(京都市) (本書カラー参照)、「南山城村の宇治茶生産景観」(京都府相楽郡南山城村) (国58)、「智頭の林業景観」(鳥取県八頭郡智頭町) (国59)、「和束の茶業景観」(京都府相楽郡和束町) の調査研究を地方公共団体から受託した。

その他、重要文化的景観に選定されている「四万十川流域の文化的景観 下流域の生産と流通・往来」(高知県四万十市)、「宇治の文化的景観」(京都府宇治市)、「阿蘇の文化的景観」(熊本県)の調査・計画策定等に関しても支援をおこなった。

都市域における文化的景観 京都岡崎、佐渡相川、長良川中流域の文化的景観調査は2011年度以前から実施していたものである。いずれも都市域を含む文化的景観であり、文化的景観保護行政が抱える困難な問題の解決に向けて

表7 面直10年間における景観研究室編集の出版物一覧 (研究集会報告書は除く)

種別	出版物名	発行年月	発行機関
検討会	「地域のみかた－文化的景観学のすすめ」	2016年3月	奈良文化財研究所
研究会	「川と暮らしの距離感－四万十・岐阜」	2017年3月	奈良文化財研究所
研究会	「都市の営みの地図－宇治・金沢」	2017年11月	奈良文化財研究所
資料集成	「文化的景観保存計画の概要（Ⅱ）」文化的景観資料集成第2集	2015年7月	奈良文化財研究所
資料集成	「文化的景観保存計画の概要（Ⅲ）」文化的景観資料集成第3集	2015年11月	奈良文化財研究所
諸外国	「世界遺産の文化的景観－保全・管理のためのハンドブック」World Heritage Papersシリーズ26	2015年3月	奈良文化財研究所
その他	「文化的景観全般圖－鳥瞰図による文化的景観の表現」	2018年3月	奈良文化財研究所
受託調査研究	「京都岡崎の文化的景観調査報告書」	2013年3月	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
受託調査研究	「佐渡相川の鶴山都市景観パンフレット」	2013年11月	佐渡市世界遺産推進課・新潟県文化行政課世界遺産登録促進室
受託調査研究	「佐渡相川の鶴山都市景観保存調査報告書」	2015年3月	佐渡市世界遺産推進課
受託調査研究	「重要な文化的景観」「京都岡崎の文化的景観」パンフレット	2015年10月	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
受託調査研究	「岡崎公園－洛東にできた都市の広場（時間を旅する絵本「京都岡崎の文化的景観」Ⅰ）」	2017年3月	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
受託調査研究	「白川と疏水－都市をめぐる水の冒険（時間を旅する絵本「京都岡崎の文化的景観」Ⅱ）」	2018年3月	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
受託調査研究	「茶畑のある風景なぜなに－南山城村、山の風土と暮らしをめぐって」	2018年3月	南山城村産業生活課
受託調査研究	「京都中川の林業景観調査報告書」	2019年3月	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
受託調査研究	「京都の文化的景観」調査報告書】	2020年3月	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
受託調査研究	「地域のみかた－京都の身近な風景からひととく地域らしさ」	2021年3月	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

調査を継続した。

宇治茶生産に関わる文化的景観 京都府南部の「宇治茶生産の文化的景観」に関する調査は2014年度におこなった。山城地域の茶生産地を対象に、特徴を調査したうえで文化的景観全覧図（鳥瞰図）を作成した。また、2016・2017年度には南山城村にある京都府選定文化的景観「南山城村の宇治茶生産景観」の現地調査をおこない、価値を再検討し、普及啓発のためのパンフレットを作成した。さらに、2021年度からは「和束の茶業景観」の調査にも携わっている。

京都市域の文化的景観 「京都の文化的景観」と「京都中川の北山林業景観」の調査は2015年度から2020年度にかけて実施した。前者は京都市全域、後者は北山林業の中心地・中川地区を対象に、現地調査等からそれぞれの特性を明らかにした（図60）。これらの成果は調査報告書に

まとめるとともに、幅広い理解のため市民向けの冊子としても編集した。

林業に関わる文化的景観 2019・2020年度には重要文化的景観「智頭の林業景観」の整備計画策定に向けて、土地利用、生業、建造物、水系等の現地調査から価値の見直しを図り、成果をとりまとめた。また、コロナ禍で感染対策を講じたうえで、住民報告会も実施した（図61）。

なお、2021年度からは、智頭林業や北山林業、飫肥林業といったスギ生産に関わる文化的景観の比較研究をおこなっている。

文化的景観全覧図の作成 これらの調査研究の中では、対象地を俯瞰して描く文化的景観全覧図を作成している（図61）。2017年度にはそれらを解説するためのパンフレットを編集・刊行した。その後も作成を続けており、2021年度までに12枚の全覧図が完成した。



図57 京都の文化的景観



図58 南山城村の宇治茶生産景観



図59 智頭の林業景観



図60 調査成果の取りまとめ（京都市中川地区）

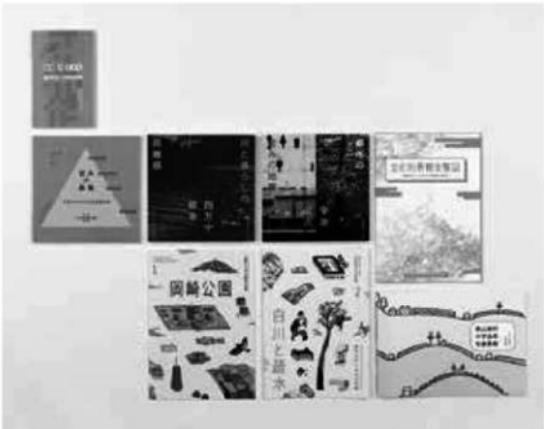


図62 景観研究室編集の出版物（一部）



図61 調査成果の住民報告会（智頭町）

(4)記念物の保存・活用に関する調査研究

遺跡整備研究室では、遺跡や庭園の保存活用について調査研究をおこなっている。

1) 遺跡整備・活用の研究

遺跡等の整備・活用については国際的な動向も視野に入れながら、主として国内に所在する遺跡等の保存・活用およびそのための整備事業について、理念や計画、設計、技術に関する調査研究をおこなっている。

遺跡整備・活用に関する基礎的な研究として、2012年度から2014年度までの3か年は、遺跡等マネジメント研究集会として、2015年度以降は遺跡整備・活用研究集会として、各テーマを設けて研究集会を開催し、研究報告やディスカッションを通じて、現状や課題について議論を深めた（表8、図63、2020年度からは感染症流行のため、発表者・コメントーターのみでの開催としている）。これらの成果は、原則次年度に、各地の事例報告を追加などして報告書として刊行するとともに、研究所の学術情報リポジトリにてPDFにて公開して普及を図っている。これらのうち、特に「デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用」と「史跡等を活かした地域づくり・観光振興」は、研究所全体の刊行物としてもアクセスが多く、近年の文化財の活用促進の動きにおけるこれらのテーマでの関心の高さがうかがえる。

また、特別名勝平城宮東院庭園での6年間の活用イベントを経て、2018年度に遺跡整備研究室を中心になって研究所内で体制を組み、2019年度より「平城宮跡の活用に関する実践的研究」を進めている。文化庁が1978年に策定した「特別史跡平城宮跡保存整備基本構想」にいう遺跡博物館の実現に向け、屋内展示と遺跡現地とをつなぐ活用の在り方を検討し、I. 復元建物のある空間における歴史的文脈に基づく体験の提供（復元建物の活用）、II. 遺跡現地と遺物・情報の関係性の再構築（コンテンツの開発）、III. 遺跡のある地域との関係性の再構築（地域間交流）の3つのテーマを立て、様々な企画を実施している（本書20頁）。

特別史跡キトラ古墳および特別史跡高松塚古墳にかかる文化庁受託事業の一部としては、キトラ古墳の整備事



図63 遺跡整備・活用研究集会（2018年度）

表8 遺跡マネジメント研究集会・遺跡整備・活用研究集会 開催一覧

開催日	開催テーマ	報告書刊行年月
2012年 2月16-17日	平成23年度 道路等マネジメント研究集会（第1回） 「自然的文化財のマネジメント」	2012年12月
2012年 12月21-22日	平成24年度 道路等マネジメント研究集会（第2回） 「パブリックな存在としての道路・遺跡」	2013年12月
2014年 1月24-25日	平成25年度 道路等マネジメント研究集会（第3回） 道路整備・景観合同研究集会 「計画の意義と方法 一計画は何のために策定し、どのように実施するのか？～」	2014年12月
2015年 1月16日	平成26年度 道路等整備・活用研究集会 「史跡等の整備・活用の長期的展望 一経年によるソフト・ハードの変化と再生ー」	2015年12月
2015年 12月18日	平成27年度 道路等整備・活用研究集会 「デジタルコンテンツを用いた道路の活用」	2016年12月
2016年 12月16日	平成28年度 道路等整備・活用研究集会 「近世城跡の近現代」	2017年12月
2017年 12月22日	平成29年度 道路等整備・活用研究集会 「史跡等を活かした地域づくり・観光振興」	2018年12月
2018年 12月21日	平成30年度 道路等整備・活用研究集会 「史跡等の保存活用計画－歴史の重層性と価値の多様性－」	2020年3月
2020年 10月16日	令和2年度 道路等整備・活用研究集会 「歴史的脈絡に因む道路の活用 一儀式・行事の再現と地域間交流の再構築第一」（発表者・コメントーターのみでの開催）	2021年3月
2022年 3月1日	令和3年度 道路等整備・活用研究集会 「移築された道路由来の遺構および石造物の現状と課題」（発表者のみでの開催）	刊行予定

業における現地指導や、「特別史跡キトラ古墳環境整備報告書」(2019年)の執筆編集発行をおこなった。また、古墳現地の活用促進の取り組みとして、墳丘近くに設置された壁画乾拓板を用いた道跡見学・乾拓体験会を2018年度より国営飛鳥歴史公園と共に実施している(図64)。また、仮整備後の高松塚古墳現地について、「高松塚古墳墳丘整備の在り方にに関する調査報告書」(2015年)を取りまとめる一方、高松塚古墳壁画の乾拓板を制作し、壁画公開の際などでの活用を図っている。

2) 庭園の調査、庭園史研究

庭園に関する調査研究では、奈文研が独立行政法人化した2001年度より、庭園史、考古学、歴史学、建築史、美術史など、庭園に関する諸分野の研究者に研究発表を依頼し、研究会を開催してきた(表9)。2011~2014年度には中世庭園を対象に研究会を実施し、2016年度に学報「中世庭園の研究—鎌倉・室町時代—」を刊行した。また、2017~2019年度には近世庭園を対象に研究会を実施、2021年度に「近世庭園の研究—安土桃山・江戸時代—」を刊行した。

外部機関との連携研究としては、奈良市教育委員会文化財課と、2012年度より準備を開始し、2013~2018年度にかけて「奈良市における庭園の悉皆的調査」を実施し(図65)、2021年度に「奈良市の庭園総合調査報告書」を刊行した。また、「名勝法華寺庭園の保存活用にかかる調査研究」を2016~2018年度に実施し(図66)、「名勝法華寺庭園 保存活用計画」(2020年)して、とりまとめた。

庭園史家・作庭家である森蘿の調査研究や作庭にかか

表9 庭園の歴史に関する研究会 開催一覧

開催日	開催テーマ	報告書刊行年月
2011年 10月29日	平成23年度 庭園の歴史に関する研究会 「鎌倉時代の庭園 -京と東国-」	2012年3月
2012年 10月13日	平成24年度 庭園の歴史に関する研究会 「柳宗寺院と庭園」	2013年3月
2013年 11月2日	平成25年度 庭園の歴史に関する研究会 「室町時代の若草の庭園」	2014年3月
2014年 10月25日	平成26年度 庭園の歴史に関する研究会 「戦国時代の城館の庭園」	2015年3月
2016年 11月27日	平成28年度 庭園の歴史に関する研究会 「鎌倉期-江戸時代初期の庭園」	2017年3月
2017年 10月29日	平成29年度 庭園の歴史に関する研究会 「回遊式庭園と庭園文化」	2018年3月
2018年 10月21日	平成30年度 庭園の歴史に関する研究会 「茶の文化と庭園」	2019年3月
2019年 11月24日	令和元年度 庭園の歴史に関する研究会 「庭園文化の近世的展開」	2020年3月



図64 キトラ古墳壁画乾拓体験



図65 奈良市の庭園調査(2017年10月)



図66 名勝法華寺庭園の実測(2017年6月)



図67 森蘿旧蔵資料の写真撮影

る資料「森蘿旧蔵資料」「村岡正旧蔵資料」について、地方公共団体等における文化財庭園の整備に資するため、また、造園史上の森蘿の業績を評価するため、整理およびデジタル化を進め（図67）、「森蘿旧蔵資料目録」を2018年12月に研究所ホームページ上にて公開をおこなった。これらの資料の初めての一般公開として、京都産業大学ギャラリー 第22回企画展「京都の庭を守ったひとたち—森蘿と法金剛院ー」（2021年6月1日～7月17日）、平城宮跡資料館 令和3年度 夏期企画展「奈良を測る—森蘿の庭園研究と作庭ー」（2021年8月7日～9月12日）の2つの展示を、京都産業大学との共催によって実施した（図68）。共通図録「森蘿の世界—奈良・平安の庭を求めてー」を作成するとともに、平城宮跡資料館の展示解説、記念座談会、橋本聖闇氏へのインタビュー動画を制作した。

奈文研が大韓民国国立文化財研究所と実施している共同研究では、2015年度に同研究所自然文化財研究室と名勝に関する調査研究を開始し、現在も継続している。日韓両国において庭園や自然的な名勝の現地調査、また、それぞれの国の名勝の保護、事例に関する情報交換をおこなった。その成果は『日韓文化財論議Ⅳ』（2021年）に論文としてまとめたほか、奈文研平城宮跡資料館講堂での中間成果発表会（2018年10月）と韓国昌徳宮での「国立文化財研究所設立50周年 中・韓・日の伝統庭園の保存管理のための専門家シンポジウム」（2019年5月）において発表した（図69）。

3)その他

2012年の「奈良大学に対する奈良文化財研究所の教育協力に関する協定書」に基づき、同年より文化財修景学



図68 「奈良を測る—森蘿の庭園研究と作庭ー」会場（2021年）



図69 日韓共同研究での会場 書香閣（2019年）

として半年間15回の講義をおこなっている。2020年より感染症拡大防止ため講義はオンラインで実施した。講義内容は、史跡等整備に関する歴史・理念・事業の流れ・技術の体系、平城宮跡躰地講義、名勝の保存と活用、文化的景観の調査と活用、建造物・伝統的建造物群の保存と活用、史跡等を活かしたまちづくりと観光等であった。

表10 遺跡整備研究室のその他の刊行物

種別	出版物名	発行年月	発行機関
学報	研究論集18「中世庭園の研究 一鎌倉・室町時代ー」 奈良文化財研究所学報 第96冊	2016年3月	奈良文化財研究所
学報	研究論集19「近世庭園の研究 一安土桃山・江戸時代ー」 奈良文化財研究所学報 第101冊	2022年3月	奈良文化財研究所
受託研究	「特別史跡キトラ古墳環境整備報告書」	2019年3月	文化庁・奈良文化財研究所
連携研究	「名勝法華寺庭園 保存活用計画」	2020年3月	光明宗・法華寺
連携研究	「奈良市の庭園総合調査報告書」	2022年3月	奈良文化財研究所
展示図録	京都産業大学ギャラリー 第22回企画展「京都の庭を守ったひとたち—森蘿と法金剛院ー」 平城宮跡資料館 令和3年度 夏期企画展「奈良を測る—森蘿の庭園研究と作庭ー」 「森蘿の世界—奈良・平安の庭を求めてー」	2021年6月	奈良文化財研究所
目録公開	森蘿旧蔵資料 目録	2018年12月	-

5. 都城発掘調査部 飛鳥・藤原地区における発掘調査の概要

奈文研による飛鳥・藤原地域の発掘調査は、大和平野農業用水導水路工事計画にともない、1956年から1959年にかけ実施した飛鳥寺、川原寺、飛鳥板蓋宮伝承地の調査を端緒とする。その後、調査を一旦中断したが、1960年代後半には国土開発の波が迫り、1966年以降、奈良県教育委員会が実施した国道165号線バイパス建設とともに藤原宮の発掘調査により藤原宮北・西辺、東北隅が確認され、飛鳥地域でも歴史的風土の保全が問題となつた。こうした状況から、1969年より藤原宮の調査を再開し、以降、飛鳥・藤原地域の発掘調査を継続してきた。1970年には飛鳥藤原宮跡発掘調査室を設け、1973年からは飛鳥藤原宮跡発掘調査部、2006年からは都城発掘調査部飛鳥・藤原地区と組織を改編し、現在に至っている。

この10年で、藤原宮では大極殿院、朝堂院の調査を継続的に実施したほか、東方官衙北地区等でも調査をおこ

なった（図70）。藤原京では右京九条二・三坊、右京二条一坊、本業師寺等、飛鳥地域では、大官大寺南方、甘樅丘東麓道路、檜隈寺周辺、キトラ古墳、山田寺、山田道、豊浦寺、奥山庵寺、飛鳥寺旧境内等の調査をおこなった。

調査研究成果の公開にも力を入れており、「奈文研紀要」等においてその概要を報告し、一定の成果がまとまり次第、順次報告書等を刊行して公表している。また、一定規模以上の発掘調査に際しては、関係者のご理解・ご協力を得ながら現地説明会・見学会を開催し、一般の方々に実際の古代の遺構をご覧いただく機会を設けている。

近年は、蓄積した調査研究成果を史跡等の保存・活用策のために提供する機会が増えている。文化庁による特別史跡藤原宮跡等の史跡整備事業等にはこれまでにも積極的に協力してきたが、この10年では、桜井市による「桜井市内史跡名勝保存活用計画」（2017）、桜井市による「特別史跡山田寺跡保存活用計画書」（2022）の策定等にも協力した。このほか、国、奈良県、桜井市、明日香村が進める「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の世界遺産登録に向けた動向に合わせ、これを学術的な観点から後押しへく協力している。

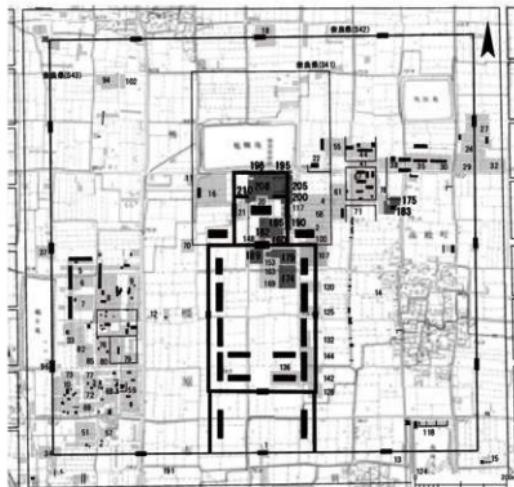


図70 藤原宮発掘調査位置図 (1:10000)

(1) 藤原宮の発掘調査

1) 藤原宮大極殿院の調査

(紀要2015~2022)

第一182次・第186次・第190次・第195次・第198次・第200次・第205次・第208次

概要 大極殿院は藤原宮の中心部に位置し、周囲を回廊で囲まれた東西約120m、南北約165mの空間である。その中央には即位や元日朝賀などの儀式に際して天皇が出御する大極殿がある。

大極殿院については、戦前に日本古文化研究所が大極殿、大極殿院南門、回廊の部分的な調査をおこない、復元図を作成している。1977年度以降、奈良文化財研究所は、日本古文化研究所による復元案の検証および大極殿院の全容解明を目的に、大極殿北方（第20次、1977年度）、大極殿西門（第21次、1977年度）、東門および東面回廊（第117次、2002年度）、南門（第148次、2007年度）、南面回廊（第160次、2009年度）の調査をおこない、主要な建物の配置と構造を明らかにしてきた。

この10年では、内庭東南部（第182次、2014年度、第186次、2015年度）、東面回廊南部（第190次、2016年度）、北面回廊（第195次、2017年度）、回廊東北隅（第198次、2018年度）、東面回廊・大極殿後方回廊（第200次、2019年度）、東面回廊北部（第205次、2020年度）、大極殿北方（第208次、2021年度）、後殿西部（第210次、2022年度）において調査を実施した（図75）。以下では、これらの成果に基づき、遺構ごとに概説する。

藤原宮期の遺構

大極殿 第186次調査では、大極殿基壇南面において、中央階段SX11325および東階段SX11326を検出した。凝灰岩切石によるもので、東西幅は切石の内法で5.2m、階段の出は、3.0m以上に及ぶ。同調査では、大極殿周辺の高まりについて、三次元レーザー測量をおこない、桁行9間、梁行4間とする從来の大極殿の柱配置案について、蓋然性が高いことを追認した（『紀要2016』）。

東面南回廊SC9450 第190次調査において、8間分を検出した（図71）。礎石建ち、瓦葺の複廊であるが、東門SB9500との取り付き部2間は、棟通りを掘立柱とし、側柱は検出されなかった。梁行10尺等間で、桁行は14尺

等間を基本とするが、東門との取り付き部分は柱間が狭い（『紀要2017』）。

東面北回廊SC9490 第195・200・205次調査で検出した礎石建ち、瓦葺の複廊である（図72）。後述する北面東回廊SC11510および大極殿後方回廊SC11540の取り付き部を含め19間、242尺である。SC11540の取り付き部の南北で柱配置が異なり、南部が14尺等間であるのに対し、北部はSC11510とSC11540取り付き部の入間隔160尺を12間で割り付けている。北部の柱間寸法は、13.0~13.5尺で様々な解釈が可能であるが、等間割と考えると13.3~13.5尺となる。大極殿院回廊の他の部分が14尺等間を基本とするのと大きく異なる計画をもつ。棟通りの2カ所では杭を検出した。SC9490の計画に際して使用された計画杭と考えられる（『紀要2021』ほか）。

大極殿後方東回廊SC11510・東西廊SA2060 大極殿後方東回廊SC11510は、第200次調査で検出した東面北回廊SC9490に取り付く礎石建、瓦葺の東西棟複廊で、桁



図71 大極殿院東面南回廊（第190次、東から、2016年）



図72 大極殿院東面北回廊（第205次、北東から、2020年）



図73 大極殿院北門・北面回廊（第198次、南西から、2018年）

行7間、梁行2間、14尺等間である。SC11510の棟通りは、南面回廊と北面回廊の棟通り間540尺を2:1に区画する位置にある。SC9490のSC11510接続部分が回廊梁行寸法と同じく桁行10間で割り付けられていることから、大極殿院の造営当初より計画されたものと考えられる。SC11510の基壇上面では、東西廻SA2060も検出しており、SC11510の造営過程において、一時的に南北を区画した場と考えられる（『紀要2020』）。

また第208次調査では、SC9490とSC11510の間で後殿の有無を確認するため調査を実施したが、明確な痕跡を確認することができなかった。しかしながら、同調査は後方回廊の中央において、新たに基壇の一部を確認した。今後の調査において、基壇の様相を明らかにしたい（『紀要2022』）。

北門SB11500・北面東回廊SC11510・北面西回廊SC11505

北門SB11500および北面西回廊を第198次調査で、北面東回廊SC11510を第195・198次調査で検出した（図73）。礎石建ち、瓦葺の複廊の中央に、北門が開いていたものと考えられる。東西面回廊の棟通り間の長さは400尺で、桁行柱間は、中央間が16尺、東西面回廊取り付き部分が



図74 大極殿院内庭（第186次、南から、2015年）

10尺等間であるほかは14尺等間で割り付ける。梁行は2間10尺等間である。中央間は、他の位置と比較して、礎石痕跡が削平されている。当該部分が1間門の北門で、両脇の回廊よりも基壇が高かった可能性が考えられる（『紀要2019』）。

藤原宮造営期の遺構

運河SD1901A 第182・186・198・200・208次調査において、大極殿院の下層で検出した素掘りの南北溝で、藤原宮造営に関わる資材を運搬するための運河と考えられる（図74）。朝堂院朝庭から藤原宮北面中門まで、南北570m以上に及ぶことが確認されていた。大極殿院では、南門SB10700の東端、大極殿の東部、北門SB11500の東方を南から北に貫流する。幅約6m、深さ約2mで、埋立土からは多量の土器・木製品・鉄製品・木簡・種子・獸骨などが出土した。朝堂院から北では、大極殿院南門および大極殿を避けるように、運河の東方を南北溝SD10801Bが並行し、大極殿の背面下層で検出した東西溝SD11550で再び運河に合流するものと考えられる。南門の北方では、SD10801Bから北西へ斜行溝SD11250が伸び、SD1901Aに接続する。SD10801Bと同時に掘削されたのか、のちに掘削されたのかは不明である（『紀要2016』ほか）。

藤原宮造営前の遺構

先行条坊 第186・198・205次調査において先行朱雀大路の東西側溝を、第205・208次調査において、先行四条条間路の南北側溝を検出した。藤原宮造営に先立って、藤原京の条坊道路が計画された後に、整地を施し、藤原宮が造営されたことを示す（『紀要2021』ほか）。

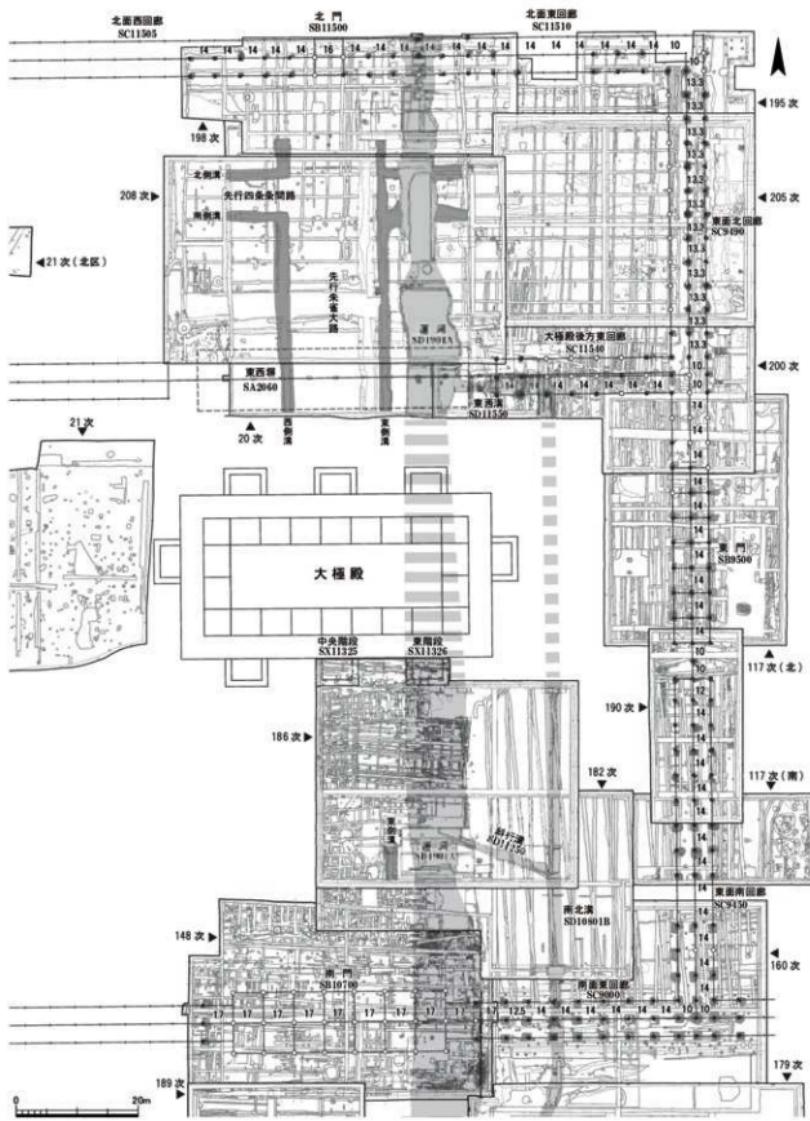


図75 藤原宮大極殿院遺構図 (1:800)

2) 藤原宮朝堂院朝庭の調査

(紀要2013・2014・2017)

—第174次・第179次・第189次

朝堂院は、藤原宮の中軸部、大極殿院の南に位置する回廊に囲まれた東西約235m、南北約320mの空間で、中央には広場（朝庭）があり、広場を囲むように建物（朝堂）が建ち並ぶ。1999年度以降、奈文研は藤原宮中軸部の実態解明を目的に朝堂院朝庭の発掘調査を進めてきた（図76）。以下、この10年の調査成果で明らかになった新知見を次数ごとに概説する。

第174・179次調査 2012・2013年度に実施したこれらの調査は、朝庭の東北部において、礎敷広場SH10800での空間利用の在り方や礎敷下層における遺構の状況を確認することを目的とした。その結果、第一次整地土を掘り込むSX10820などの沼状遺構を、木屑を多く含む土で埋めたのち、さらに第二次整地土で整地する状況を確認した。このほか、造営期の掘立柱建物や柱穴列を検出した（「紀要2013」・「紀要2014」）。

第189次調査 2008年度に実施した第153次調査では、藤原宮中軸上に1基（SX10760）、その東に3基（SX10765～10767）の大型柱穴と、その前方に東西方向の柱穴列（SX10770～10778）を検出し、これらが『続日本紀』大宝元年正月乙亥朔条（701）にある宝幢・四神幡（旗）に関わる遺構である可能性が指摘された。

そこで2016年度の第189次調査では、第153次調査区の一部を再調査するとともに、第153次調査区の西側の調査を実施した（図76）。その結果、SX10765～10767を藤原宮中軸で折り返した位置に3基の大型柱穴（SX11405～11407）と、SX10770～10778の西側に連続する柱穴列（SX11412～11418）を検出した（図77）。

7基の大型柱穴は掘方が一辺1.5～2.0mに復元され、礎敷から掘り込まれる。柱抜き取り後は再び礎敷が施され、柱を複数回立てた痕跡は確認できなかった。

東西柱穴列は、藤原宮中軸を挟んで東西対称に8基ずつ、計16基で構成され、3.0m（10尺）間隔で並ぶが、両端間のみ2.8m（9.5尺）となる。両端の柱穴（SX10778・11418）は一辺約1mの掘方に抜取穴が1穴のみ確認されるが、他の柱穴はいずれも東西1.4～2.0m、南北0.9～1.1mの横長の柱掘方に、0.6mの間隔で東西に大小2穴の抜取

穴が確認された。抜き取られた後は礎敷が再び施されていた。

『続日本紀』大宝元年正月乙亥朔条によると、元日朝賀に際し正門（＝大極殿院南門）において、（中央に）鳥形の幡、左（東）に日像・青龍・朱雀の幡、右（西）に月像・玄武・白虎の幡を立てたと記され、この7基の大型柱穴群が、これらの幡旗に関わる遺構（SX11400）に相当すると考えられる。また東西柱穴列も、その構造から、儀式に関わる一連の幡旗遺構（SX11401）と推定される。

7本の宝幢・四神幡（旗）に関する遺構は、恭仁宮朝堂院南門北側や、平城宮西宮（称徳朝）、平城宮第二次大極殿前庭、長岡宮大極殿前庭でも確認されているが、いずれも3～4mの横長の柱掘方に3本の柱を立て、約6m（20尺）の間隔で東西一列に7基並ぶ点が共通し、この幡旗遺構SX11400と構造が大きく異なる。『続日本紀』大宝元年正月乙亥朔条は宝幢・四神幡（旗）の設置に関する初見史料であることから、SX11400の配置が最も古い様式であり、それが奈良時代中期までに東西一列に配する構造へと変化し、定型化したようすが窺える。

幡旗遺構SX11400・11401の配置計画と施工状況を検討すると、南面中央のSX10760は大極殿院南門の南面階段南端中央より南に70尺の位置に配置する予定であったが、実際には藤原宮中軸線からは東に約0.5mずれて施工されている（図77）。同様に、その内側のSX10765・11405も南面階段南端より40尺、宮中軸線より40尺という計画が、それぞれ東に約0.2m偏って施工されている。一方、さらに東側のSX10766・10767は南門東妻の柱列に、西側のSX11406・11407は西妻の柱列に筋を揃え、南門南側柱からそれぞれ南に65尺、45尺の位置に配置された。SX11401については南門南面階段から南に100尺の位置で、宮中軸線を中心を揃えた総長149尺の柱穴列となる。両端間のみ柱間が9.5尺である理由としては、南面回廊の柱筋と揃えるためであった可能性が高い。

今回明らかとなった幡旗遺構SX11400の在り方は、奈良時代以降の幡旗遺構とは配列や構造が全く異なっている点で、朝賀や即位式という国家的儀式の整備過程を明らかにするための重要な手がかりとなる。この大宝元年正月朝賀は「文物の儀、是に備れり」と評されるほどの歴史的重要性をもつものであり、その具体像を復元できたことの意義は大きい（「紀要2017」）。

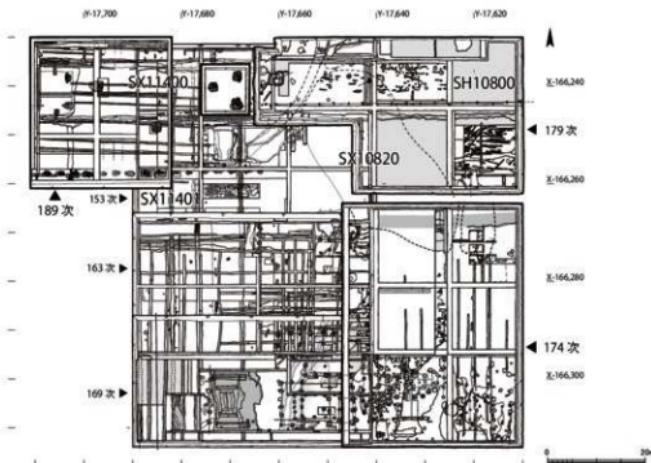


図76 朝堂院朝庭における各調査区 (1:1000)

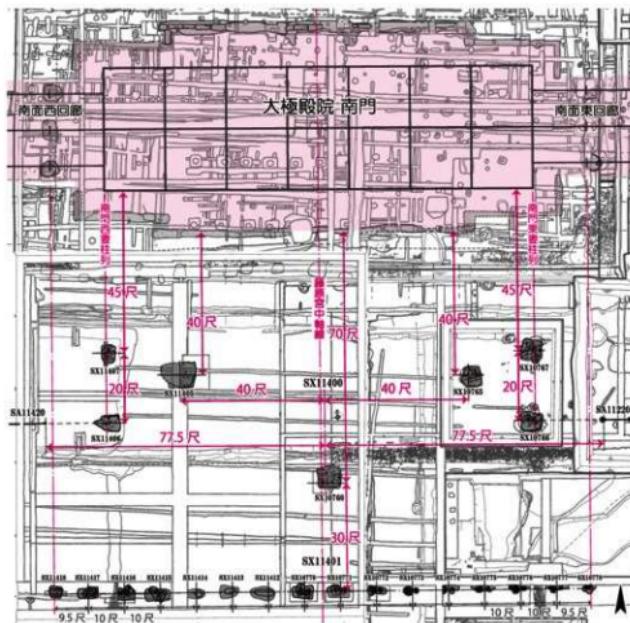


図77 権旗構造 SX11400・11401と大極院南門との位置関係 (1:400)

3) 藤原宮東方官衙北地区の調査

(紀要2013・2015)

第一第175次・第183次

藤原宮の官衙地区において、この10年で大きな調査の進展がみられたのは東方官衙北地区である。東方官衙北地区は、内裏東官衙地区の東に位置し、東面北・中門に通じる2本の宮内道路に挟まれた範囲を指す。これまでの調査成果により、本地区の北部には、南北156m、東西148mの大規模な区画施設が存在し、その内部には長大な東西棟建物が並び建つことが判明している。

2012年度に実施した第175次調査では、上述の大規模区画施設の西南部を調査し、区画の南辺をなす東西区画塀とそれに沿って設置された東西溝を24m以上にわたって検出した。またその内部では、桁行12間以上を数える長大な掘立柱東西棟建物の存在を確認した。

一方で、調査区南部では、上記の東西区画塀や東西溝と対になるような遺構は検出できず、東方官衙北地区的南部には明確な区画施設が存在しない可能性が高まった。これに対して、調査区南端では、礎石建物SB11100の存

在が明かとなり、当該地区の利用状況の再検討が課題として浮上した(「紀要2013」)。

2014年に実施した第183次調査は、第175次調査で存在を確認したSB11100の全容とその周辺施設の解明を目的とするもので、第175次調査区の西南部を調査対象とした。その結果、SB11100は、桁行4間、梁行3間の東西棟総柱礎石建物であることが判明するとともに、調査区西端では桁行5間以上の大型掘立柱建物SB11300を検出したほか、先行東一条大路SF3499、およびその前身の条坊道路SF11320などを検出した(図78)。

SB11100・11300の両建物は、東西中軸線が描い、かつその延長線が大極殿院の中心ラインにはほぼ一致することから、東方官衙の中でも極めて重要な施設であったとみられる。とりわけ礎石建物SB11100は、大量の瓦の出土から屋根の一部に瓦を使用した高床の倉庫ないしは楼閣風の建物とみられる。礎石の抜取穴から舶載品とみられる佐波理椀の破片が出土したことは、そうした推測を裏付ける成果として注目される(「紀要2015」)。

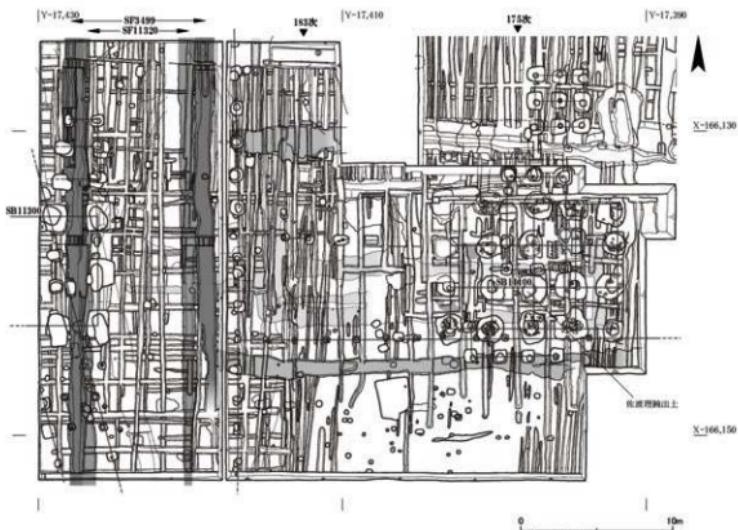


図78 第183次調査遺構図(1:300)

(2) 藤原京の発掘調査

〔藤原京九条二坊・九条三坊、瀬田遺跡発掘調査報告〕
紀要2014・2016・2021)

第一第187次・第178-2次・第178-8次・第185-7次・
第204-2次・第204-6次

この10年で、都城発掘調査部が藤原京の範囲内で実施した発掘調査は20件である。このうち、特筆すべき成果がみられた右京九条二坊・九条三坊および瀬田遺跡等の発掘調査成果の概要を示す。

1) 右京九条二坊・九条三坊、瀬田遺跡

飛鳥藤原第187次調査(2015・2016年)は、ボリテクセンター奈良(独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構奈良支店 奈良職業能力開発促進センター)の本館建て替えにともなう発掘調査である。調査地は右京九条二坊西北坪・九条三坊東北坪および西二坊大路にあたり、その北方には天武天皇発願の本薬師寺が四町四方の伽藍をかまえる。調査期間は2015年11月から2016年9月で、調査面積は2,019m²である。発掘調査は藤原京の遺構検出に始まり、弥生時代の大型円形周溝墓の発見を経て、撫文時代後・晚期の遺物包含層の調査を終えて完了した。

藤原京期 調査区の中央部で西二坊大路を検出した(図79・81上)。西側溝は削平により失われていたが、東側溝SD4411を検出した。大路の東側にあたる九条二坊西北坪では、坪内道路とみられる東西道路SF4412と、建物SB4416の一部、L字形溝SD4418、土坑SK4422などを検



図79 古代の遺構検出状況(第187次、北東から、2016年)

出したが、第187次調査では西北坪の西端付近を調査したにすぎず、建物等の配置はなお明らかでない。

いっぽう、大路の西側にあたる九条三坊東北坪では大型掘立柱建物3棟(SB4452・SB4455・SB4456)を検出したほか、大路沿いの南北塀SA4431A・4431Bの西側150mにおいて、南北塀SA4451A・4451Bを検出した。これらの南北塀や大型掘立柱建物は、東北坪の東半北寄りに計画的に配置されており、この地に一町以上を占める施設が存在していた可能性を示唆している。また、これら大型掘立柱建物とは別に、小規模な掘立柱建物(SB4432・SB4433・SB4434)を3棟検出した。

今回の調査により、藤原京右京九条二坊西北坪と九条三坊東北坪とでは、西二坊大路を挟んで坪内の利用形態が異なることがあきらかとなった。とくに、右京九条三坊東北坪に整然とした配置が推定できる施設が存在することが判明したことは、大きな成果である。

大型円形周溝墓の発見 弥生時代の遺構では、調査区中央部で検出した大型円形周溝墓SZ4500が特筆される(B881下)。そのすぐ東では、2基の方形周溝墓も検出した。SZ4500は弥生時代後末期の円形周溝墓で、南側に陸橋を備えるため前方後円形を呈している。その主軸は北でやや東へと偏しており、墳丘は東西19.0m、南北18.5mの円形で、陸橋の長さは約7.4m、陸橋部を含めた全長は25.9mである。墳丘は後世の削平により残存せず、主体部や副葬品についても不明である。SZ4500の周溝からは多量の弥生土器が出土した。ことに東周溝から出土した土器は保存状態が良好で、畿内第V様式系の壺が多い一方、長頸壺



図80 SZ4500 東周溝土器出土状況(第187次、北から、2016年)

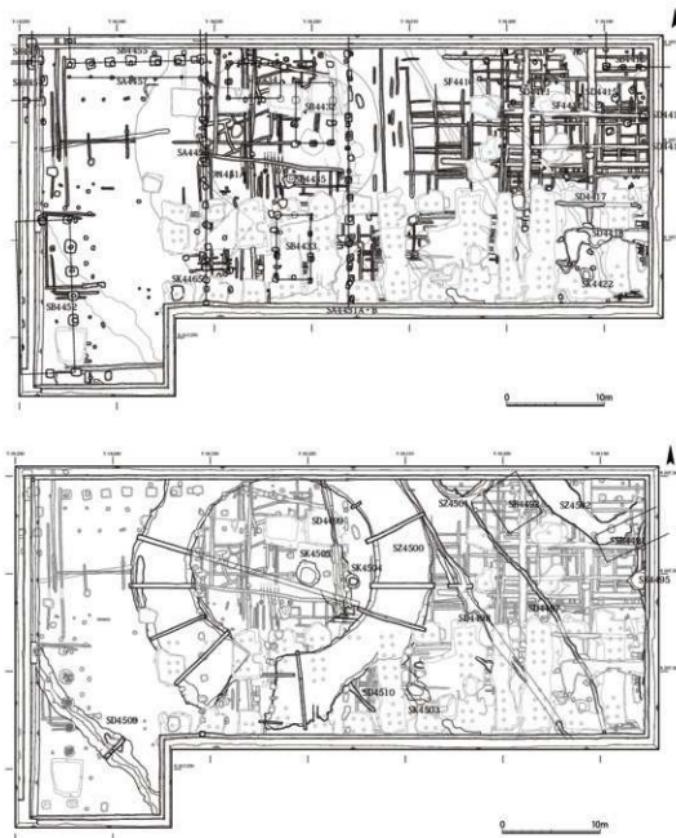


図81 第187次調査遺構図（上：新羅京跡、下：弥生時代・古墳時代。1:500）

や細頸壺など弥生時代最末期の庄内期にはみられない型式をも含んでいる（図80・82）。その他の要素も含めると、これらは庄内式期直前のもので、縦向1式もしくは庄内0式期の土器群と考えられる。

SZ4500は、庄内式期における円形周溝墓として奈良盆地ではもっとも古いもので、弥生時代埴丘墓の発展過程を考えるうえで重要である。定型的な前方後円墳の祖型ともいわれる「縦向型前方後円墳」との関係でいえば、縦向石塚古墳とは規模の隔たりが大きいものの、埴丘径

（円部径）と陸橋の長さ（前方部長）との比が、SZ4500ではおよそ3:1であるのに対し、縦向石塚古墳では4:1から3:1である。今回の調査成果は、その出土土器の年代観から見て、SZ4500に代表される円形周溝墓の陸橋が延伸することで縦向型前方後円墳が成立したとする説とも整合的であるといえる。

円形周溝墓SZ4500の東周溝とその周辺に位置する土坑からは、4個体の編みかごが出土した。なかでもSZ4500東周溝の黒色粘土から出土した編みかご1には、板材を



図82 S24500 東岡溝出土の弥生土器

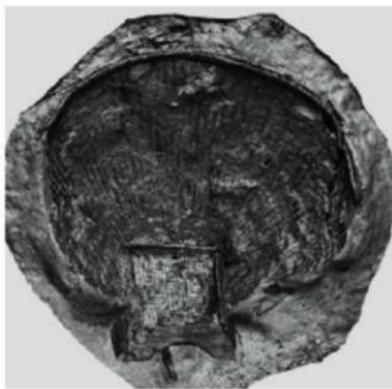


図83 S24500 東岡溝出土の縄みかご 1

組み合わせたいわゆる「四方軸び木製品」が付属しており、これまで用途が明らかでなかったこの木製品が、縄みかごの脚台であったことが確定した（図83）。また、縄みかごの詳細な検討から、その製作技法も明らかになった。

縄文時代の瀬田遺跡 今回の調査では、縄文時代包含層（黒褐色粘土）の調査は部分的に実施するにとどまったが、調査面積の約20%につき下層確認調査をおこない、縄文時代後期から晩期にかけての土器・石器類が数多く出土した。出土した縄文土器のうち平行沈線文土器は、諸特徴から縄文時代後期後葉の滋賀里Ⅰ式が主体であり、無文土器もこれにともなうものであろう。瀬田遺跡出土の滋賀里Ⅰ式土器は、近傍の大規模遺跡である柳原遺跡の前段階にあたる資料として重要な位置を占めている（『藤原京右京九条二坊・三条三坊、瀬田遺跡発掘調査報告』）。

2) 条坊関連遺構

この10年で、都域発掘調査部が藤原京の範囲内で実施した発掘調査のうち、7件で条坊関連遺構を検出した。以下、先述の第187次調査以外の成果を紹介する。

第173-1・178-7次調査 農業用水路の改修にともなう一連の発掘調査（2012・2013年度）で、左京二条三坊・三条三坊にあたる。調査区は東二坊大路に沿い、その東側溝とみられる南北溝SD11140・11141、SD11212を断続的に検出した（『紀要2013』・『紀要2014』）。

第178-2次調査 大和平野支線水路等改修工事にともな

う発掘調査（2013年度）で、右京七条一坊にあたる。狹小な調査区において、六条大路側溝・西一坊大路側溝にあたるとみられる溝（SD11201・11202およびSD11200）をそれぞれ検出した（『紀要2014』）。

第185-7次調査 個人住宅建設にともなう発掘調査（2015年度）で、右京八条二坊・三坊にあたる。西二坊大路東側溝SD480・西側溝SD485、八条条間路南側溝SD481を検出し、SD481がSD480に接続しL字形に曲折することが判明した。SD480の下層では南北溝SD479を確認し、先行西二坊大路東側溝と考えた（『紀要2016』）。

第204-2次調査 店舗建設にともなう発掘調査（2020年度）で、右京六条二坊・三坊にあたる。東側溝の推定位置で、中世に埋没した南北溝を検出した（『紀要2021』）。

このほか、第204-6次（左京三条三坊、2020年度）では東三坊間路の両側溝を検出した（『紀要2021』）。

(3) 飛鳥地域の発掘調査

(紀要2015・2018・2020・2021・2022)

第一第181-4次・第193次・第194次・第197-6次・第203次・第206次・第209次ほか

はじめに 飛鳥地域では、1956年からの飛鳥寺ほかの発掘調査を嚆矢として、寺院や主要な遺跡を対象に継続的に発掘調査をおこなってきた。

この10年で実施した主要な調査地は、飛鳥寺旧境内(北方:第188-19・192-1・192-9次 東方:第197-6次)、檜隈寺周辺(瓦窯を含む。第176・180・181-4・184・197-1・197-2次)、山田寺北面大垣(第188-8・11次)、奥山庵寺(第185-10・204-7次)、甘樺丘東麓遺跡(第177次)、山田道(第193・194次)などである。さらにこの5年には、大官大寺南方において地下探査と試掘調査を継続的に実施し(第196・199・203・206次)、2021年度からは、石神遺跡東方の隣接地において新たな計画的な調査を開始した。

以下、紙幅の関係から、飛鳥寺旧境内と山田道の調査、継続的な調査を続けてきた遺跡として、檜隈寺周辺と大官大寺南方、今後、継続した調査の実施を予定している石神遺跡隣接地について、調査成果を略述する。

飛鳥寺旧境内の調査 1950年代末の調査により明らかにされた伽藍中軸に比して、飛鳥寺旧境内は大字飛鳥の宅地密集部分を含み、主として現状変更にともなう小規模な調査を繰り返すことにとどまっていた。こうしたなか、2018年度に、北面回廊東端から東へ約100mの地において、河川改修にともなう調査をおこなった(第197-6次)。調査地は、飛鳥寺東面大垣の推定ラインをふくむとともに、いわゆる桜院(東南桜院)推定地にも隣接している。

トレンチは東西約40mと細長く、南北約2mと狭いため全容は不明ながらも、調査の結果、東面大垣の可能性のある柱穴を複数候補検出したほか、7世紀後半と推定される整地層を検出し、7世紀後半における寺地の造営ないし改作の事実を確認した。特筆すべき出土遺物は、整地土下層の木崩層から算木などの木製品とともに出土した木簡162点(うち削刻135点)で、飛鳥寺旧境内としては、はじめての出土である(「紀要2020」)。

山田道の調査 古代の山田道は、上ワ道と横大路との交差点から南に延び、地形に沿って南西方向へ進み、飛鳥地域の盆地部分からはほぼ東西方向に進み下ワ道との交

差点(軒衝)へといたっていた。現在の地名では、桜井市の弊余、阿部から山田、さらには明日香村の雷、豊浦、櫻原市久米町にあたる。そのルートは、現在の県道15号桜井明日香吉野線とそれに接続する県道124号櫻原神宮駅東口停車場飛鳥線には重なるとみられている。

2017年度、山田道推定地のうち、盆地から丘陵にさしかかる付近において店舗新築にともなう調査を実施し、東西溝1条を検出した(第193・194次)。溝の年代を示す遺物に乏しく決め手に欠けるものの、既存の調査で検出している山田道南北両舞溝を再検討した結果、南舞溝の可能性が高いと判断された。さらなる成果は、その南方に、古代の池状遺構を検出したことである。この池は、発掘調査知見に加え、地質学的検討や放射性炭素年代など自然科学的分析により、谷状の地形を利用して古墳時代後期から飛鳥時代前半にかけて人為的に築造され、飛鳥時代後半に埋め立てられたことを明らかにすることできた。奈良県内で発掘がおこなわれた古代の池としては、もっとも古い事例の一つとして注目される(「紀要2018」)。

檜隈寺周辺の調査 檜隈寺は、渡来系氏族東漢氏の氏寺として創建された古代寺院で、現在寺跡は於美阿志神社境内となっている。寺城周辺における国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備事業にともない、2008年度から継続的な調査の一端を担当してきた。

調査地は寺跡の周辺多岐にわたり、伽藍南辺をはじめとして平安時代以降中世までの建物遺構などを検出したことから、史料に乏しい檜隈寺の変遷がうかがわれる調査知見を得た。特に、2014年度の第181-4次調査では、伽藍の北西において、10世紀頃に操業していたとみられる瓦窯を検出したことは注目される(図84)。檜隈寺に関連する瓦窯をはじめて発見したのみならず、出土瓦を根拠に從来から推測されてきた、平安時代における補修の事実を裏付ける成果といえる(「紀要2015」)。

大官大寺南方の調査 大官大寺は、1973年から1982年にかけておこなった調査により中心伽藍の概要がほぼ明らかされているが、寺域の多くは未調査であるとともに、藤原京の十条大路に面したと推定される南門は未検出で、全容の解明には課題を残していた。また、寺の南方、山田道までのおよそ450mの間は、これまで大規模な発掘調査がおこなわれておらず、条坊施工の状況や土地利用の様相は明らかにされていなかった。このあたりは、古



図B4 横隈寺瓦窯（第181-4次、北西から、2014年）



図B5 石神遺跡東方の東西堀（第209次、東から、2022年）

代においては狭義の飛鳥の北にあたり、小治田（小堀田）と呼ばれる地域であったと推測されている。奈良時代から平安時代にかけての小治田宮は、山田道の南、雷丘東方遺跡周辺に推定されているが、推古朝小堀田宮の所在は、いくつかの有力な候補地が指摘されるものの、未だ確定にはいたっていない。

こうした問題意識から、2017年度から2020年度にかけて合計約430mの試掘調査と、大官大寺から山田道までの間で、東西幅約100mの範囲を対象地とした地下探査（このうち諸条件により、実際に探査可能な範囲のみで実施）を継続して実施してきた。

2019年度の第203次調査では、飛鳥時代に属する東西方向の溝を確認した。この溝は、幅2.2m以上、深さ0.5mで、溝の南肩を調査区東端から13m分検出した。溝の出土土器は、飛鳥福年の基準資料のうち、川原寺下層SD02・SD367下層出土土器や山田寺下層整地土・SD619出土土器の様相にもっとも近いとされる。わずかではあるが漆付着土器がみられ、繩の羽口片などもあることから、7世紀前半頃、この周辺で何らかの生産活動があったことがうかがわれる（「紀要2021」）。

2020年度の第206次調査では、十一条大路に北接する地点に調査区を設定し、7世紀後半から末までに属する

東西3間以上、南北2間以上の総柱建物、南北棟建物や堀数条、井戸などを検出した。藤原京の条坊に関わる明確な造構は確認していないものの、7世紀後半から藤原京期にかけて、この地が積極的に利用されたことが明らかになった。（「紀要2022」）

石神遺跡東方の調査 石神遺跡は、須弥山石などが発見された地として知られ、1981年から2008年度にかけて継続的な調査を実施してきた。石神遺跡で検出した造構のなかには、調査範囲を超えて東方に展開するものも散見すること、石神遺跡隣接地の東方一帯に推古朝小堀田宮を推定する理解もあること（相原嘉之説）などから、2021年度の第209次調査から、この地の土地利用の実態解明を課題として、継続的な調査を開始した。

調査の結果、石神遺跡の南限とみられてきた東西堀に連続する形で、新たに24基の掘立柱の柱穴を検出した（図85）。柱間や振れがほぼ一致することから、石神遺跡からさらに東へ伸び、総延長85m以上となる東西堀が存在し、道路をへだてて飛鳥寺北限に面することが明らかになった。このほか、弥生時代に属する土坑、古墳時代中期から後期までに属するとみられる堅穴建物などを検出し、調査地における継続的な土地利用の一端を垣間みる成果をえた。今後、さらに調査を継続する計画である。（「紀要2022」）

(4) キトラ古墳の発掘調査

(紀要2012・2014)

—第170・173-8・178-6次

キトラ古墳は、明日香村大字阿部山字ウエヤマに所在する二段築成の小さな円墳である。1983年のファイバースコープを用いた石室内探査により、北壁に「玄武」の彩色画が描かれていることが判明し、我が国2例目の極彩色壁画古墳として、広く知られるようになった。

2004年におこなわれた石室の発掘調査(飛鳥藤原第135次)では、刀装具や木棺の飾金具をはじめとした遺物が出土した。被葬者の人骨や歯牙もみつかり、分析から熟年の後半から老年の初頭(50~60歳代)の男性1体分のものであることがわかった。

壁画の記録作業では、写真撮影とフォトマップ作成がおこなわれた。フォトマップとは、デジタルカメラで撮影した膨大な高精細画像データをコンピュータで解析して作り出す合成画像のことで、歪みがきわめて少なく、誤差は1mで±3mm程度におさまる。フォトマップ作成のために撮影した写真の枚数は、壁画・床面・天井面合わせて1,200カットほどにのぼった。

一方、実物の模画については、2004年の調査で初めて目視で詳しく観察できるようになったが、損傷が著しく、漆喰が壁から3cmほど浮いている部分も存在した。速やかな保存処置が必要であると判断され、壁画を描いた漆喰の全面取り外し方針が決定された。この方針決定を受け、順次漆喰の取り外し作業が進められ、2010年11月、床面を除く5面全面の漆喰の取り外し作業が終了した。取り外しが完了した後、2011年度から2013年度にかけて、石室内および墓道部の考古学的調査を実施した。これらの調査では、以下のような成果が得られた。

唯一取り外されずに残った床面の漆喰を精査した結果、床面の中央に南北200cmほど、東西68cmの棺台が置かれていた痕跡が確認できた(図86)。棺台の形状は、漆喰の状態からみて、底板をもたないか、底板があったとしても床面と接する形状ではなかったと推測できる。

石室の構築技術を示す痕跡には、朱線や梃子穴がある。2004年までの調査成果により、石室石材には、加工の際の基準線として利用された朱色の割付線が引かれていることがわかっていた。漆喰取り外し後の調査で、石室内

の隅々まで観察したところ、各石材で多数の朱線を確認することができた。線の太さは1~3mmを基本とし、朱線の大半は石材の外周縁にみられた。朱線は、石室内全体で117ヵ所に残っており、そのうち最長のものは41.2cm、最短のものは1mmであった。同一直線上にのるものを1本として計算すると、確認できた朱線の合計は24本分となる。

また、漆喰取り外し前の調査では、石室のもっとも南の天井石に、石材を動かす際に使用した梃子穴が2ヵ所存在することが確認されていたが、2013年度の調査では、新たに南壁石の南面下辺で、梃子穴を1ヵ所みつけることができた(図87)。南壁石下辺の梃子穴は、高松塚古墳でも確認されており、その成果を参考にすると、棺を納める際の南壁石の閉間に使用されたと考えられる。

幕前祭祀に関わる可能性のある遺構としては、石室のすぐ南で検出した2基の穴がある。穴の内部で柱の抜取穴が確認できることから、これらの穴には柱が立てられていたことが判明した。柱穴は、一辻55~80cmの隅丸方形で、柱の太さは10cmほどであったと推測できる。遺構の重複関係から、棺を納め、石室を閉鎖した後に、穴を開け、柱を立てたことがわかった。

2013年度の調査では、地震の痕跡も確認できた。もっとも顕著なものは、石室から約2m南で確認した地割れの痕跡で、墓道部を東西に横断している(図88)。この地割れ痕跡は、幅60cm、深さ30cm以上で、V字状に聞くと考えられ、内部には上方にあった版築層が落ち込んでいた。また、地割れ痕跡の南側では、墓道床面が25cmほど落ち込んでいる状況も確認できた。このほか、墓道部を埋めた版築層にも地震によると考えられる多数の亀裂がみつかり、キトラ古墳の墳丘南側が、巨大地震により大きく崩壊していたことが明らかとなった。これは近畿地方南部を定期的に襲う南海地震の爪痕と考えられる。

一連の考古学的調査が終了したのち、キトラ古墳の墓道は再び埋め戻されることとなった。2013年9月から10月には、文化庁により、石室の閉塞作業がおこなわれ、2013年11月から12月にかけて、奈良文化財研究所が石室南側の墓道部の埋め戻し作業を実施した。その後、墳丘は築造当時の大きさに復元整備され、現在は国営飛鳥歴史公園(キトラ古墳周辺地区)内で多くの人に親しまれている。

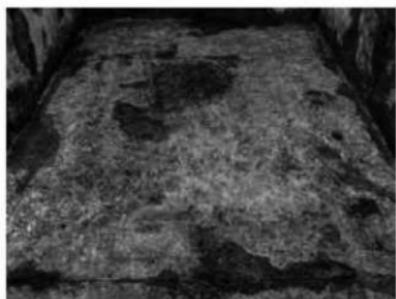


図86 床面に残る棺台の痕跡（南から、2011年）



図87 南壁石の柱子穴（矢印部分に穴の上端が見える、南から、2013年）



図88 基礎部構造図 1:40

6. 都城発掘調査部 平城地区における発掘調査の概要

2006年度に都城発掘調査部として平城と飛鳥・藤原の両発掘調査部が一体化したのち、平城宮跡および平城京、平城京内の寺院の発掘調査は、同部平城地区の研究員が担ってきた。

2012年度から2021年度までの10年間では、第491次から第646次まで、平城宮・京および京内寺院など計156次の発掘調査をおこなった。このうち、特別史跡平城宮跡内での発掘調査は、図89の通りである。継続的に調査を進めてきた東院地区と東方官衙地区での学術調査のほか、第一次大極殿院や中央区朝堂院周辺では、国土交通省による平城宮跡内の整備とともに調査を中心におこ

なった。

平城京城では、奈文研本庁舎建て替えとともに右京一条二坊・二条二坊の調査を手がけ、2010年度から2015年度にかけては、朱雀門周辺の国土交通省関係施設整備とともに左京三条一坊右京三条一坊を中心に継続した調査をおこなった。

京内寺院の調査では、これまでに引き続き、興福寺と藥師寺の境内を継続しておこなった。両寺では、こうした発掘成果に基づいて境内整備が進められている。また2015年度からは、東大寺が発掘調査団を組織し、その一員として東大寺東塔院の発掘調査に参加した。このほか、平城宮跡やその周辺、法華寺、興福寺、西大寺の各旧境内等で小規模開発にともなう発掘調査を継続しているが、史跡の追加指定等の案件は発生しなかった。

発掘調査費削減の中で、工夫を凝らしながら、平城宮跡の学術調査を今後も継続していきたい。

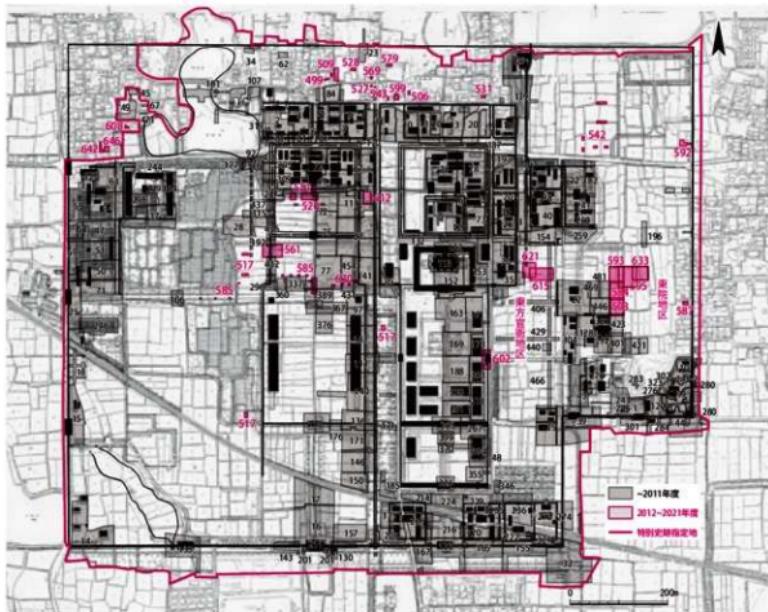


図89 2021年度までの平城宮跡とその周辺の発掘調査区 1:10000

(1) 平城宮の発掘調査

平城宮跡において継続的におこなってきた東方官衙地区や東院地区を中心に、この10年の成果を述べる。また、このほかには、先述のように、この10年では第一次大極殿院の整備に関わる追加の調査や東区朝堂院の学報作成に関わる追加調査などもおこなった。さらに、平城宮北方を中心個人住宅建て替えにともなう小規模調査を20件ほど実施した。

1) 東方官衙地区的調査

(紀要2020~2022)

—第615・621次

東方官衙地区は、平城宮内裏・第二次大極殿院・東区朝堂院と東院地区の間に配置された官衙群を指す(図90)。1966・1967年度におこなった第38・40次調査では内裏の東方に埴積基壇建物を配した官衙区画(埴積基壇官衙)を検出し、1984年度の第154次調査では、その南方位別の官衙区画の北辺部分を確認していた。

内裏東方の官衙については、基幹排水路SD2700から出土した木簡や墨書き器などの出土文字資料から、宮内省などの官司が配されることが推定されているものの、第二次大極殿院の東外郭から東方官衙地区にかけては、具体的な官司の比定に課題を抱えていた。都域発掘調査部平城地区では、平城宮における実務的な行政を担った可能性が高い官衙中枢の解明を、今後の重要な課題のひとつと位置づけ、2006年度から継続的な調査をおこなってきた。

幅6mの細長いトレンチを東西、南北に設定し、第406・429・440・466次と南に展開するかたちで、概要の把握に努めた。北寄りでおこなった第406次調査では、第154次(1984年度)で検出した官衙区画(官衙区画Aと仮称、図2)が、東西方向の築地塀によって北区と南区に分けられていることや、南区では基壇建物SB19000の存在を確認した。2019年度には、この基壇建物の規模や建物配置の解明を目指すため、本格的な発掘調査をおこなった。第615次(2019年度)・第406次(2006年度)でみつかった基壇建物は大規模な東西棟礎石建物SB19000であることが判明した(口絵)。このSB19000は官衙区画A南区

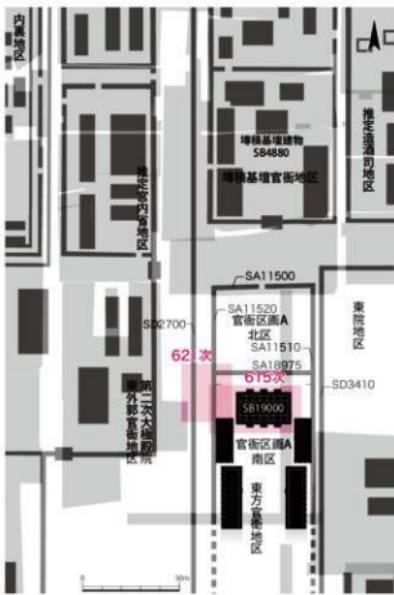


図90 東方官衙地区的官衙区画の建物配置 1:2000

の南北中軸線上に位置し(図90)、この区画の正殿とみられ基壇規模は東西約28.7m、南北約16.9mをはかる。建物規模は桁行7間、梁行2間の身舎の南北2面に廂がつき、7間×4間に復原できる。基壇外装の凝灰岩製地覆石と羽目石が残存するとともに、南面および北面にいずれも3基の階段を検出した(図91)。北面階段の幅はそれぞれ



図91 基壇建物 SB19000 の北面中央階段(第615次、北から、2019年)

約3.5m、階段の出は約1.4m、南面階段の幅はそれぞれ約3.9m、階段の出は約1.8mと、北面に比べてやや大きい。南面中央階段の正面には、東西幅約2.2mの襖敷舗装が施されており、内底部中央の通路とみられる。

SB19000の南側には東西対称位置に、南北棟礎石建物が配されていることも明らかとなった。第406次(2006年度)では、さらにその南に、ひとまわり大きい東西対称の南北棟礎石建物を確認しており、それらの成果を合わせるとSB19000を正殿とし、南北棟の脇殿を東西2棟ずつ配する構成と考えられる。

第621次(2020年度) 第621次では基幹排水路SD2700を含む調査区を設定した。その目的は、官司比定の根拠となる文字資料の獲得と官衙区画A内の排水施設の解明である。

官衙区画Aの西面築地塀SA11520では3時期の築地基部を検出した。また官衙区画Aを北区と南区に画する東西築地塀SA18975と、その南北に東西方向の雨落溝を検出した。この南北落溝は木樋暗渠によって西面築地塀SA11520の下を抜けることが判明した。この暗渠は改修した西面築地塀の基部を掘り込んでいることから、この東西築地塀SA18975は、西面築地塀よりも一段遅れて造営されたことも明らかとなった。

検出したSD2700の幅は6.2~7.3m、深さ1.5~1.6mをはかる(図92)。上流にあたる第172次(1986年度)では石組や木杭などによる護岸を備えていたが、本次調査区では確認していない。奈良時代前半から平安時代初頭頃までの堆積層を確認した。

また、東西の官衙城からSD2700に接続する暗渠を検



図92 完成した基幹排水路 SD2700(第621次、南東から、2021年)



図93 水分計を設置して埋め戻した木樋(第621次、西から、2021年)に出した。東岸の官衙区画Aからは巨石を用いた石組暗渠をはじめ、東岸の東西方向の木樋暗渠がみつかった。また、SD2700の西岸の官衙区画からは、木樋や瓦を用いた樋など計3基の暗渠を検出したが、総じて東側の暗渠に比べて簡素である。東岸の東西方向の木樋暗渠については、埋蔵文化財センターの協力のもと水分計を付した状態で埋め戻し、発掘調査後の木材の水分量についてデータの採取をおこなっている(図93)。

さらに、正殿SB19000の造営にともなう整地土の下から掘立柱建物や東西溝を確認し、この官衙の変遷を考える上で重要な知見をえることができた。

まとめ 東方官衙地区のなかでも官衙区画Aの南区は、大型の東西棟礎石建物を正殿とし、東西に各2棟の脇殿を備えた比較的格の高い官衙であることが判明した。具体的な官司比定については、平城宮内における当該区画の位置や建物規模、建物配置等の平安宮との比較、SD2700の下流にあたる第406次から出土した「左弁官口宣」木筒を勘案し、太政官の弁官曹司の可能性が高い。しかしながら、現状では出土した遺物からの詳細な時期比定は難しい部分もあり、東方官衙全体の解明については、今後の調査の進展に期したい。

2) 東院地区の調査

(紀要2013・2014・2017~2019・2021)

—第503・584・587・593・595・633次

平城宮東張り出し部の南半を東院地区と呼称し、1968年の東張り出し部と園池遺構の発見以来、園池の復原整備にむけた発掘調査を進め、1998年に開園した。その後、隅楼の復原（2000年度）を経て、2009年に名勝、2010年には特別名勝の指定を受けた。平城宮跡の中でも、多くの人々が見学に訪れるエリアとなっている。

「東宮」「東院」や「楊梅宮」は、宴や叙位、儀式などがおこなわれた場として、しばしば文献資料に登場するが、その中心舞台とみられる東院中枢部の実態は、ほとんどわからていなかった。そこで、園池北側に推定される東院中枢部の解明を目指して、2004年度以降、計画的に発掘調査を進めてきた（図94）。

その結果、複雑な遺構の重複関係から、6時期の変遷を確認し、現在も新たな発掘調査成果をえて、詳細な検討を重ねてきている。2009年度までの調査と成果については『奈良文化財研究所六十年のあゆみ』を参照いただくこととして、以下では2012年度以降の調査成果を中心述べる。

第503次（2012・2013年度） 光仁天皇の楊梅宮と推定される第6期の遺構で、南の第423次（2007年度）から続く柱穴列は、梁行約6m（20尺）の単廊であることが判明した。第401・421・423次の調査成果を再検討した結果、南北約90m以上の回廊に囲まれた区画内に、南北棟建物2棟と北廊をもつ東西棟建物が存在することがわかった。このほか、平瓦を外装材に用いた第6期以前の壇状遺構や總柱建物などを確認した。

第584次（2016・2017年度） 奈良時代前半の第1期に位置づけられる桁行10間、櫓行2間の南北棟建物立柱建物SB19515、SB19970の2棟を検出した。両者は柱筋を揃えているが、時期的な前後関係があるとも考えられる。また、4時期にわたる遺構変遷を確認し、東院地区北部では奈良時代にわたって複雑な空間利用の変化がみられることが明らかになった。

第587次（2017年度） 未調査地が多い東院地区東部における小規模調査である。建物一棟の検出に留まるが、遺構の残存状況を知る上で貴重な手掛かりをえた。

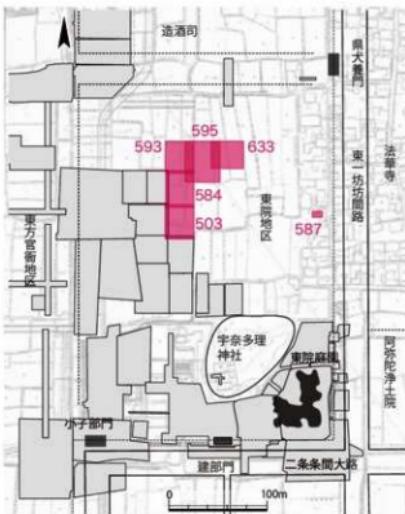


図94 東院地区的調査区（赤はこの10年で調査した部分）1:5000

第593次（2017年度） 奈良時代前半にあたる第1期の遺構として、東西9間以上、南北2間の南面に廊をもつ大型の東西棟建物SB1999を検出した。この建物は第584次で検出した南北棟建物SB19515とも柱筋を揃えており、奈良時代前半に複数棟の大型建物が配置されていたことが判明した。

また、大型井戸SE20000を検出し（図95）、奈良時代中頃から後半（第3～5期）の様相を知る手がかりをえた。一辺約4.6mの掘方をもち、周囲に石敷や石組溝をともなう井戸で、平城宮跡では内裏の井戸に次ぐ規模を誇る。井戸の西側からは井戸周囲の溝に接続する東西溝を検出し、これがさらにL字に分岐し、2本の東西溝として派生していた。この2本の東西溝は東西6間以上、南北2間で南に廊をもつ東西棟建物の内部を流れる。これら一連の遺構は井戸とその周囲の水を東西棟建物に配する機能が想定され、この場所は東院中枢部の食膳を準備する厨に関する空間であったと考えられる（図95・96）。

第595次（2017・2018年度） 第593次（2017年度）で検出した大型井戸SE20000から東方に続く階段と石敷舗装面や方形区画遺構群を検出した（第3～5期）。方形区画遺構群は溝により方形に区画された内部で被然痕跡や方形

の掘り込みを有し、この区画が東西に8基並ぶ。これらの被燃痕跡は地上式窓の基礎部分と想定できる。第593次で検出した大型井戸や溝とあわせて、場所により異なる機能を有する大規模な窓が周辺に展開している可能性が高まった。

第633次(2021年度) 大型東西棟建物SB20060を検出した(口絵)。桁行9間、梁行4の総柱建物間で、高床を備えた構造とみられる。東院地区北部にも正殿クラスの建物が存在することがあきらかになった。また、第595次と同様の方形区画造構を検出し、SB20060はこれらの廃絶後に造られていた。造構変遷から、第4期ないし第5期に該当する造構の可能性が高い。

まとめ 東院地区は平城宮跡の中でも特に造構密度が高い場所である。継続的な調査によって、奈良時代を通じて活発な空間利用がなされるとともに、時代を経るごとに機能や構造が大きく変わることが判明した。課題であった東院地区の中枢部については、大型建物を複数検出した宇奈多理神社の北方を中心とみてよい。しかし、各時期の造構変遷の整理と空間構造の復原は今後の課題であり、出土遺物を含めた調査成果の総合的検討が必要である。平城宮のなかでの東院地区の歴史的位置づけを、今後、明らかにしていきたい。



図95 廊間連とみられる大型井戸と周辺の造構
(593次、東から、2017年)

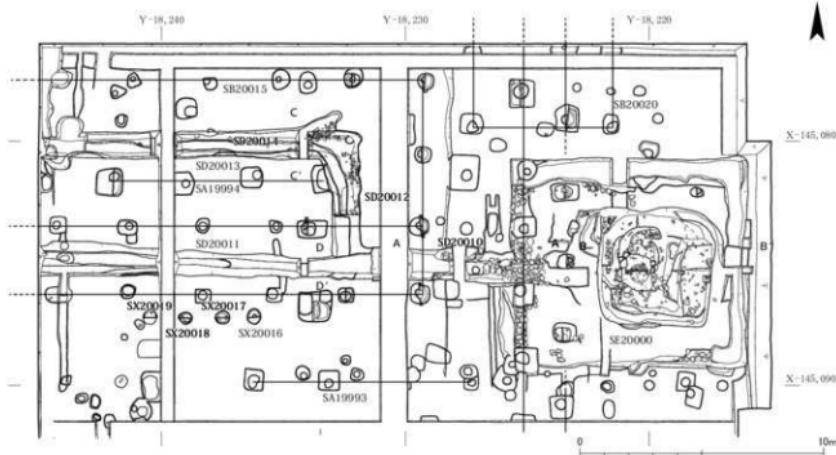


図96 第593次調査でみつかった廊間連造構の平面図 1:200

(2) 平城京などの発掘調査

平城京城の発掘調査としては、朱雀門前の平城宮いざない館と周辺施設の建設に先立つ左京三条一坊一・二坪と、二条大路南側溝、朱雀大路西側溝の調査、および佐伯門前にあたる奈文研本庁舎建て替え工事に先立つ右京一条二坊・二条二坊の調査が、比較的大規模でまとまった調査となった。その他、法華寺旧境内および左京一条一・二坊や二条二坊にあたる法華寺町周辺では、宅地造成などの開発事業が活発で、小規模ながら地道な調査を積み重ねてきた。以下、朱雀門前と佐伯門前の調査成果を中心に述べる。

1) 左京三条一坊一・二坪および

朱雀大路西側溝・二条大路南側溝の調査

(紀要2012~2017・2019・2021)

一第491・495・515・522・552・566・577・578次

発掘調査の経緯 1998年、平城宮の南面正門である朱雀門が復原され、ほぼ同時に南に続く史跡平城京朱雀大路跡についても、奈良市による整備がおこなわれた。2018年には、国営平城宮跡歴史公園として整備された「朱雀門ひろば」「平城宮いざない館」が完成し、朱雀門の南西の坪には奈良県営平城宮跡歴史公園として「天平みはらし館」や「天平うまし館」などの施設が設置された。また、奈文研の立会調査のもと進められてきた二条大路と朱雀大路の整備も完了し、特別史跡平城宮跡への玄関口としての朱雀門周辺の美観が整ったといえよう。

平城宮いざない館の建設地は、1988年に開催された「なら・シルクロード博覧会」の会場の一部として利用された場所である。その後は、平城宮の保存運動に尽力した棚田嘉十郎の銅像が立てられ（1990年）、朱雀大路緑地として市民に親しまれてきた広場であった。

2015年度には、朱雀大路をまたいだ東西対称位置にあった民間工場が移転し、国土交通省による史跡平城京朱雀大路跡等の整備事業が本格化した。工場跡地は平城京右京三条一坊一・二坪にあたり、特別史跡平城宮跡と史跡平城京朱雀大路跡の一部がかかる。史跡指定地外は奈良県営平城宮跡歴史公園として、奈良県が「天平みはらし館」や「天平うまし館」などの施設建設を計画し、事前

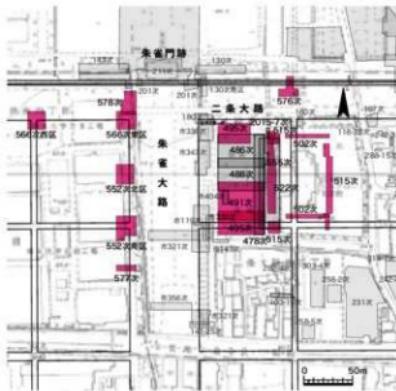


図97 平城京朱雀門前の調査区位置図 1:5000

の発掘調査は奈良県立橿原考古学研究所がおこなった。奈文研は国土交通省が整備をおこなう特別史跡平城宮跡および史跡平城京朱雀大路跡部分についての確認調査を担当した（図97）。

発掘調査の概要 2010年度、左京三条一坊一坪の東寄りに東西約10m、南北約108mの細長いトレンチを設定した（第478次）。その結果、坪内東西道路の側溝や大型の井戸SE9650（図98）がみつかったものの、柱穴などは確認されず、遺構密度は高くないと予想のもと、次年度以降の本格的な発掘調査の計画を立てた。

しかしながら、2011年度、一坪の北側を中心に東西48m、南北34mの調査区を設定しておこなった第486次に



図98 平城京左京三条一坊一坪でみつかった大型井戸
(平城第478次、西から、2011年)

おいて、予想していなかった鉄鍛冶工房を発見し、平城宮造営に関わるとみられる大規模な官営工房が置かれていたことが明らかとなった（図81）。その後、2012年には第488次、2013年には第491・495次と南に調査区を広げ、4年の歳月を費やして左京三条一坊一坪の大部分を発掘調査した。

その結果、敷地の北部を中心に鍛冶工房が4棟、管理施設や資材保管庫とみられる一連の掘立柱建物が6棟配位されていることが明らかとなった。炉跡には蘆羽口がそのまま置かれたものや、穴を掘って自然石を据えて金床石にした遺構がみつかった（図82）。

鍛冶工房でもっとも遺存状態が良い工房SX9690では、東西約18mの掘立柱建物内に整然と配列された鍛冶炉が47基もみつかった。これらの炉は重複するため、造り替えがおこなわれたとみられ、炉の配列から一度に12～16人の工人が作業をおこなったと推定できる。

工房を取り巻くように、防湿用の溝が掘られ、それらの溝が合流する場所では、堰板が設けられており、用水を確保したと考えられる。この排水溝SD9883の西延長とみられる溝が奈良市の発掘調査（市336次）で確認されており、朱雀大路の東側溝に接続するため、この工房の操業開始は早くとも朱雀大路施工後となる。

工房跡からは多量の鉄滓や鍛造剥片とともに、わずかならながら鉄釘や鎧などの製品も出土した。都城の造営には、平城宮を中心に膨大な量の建築金具などの物資が必要で、大量生産をおこなうには集約的な生産が効率的であったと考えられる。同様の鉄鍛冶工房は、7世紀後半の飛鳥島遺跡（明日香村）や8世紀中頃の平城宮馬寮跡でもみつかっており、今回の発見は、その間をつなぐもので、都城造営に関わる官営工房の発展を考えるうえで、きわめて重要な成果である。

その歴史的重要性に鑑み、遺構保存が図られることになった。建設予定の建物は大幅に設計を変更し、東に隣接していた北新大池の半分を埋め立てる形で、平城宮いざない館が建設されたのである（図99）。

第486・488次の調査成果から、一坪西辺には、朱雀大路と画す築地堀ではなく、恒久的な建物は設けられていなかったことが判明した。都城造営にあたって、のちに広場とする予定地に工房が営まれた点は興味深い。何も建てる必要がない場所であるため、遷都直前まで工房とし

て機能させることができ、操業停止後はすみやかに整地土を入れて広場として整備できるためである。このことは、縦密な造営計画に基づいて、平城京造営がおこなわれたことを示唆する好例とも言えよう。

平城京遷都後の遺構としては、一坪の東寄りに大型の井戸が設置されていることや、東西方向の坪内道路を設けて、南北で敷地を分ける時期があったことがわかった。井戸は横板組で上段が四角、下段が六角形を呈する（図98）。設置された時期は不明だが、奈良時代末には廃絶したとみられる。井戸埋土からは相撲司に関する墨書き器が出土し、この場所の使われ方を示唆するものとして興味深い。

2015年度の第552次では、朱雀大路西側溝を確認するため、2ヵ所の調査区を設定し、坪内道路と合わせるように橋が敷設されていたことなどを明らかにすることができた。2016年度には二条大路部分の調査をおこなった（第566・578次）。その結果、朱雀大路西側溝は二条大路を横断し、二条大路の南側溝のみならず、北側溝の水も合わせて南に流す役割があったことが判明した（図100）。

2016・2017年度の第566次では、二条大路南側溝については、平城宮の第一次大極殿院地区と第二次大極殿・東区朝堂院の間を流れる基幹排水路SD3400が二条大路北側溝と合流することを確認しており、時には水量が多い流れだったことが堆積状況から確認できた。

朱雀大路西側溝は、かなり水量が多い排水路であったらしく、この大路側にはしがらみ護岸が施され、坪内道路に対応した位置には、橋脚になる可能性がある張り出し部を設けていることも明らかとなった。



図99 平城宮いざない館と整備が完了した二条大路と朱雀大路（ドローンによる撮影、北東から、2018年）



図100 二条大路を横断する朱雀大路西側溝
(第578次調査、南西から、2016年)

さらに、右京三条一坊一坪・二坪は、左京同様、一坪には朱雀大路と隔てる築地塀が確認されず、二坪には築地塀がめぐることが明らかとなった。つまり、朱雀門前にあたる左京三条一坊一坪と右京三条一坊一坪は、朱雀大路と二条大路と一体となった開放的な空間であったのである。

発掘調査の成果 朱雀門前にあたる左京三条一坊一坪と右京三条一坊一坪の両坪は、築地塀が設けられていないことや、恒久的な建物が設置されていなかった可能性が高いことなどを確認することができた。朱雀門は天皇が元旦朝賀をおこなったり、外交使節団を出迎えたり、さまざまな儀式をおこなう空間として、文献にもしばしば登場する。そのため、この両坪は朱雀大路や二条大路と一体の広場空間として利用されたのであろう。

また、平城宮・京の造営に際して、鉄釘などを大量に製造する鉄鍛冶工房が発見されたことは特筆すべき成果である。平城宮造営にあたり、合理的な土地利用がなされていたことが判明したのである。さらに、二条大路、朱雀大路の調査では、朱雀大路西側溝が二条大路を横断することなど、重要な知見をえることができた。

2) 平城京右京一条二坊・二条二坊

(紀要2014~2018)

—第518・530・546・560・565・588次

発掘調査の経緯 奈文研本庁舎の建て替え工事に先立つ発掘調査である。平城宮の西面正門である佐伯門のすぐ西に位置し、南北方向の西一坊大路と東西方向の一条南大路がT字に交差する場所にあたる。条坊では平城京右京一条二坊・二条二坊に該当する。また、遺存地割などから、平城宮造営前の秋篠川の旧河道が通る可能性も指摘されていた。さらに、旧庁舎解体前におこなった試掘調査(2006年度の第400次、2013年度の第518次)では、奈良時代の遺構はみつからなかったため、秋篠川の氾濫原が広がると推定していた。

2014年4月から、旧庁舎の解体と併行して、本格的な発掘調査(第530次)がはじまった。調査は建物建設予定地のほぼ全城域および、翌年2月までの11ヶ月にわたった。予想外に平城京の条坊道路遺構が残存することが判明し、庁舎建設計画は大幅に見直しを迫られることとなった(本書5~6頁)。

設計変更のため、2015年度には第546次、第560次の2度、2016年には第565次、第588次の2度、計4度にわたりて追加の発掘調査をおこなった。

発掘調査の概要 奈文研本庁舎の敷地の大部分は、秋篠川旧流路にあたることが確認できた。敷地内からは旧石器をはじめ、石礫や石錐、弥生時代の石臼、石杵などが出土し、管玉や勾玉なども出土したが、圧倒的に多いの



図101 秋篠川の旧流路 (第530次調査、北西から、2014年)

は古墳時代の土器である。

秋篠川旧流路の河岸は段丘状に削られており、堆積土には、30~50cmの粘土ブロックを含み、時には水量が多く、急流だったことがわかる(図101)。埋土から出土した土器は古墳時代の布留Ⅰ~Ⅱ式の瓶土師器を中心で、敷地の南寄りほど完形品に近い土器が多いことから、敷地南西の微高地に当該時期の集落が営まれていた可能性が高い。

平城宮造営時に、秋篠川は平城京の条坊に沿って南流する新流路、つまり現代の秋篠川へと付け替えられた(図103)。しかし、旧流路はすぐに埋め立てられたわけではなく、基本的に位置を踏襲しながら、比較的浅く直線的な斜行大溝に整備されていた。堆積土には比較的細かい砂粒がラミナを形成する水成堆積層を確認し、この斜行大溝は水量がコントロールされた流れであったことがわかった。また、斜行大溝の河岸には、粗朗が敷かれ、その上には切り株が置かれており(図102)、川床と岸を保護するための工夫と考えられる。

さらに、この斜行大溝は、秋篠川の佐伯門の前を通り、平城宮の南西に向かうことから、平城宮造営のための物資を運ぶための運河として利用された可能性が高い。秋篠川の上流域には、平城宮第一次大極殿の瓦を焼いた中山瓦窯(次節で詳述)がみつかっており、瓦などの重量物を運ぶ運河として利用されたと考えられる。

この斜行大溝は平城宮・京の造営がひと段落する頃には埋め立てられ、平城宮西面中門である佐伯門につながる一条南大路と、平城宮の西面に沿う西一坊大路が施工された(口絵)。斜行大溝は敷葉・敷粗朗工法を用いて、とくに丁寧に埋め立てられたことがわかっている(口絵)。また、その埋め立て土からは、「奈良京」と書かれた木



図102 斜行大溝(運河)に面かれた切り株(第530次調査、東から、2014年)



図103 発掘調査成果から推定した秋篠川旧流路 1:10000

簡が出土した。これまで、二条大路木簡に記されていた奈良時代最古の「奈良」の地名表記を巡る例として話題となつた。平城京の造営時には、すでに「奈良京」と呼ばれていたことになる。

奈良時代の造構としては、一条南大路と西一坊大路を検出した。一条南大路の北側溝は、大路側に千鳥に杭を



図104 一条南大路北側溝のしがらみ崖岸(第530次、北東から、2014年)

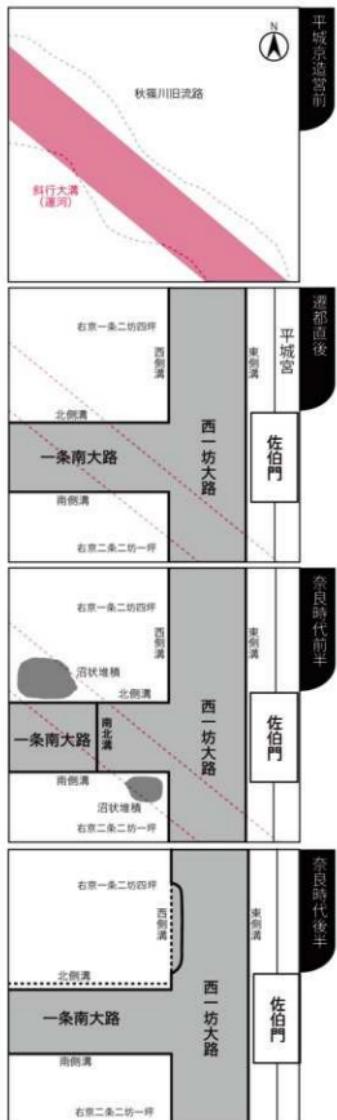


図105 奈文研新庁舎敷地周辺の構造変遷

打ったしがらみ護岸が残存していた(図104)。しかし、秋篠川旧流路の埋め立て部分は、地盤沈下をおこしていったことがわかった。一条南大路の大部分は、旧流路部分とそうでない部分とで約80cmもの高低差があるのである。この沈下部分は、沼状を呈していたとみられ、奈良時代前半の土器を含む粘土層が堆積していた。奈良時代前半にはすでに旧流路部分の沈下が進んでいたらしいことがわかった。

地盤沈下で漏水してしまうためか、北側溝と南側溝をつなぐ南北溝もみつかった。北側溝、南側溝および南北溝からは奈良時代前半から中頃の土器が出土したことから、これらの条坊側溝は奈良時代の中頃に埋め立てられた可能性が高い。

2015年度におこなった西一坊大路を中心とする敷地東側の調査(第546次)では、沈下した部分を整地し、奈良時代中頃に再整備をおこなっていることがわかった。再整備した一条南大路は、後世に削平された可能性が高い。しかし、北側溝に重複する新しい溝が大路側に位置をずらして掘削されており、一条南大路はやや道幅を狭めて再整備したことが明らかとなった。また、西一坊大路の西側溝は、最終段階で東に迂回させる溝を掘るなど、排水に苦労した様子がうかがえる。

右京一条二坊四坪内では、建物や築地塀などの遺構は検出していないが、数基の井戸がみつかっている。奈良時代の横板組の井戸SE3242からは枠材に役人の名前が列挙されており、いずれかの官衙で用いられた略名簡が転用されていた。また、敷地北寄りで検出した横板組の井戸は内法幅一辺約2.2mをはかる。井戸枠は最下段を除いて、すべて抜き取られていたが、埋め立て土からは、薬の名前を記した木簡や奈良三彩が出土した。

発掘調査の成果 奈文研本庁舎の敷地は、平城京造営前の秋篠川旧流路の河道にあたることや、造営時にそれを改修して運河として利用した可能性が高いことが明らかとなった(図105)。その運河は敷葉・敷粗朧を用いて丁寧に埋め立てられ、条坊道路が施工されているものの、地盤沈下をおこしたことなども明らかとなった。平城宮・京造営に関わる貴重な知見をえることができた。

なお、本庁舎の建設に際しては設計変更をおこない、重要遺構の保存に努めた。

3) 中山瓦窯の調査（平城第523・586次）

（紀要2014・2015・2018）

—第523・586次

調査の経緯 中山瓦窯は平城宮の北方に展開する奈良山丘陵西南部の南裾に位置する（図106）。1972年度に奈文研がおこなった発掘調査（第79-5次）で計10基の瓦窯を確認した。2013年度に、その北側で個人住宅の建て替えが計画されたものの、既知の瓦窯が発見されている斜面の一段上にあたることから、立会対応となった。しかし、工事立会中に瓦窯がみつかり、奈文研が緊急の学術調査をおこなうこととなった（第523次）。

発掘調査の結果、小丘陵の東側に1基、西側に2基の窯窯がみつかった。出土した軒瓦の年代から、奈良時代初頭から前半にかけてのものであり、中山瓦窯で平城宮に供給する瓦埠類の集約的生産がおこなわれたことを再確認することができた。なお、1972年度に調査した範囲については、2016年に国指定史跡奈良山瓦窯に追加指定されるとともに、奈良市によって買い上げられ、保存活用が図されることとなった。

発掘調査の概要 東南斜面で検出した窯窯は焼成部、燃焼部、煙道部、焚口部、灰原が残存していた。全長は約3.5mである。少なくとも1度の改修が認められ、検出した焚口部や煙道部は改修後の床面にともなうものである。前庭部には排水溝や暗渠もみられた。

西斜面で検出した窯窯は開口部が西向きで、焼成部および煙道部が残存していた。焼成部は全長約3.5m、幅約1.8mあり、床面は緩斜面で、瓦片を並べて段を構築している。窯壁の一部は粘土ブロックを積み上げている。煙道部には天井が遺存しており、排煙口付近では粘土ブロックを積み上げた隔壁により煙道が二分されている。

この窯の北東ではもう1基窯窯がみつかっており、焼成部、燃焼部、灰原の一部が残存していた。焼成部は大半が失われているが、幅は約1.8mで緩斜面に丸瓦を並べ、段を構築している。焼成部と燃焼部の境には高さ85cmの階がある。

これらの窯からは奈良時代前半の軒丸瓦、軒平瓦が出土しており、西斜面の窯は第一次大極殿の所用瓦である鬼瓦IA（図107）を焼いた窯であることがわかった。

発掘調査の成果 この調査で出土した瓦や瓦窯の構造は、

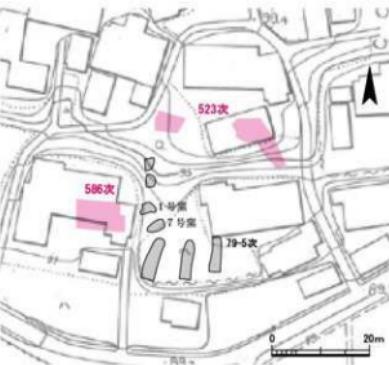


図106 中山瓦窯の遺構と調査地 1:2000



図107 中山瓦窯出土の第一次大極殿所用鬼瓦

既往の調査所見を追認するものであったが、今回の発見により、瓦窯が高低差のある斜面を利用し、上段と下段にわかれて窯かれていることが判明した。一つの丘陵に高低を越えた窯を構築して、ほぼ同時期に操業している点は、瓦窯の範囲を考える上で重要な発見といえる。残念ながら、今回発見された3基の窯については、記録保存とせざるをえなかったが、このような生産遺跡の分布域の推定に注意を要する点は、今後の文化財保護に活かすべき教訓であろう。

(3) 寺院の発掘調査

平城京内の寺院の調査は、興福寺、薬師寺、東大寺の境内整備に関わる発掘調査を継続的におこなった。このほか、西大寺旧境内では2012年度に薬師金堂院の回廊跡（第505次）、2013年度に弥勒金堂院回廊跡（第521次）を確認し、中心伽藍の復元に重要なデータをえることができた。また、2017年度に金堂院の南側でおこなった調査（第597次）では小規模ながら轆轤支柱とみられる遺構もみつかっている。また、法華寺旧境内の南寄りの坪では、2013年度の開発に関わる調査で鉛釉陶器・瓦博が多くみつかり（第517次）、さらに2018年度の調査（第601次）では法華寺の造営に関わる可能性が高い工房跡などが発見されている。

1) 興福寺の調査

（紀要2014～2022）

一第516・540・541・559・625・640次

概要 興福寺は、平城京左京三条七坊に位置する。奈良時代の創建以来、藤原氏の氏寺として政治、経済、社会、文化に大きな影響を与えてきた。享保2年（1717）の火災、さらには明治初頭の神仏分離令、廃仏毀釈、上知令などにより多くの子院や堂舎、寺地が失われたが、その後、復興に努め、1991年より学識経験者、文化庁、奈良県、奈良市の担当による協議を経て、1998年には「興福寺境内整備構想」を策定し、境内整備を進めている。

奈文研は興福寺から委託を受けて、伽藍中核部の発掘調査を進めてきた。その大きな成果の一つは、2018年の中金堂再建である。さらに、その後も中金堂をとりまく諸堂宇の調査を積み重ねてきた。この10年は僧房である西室、中室、経蔵、鐘楼、五重塔と東金堂を取り囲む東金堂院回廊および南面築地塀の調査をおこなった（図109）。以下、その成果を概述する。

西室（西僧房） 興福寺では中金堂と講堂、およびその東西に位置する経蔵・鐘楼の東・北・西をコの字形に取り囲む三面僧房（中室・北室・西室）を有し、西室と中室は大房と小子房からなると推定されていた。

2013年度（第516次）および2014年度（第540次A区）の調査で、西室大房は桁行10間、梁行4間の南北棟礎石建物であることを確認した。残存する礎石の多くは据え直

した痕跡が認められず、創建当初の位置を保っていることがわかった。基壇は地山削り出しで、わずかに積み土を施す。基壇規模は南北約66.5mを測るが、東西規模は未確認である。基壇南面と東面の地覆石および羽目石の一部が残存し、同じく南面と東面に接して2列の自然石を底石とする雨落溝を検出している。

西室大房の西隣には桁行7間以上、梁行2間の掘立柱南北棟建物を検出した。その位置から小子房の可能性もある。ただし、中室の小子房が礎石建ちであることや、西室大房との繋廊がみられないなどの課題が残る。

中室（東僧房） 2015年度の調査（第559次）で検出した中室大房は、桁行11間、梁行3間以上の南北棟礎石建物である（図108）。梁行方向の柱間寸法が西室大房と一致することから、中室大房の梁行も4間と推定される。残存する礎石は据え直しの痕跡がなく、創建当初の位置を保つことが判明した。基壇は地山削り出しで一部に積み土を施す。北面と南面で地覆石と羽目石を確認した。中室の西辺に沿って石組溝があり、出土遺物から明治時代に廃絶したとみられるが、中室と併存する期間は雨落溝としても機能した可能性がある。

西室大房と中室大房は基壇を含む全体規模がほぼ同じ



図108 正面手前と奥に中室、右に經藏（第559次、北から、2015年）

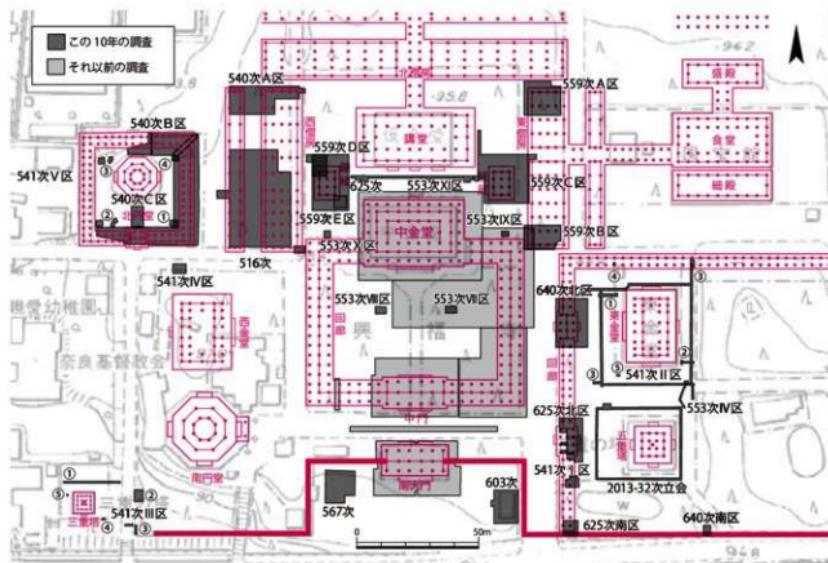


図109 興福寺境内のこの10年の発掘調査 1:2000

である可能性が高いことが判明したが、桁行絶長はわずかに中室大房が大きく、間仕切りの柱配置は大きく異なることがあきらかとなった。

経藏 中金堂と講堂の東に建つ、桁行3間、梁行2間の南北棟礎石建物。同じく2015年度の調査（第559次）で確認した（図108）。現存する礎石の多くが、創建当初の位置を保つ。基壇の造成は、地山を削り出した上に土礎頭形の積み土をおこない、四周を切り落として外装材を据えており、明確な版築は確認できなかった。基壇外装は西南隅と東北隅で室町時代以降に据えられたとみられる羽目石の一部が残存しているのを確認した。地覆石およびその抜取痕跡は認められず、羽目石が直接地上に据えられたと考えられる。基壇規模は南北約5m、東西約11m。階段は中金堂側ではなく、僧房（中室）に面した東側に設けられていることもわかった。

また、基壇周間に雨落溝の痕跡は認められなかったが、基壇北側で、側石と底石に玉石を用いた東西方向の石組溝を検出した。さらにその北側と基壇西側には幅1.3m以上の玉石敷を検出し、伽藍内の主要堂塔を結ぶ通路とそ

れにともなう排水施設の存在があきらかとなった。

鐘樓 中金堂と講堂の西に建つ鐘楼は2015年度の調査（第559次・E区）において、部分的に確認していたが、基壇全体の調査を2020年度（第625次）におこなった（口絵）。桁行3間、梁行2間の南北棟礎石建物で、礎石は創建当初の位置を保つことが判明した。礎・砂・粘土が混合した基盤の整地上に、経藏同様、礎を多く含む土を土礎頭形に積んで構築したのち、四周を切り出して外装材を据える工法を探り、版築は認められない。基壇土は室町時代以降に一度積み足されていることもあきらかとなった。基壇外装の一部が残存し、地覆石およびその抜取痕跡は認められず、羽目石が直接地上に据えられ、その上面高は据付溝底面で調整していることがわかった。基壇規模は南北14.5m、東西11.1mである。基壇周囲に雨落溝がない点も経藏と同じである。また、中金堂側には階段がなく、西室側にあたる基壇西面に2時期分の階段痕跡を検出した。

経藏と大きく異なる点として、鐘楼では基壇上の縁辺部から約30cm内側を長方形にめぐる幅約40cmの素掘溝を



図110 鐘塔基壇上の袴腰地盤石抜取溝
(第625次、北から、2020年)

確認した。この溝は、室町時代以降の積み足し基壇土が削平された箇所で検出したもので、規模は南北13.4m、東西10.1mである。埋土には破碎した凝灰岩片が含まれており、「春日権現駿記絵」(14世紀初頭)等の絵画資料にみるような鐘楼下層を覆う袴腰の地覆石を抜き取った溝と考えられる(図110)。

『興福寺流記』には鐘楼の規模について大小二つの記載があり、一つは経蔵と同規模(桁行34尺、梁行22尺)とするが、「弘仁記」には桁行46尺、梁行35.3尺とあり、「宝字記」も同様と記す。袴腰地覆石抜取溝の規模はこれらの数値と近似することから、「弘仁記」や「宝字記」に記載された鐘楼の規模は袴腰下端の平面規模を記したものとの解釈できる。また、このことは、興福寺の鐘楼が袴腰を備えた時期も、奈良時代にさかのばる可能性を示唆する点で特筆すべき成果といえる。

また、基壇北側では東西方向の石組溝を検出し、さらにその北側には幅1.3m以上の玉石敷を検出した。経蔵周辺で検出したものと同規格で、左右対称に配されていることを確認することができた。

東金堂院 東金堂院は中金堂院の南東に位置し、「興福寺流記」では「東佛殿院」と称される。西面・北面は回廊、南面は築地塀で区画され、その中に東金堂と五重塔が配され、それぞれの西正面の位置には門の存在が推定されていた。2020年度(第625次)では五重塔前の門推定地を、2021年度(第640次)では東金堂前の門推定地を中心にして発掘調査をおこなった。

東金堂の西正面に聞く門は大きく削平をうけ礎石は残



図111 南面築地塀の調査でみつかった礎石や石組溝
(第625次、北東から、2020年)

存しないが、礎石据付穴・抜取穴を8基検出し、門の存在を確認した。桁行3間、梁行2間の礎石建ちの八脚門と推定される(口絵)。

この門と回廊は改修されており、創建当初の様相は判然としない。門の北側に接続する回廊の地覆石抜取溝直下の整地土は焼土を多く含み、そこから出土する土器・瓦の年代からみて治承4年(1180)の火災にともなう整地と考えられる。よって、この地覆石は鎌倉時代初頭の再建にともなうものと推定できる。治承の焼討後の再建と特定できたのは、2021年度(第640次)の調査が初めてである。さらに、これらの下層に創建時の基壇外装や雨落溝と考えられる遺構を検出した。

五重塔の西正面に聞く門も、中世の改修と廃絶後の削平によって創建時の姿は判然としない。礎石も残存しないが、礎石据付穴なし抜取穴を7基検出し、かろうじて桁行3間、梁行2間の礎石建ちの八脚門と推定できた。

一方、東金堂院の南面については、寺域の南面にもあたるため、築地塀と推定してきた。

2020年度の調査(第625次)では、東金堂院西南隅部の南面築地塀と西面回廊との接続部分を調査し、凝灰岩切石の石組溝が残存していることや、礎石などを確認した(図111)。西面回廊との接続の様相は明確でない。南面築地塀については、さらに2021年度(第640次)、東側に小規模なトレンチを設定し、築地の積み土や、寄柱または塀板を押さえるためとみられる柱穴などを検出した。出土遺物などから、南面築地塀は大きく位置をずらすことなく、複数回の改修が重ねられたことが明らかになった。

2) 薬師寺の調査

(紀要2014~2016・2021)

—第500・519・536・554・622次

概要 薬師寺は和銅3年(710)の平城遷都にともなって平城京右京六条二坊に寺地を移し、現代まで法灯を受け継いでいる南都を代表する古刹である。

法相宗大本山薬師寺では、長らく堂塔の復興を進めてきたが、2011年度からは薬師寺旧境内保存整備計画にもとづいて、寺觀の整備を進めることとなり、委託を受けた奈文研が発掘調査をおこなってきた(図112)。この10年の発掘調査としては、2012年度の食堂(第500次)、2013年度の十字廊(第519次)がある。

また、東塔は、薬師寺が奈良時代に平城京へ移されてから現在まで伝わる貴重な建造物として、国宝に指定されている。2009年度より開始した保存修理事業に際して、2014年度から発掘調査(第536・554・622次・奈良県立橿原考古学研究所との共同調査)をおこなった(口絵)。

食堂 これまで4回にわたり部分的な発掘調査(1969年度の第62-3次、1970年度の第62-14-69-3次、1974年度の第88-21次)をおこなっており、桁行11間、梁行4間の基礎建物であることが判明していた。食堂の再建事業に先立ち、全体の発掘調査をおこなった(第500次)。

調査の結果、基壇上の礎石はすべて抜き取られていたものの、礎石の据え付けのための壇地業を確認し、抜取穴を検出した。建物規模は伽藍中軸線と階段との関係などから、桁行41.4m、梁行16.0mの復元案A、桁行40.7m、梁行16.0mの復元案Bの2案が想定されるが、いずれにしても、これまで発掘調査で確認されている全国の食堂遺構では最大となる。

基壇は版築を用いて造成され(口絵)、東西47.1m、南北21.6mの規模である。基壇外装の地覆石を、南面、北面西部、西面中央部で検出した。また、南面3カ所で階段を確認したほか、基壇外周では石敷や雨落溝を検出した。

基壇版築や壇地業から出土した土器や瓦の年代はいずれも8世紀前半のもので、食堂は遅くとも奈良時代前半には造営が開始されたと考えられる。また、天孫4年(973)の火災後には清掃がなされ、寛弘2年(1005)に再建された食堂は、創建時の礎石位置を踏襲して建てられたとみられる。

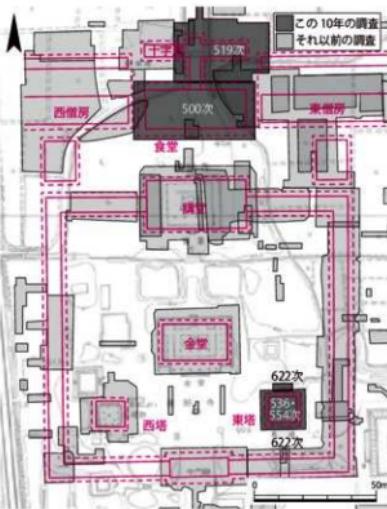


図112 薬師寺境内のこの10年の発掘調査 1:2000

食堂造営前の遺構として、基壇版築下層から、掘立柱列、石敷、石列を検出し、造営前に何らかの施設が存在していたことも明らかになった。さらに雨落溝、石敷の上で検出した瓦溜、および基壇を壊す土坑出土の遺物より、食堂の廃絶は12世紀頃であることも判明した。

十字廊 十字廊は食堂の北方に位置し、食堂に付帯する機能をもつ建物とみられる。1977年度の発掘調査では、十字形の平面のうち東西に長い東西廊、西半の桁行4間、梁行1間分と、南北に長い南北廊の西側柱1間分の礎石据付痕跡を検出していたが、十字廊の遺構かどうかなど、その性格はよくわかっていないかった。

調査の結果(第519次)、基壇上の礎石は遺存していないが、据付痕跡を21ヶ所で検出した。建物は、東西廊が桁行11間、梁行1間、南北廊が桁行4間以上、梁行1間であることが判明した。建物規模は、東西41.7m、南北14.5m以上と推定される。これは東西廊については「薬師寺縁起」に記された規模におよそ一致する。

基壇規模は東西44.4m(150尺)、南北約21m(70尺)を測り、地山上や、地山を掘り込んだ面の上に、周辺と一体的に整地し、版築により積み上げる。基壇外装は地覆石を置かず、羽目石を据え、その後あるいはそれと同時に素掘



図113 薬師寺十字廊南北庭の基壇と基壇外装
(第519次、南側から、2014年)

り（東西廊より北側）、ないし石組の雨落溝（東西廊より南側）が敷設されていた（図113）。

造営年代は出土遺物の様相や層位関係から、奈良時代後半とみられることも明らかとなった。また、基壇を壊す土坑群より10世紀後半から11世紀の土器が炭化材とともに出土していることから、天祐4年（973）の火災によって廃絶したとみられる。

東塔 保存修理事業に際して創建当初の基壇規模や構造、材料などを調査し、基壇外装の旧状の確認および後世の改変履歴などの変遷を解明することを目的として、建物の解体後に発掘調査をおこなった（第536・554次）。また、不等沈下が著しい礎石の沈下原因を解明し、修理方法についての検討材料をえることも重要な課題と位置付けられた。

調査の結果、基壇上の礎石については、心礎を含め、いずれも創建時の位置を保っていることを確認した（口絵）。一方で、表階柱礎石は、いずれも据え直した痕跡を確認した。明治修理に伴うものとみられる。

基壇外装は、発掘調査前の基壇を含めると、古代（創建時）、近世前期（寛永・正保修理時）、近代（明治修理時）の3時期分を確認した（図114）。創建時の基壇外装は花崗岩を主とした地覆石と凝灰岩羽目石などからなる切石積基壇で、平面規模は約13.4mの正方形で、高さは1.3m程度と考えられる。古い基壇を覆うように新しい基壇が構築されており、寛永・正保修理時には乱石積基壇に、明治修理時には一辺14.6～14.7m、高さ0.75mの花崗岩切石の埴正積基壇に改められた。

創建当初の基壇造成に関わる知見として、版築にとも



図114 薬師寺東塔創建時の基壇外装と版築
(第536次、北西から、2015年)

なう突棒痕跡や礎石据付穴の掘削跡とみられる工具痕、加えて創建時と推定される基壇版築の西・南・北の各面の縁辺部で検出した半截された足場や杭の遺構などを検出した。とくに、上述の半截された足場からは現状の基壇より平面で1m以上大きく版築して造成したのち、縁辺部を削り落として整形したことが明らかになり、古代寺院の基壇築成工法に関する重要な知見を得ることができた。

周辺の地質調査の成果を加味すると、基壇造営以前は氾濫原であった地形を利用していることや、掘込地業をおこなった後に工事を一時中断する時期があることなどが明らかとなった。基壇築成前後の詳細な過程を発掘調査で確認した点で、大きな成果をあげたといえる。さらに、基壇築成にともなう地鎮供養に関わる遺物として、掘込地業から和同開珎が出土した点は特筆される。天平2年（730）とされる東塔の創建に、このような容器をともなわない錢貨を用いた地鎮をおこなう例としては、最古の資料である。

基壇上の側柱礎石の不等沈下の原因について、とくに西側に展開する砂利層中の水の挙動が顕著であることを確認した。それによって掘込地業内の砂利層および粘質土層が圧密をおこし、その影響が上部の基壇版築および、結果として西側柱列の礎石の不等沈下を引き起こしたと考えられる。そのほか、基壇上や基壇外周で修理時の足場や杭の遺構を検出し、東塔修理履歴の知見もえることができた。また、東塔の修理が終了した2020年度には、北面と南面の階段部分について、追加で発掘調査をおこない（第622次）、一連の調査を完了した。

3) 東大寺の調査

(紀要2013・2016~2021)

一第492・550・574・589・600・617次

概要 東大寺境内の発掘調査について、この10年は建造物の修理や境内整備に関わる案件について、埋蔵文化財センターによる探査や奈文研も加わっての発掘調査をおこなってきた。2012年には、国宝法華堂の須弥壇解体修理にともなう発掘調査を奈良県立橿原考古学研究所（橿考研）と合同で実施した。

2013年、宗教法人東大寺では「東大寺境内整備基本構想」を策定し、翌年度から「境内史跡整備第1期計画事業」を開始した。東大寺東塔院跡の発掘調査（図115）はその一環として、鈴木嘉吉元奈文研所長を团长とする発掘調査団を組織し、東大寺・橿考研および奈文研の3者合同での調査を5ヵ年にわたり実施した。

法華堂 法華堂は東大寺境内で唯一残存する奈良時代の仏堂であり、国宝に指定されている。2012年度に、その須弥壇解体修理にともなう発掘調査を、橿考研と奈文研が合同でおこなった（第492次）。基壇の断面調査では東大寺の創建に関わる成果が期待された。前身寺院に関わる知見はえられなかったものの、発掘調査とGPR探査の成果から、基壇を構築が奈良時代中頃とみられることや、地山を削り出した上に盛土をおこなって基壇を構築していることなどがあきらかとなった。

東塔院 往時、東大寺は大仏殿院の南東・南西に2基の巨大な七重塔を擁し（東塔・西塔）、それぞれを回廊で囲んで塔院を構成していた。いずれも奈良時代後半に造営されたが、西塔は平安時代中期に落雷によって回廊もろとも焼失した。

東塔は平安時代を通じて存続したが、治承4年（1180）、平重衡による南都焼討で他の堂宇とともに灰燼に帰した。回廊については明証を欠くが、仮にこの時まで存続していたとしたら焼失を免れなかつたであろう。

その後、東塔は貞応2年（1223）に「九輪」（=相輪）を上げたとの記録があり、また「東塔廊瓦嘉禄三年造之」銘（嘉禄3年は安貞元年、1227）をもつ軒平瓦が出土したことなどから、東塔院はこの頃復興したとみられる。

この再建東塔も康安2年（1362）に雷火により再び焼失し、その後は復興ならず、現地には塔基壇が巨大な高まりと

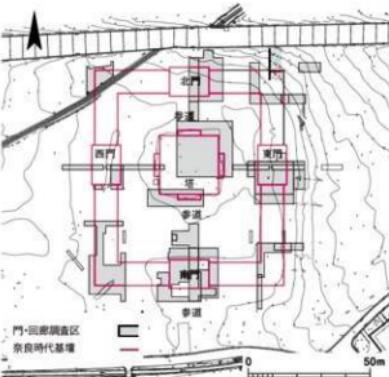


図115 東大寺東塔院の調査区 1:2000

なって残るのみであった。このように、東塔・回廊とも、奈良時代創建と鎌倉時代再建の2時期の建築が存在したこととなる。

2015年度の調査（第550次）では、塔基壇中央から東・北裾部にかけて、回廊北門付近、回廊東南隅付近の3ヵ所にトレチを設定した。2016年度の調査（第574次）では、塔基壇中央から東・北裾部にかけてのトレチを再発掘するとともに、新たに塔基壇南辺中央付近から西南隅付近にかけてのトレチを設定し、再建塔の追究と創建塔の実態解明を目指した。2017年度の調査（第589次）では、東塔院南門のはば全城と南面回廊の一部を含むトレチを設定して調査をおこない、再建南門の規模や構造を解明した（図117）。さらに、2018年度の調査（第600次）では、南門の一部、東門の南半、および回廊の四隅付近に、計



図116 創建塔北面階段東半（第574次、北から、2016年）



図117 東大寺東塔院南門（第589次、西から、2017年）

7カ所のトレンチを設けた。2019年度の調査（第617次）は東門の南半と東面回廊（図117）、北門の東半と北面回廊、西門・西面回廊の一部、および回廊東北隅付近に計7カ所のトレンチを設けた。

東塔 創建塔については再建塔基壇の内部に凝灰岩製の基壇外装（延石・地覆石・羽目石・東石）が良好な状態で遺存していることを確認し、壇正積基壇であったことが判明した（口絵）。規模は約24.2m（82尺）四方に復元できる。

東面および北面では、凝灰岩製の階段の構築材（踏石・東石・羽目石・地覆石・延石）を検出した。階段幅は約9.2m（32尺）と広く、特に北面階段ではそれを3分割する仕切石の痕跡も確認した（図116）。塔初重の中央3間分に対応したものと想定できる。再建時の削平により礎石に関わる痕跡は遺存していなかったが、階段の構造などから、創建塔の初重平面は5間（計52尺、中央間12尺、他は10尺等間）四方と推定した。

再建塔の基壇は、創建塔のものより一回り大きく、それをすっぽりと覆っていた。凝灰岩製の延石列が比較的良好に遺存し、基壇規模は約27.0m（90尺）四方に復元できる。基壇上面では礎石抜取穴を検出し、その配置から初重平面は3間（計56尺、中央間20尺、他は18尺）四方と推定した。礎石抜取穴の下部では、礎石据付の工法の一端を示す環状の石列も確認した。総じて、鎌倉時代再建時には創建塔のあり方に捉われず、まったく異なる構造の建物が造営されたと考えられる。

この他、創建塔・再建塔それぞれにともなう基壇外周



図118 東大寺東塔院回廊の東北隅（第600次、南西から、2014年）

の石敷なども検出した。

回廊・門 創建回廊の基壇は、東半では地山を削り出した上に、西半では整地土上に、それぞれ盛土を施して構築していた。門・回廊ともに礎石の据付穴・抜取穴などを検出し、門は四面とも同規模で桁行3間、梁行2間の八脚門、回廊は四面とも複廊に復元できる。東塔院の全体規模は東西約74.0m（251尺）、南北約84.7m（287尺）と推定した。

再建にあたり、南門が創建建物の位置・規模・構造をほぼ踏襲するのに対し、他の三門は規模を若干縮小し、また棟通り中央の2本の柱を持たないやや特異な構造であったことが判明した。回廊も、南面は創建建物とはほぼ同規模の複廊であったのに対し、他の三面は創建基壇を切り縮めるなどして単廊に改められていた。七重塔と同じく、創建建物とは構造等が大きく異なる建物が造営されたことが明らかになった。院の全体規模は東西約73.8m（246尺）、南北85.5m（285尺）と推定した。

それぞれについて創建・再建両期の遺構を検出し、建物や基壇の規模および構造、さらに周辺遺構についての情報をえた。ここから、再建期の大変な変容の様相などをより具体的に明らかにした。回廊東北隅部では地山の切土痕跡を確認し、造営時の平場形成の様相など、東塔院地区の土地利用に関わる知見をえた（図118）。

一方、これらの発調査成果にもとづき、東大寺からの委託による東塔の復元検討（本書80頁）や、東大寺による東塔院跡の史跡整備事業が進められている。

7. 都城発掘調査部 調査成果の活用等

(1) 平城宮・京 復元CG動画作成

奈文研では一般の方々に遺跡を理解してもらうため、発掘調査で判明した平城宮の諸施設の原寸大復元や半立体復元、石材を用いた基壇復元や植栽による遺構表示など、さまざまな方法で遺跡の整備をおこなってきた。

しかし、いずれの方法でも奈良時代の平城宮・京の景観を再現するのには限界がある。そこで都城発掘調査部平城地区では平城宮・京の往時の姿を視覚的に表現したコンピュータグラフィックス(CG)の作成を手がけてきた(図119)。2020年度には文化庁の文化財多言語解説整備事業の国庫補助を受け、このCGを日本語・英語・中国語・韓国語の4カ国語の字幕・音声解説付きの「平城京のまちなみ紹介」および「平城宮へのご招待」という動画(各約7分)にまとめた。

復元のベースとしたのは1978年に奈良市が製作した平城京の復元模型の製作記録である。しかし、その後の研

究の進展により修正すべき部分も少なくなかった。そのため、部内にプロジェクトチームを組織、CGに盛り込むべき内容について検討した。

平城京については、膨大な発掘調査成果の蓄積の全てを、短時間で集約するのは困難であった。そのため、京内の寺院や主要な貴族邸宅を中心に、諸施設の規模・配置を現在までの発掘調査や研究の成果にもとづき修正した。

平城宮については、近年発掘調査の進展が著しい東方官衙地区ならびに東院地区を中心に発掘調査成果を整理し、諸施設の規模・配置・建物の構造などを再検討した。各施設の建物の配置も可能な限り検討した。第一次および第二次大極殿院、朱雀門、内裏正殿周辺、東院庭園など、既存の復元研究がある施設は、その成果にもとづいた。未調査の施設は、奈良市の復元模型の製作記録を参考に、時に大胆な想像を加えた。

こうして、復元CG動画は2021年3月に完成した。奈文研において、平城宮や平城京の全体を視覚的に復元し、多言語解説を付した初めてのコンテンツとなった。現在、平城宮跡資料館や、奈文研のYouTubeチャンネル「なぶんけんチャンネル」において公開している。



図119 CGで復元された平城宮東院

(2) 平城宮第一次大極殿院・東大寺東塔の復元研究

1) 平城宮第一次大極殿院の復原研究

平城宮跡は2008年に国土交通省管轄の国営公園となり、同時に策定された基本計画にもとづき整備が進められている。奈文研は、2010年より国土交通省国営飛鳥歴史公園事務所から委託をうけ、都城発掘調査部遺構研究室が事務局となり、全所的な体制で、第一次大極殿院の復原研究をおこなってきた。

2021年までに計85回の所内検討会を重ね、建物の構造形式のはか、細部の構造・意匠などに関する復原研究を推進してきた。これまでいくつかの復原案を再検討し、最新の発掘調査成果などを加味し、2013年には、以下の復原原案を提示した。

第一次大極殿院 東西176.6m、南北317.7mを築地回廊で囲む。南面中央には南門（後の検討で「大極門」）の扁額を掲げる）、それを挟んで東西対称に東樓・西楼を配し、東・西面には各3棟の小門を建てる。北面中央には北門のみ。後殿の存在は推定されるが、復原対象から外す。

大極門（南門） 碓石建ち、5間3戸二重門、入母屋造、本瓦葺、組物は三手先。

東樓・西樓 側柱は掘立柱、内部柱は礎石建ち、桁行5間、梁行3間、側柱のみ通柱による樓造。寄棟造、本瓦葺、組物は平三斗。

築地回廊 梁行2間の複廊、棟通りは築地解、本瓦葺。

この成果にもとづき、2014年度には国土交通省が200分の1の復原整備模型を製作した。その後は、細部の構造・意匠を詰め、古代の技法を用いた建築飾金具の意匠と製作技法、東樓の寄棟屋根の鶴尾の納まり、扁額の意匠と取付方法などを検討した。並行して、これまでの研究成果をまとめた研究報告書を作成している。

近年は、復原工事の進捗により生じた課題にも随時対応し、復原研究の精度を高めるとともに、その成果を工事内容に還元している。また、写真室の協力を得て工事写真的撮影をおこなっている。大極門（南門）の復原工事は2017年11月より着工し、2022年3月に竣工した（口絵）。つづいて、2022年4月からは東樓の復原工事が始まっている。

2) 東大寺東塔の復元研究

東大寺では「東大寺境内整備基本構想」にもとづき、伽藍の復元・整備を進めており、東塔跡の発掘調査では、奈良時代創建期と鎌倉時代再建期の2時期の遺構などを検出した（78頁）。その成果などをふまえて東大寺は東塔の復元事業に着手し、復元研究を奈文研へ委託した。奈文研ではこれを受け、2018年から上部構造の復元研究を進めてきた。検討は都城発掘調査部遺構研究室を中心に、所内他部署の協力を得て推進した。2021年度までに計20回の所内検討会を開催し、東大寺が組織した外部有識者を中心とする「東大寺東塔建築復元検討委員会」に計7回講評、指導・助言を得た。今後、この検討成果をまとめた報告書を作成する計画である。

東大寺の東西両塔は七重塔で、奈良時代に創建された。東塔は、南都焼討（1180）の焼失まで存続した初代の「天平塔」と、鎌倉時代に大勘進の重源や荣西らによって再建され、1362年の落雷による焼失まで存続した二代目の「鎌倉塔」、2時期の造営があった。

天平塔 発掘調査成果や文献史料などの検討から、初重方5間、七重塔、本瓦葺とした。高さは文献史料の解釈から、全高を約33丈（100m）、約31丈（90m）、約23丈（70m）とみる3案があったが、今回は全高を約23丈とみる案とした。復元案では、軒支輪・実肘木付き三手先組物、二軒地円飛角で、塔身の組上げ構法は側1間を積重、それ以外の内部の柱を長柱とする併用構法とした。相輪は、文献史料から高さ882尺（約26m）とし、形式や装飾は薬師寺東塔などを参考とした。相輪の支持方法などから七重を方3間とし、ここから各重の柱間数を割り付けた。そのほか、各重の高さ、組物の手先間隔、軒の出や一部の部材寸法も上重で通減させる。

鎌倉塔 発掘調査成果や文献史料などの検討から、初重方3間、七重塔、本瓦葺で、全高は32丈（96m）とした。再建の経緯から、重源と荣西それぞれの構想を想定した。東大寺南大門（大仏様）などを参考とした「重源案」、東大寺鐘楼（禅宗様）などを参考とした「榮西案」の2案を検討し、復元図を作成した。

上記の平城宮第一次大極殿院と東大寺東塔の復元研究における復元図・検討図の作成には、公益財團法人文化財建造物保存技術協会の全面的な協力を得た。

(3) 国内研究拠点・研究会

1) 本筋の国内多機関連携体制の構築

現在、日本全国の出土木簡は約47万点ほどであり、奈文研はそのうちの約31万点を保管・管理する国内最大の木簡保管・管理機関である。こうしたこともあり、奈文研は、木簡を中心とする出土文字資料の研究拠点としての役割を果たしてきた。

近年、多様な資料の研究資源化（デジタル化・公開等）の重要性が高まる中、国内の拠点の機関がその特性を活かして役割分担をおこないつつ、相互協力体制を構築して研究資源化を促進することが、大きな潮流となっている。奈文研も拠点間の交流や共同研究を強化してきた。

東京大学史料編纂所（紙媒体の史資料）、国立国文学研究所（文学作品）と、出土文字資料を担当する機関として研究協力の協定を締結し（史料編纂所とは2009年、国文研とは2021年）、出土文字資料関連の研究データを蓄積する法政大学国際日本学研究所とも共同研究の協定を締結した（2017年）。また、文字関連資料の研究資源化に関する基礎的研究をおこなう国立国語研究所・京都大学人文科学研究所とも共同研究も実施している。さらに、奈文研を含めた上記国内4機関に台湾の中央研究院を加えた5機関で文字資料の公開に関する宣言と、宣言実現のための基礎的な技術仕様を公開した。これらの成果の一端は、「歴史的文書データベース連携検索システム」として公開している。

今日、日本の人文学研究において、機関間の共同・連携・分担は欠かせない。文部科学省「学術研究の大型プロジェクトの推進に関する基本構想ロードマップ」策定



図120 第25回古代官衙・集落研究集会の様子（2021年）

「ロードマップ2020-」に採択された国文研を中核とする研究課題「データ駆動による課題解決型人文学の創成」にも奈文研が参画する計画となっているように、奈文研の出土文字資料分野における国内中核研究拠点としての責任と期待は、ますます高まっている。

2) 古代官衙・集落研究集会

奈文研では全国の埋蔵文化財に関する基盤的な調査研究の一環として古代官衙・集落研究会を組織し、官衙・集落遺跡に関する研究集会の開催や古代官衙・寺院遺跡データベースの作成と公開を進めている。特に、古代官衙・集落研究集会は、都城発掘調査部をはじめ企画調整部・埋蔵文化財センターの研究員が連携して事務局を組織し、企画・運営をおこなってきた。

この研究集会では官衙・集落遺跡の遺構や遺物から一つのテーマを取り上げ、さまざまな角度から掘り下げている。この10年で取り上げたテーマは、表11のとおり。いずれも古代都城や古代国家形成過程に関するテーマであり、全国の埋蔵文化財担当者や研究教育機関などから、

表11 古代官衙・集落研究集会一覧

年度	開催テーマ	開催日時	参加人数
平成24年（2012）	第16回 塩の生産・流通と官衙・集落	平成24年（2012）12月7・8日	124名
平成25年（2013）	第17回 長舎と官衙の建物配置	平成25年（2013）12月13・14日	137名
平成26年（2014）	第18回 宮都・官衙と土器（官衙・集落と土器1）	平成26年（2014）12月12・13日	148名
平成27年（2015）	第19回 宮都・官衙・集落と土器（官衙・集落と土器2）	平成27年（2015）12月11・12日	149名
平成28年（2016）	第20回 都城の空間構成	平成28年（2016）12月9・10日	138名
平成29年（2017）	第21回 地方官衙政府域の変遷と特質	平成29年（2017）12月8・9日	144名
平成30年（2018）	第22回 官衙・集落と大廈	平成30年（2018）12月7・8日	110名
令和元年（2019）	第23回 灯明組と官衙・集落・寺院	令和元年（2019）12月13・14日	115名
令和2年（2020）	第24回 古代集落の構造と変遷（古代集落を考える1）	令和2年（2020）12月12日	126名
令和3年（2021）	第25回 古代集落の構造と変遷2（古代集落を考える2）	令和3年（2021）12月17・18日	125名

毎年平均して約130名が参加し、学術交流を深めてきた（図120）。官衙・集落遺跡を基軸にさまざまなテーマを共有することによって、全国の官衙・集落遺跡に対する理解や問題意識が深化し、各遺跡の研究および保護活用への関心を惹起するなどの好循環が生まれている。

さらに、これらの成果は次年度に奈文研研究報告シリーズとして着実に刊行を重ねてきた。当研究集会は古代都城をフィールドとする奈文研の調査研究の成果を全国の埋蔵文化財保護へと繋げる重要な役割を担っており、今後も適切なテーマ設定による質の高い研究集会の開催に努めていきたい。

3)古代瓦研究会

古代瓦研究会では、この10年、奈良時代の瓦を中心とした研究課題を取り上げ、毎年、奈文研にて研究集会を実施してきた。例年、全国から100名前後の埋蔵文化財担当者、大学等の研究者が集まり、発表者の協力のもと、各地の出土資料を実際にみながり2日間にわたり、検討を進めてきた。この10年の研究のテーマは表12のとおりで、奈良時代の瓦については、一通りの様相が把握できたといえる。また、これら研究会の成果にもとづく報告書を6冊刊行してきた。

今後は平安時代の瓦壇について検討を進めていく予定である。

4)飛鳥土器編年の再検討

2013年以来、考古第二研究室では石神遺跡出土土器の整理を継続しており、その成果は「紀要」において逐次報告している。ことに石神遺跡の南北大溝SD640や、B

期整地土出土土器など、7世紀後半（飛鳥IV）の新資料が急増し、研究室内でも飛鳥・藤原地区における7世紀の土器編年（飛鳥編年）を再考する機運が高まってきた。そこで、「飛鳥時代の土器編年再考」シンポジウムの開催を企画することとなり、その地均しのために上記資料の概要報告をおこなった（「紀要2018」）。同じ頃、坂田寺SG100出土土器（飛鳥II）の全貌も明らかとなっている。シンポジウムの条件整備には、およそ2年を要した。

「飛鳥時代の土器編年再考」シンポジウムは、歴史土器研究会との共催として、令和元年（2019）7月13日・14日に開催し、約250名の参加があった。その焦点は、飛鳥IからVという5期区分編年の骨格は継承しつつも、土器様相としての「飛鳥II」から「同IV」までの時間的な重複がある程度想定する、ということであった。例えば「飛鳥II」的な土器群と、「飛鳥IV」の土器群とが、7世紀後半に併存していた可能性を認める、ということである。

参加者に聞いたかったのは、飛鳥淨御原宮における土器群の多様性をどのように解釈するか、であった。7世紀後半の土器様相は、土器様式の転換期であることとも相俟ってじつに多様であるが、それゆえに土器群の様相差を時間差に読み替えることが多かったといえる。ところがそのちがいは時間差だけではなく、例えば階層差や、須恵器の産地構成などにも起因しているのではないか、というのが、シンポジウムを通じての主張ということになろう。参加者の受け止め方はさまざまであろうが、その「再考」は土器編年にかぎらず、方法論や土器群の見方にもおよぶんだ。

表12 古代瓦研究会一覧

年度	開催テーマ	開催日	参加人数
平成24年（2012）	第13回 「8世紀の瓦づくりⅡ 重圓文系軒瓦の展開」	平成25年（2013）2月2・3日	145名
平成25年（2013）	第14回 「8世紀の瓦づくりⅢ 平城宮式軒瓦の展開Ⅰ 6225-6663系」	平成26年（2014）2月8・9日	132名
平成26年（2014）	第15回 「8世紀の瓦づくりⅣ 平城宮式軒瓦の展開Ⅱ 6282-6721系」	平成27年（2015）2月14・15日	107名
平成27年（2015）	第16回 「8世紀の瓦づくりⅤ 東大寺式軒瓦の展開」	平成28年（2016）2月6・7日	105名
平成28年（2016）	第17回 「8世紀の瓦づくりⅥ 飛雲文軒瓦の展開」	平成29年（2017）2月4・5日	118名
平成29年（2017）	第18回 「8世紀の瓦づくりⅦ 一本づくり・一枚づくりの展開Ⅰ」	平成30年（2018）2月3・4日	141名
平成30年（2018）	第19回 「8世紀の瓦づくりⅧ 一本づくり・一枚づくりの展開Ⅱ」	平成31年（2019）2月2・3日	113名
令和元年（2019）	第20回 「縄尾・鬼瓦の展開Ⅰ 縄尾」	令和2年（2020）2月1・2日	136名
令和2年（2021）	第21回 「縄尾・鬼瓦の展開Ⅱ 鬼瓦」	令和3年（2022）2月5・6日	107名

(4) 海外との共同研究

1) 中国社会科学院考古研究所との共同調査

奈文研と中国社会科学院考古研究所は、日中古代都城の比較研究を通して、日本古代都城の形成と発展過程を理解するために、1996年より共同研究を継続している。2007～2011年度には、河南省洛陽市の北魏洛陽宮城の共同発掘調査を実施した。

この10年は、とくに出土物の整理および調査研究を継続的におこなった(図121)。出土品のうちもっとも量の多い瓦壇類を中心に調査研究を進め、日中の古代都城で用いられた瓦壇類の研究が大きく進展するとともに、日中研究者間の学術交流を深めることができた。これらの成果は中国側が出版する報告書に掲載予定である。

また、同遺跡を研究する過程での類例調査研究も、この10年で大きく進展した。具体的には、河北省北朝鄆城、陝西省唐長安城、黒龍江省渤海京龍泉府、同省金上京遺跡、内蒙自治区遼上京遺跡、ベトナムタンロン城の遺跡等の踏査をおこなった。また、北朝鄆城宮城、唐長安城大明宮、タンロン城から出土した瓦壇類についても、資料調査を蓄積している。

相互の研究交流については、2014年8月に中国社会科



図121 中国社会科学院での北魏洛陽宮白出土瓦壇の調査(2016年度)

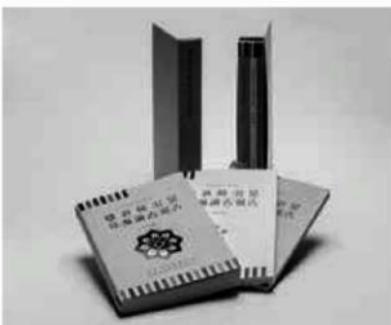


図122 2020-2021年度刊行の日本語版「鞏義黃冶窯発掘調査報告」

学院考古研究所が主催するシンポジウム「東亞古代都城及鄆城考古・歴史国際学術研究会」にて今井見樹が平城宮・京の発掘成果の発表をおこなったほか、2016年1月には中国社会科学院考古研究所の錢國祥氏を奈文研に招聘し、北魏洛陽宮城の発掘成果についての報告会を実施した。

2017年度は第5期となる新たな共同研究講定書を締結し、共同研究の継続を確認するとともに、両研究所の研究員を相互に派遣して学術交流を実施することとなった。2018・2019年度には研究員を相互に1ヶ月ほど派遣し、発掘調査や研究報告会を通して学術交流を深めた。

2) 河南省文物考古研究院との共同研究

中国河南省は屈指の窯業生産地として知られ、歴代の多数の窯跡が存在する。なかでも鞏義市に所在する黄冶窯・白河窯は、精美な唐三彩を焼成した窯跡であることが知られている。唐三彩は日本にも将米されていることから注目されてきた。奈文研は、その重要性に鑑み、2000年度より河南省文物考古研究院(2013年3月までは河南省文物考古研究所)と共同研究を積み重ねてきた。

この10年間は、第3・4期として、双方の研究者が往訪し、唐三彩や関連する資料の調査を進めてきた。共同研究をおこなってきた黄冶窯が大安寺など日本の遺跡から出土する陶枕の有力な生産地と一つであることが確認されたことや、唐三彩のみならず唐代の瓷器生産の実態があきらかにされたことは、考古資料から読み解く日中交流の幅を大きく広げたといえる。

2016年度には、黄冶窯の発掘調査報告書である『鞏義

「黄治窯」を中国の科学出版社より刊行し、その日本語版である『鞏義黄治窯発掘調査報告』を2020・2021年度に共同で刊行した（図122）。また、白河窯についても、発掘調査概要と関連論文を所収した『河南省鞏義市白河窯跡の発掘調査概報』も2012年度に刊行し、現在は報告書に向けた整理作業と共同研究を進めているところである。2020年度以降は、新型コロナウィルス感染症拡大防止のため、双方の往来は控えているものの、2022年度には唐三彩をテーマにした国際学会「唐三彩学術研討会」（河南省文物考古研究院が主催）が鄭州で開かれ、日本側からはオンラインで4本の講演をおこなった。

3) 遼寧省文物考古研究院との共同研究

奈文研と遼寧省文物考古研究院は、1996年度に協定書「東アジアにおける古代都城遺跡と保存に関する研究」を締結して以来、継続的に共同研究事業に取り組んでいる。この間、「三燕文物の調査研究」（1998～2001年度）、「3～6世紀日中古代遺跡出土遺物の比較研究」（2002～2005年度）、「朝陽地区隋唐墓の整理と研究」（2006～2010年度）を遂行してきた。

2011～2015年度には、第4期目の共同研究として「遼西地域の東晉十六国期都城文化の研究」を実施した。初期慕容鮮卑の墓地と目される大板營子墓地、整然と並ぶ瓦葺基壇建物が検出された金嶺寺遺跡を取り上げ、出土遺物の詳細な分析に取り組むとともに、両遺跡の性格をめぐって日中で議論を交わした。その成果は、論文集『遼西地区東晋十六国时期都城文化研究』として2017年度に中国側で先行して刊行された。これを翻訳し、中国側論文の原文とともに掲載した日本側論文集を『東アジア考古学論叢Ⅱ』として2019年度に刊行した。



図123 遼寧省朝陽博物館での三燕土器の三次元計測（2016年度）

2017年度からは、第5期目の共同研究として、「三燕文化出土遺物の研究」に着手し（図123）、本共同研究開始の契機となった喇嘛洞墓地の出土金属製品をはじめ、三燕文化の標識資料をあらためて悉皆的に調査することに取り組んできた。しかし、計画の最終年度にあたる2020年度に新型コロナウィルス感染症が拡大した影響により、現在、双方の往来を中断している。

4) 東アジアの本簡研究

本簡（中国では「簡牘」）は、貴重な文字資料として高く評価されている。特に近年、中国での簡牘出土事例の爆発的増加・韓国での出土事例の積み重ね・台湾での研究の深化などを背景に、東アジア地域本簡（簡牘）の相互比較研究が勃興しつつある。こうした中、日本における本簡の調査・研究の中心拠点として、海外諸機関からの奈文研への注目・期待は大きく高まっている。

史料体に即した調査・研究能力 - ①本簡現物の取り扱い（発掘調査での取り上げ方法から整理・保存・保管）、②現物資料調査方法のノウハウ（写真撮影方法やデジタル技術も含めた記録作成方法）、③情報公開（データベース群の開発・公開と維持・管理）、④「現物資料」としての総合研究（遺跡・共伴遺物や加工・図像としての文字分析などを含めた総合的な研究手法）といった点で、日本国内で最高の水準と評価されるのみならず、東アジア圏全体の中でも高く評価されている。

東アジア圏では、従来「テキスト」優先で研究が進む傾向にあったが、出土事例の増加を通じて、史料体に即した研究の必要性が認識されるようになり、奈文研のもつ調査・研究能力が改めて高く評価され、期待されるようになったのである。

こうした中、共同研究の協定を、2016年に台湾の中央研究院歴史語言研究所と、2021年に韓国の慶北大学校人文研究院（HKプロジェクト）と、2022年に中国社会科学院歴史研究院古代史研究所と締結した。

そして、「居延漢簡」シリーズに奈文研が協力して撮影した赤外線画像が所収されたほか、漢字文化の広汎な研究促進を目指した共同宣言や、「歴史的データベース連携検索システム」での多機関文字画像連携検索の実現、また奈文研関連の本簡研究書籍の韓国語版の翻訳・出版など、着実に成果を上げている。

5)韓国国立文化財研究院との共同研究

奈文研と韓国国立文化財研究院（2022年1月以前は国立文化財研究所）は、1999年以降、協約書・合意書を締結して文化財に関する共同研究事業を実施し、多くの研究者を相互に派遣し交流をおこなってきた。2006年度以降は両機関が実施する発掘調査への参加交流も加わり、共同研究と発掘交流が事業の両輪となっている。ここでは2013年度以降について概況を述べる。

まず共同研究については、2011年度より「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」をテーマとして研究を進め、2015年度には、5ヵ年ごとの研究成果をまとめた報告書として論文14を収めた『日韓文化財論集Ⅲ』を刊行した。翌2016年度からは研究テーマ別に日韓双方で5つの研究チームを編成して共同研究をおこなうこととし、2018年度には奈文研において中間成果報告会を実施し、2020年度に論文12本を収めた『日韓文化財論集Ⅳ』を刊行した。2021年度からも日韓各5チームを編成して共同研究をおこなっている。

発掘調査の交流については、国立慶州文化財研究所を窓口として相互に研究員1名を派遣し、日韓双方で共同発掘調査を実施している（図124）。2013年度から2018年度にかけてはのべ12名の研究員が双方の地の都城跡等において共同発掘をおこなった。2019年度は奈文研から1名派遣したが、新型コロナウイルス感染症の影響により韓国側からの受け入れを中止せざるをえず、その後2021年度にいたるまで発掘交流は実施できていない。



図124 2016年の発掘交流：東大寺東塔跡の発掘調査現場にて
(韓国・崔亨仙氏(前列左))

(5)出版物の刊行・公開

1)『飛鳥むかしむかし』の連載・刊行

調査研究成果の公開は重要な責務であり、これまでもさまざまな形で取り組んできた。2013年4月から2016年3月にかけては、飛鳥・藤原地域における発掘調査など最新の調査研究成果を盛り込みながら、一般の読者に親しみを感じていただけるような歴史の叙述をめざし、朝日新聞奈良版への連載（全116回）を担当した。

執筆は、飛鳥・藤原地域での調査経験のある所員を中心として、飛鳥にゆかりの深い所外の篤学の方にもお願ひすることとした。連載は、テーマごとに4回1シリーズとし、初回は総論的な内容、2回目以降はや専門的な内容に踏み込んで各論を展開するような構成をとった。連載の華は、イラストレーターの早川和子さんによる、直感と想像に富むイラストで、これにより文章では表現しきれない、古代飛鳥のイメージがふくらんでいくこととなった。

新聞連載に若干の新稿を加えた『飛鳥むかしむかし』は、連載終了後数ヶ月を経た2016年8月と10月に、奈文研編・早川和子絵『飛鳥むかしむかし』飛鳥誕生編・国づくり編（朝日選書949・950、朝日新聞出版発行）の2冊として刊行された。2022年4月現在、飛鳥誕生編は5刷、国づくり編は4刷を重ね、好評を博している（累計17,000部発行）。なお、刊行を記念して、飛鳥資料館は翌2017年に春の特別展「早川和子が描く飛鳥むかしむかし」を開催した。遊び心に満ちたイラストの原画は、飛鳥を愛する多くの観覧者を魅了した。

2)『探検！奈文研』の連載・公開・刊行

『探検！奈文研』は、奈文研の調査・研究活動を広く紹介することを目的に、主として小学校高学年～中学生の若い世代に向けて、奈文研の調査・研究活動を広く紹介することを目的とした読み物である。読売新聞奈良版での短期連載としてスタートし、後に定期連載となった。また、奈文研ホームページの「なぶんけんブログ」としても発信し、さらに、全体を一冊にまとめた書籍も刊行した。

短期連載 奈文研が創立60周年を迎えた2012年の8月に、

読売新聞奈良版に5回分を掲載いただいたことからはじまった。「多分野の専門家が一堂に会して奈良の文化財を調査・研究する」という奈文研設立の理念を説いた「なぜ奈良に?」を皮切りに、木簡・文化財の保存処理、古代建築の復元、国際共同研究や国際協力といった奈文研の代表的な調査・研究活動や事業を紹介した。

定期連載 短期連載が好評を博したため、2013年4月からは読売新聞奈良版の定期連載企画となり、2018年8月まで足掛け6年間にわたり連載を継続した(全200回)。

内容は平城宮・京跡の発掘調査や出土遺物、奈良時代の歴史に関するトピックを中心に、文化的景観や年輪年代学、データベース、遺跡整備や文化財の撮影・記録など多種多様で、奈文研の調査・研究活動の幅広さを反映させることができた。また、平城宮跡資料館や飛鳥資料館での企画展・特別展に絡めた時事的な話題も多かった。一話完結を原則とし、毎回異なるテーマをアトランダムに掲載した。読者が自然と多彩なトピックに触れられるよう企図した、いわば「万華鏡方式」である。

なんぶんけんブログ 定期連載は読売新聞奈良版のみでの掲載であったため、読売新聞社のご理解を得て、2014年4月からは奈文研公式HP上の「なんぶんけんブログ」としても順次掲載し、多くの方々に閲読の機会を提供した。定期連載の200回分を対象とし、原則として内容は新聞掲載時のままとした。現在も、奈文研HPにて閲覧できる(<https://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/cat111/>)。

書籍 2020年度には短期連載5回分を含むすべての話を一冊の書籍にまとめる計画が持ち上がり、奈文研編『探検!奈文研』(岡村印刷工業株式会社印刷、2021年3月31日奈文研発行)としてA5判全205頁の単行本を刊行した(図125)。

「万華鏡方式」を継承し、原則として新聞掲載時の連載順のまま収録した。一方で「No○○も参照」といった注記を加え、関連トピックへのアクセスを促す工夫も施している。新聞掲載時の内容の維持を基本方針としつつも、体裁や用語などの統一を図り、写真やイラストも一部リニューアルしている。また、新聞掲載後に進展した内容や更新された情報などもできる限り盛り込むよう努めた。平城宮跡資料館・飛鳥資料館・六一書房(<https://www.book61.co.jp>)で販売しており、手軽にお買い求めいただくことができる。

コンセプト ほぼ10年間にわたり新聞やホームページで



図125 全話を一冊にまとめた書籍『探検!奈文研』(2020年度刊行) 発信を続けてきた「探検!奈文研」であるが、そのコンセプトは一貫して「小・中学生を中心とする幅広い層の読者に、奈文研の調査・研究をわかりやすく伝える」ことであった。

執筆は若手研究員やアソシエイトフェローを中心に分掌し、松村恵司所長(当時)の厳しい添削も加わった。文字数500字程度、添える写真やイラストも原則1点という制約の下、難解になりがちな調査・研究内容を簡潔・明瞭にまとめ伝えるという、一見簡単そうに見えるこの作業が、実は大変に難しいことを痛感しながらの連載であった。その意味で『探検!奈文研』は、執筆を担当した研究員たちにとっても、探検に近い試みであったと言える。

3)「藤原京右京九条二坊・九条三坊、瀬田遺跡発掘調査報告」の刊行

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)では、2019年度に「藤原京右京九条二坊・九条三坊、瀬田遺跡発掘調査報告書」を刊行した。この報告書では、2015~2016年度に実施した、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構奈良支 奈良職業能力開発促進センター(ボリテクセンター奈良)の本館建て替えにともなう発掘調査の成果を150頁にわたりまとめている。その成果の第一には、西二坊大路をはじめとする藤原京期の遺構群の発見が挙げられる。

第二の成果は、弥生時代後期の大型円形周溝墓SZ4500の発見である。残念ながら、墳丘や墓壇は削平のため残っていなかったが、墳丘をめぐる周溝のかたちから、それが「前方後円形」であることがわかり、調査当初から大きな注目を浴びることとなった。また、周溝出

土の弥生土器はこの墳墓の年代を考えるうえでもきわめて重要である。

およそ3年にわたる整理作業を経て、この報告書ではおよそ230点もの弥生土器を収録することができた。現場で丹念に作図し、製図におよそ1年を要した弥生土器の出土状況図も、附図として巻末に繰り返してある。

第三の成果は、绳文時代後期末の土器群の発見である。調査期間の関係で、調査範囲が限られてしまったが、滋賀里1式の土器は類例が少なく、その貴重な一例をくわえることができた。

この報告書に掲げた資料が、瀬田遺跡および藤原宮の歴史的価値を高め、さまざまな方面で活用されることを願ってやまない。

4)『飛鳥・藤原宮発掘調査報告V』の刊行

飛鳥藤原宮跡発掘調査部は、1985年から1987年に新庁舎の建設予定地で、約17,000m²におよぶ調査を実施した。この地は藤原京左京六条三坊にあたり、藤原宮に隣接する一等地である。調査の結果、藤原京期を中心に多数の遺構を検出し、墨書き土器を含む多数の土器や瓦塊類、木簡などの遺物が出土した。これらの遺構、遺物に対する一連の分析や考察により、多くの成果が上がった。

藤原京期では、左京六条三坊の中央に位置する東西棟建物SB5000を中心とした、四町占地の大規模な施設が存在することが明らかとなった。複数町占地の施設を検出した初めての例である。この施設は当初は右京職、後に左京職であることを確認し、建物配置などの具体的な様相など、京内官衙の実態に重要な知見を加えた。関連した分析では、左京職に対する右京職が、実は右京七条一坊に広大な敷地を有し、左京職と同様に儀礼的空间をもつ官衙であることが判明し、これも重要な成果である。

一方、奈良時代にも官衙に関連すると考えられる遺構が存続する。これは「香山」と墨書きした土器や桶の収納に関わる木簡から、「香山正倉」に関わるとされてきた。しかし、大倭国正税帳の詳細な分析から、香山正倉以外の何らかの官衙であろうことが明らかとなり、興味深い成果をあげた。

この学報の成果をもとに、今後も継続的な調査を実施し、日本最初の中国式都城、藤原京の実態を明らかにしていくことが望まれる。

5)旧大乘院庭園学報の刊行 —南都中近世の研究

旧大乘院庭園の発掘調査報告書は、奈文研としては本格的な中近世を扱うはじめての発掘報告書である。

名勝旧大乘院庭園は明治時代初頭まで興福寺の門跡である大乘院が置かれた場所である。大乘院は1087年に創建された門跡寺院で、興福寺境内にあったが、平重衡による南都焼き討ちによって、罹災したのち、その一部がこの場所に移った。大乘院庭園は室町時代の庭師、善阿弥が改修に関わったとされ、現存する庭園の中でも中世の姿を踏襲する貴重なものとして、1995年から2007年にかけて、本格的に奈文研が整備に先立つ発掘調査をおこなってきた。

これまで重森三玲や田村剛、森蘿などの庭園史学者によって、庭園の実測調査や文献、絵画資料を用いた考証が進められてきた。大乘院庭園の東大池の西側にある西小池は、江戸時代末期から明治時代前期にかけて制作された「大乘院四季真景図」には描かれているものの、戦前には、すでに埋没した状態であった。この西小池の形状を発掘調査によって明らかにできた点は、日本庭園の歴史を紐解く上で貴重なデータを得ることができたといえる。

大乘院は明治時代の廢仏毀釈によって廢された後、寂殿は小学校に利用され、茶室の八窓庵（含翠亭）は奈良国立博物館に移築されるなど、建築史の観点からも重要な課題を含んでいた。また、中近世の考古資料研究にとどまらず、「大乘院寺社雜事記」との対比ができる点で一級の資料群である。さらに、大乘院には庭園や建物を描いた絵図や指図が残されており、その遺構の解釈および発掘調査報告の作成には、文献、考古、建築、絵画、庭園史など、文化財の総合調査が必要であった。

この学報刊行にあたり都城発掘調査部平城地区と文化遺産部を中心に積み重ねた基礎研究は、南都の中近世に関する今後の調査・研究の水準を、飛躍的に高めるものとなったといえよう。

また、整備が完了した大乘院庭園は、広く一般公開されており、その隣接地にある大乘院庭園文化館での講演会や出土遺物の展示などに、奈文研の研究が昇華されている。

(6) 展示・一般公開

1) 藤原宮跡資料室の土日開室とロビー展示

藤原宮跡資料室は、出土遺物等を通して、奈文研がおこなってきた藤原宮跡等の調査成果を一般向けに紹介するための施設として、飛鳥・藤原地区の庁舎建物新館にともない、その一角に1989年に開設された。長らく、月曜から金曜までの平日のみ開室してきたが、2012年4月より、橿原市と協定書・覚書を取り交わし、土・日・祝日の休日開室を開始した。休日は橿原市の解説ボランティアが来館者の対応をおこなっており、より多くの人々に藤原宮跡の魅力を発信できる施設となった。

また、藤原宮跡資料室では、常設展示に加え、都城発掘調査部飛鳥・藤原地区が主体となり、エントランスロビーにて企画展示や特集展示をおこなってきた。この10年では、各年度の発掘調査や出土遺物の研究成果を紹介した速報展示、東日本大震災の被災文化財レスキュー事業や復興調査への取り組みを紹介する展示、「埋もれた大宮びとの横顔」と題した木簡の実物展示等を実施した(図126)。2013年度には、飛鳥藤原宮跡発掘調査部創立40周年を記念して、「写真で振りかえる発掘調査40年」を開催し、飛鳥寺はじめ奈文研の飛鳥・藤原地域での発掘調査のあゆみを紹介した。

2) 展示協力

都城発掘調査部平城地区では、平城宮跡資料館で催された夏期企画展、秋期特別展や冬期・春期企画展において展示協力をおこなってきた。毎年、冬期もしくは春期



図127 研究員がうんちく博士に扮した子供向けのギャラリートーク(2015年)

には前年度までの発掘調査成果を公開する「発掘速報展」が、夏期は夏休みの児童・生徒に向けた企画展が催される。秋期には2017年に10周年を迎えた恒例となった「地下の正倉院展」が開催されている。

夏期・冬期・春期企画展、ミニ展示における協力 平城宮跡資料館の展示では、主に平城宮・京跡から出土した遺物を扱い、冬期あるいは春期には都城発掘調査部平城地区のおもだつた発掘調査成果を展示公開している。配布する展示パンフレット用の写真撮影や、遺物や遺構部分の執筆、遺物の貸し出しなどについて協力をおこなっている。さらに、「発掘速報展」では、それぞれ発掘調査担当者が中心となってギャラリートークを実施し、好評を得ている(図127)。特に、発掘調査成果の展示は、発掘調査担当者が調査時の問題意識や経験について、臨場感をもって解説をおこなうことで、より理解を深めていただく機会となっている。

夏期企画展では、2012年以降、夏休みの児童・生徒に向けた展览会が開催され、研究員がわかりやすく、おもしろい解説を提供している。実際に研究室から遺物を持ち出して、手に取りながら解説をおこなうことで、理解が深まる工夫もおこなってきた。

2019年度の冬期展示以降は新型コロナウイルス感染症の蔓延防止に鑑み、対面でのギャラリートークは中止せざるをえなくなっているが、展示企画室の「なぶんけんチャンネル」を活用した解説動画の撮影に積極的に協力している。

秋期特別展における企画協力 平城宮跡資料館では、2007年度より毎年、秋期特別展として「地下の正倉院展」と



図126 「埋もれた大宮びとの横顔2」展での木簡の実物展示(2019年)

題する平城宮・京跡出土木簡の実物展示をおこなっている。本特別展は、都城発掘調査部史料研究室が企画し、企画調整部展示企画室が全面的に協力し開催するもので、テーマによってはさらに他の研究室の協力を仰ぐこともある。

木簡は脆弱なため、実物を展示する機会の少ない文化財である。本特別展は、一度にまとまった点数の木簡を実見できる貴重な機会を提供している。展示木簡は基本的に科学的保存処理が済んだものであるが、水滴状態の木簡を展示することもある。これまでに展示した木簡は、1,000点を超える。

会期は概ね10月の半ば頃から11月末頃まで、奈良国立博物館で開催される正倉院展に合わせて約6週間を設定している。ただし遺物保護の観点から、木簡は約2週間に亘り展示替えをおこなう。2021年度は、さらに遺物の保護に万全を期すため、気候が不安定な時期を除き4週間に会期を短縮した。

展示にあたっては、展示木簡の写真を主体とするカラーリーフレットと、個々の展示木簡の釈文と詳細な解説、出土遺構の紹介等をまとめた解説シートを作成している。これらは一部の年度のリーフレットを除き、奈文研リポジトリでPDFをダウンロードすることができる。

2018年3月には、10周年を記念して、「地下の正倉院展 10年のあゆみ」を刊行した(図128)。これは、10年分のリーフレットを合冊し(ただし、2010年度と2012年度を除く)、巻末に索引を付して検索の便を図ったものである。



図128 地下の正倉院展のリーフレットをまとめた冊子(2018年)

(7) なぶんけんチャンネルによる情報発信

1) コロナ禍の情報発信の代替策として

2020年から深刻化した新型コロナウイルス感染症の世界的大流行によって、奈文研の調査研究業務は大きな制約を受けることとなった。これまで平城宮・京や飛鳥・藤原地域での発掘調査では現地説明会を実施し、多くの方々に遺跡を直接ご覧いただき、発掘調査の成果を広く公表する機会をできるだけ設けてきた。また、奈文研の調査研究成果は、平城宮跡資料館や飛鳥資料館などで展示したり、講演会として公表したりしてきた。しかしながら、新型コロナウイルス蔓延防止のため、大人数を集めての対面による調査研究成果の公表は、ことごとく控えなければならない事態に陥ったのである。

奈文研では、その代替策として、また人流抑制策の一環として、YouTubeなぶんけんチャンネルを利用した情報公開を試みてきた。

都城発掘調査部でも平城地区を中心に、現地説明会の代替策として、積極的に発掘調査のドキュメンタリー動画による発信を試みてきた(図129)。研究員が直接カメラを回して発掘調査の過程を撮影する動画では、現地説明会の代替として調査の成果を公表できるだけでなく、現地説明会ではお見せできないような発掘調査の手順や苦労話などを知りていただく良い機会となつた。

実物の遺跡を見ていただく機会も大切にしていかなければならぬが、動画配信による遺跡紹介は、実際に現場に足にお遊びいただけない方々でもみることができ、発掘調査の必要性や目的などを一般の方々にご理解いただくうえで、有効なツールである。



図129 興福寺の発掘調査の作業風景を伝えるシーン



図130 都城発掘調査部平城地区のお仕事探しシリーズのサムネイル

今後もYouTubeに限らず、現代社会のニーズに合った情報発信の方法を模索しながら、調査成果の情報発信に努めていきたい。

2)奈文研のバックヤードツアーとして

発掘調査の最終的な成果は、発掘調査報告書を刊行することで広く公開に努めてきた。発掘調査報告書には、調査終了後から報告書が刊行されるまでに、各分野の研究者が整理・研究を積み重ねた成果が反映されている。この整理・研究の積み重ねは、整理作業と呼ばれているが、さまざまな問題から広く公開することは難しい。このため、一般の方々にとっては、各研究室では、研究員がどのような仕事をしているのかがわかりにくい状況がある。

都城発掘調査部平城地区では、所内の多くの職員が日々携わっている整理作業の様子、言い換えれば、奈文研の日常業務を紹介する試みの一つとして、新人研究員が都城発掘調査部平城地区の各研究室にお邪魔して、それぞれの研究や整理作業の様子について紹介する1枚5分前後の動画を作成することとなった。

動画の内容は、それぞれの研究室の主な業務を紹介し、その中の一つを新人研究員が、研究室の研究員の指導のもと体験するというものである（図130）。普段なかなか目にすることのできない整理作業の一端を、視聴者は新人研究員の作業を通して知ることができる。また、日々作業に従事する職員からの裏話を聞くこともできる。

他にも、それぞれの研究室が管理する遺物の収蔵庫を見学し、各研究員のオススメの資料を紹介してもらうこともおこなった。普段なかなか目にすることのできない資料や、これまでの研究の基礎となった資料などを、各研究室の個性あふれる研究員が紹介することで、研究所の裏側を垣間見られるような工夫をおこなった。

(8)その他

1)平城宮出土木簡・長屋王家木簡の国宝・重要文化財指定

平城宮・京出土木簡は、日本が律令制度を核とした国家経営や、仏教をはじめとする宗教や技術等を繼承しつつ、その国家と文明を確立する過程の日常を伝える一次資料である。そこには、日本語とは異なる言語体系を背景にもつ「漢字」という文字を獲得し運用する試行錯誤と格闘を経て、「漢字假名交じり文」という表記方法にたどり着くまでの痕跡がふんだんに残されている。

平城宮・京出土木簡は、歴史学のみならず、国語学・国文学、文学などの研究においても欠かせない。さらに近年では、東アジア各地の簡牘・木簡や、世界各地の木簡類（ローマン・タブレット等）との比較研究も盛んにおこなわれ、その重要性はますます高まっている。

こうした重要性から、平城宮跡大膳職推定地出土木簡（39点、2003年）、同内裏北外郭官衙出土木簡（1,785点、2007年）、同内膳司推定地出土木簡（483点、2009年）、同造酒司出土木簡（568点、2015年）が重要文化財に指定してきた。そして、2017年には、これらの重要文化財指定品2,875点に新たに309点を加えた3,184点が「平城宮出土木簡」として国宝に指定された（口絵）。

また、2020年には、長屋王家木簡1,669点・附平城京跡左京三条二坊出土木簡140点の計1,809点が重要文化財に指定された。木簡の文化財指定は、平城宮木簡を嚆矢として、全国の主要な出土木簡にひろまりつつある。

さて、発掘調査や洗浄作業の進展によって、平城宮・京出土木簡の点数は日々増大し、30万点におよぼうとしている。これらはいずれも、将来の国宝候補ということができる。

国宝・重要文化財指定は、木簡のもつ価値を国民に明確に示すとともに、さまざまな活用・公開のきっかけでもある。2007年の重要文化財指定を契機に、「地下の正倉院展」と題した木簡の展示を開始し（前述）、平城宮跡資料館の秋期特別展として継続的に実施してきている。また、国立文化財機構が運営する「e国宝」および「colbase」データベースでの画像公開もおこなっている。

一方、出土木簡はきわめて脆弱な文化財である。保存

液中の仮保管状態から科学的保存処理を施し、安定的な保全に一定の目処が立った後に、文化財指定がおこなわれる。科学的保存処理後も、安定した環境での保管・管理および木簡の状態のモニタリングが必要である。このように、より高水準の処理方法や保管環境を目指した研究が日進月歩で進められている。

今後も着実に整理作業と保存処理を進めて、国宝・重要文化財への指定を目指していきたい。

2) 飛鳥・藤原木簡の新研究

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区史料研究室は、藤原宮東面地区の木簡を集成した『藤原宮木簡三』(奈文研史料88、2012年)に続き、宮西半部の出土木簡を集成した『藤原宮木簡四』(奈文研史料91、2019年)を刊行し、藤原宮跡出土木簡のうち東西の重要な資料群の正報告を終えた。

それらに収めた木簡のうち、もっとも注目すべき木簡は宮西北隅で検出した平安時代の井戸から出土した、弘仁年間の年紀をもつ庄園の帳簿である。弘仁元年(810)10月20日に収穫した稻を収めて以後、翌年の2月末までの支出の詳細を月ごとに記しており、平安時代初頭の畿内庄園の経営の具体的な姿がうかがわれる類例のない資料である。木簡としては異例の情報量で、長さ1m近いヒノキの板に、推測されるものもふくめ解読できた文字は797字あり、墨の痕跡が残るものを使わせると800字を優に超える文字が記されていた。現在のところ、国内で



図131 弘仁元年の庄園の帳簿(手前)とそのレプリカ(奥)

もっと多くの文字が記された木簡である。

2019年度から3ヵ年計画で、この長大な木簡の保存処理と、レプリカ作成に取り組んだ(図131)。木目の似たヒノキの材木を探すところはじまり、墨書の原稿作成では、一文字一文字をあらためて丁寧に読み解く機会に恵まれた。水漬けで保管していた段階には分からなかつた新たな墨痕もみつけることができた。レプリカ作成は、木簡の現状を記録し、資料の展示公開など活用を図るといった本来の意味だけではなく、調査研究の深化という点においても、またない機会になっている。

3) 古代の盤上遊戯「かりうち」の研究

平城宮・京から出土した土器・土製品について、地道な整理作業を進めるなかで、古代の遊戯に関する新たな研究成果が得られた。現代の研究者の日常のひとコマが、古代の官人の日常のひとコマを照らし出した大きな成果である。

きっかけは二条大路SD5100出土土器の内面に刻された列点記号と同じ配列の記号が秋田城跡出土土器にも刻されていることに気づいたことである。この記号の類例を探したところ、平城宮内裏北外郭検出の土坑SK820や東方官衙検出の土坑SK19189など平城宮・京で複数の出土例があり、秋田城跡のほか、三重県齋宮跡、新潟県八幡林官衙遺跡、岩手県柳之御所遺跡でも出土していることが判明した。

この列点記号について、現代韓国で遊ばれている「ユンノリ」というボードゲームの盤面と系譜関係をもつことを論証した。また『万葉集』の検討により、奈良時代にユンノリに似た「かりうち(博浦)」という盤上遊戯が存在することが知られていた。これらを考え合わせることにより、列点記号が「かりうち」の盤面である可能性が高いと判断し、この成果を発表した(2015年)。

さらに、「かりうち」に使う「かり」とみられる木製品が平城宮・東方官衙の土坑SK19189から出土していることが判明し、「かりうち」の実態を遺物から検討できるようになった。そこで、現代でも「かりうち」で遊べるように遊戯方法と遊具の復元研究を推進している。これは「平城宮跡の活用に関する実践的研究」の一環として、文化遺産部・企画調整部と共同で実施している(本書21頁)。出土遺物の調査研究から遺跡の活用へ繋げる奈文研の新たな取り組みとして、今後の進展が期待される。

8. 埋蔵文化財センター

(1) 環境調整による遺跡現地保存法の検討

1)はじめに

一般に、発掘調査によって出土した遺物と遺構の多くは非常に脆弱な状態にある。これらを保存し、博物館などで展示するために、劣化を引き起こす原因物質を取り除く、あるいは遺物を強化する保存処理に関する調査研究を保存修復科学研究所ではこれまで進めてきた。保存科学において、遺物に適切な保存処理を施すことは、それらを保存する上で不可欠な工程であることに疑いはないが、一方で、それらの劣化の原因を究明することで劣化の発生を未然に防ぐ、あるいはその進行を緩慢なものにすることも保存科学の大重要な研究テーマと言えよう。博物館などの屋内で展示・保管される文化財の場合は、展示・保管環境をコントロールすることが可能となるため、文化財の材質に応じて指標とされる温度や湿度、あるいは照度の適切な制御がおこなわれており、その予防的保存（preventive conservation）の理念は広く浸透している。一方、屋外にある遺跡を現地保存する場合では、①遺跡を構成する岩石や土壤がもつ劣化の特性が遺跡ごとに異なるため、保存環境の目標を設定することが困難である、②遺跡を取り巻く環境条件も遺跡ごとに異なっており、そのコントロール自体が困難である。このような理由から予防的保存が採られた例は少なく、遺跡の現地保存は土壤や石材の強化を目的とした薬剤含浸が重点的におこなわれてきた。

ところが、薬剤含浸による保存処理から一定期間経過した遺跡を対象に保存状況を経過観察したところ、強化処理を実施したにもかかわらず、石材の割れや表面の剥離が生じている事例がこれまで少なからず見受けられた。このような観察結果から、遺跡を破壊するように何らかの力が作用する環境下では、薬剤含浸による保存処理は必ずしも十分とは言えず、①遺跡が破壊されるメカニズムの解明と、②そのメカニズムにおいて遺跡の周辺環境が及ぼす影響を把握する、そして劣化の進行を抑制する保存環境の調整をおこなうことが、遺跡の現地保存にお

いては大変効果的と考えられる。このような経緯から、保存修復科学研究所では、環境調整による遺跡現地保存法の検討を研究テーマの1つに掲げ、国内外の遺跡を対象に現地保存に係る調査研究を実施してきた。本稿では、これらの調査研究の中でも、塩類の析出や乾湿繰り返しといった、遺跡の現地保存において普遍的な課題に伴う遺構の劣化現象がみられた遺跡について、現地保存に至るまでの調査・検討の過程を示すことで、遺跡現地保存における環境調整の重要性を提示することを目的とする。

2) 地盤遺構の露出展示に関する検討

ここでは発掘調査によって現れた遺構そのものを展示する方法、いわゆる遺構の露出展示に関する取り組みとして、平城宮跡遺構展示館でおこなった調査・研究を紹介する。平城宮跡遺構展示館は南北2棟の保護施設の内部で遺構が露出展示されている。ここでは遺構地盤や遺構周辺の保護盛土において、塑性を失った土壤の崩壊、蘚苔類やカビの繁茂、塩の析出などによる遺構の劣化が認められた。とりわけ、南棟は保護施設南北壁の上半がルーバー状で常に外気の通風が生じる環境であり、塩析出による遺構の劣化が顕著に認められた。析出する塩を調べたところ、硫酸カルシウムが逐年析出することで遺構の汚損を引き起こしているのに加えて、硫酸ナトリウムは冬季にのみ析出しており、堺や石材の破壊を引き起こしていた（図132）。

これら、塩析出による遺構の劣化に対しては、遺構周辺地盤の水分量調査および保護施設内部の温熱環境調査から、遺構へと水が浸透するとともに、冬季に冷たく乾いた外気がルーバーを介して室内に流入することで、室内気温の低下と地盤表面からの水分蒸発が促進されることが原因と示唆された。そこで、遺構周辺地盤および保護施設内部における熱水分移動解析モデルを作成し、保護施設を適切に改修した場合の効果について検証した。ここでは、その一例として、ルーバーを介した通風を遮断した場合に、地盤からの水分蒸発量がどれほど低減するのか、そして室内気温の低下がどれほど抑制されるか、という点に着目した検討をおこなった。解析の一例を図133に示す。計算の結果、外気の流入量が大幅に低減した場合、冬季の室内平均気温は約4℃上昇、相対湿度は約8%上昇して、遺構地盤からの水分蒸発量は約20%減



図132 塩析出によって表面の粉状化が生じる場

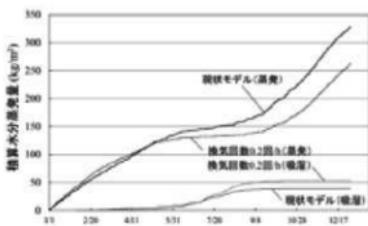


図133 遺構面からの水分蒸発量・吸湿率比較

少することが示唆された。すなわち、室内温度が上昇することで硫酸ナトリウムの溶解度が低下するのを軽減するとともに、遺構地盤からの水分蒸発量が低減するため、それらに含まれる塩の析出量も減少すると考えられる。もちろん、これだけで塩析出による遺跡破壊の危険性を完全に抑制するものではなく、また、通年高湿度環境とししまうと、温暖期にカビのリスクが高まることが予想され、季節ごとに異なる環境の調整方法をとる必要もある。残念ながら、現時点では平城宮跡遺構展示館はこれらの調査成果に基づく施設改修の実施には至っておらず、改修効果の検討は解析の結果にとどまっている。将来、遺構保存のためにも保護施設の改修が実施され、その効果について実地での検証がなされることが期待される。

3) 地盤遺構の埋め戻し保存法に関する検討

ここで紹介するタンロン皇城遺跡は、ベトナムの首都ハノイの中心部に位置しており、1010年に李朝(-1225年)の王城として築かれた。建都千年にあたる2010年に、この遺跡が位置する敷地に新国際会議場と国際会議場から

なる複合施設を建築する計画が持ち上がったため、2002年から発掘調査が実施された。調査の結果、大規模な建築関連遺構が重層的に遺存することが明らかになり、ユネスコ日本信託基金による「タンロン・ハノイ文化遺産群の保存事業」が開始された。ここでは、このプロジェクトの一環として東京文化財研究所と共同で実施した、埋め戻しによる遺構保存に関する研究について紹介する。

遺跡の発掘調査後に、これらを安定した状態で保存する方法として、埋め戻し保存がおこなわれている。しかし、埋め戻しに用いられる土は、その後の保存環境を考慮して選定したものとは必ずしも言えない。たとえば、砂質土のように透水性が高く保水性が低い土と、透水性が低く、保水性が高い粘質土をそれぞれ用いて埋め戻しを実施した場合、長期的には遺跡を含む地盤の水分状態は大きく異なるものとなる。すなわち、前者の砂質土では早々に水分蒸発が進んで低い含水状態となるが、土壤の透水性はその水分状態によって変化し、水分量が多いと透水性は高く、反対に水分量が少ない状態では透水性が著しく低下するため、埋め戻し土の砂質土が低含水状態となると、下層の遺構地盤では地表面へ向かう水分移動が抑制され、高い含水状態を維持すると予想される。一方、後者の粘質土を用いて埋め戻しをした場合、水分の移動は極めて緩慢ながら、遺構地盤の含水率も緩やかに低下し続けると予想される。

そこで、タンロン皇城遺跡では、遺構の一部、約15m四方を盛土厚20cmの砂で覆った盛土箇所と、遺構を露出した箇所の2カ所において遺構地盤内部の水分量を1年間測定した(図134)。露出箇所では遺構地盤表面から100cmの深さまで20cmごとに5カ所で測定をおこない、盛土箇所では遺構地盤表面から80cmの深さまで20cmごとに4カ所と盛土の砂深さ10cmの箇所の計5カ所で測定をおこなった。露出箇所では測定開始から9か月間は遺構表面から緩やかに水分量が減少し続け、雨期になると地盤下方からの水の浸透によって水分量が急激に増加する様子が認められた。一方、砂で盛土をした箇所では埋土の砂は速やかに水分量が低下したが、遺構地盤の水分量は高い値を安定して維持する様子が認められ、予想通りの結果を得た。ここでは粘質土による埋め戻しを実施していないため、埋め戻し土の性質の差異による遺構地盤の水分量の比較には至っていない。しかし、この



図134 タンロン塚城遺跡における土壤含水率実測の様子

結果は発掘調査後に遺跡の埋め戻しを実施する場合、用いる土の性質によって、その後の遺跡の保存環境が大きく変化することを示唆している。今後、埋戻しを実施する遺跡で、少しでも遺跡の保存環境に配慮した材料の選定がなされることが期待される。

4) 装飾古墳の保存に関する検討

ここでは装飾古墳の保存をおこなった事例として、大分県日田市に位置する史跡ガランドヤ古墳のうち、1号墳（以下、ガランドヤ1号墳と略記する）を対象に実施した研究を紹介する。ガランドヤ1号墳は奥壁に人物、動物や船などの装飾が描かれている装飾古墳で、明治から大正にかけて封土が削られた結果、長い間石室上半は露出した状態にあった。昭和52年（1977）に雨漏り対策として欠落した石材の隙間に後補の石材やモルタルで充填され、その後、昭和60年（1985）以降は防水シートで石室を覆い、その保存が図られてきた（図135）。しかし、残念ながら石材表層の剥離が奥壁の一部で進行しており、奥壁に描かれた装飾のおよそ3分の1が既に失われている。また、



図135 防水シートで覆われたガランドヤ1号墳石室（日田市文化財保護課）

石材表面が既に浮いており、装飾が失われる危険性が高い箇所や、析出した塩によって石材や装飾の表面が覆われている箇所も認められる。石材表層の剥離や浮きの要因を検討した結果、後述する石材の乾湿繰り返しによって引き起こされたものと考えられた。また表面に析出する塩は硫酸カルシウムと同定され、この塩は材料表面の含水状態が高い場合にのみ析出する塩で、水に溶けにくいため、ひとたび析出すると除去が困難である。したがって、石材の剥離や塩の析出による劣化を抑制するためには、石材を常に乾燥した状態に維持することが重要で、石材表面への水分供給源となっている結露を抑制することが保存環境の目標と結論付けた。

防水シートで覆われた状態の石室内部の環境を調査したところ、外気と比較して石室内部は常に湿度が高く、概ね100%rhを示した。石室にとって断熱材として機能する埴丘封土を失っていることから、石室内部は外界気象の影響を受けて温度ムラが生じやすく、夏季は地盤内部に位置する石室下半が、反対に冬季は露出する石室上半が放射冷却によって低温箇所となるため、季節によって場所を変えながら、低温箇所で通年結露が発生していることが明らかとなった。そして、これら結露水の起源となる水蒸気は、石室周辺の土壤に浸透した雨水が石室内で蒸発したもので、防水シートによって石室内部の換気が抑制されていることが結露の量を増大させていると考えられた。そこで、結露を低減するためには、石室周辺土壤への雨水の供給を断ち、必要に応じて石室内部を換気できる保護施設が有効と考え、その効果を検証するために仮設の保護施設を設置して、環境調査を実施した。併せて、石室周辺地盤における水と熱の移動を計算する解析モデルを作成し、結露の発生時期とその箇所および量についてシミュレーションをおこなった。いずれの検討からも、適切な雨水の浸透抑制と適切な換気の運用によって、石室石材表面の結露を大幅に低減し得る結果が得られ、保護施設の有効性が示された。また、解析モデルに基づいて、結露量を低減する効果的な施工や施設の運用方法についてさらに詳細な検討も加えた。一例を挙げると、石室内部の結露に対しては、保護施設内部の石室周辺地盤から蒸発した湿気が大きく影響していることが計算結果から示唆されたため、石室周辺地盤に対しては断溝シートを施工した。このような解析を通じて、おおよそ期待

する効果が得られるのか、あるいは想定していなかった負の効果が生じないかといった、保存環境の設計とその運用方法についても検討を加えた。

このような装飾および石材の保存に関する調査・検討や発掘調査の結果に基づき、日田市によって恒久的な保護施設が造られた。保護施設の基本的な理念は仮設のものと同じで、石室周辺地盤に対する雨水の浸透を抑制し、必要に応じて内部の換気が可能な施設となっている。ドーム状の建物の表面は軽量盛土を用いて墳丘様の形状を復元しており、それによって高い断熱性を有している。また、換気を停止した状態では高い気密性を有しており、このような高い断熱性と気密性は、適切な保存環境を作る上で保護施設にとって非常に重要な仕様となっている。一方、施設内部は広い空間となっているため、石室内部はもちろん、石室を外側からも観察することが可能となっている（図136）。保護施設内部の保存環境を調整するための設備としては、将来における設備の更新を容易にするため、大規模な空調設備などは備えておらず、換気設備と除湿器のみを導入した。

このような保護施設の中で、目標とした保存環境が維持されているのか確認し、また、その維持のための適切な設備の運用方法を検討するために、引き続き現地調査を実施した。本州や九州の一般的な気象条件のもとでは、石室のような地下空間における結露の要因は季節によって変化する。すなわち、夏季は外気が高温多湿となる一方で石室内部が低温であるため、外気を取り込んでしまうと外気由来の結露が発生する。反対に、冬季は外気が低温低湿となるため、外気由来の結露は生じないものの、墳丘の断熱性が低いと、床面で蒸発した水分が天井側の石材表面で結露する。このような条件のもと、石室での



図136 恒久的保護施設内部のガンドマヤ1号墳石室（日田市文化財保護課）

結露を抑制するため、夏季は外気由来の湿気を石室内部に取り込まぬように換気を停止するだけでなく、換気口も閉塞して高い気密性を維持している。そして、その間は除湿器を使って、施設の内部で発生する湿気を除去している。一方、冬季には外気の湿度が低下するため、結露の起源となる湿気は、施設内部の地盤から発生したものになる。そこで、石室外側の地盤表面には予め断湿シートを施工することで湿気発生量の低減を図り、石室床面から発生する湿気は、施設内部を乾いた外気で換気することで施設外へと排出している。このような施設の運用のもと、数年間に渡って保存環境のモニタリングをおこなっており、結露や新たな塩の析出は抑制された状態を維持していることを確認している。

ガンドマヤ1号墳は封土を失っていることに加えて、石室周辺まで開発によって遺構が破壊されている。したがって、保護施設の設計の自由度が高く、ここで採用した保護施設や保存環境の制御方法はもちろん一般化できるものではない。しかし、遺跡で生じている劣化の調査とその原因の検討を経て、それらを抑制する保存環境の目標値を定め、それを実現する保護施設とその運用方法の検討に至るまでの一連のプロセスは、いずれの遺跡においてもその現地保存を図る上で共通のものと考える。

5) 石材の劣化要因に関する基礎研究 -乾湿繰り返し劣化に関する検討-

石材の中でも堆積岩や凝灰岩のように内部に空隙を持つ場合、これらの空隙に水が浸透すると材料の体積は膨張し、反対に乾燥すると収縮する。そのため、石材全体が湿潤状態にあるときに石材表面から急速に乾燥が進行したり、反対に全体が乾燥状態にあるときに石材表面が濡れたりすると、材料表面で急激な体積変化を引き起こすよう力が発生する。このとき、石材表面の急激な乾燥であれば引張の力が、反対に急激な濡れが生じる場合には圧縮の力が発生する。これらの力に対して、それぞれ石材がもつ引張強度と圧縮強度が大きければ材料の破壊には至らないが、強度の方が低い場合には材料の劣化が発生し、このようにして生じる劣化を乾湿繰り返し劣化と呼ぶ。一般に、石材などの多孔質材料では圧縮強度と比較して引張強度は低いため、湿潤状態の石材が急激に乾燥した場合、表面にクラックや剥離といった



図137 表層が大きく剥離した天草砂岩製の墓石

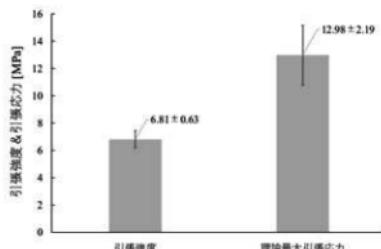


図138 引張強度と最大引張応力の比較

劣化が生じる危険性が高い。遺跡を屋外で現地保存する場合、遺跡を構成する石材や土壌などの水分量変化は避けられないため、水分量がどの程度の変化速度、変化幅であれば劣化の進行を抑制し得るのか、さらに石材の強化処理で劣化の進行を抑制可能であるのか、定量的な議論が不可欠である。ここでは京都大学人間・環境学研究科と共に実施した、乾湿繰り返し劣化に関する基礎実験とフィールド調査を紹介する。

乾湿繰り返し劣化に関する基礎実験で検討対象とした試料は、西南戦争の官軍墓地の1つで、熊本市に位置する七本官軍墓地の墓石に使用されている天草砂岩である。七本官軍墓地では図137に示すように、乾湿繰り返し劣化によるものと思われる亀裂や剥離が、石材表面に多数認められた。そこで、下浦砂岩のテストピースを用いて、割裂試験から石材の引張強度を推定するとともに、一軸圧縮試験や自由膨潤率の測定等から、乾燥時に石材表面で生じ得る引張応力の最大値を算出した(図138)。

この結果は石材が水分で飽和した状態から、表面のみ絶乾状態に移行するという極端な状態を想定したもので

はあるものの、溼潤状態にある墓石に直達日射が当たる状況など、急激な水分蒸発を誘発するような状況では、石材の劣化が生じる危険性が高いことを示唆する結果を得た。また、この下浦砂岩に対して、シリコーン系の基質強化剤を含浸した結果、無処理の試料と比較して引張強度に有意な変化は認められず、やはり石材表面の急激な乾燥が生じた場合、石材表面に劣化が生じる可能性が示唆された。これらの結果から、乾湿繰り返しだけでなく、塩析出や凍結破裂のように、石材内部に引張応力が生じることで発生する石材の劣化現象に対しては、薬剤含浸による石材の強化処理だけでは十分とは言い難く、石材に発生する応力を抑制する保存環境の調整が非常に重要であると言える。

次に、高松市で実施した石棺の保存環境に関する調査について紹介する。高松市国分寺町に位置する鷺ノ山からは角閃石輝石安山岩が産出し、市内にはこの石材で作られた石棺が複数存在する。そこで、鷺ノ山産の同一石材で作られているものの、劣化状態がそれぞれ異なる石船塚古墳の石棺、三谷石舟古墳の石棺、および石船石棺の3つの石棺を対象に、石棺周辺の局所的な環境の実測調査をおこない、これらの比較から石棺の劣化に対して周辺環境がどのように影響を及ぼしているのか検討した。石船塚古墳石棺は人頭大の石材を積み上げて作られた墳丘の頂部に露出した状態にある。周辺に樹木がないため、開空率が約71%と高く、日射と降雨の影響を大きく受けた(図139)。三谷石舟古墳の石棺も墳丘頂部に位置するが、疎林に覆われているため開空率が約26%と低く、日射の影響は大幅に低減された状態にある(図140)。石船石棺は石舟池の湖畔にあったが、1902年に引き揚げられて現在の石船天満宮境内に祀られた。現在は屋根のみの保護施設の内部で、地盤と縁を切った状態で保存されているが、冬季には直達日射に曝される状況にある(図141)。また、過去には現在の保護施設が設置されたものの、地盤に直接置かれた状態の期間があった。これらの石棺の中で最も保存状態が良好であったのは三谷石舟古墳の石棺であった。石棺の一部が地盤に埋もれることから、石棺には常に水分が供給されている一方で、開空率が低く直達光が届かないために石棺からの水分蒸発が非常に抑制された環境にあると考えられる。すなわち、石棺は常に高い含水率を維持しており、乾湿繰り返しに対するリスク

は低い状態にあると言える。次いで良好な保存状態を示したのは石船塚古墳石棺であった。雨水が溜まることで、時に石棺が満水状態となるものの、石棺石材の透水性があまり高くないと推定されること、また積石塚であることから墳丘の保水力は低く、毛管力による石棺石材への水分供給が生じないと考えられる一方で、常に直達日射に曝されていることから、石棺石材全体の含水状態は総じて低い状態を維持しており、乾湿の繰り返しが生じに

くい環境にあると考えられる。最後に石船石棺は最も保存状態が悪く、表層の浮きや剥離が石棺の下半で多数認められた。先述の通り、石棺の保存環境はこれまでに変化しているため、現在認められる劣化がいずれの保存環境下で生じたものか推定の域を出ないものの、過去には石棺には地盤から水分が供給される一方で、直達日射に曝される環境にあったことから、この間に乾湿繰り返し劣化が進行し、石棺表層の浮きや剥離が進行したと推察された。

6)まとめ

本稿では遺跡の現地保存を目的として直近10年に実施してきた調査研究のうち、主要なものを紹介した。ここで紹介した遺跡を含め、文化財を将来に伝えていくためには、文化財の物質的な保存を図るだけでは不十分で、それらが有する価値を人々が広く共有し、その保存を望むことも不可欠である。そのためには、文化財を確実に保存すると同時に、積極的に公開・活用することが必要とされている。

遺跡の公開・活用方法の1つに、本稿でも取り上げた遺構の露出展示がある。実物の遺構を現地で保存しつつ公開するこの手法は、土中に埋もれた状態と比較して、一般に遺跡が劣化するリスクは高い。このようなリスクに遺跡を晒しつつ、その物質的な保存を担保するためには、環境の変化に対して遺跡がどれほどの状態変化を示すのか、そして、どれほどの状態変化が生じた場合に劣化に至るのか、すなわち遺跡の劣化リスクに関する定量的な評価が必須のものとなる。

冒頭でも述べたように、遺跡で生じる劣化の要因やその進行速度に関しては、それぞれの遺跡に固有のものである材料の特性と周辺の環境条件が大きく影響をおよぼしている。これらの相互作用とも言える遺跡の劣化について、そのメカニズムを解明する基礎研究と、それら劣化の発生を予測し、進行を抑制する対策をあらかじめ講じることを可能とするモデル化の技術や、実際に遺跡の保存処理に用いる適切な材料の開発などの応用研究が今後ますます発展することが期待される。



図139 石船塚古墳石棺（墳頂部で露天で露天に晒されている）



図140 三谷石舟古墳石棺（麻林内部にあるため開空率が低い）



図141 石船石棺（石船天満宮境内の庫屋内に置かれるが、冬季に直達日射がある（写真は南から））

(2) 出土木製造物のより良好な保存手法の検討

1)はじめに

日本列島には埋蔵環境下で有機質遺物が遺存しやすい低湿地の遺跡が全国に分布しており、農具や容器類など比較的小型のものから、船舶や建築の部材など大型のものまで、多種多様かつ膨大な量の木製の遺物が各地で出土する。奈良文化財研究所では、平城宮跡や飛鳥藤原宮跡などの発掘調査とともに出土品を中心に、木製造物の保存処理を50年以上実施している。その一方で、木製造物をより良好な状態で保存するためには、現在でも様々な課題がある。ここでは、木製造物の保存に関する最近の研究について記す。

2) 木製造物の一時保管環境における劣化抑制法の開発

低湿地の遺跡から出土する木製造物は、埋蔵環境下で木材細胞壁を構成する成分の多くを失って脆弱化し、内部に大量の水分を含んだ状態となっている。一般にこうした水没状態の木製造物は、なんらの保存処理も施されないまま乾燥されると、著しい収縮を生じる。そのため、木製造物は保存処理が実施されるまでの間、水中で一時的に保管される。一方、木製造物の保存処理には相当の期間を要するため、出土した遺物の大半は、未処理の状態で長期間保管せざるを得ない。水中では微生物の活動によって木製造物の劣化が徐々に進行するため、「一時の」

な保管の長期化によって、遺物表面の加工痕や墨書きなど学術的に重要な情報が失われ、また文化財としての価値が損なわれる懸念がある。

そこで、出土木製造物の水中一時保管環境における劣化を抑制する方法を検討するため、実際の保管環境(図142)をフィールドとした継続的な水質調査と木材試料の腐朽実験を実施した(図143)。その結果、溶存酸素の少ない領域では、有機物を分解する好気性微生物の活動が緩慢化して木材の劣化が抑制されることが示され、また溶存酸素量に影響を及ぼす環境因子が明らかとなった。これらの知見をもとに、一般的な木製造物の保管環境における、溶存酸素を低減するための手法を検討した。

実地試験の結果、木製造物を一時保管する水槽の水面全体を酸素不透過性のシートで覆い、さらに簡易な屋根を設けて雨や風の影響を抑えることで、溶存酸素を効果的に低減し、遺物の劣化の抑制を図れることを示した(図144)。また、同時に藻類をはじめとする光合成生物の繁



図142 木製造物の一時保管環境

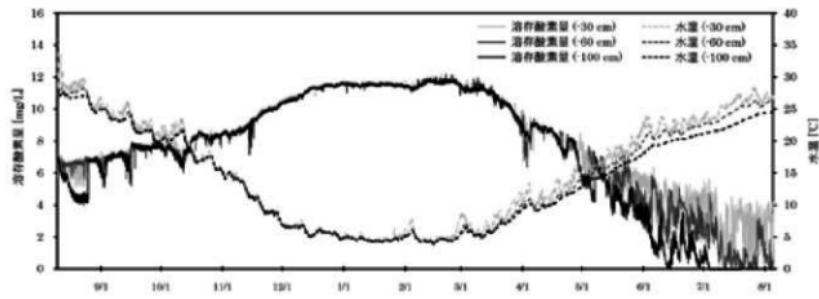


図143 木製造物の一時保管環境における溶存酸素量と水温の推移(測定期間: 2013年8月~2014年8月)

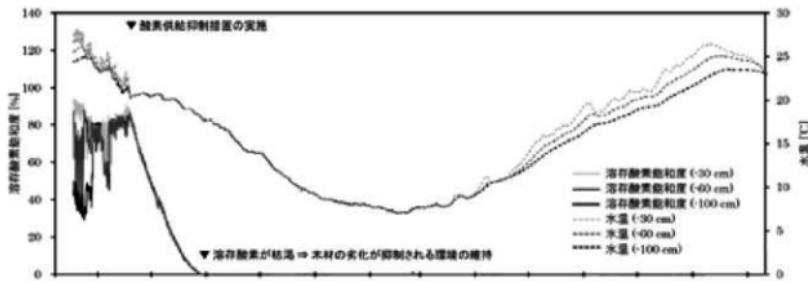


図144 木製造物の一時保管環境における酸素供給抑制措置の効果(測定期間: 2014年8月~2015年9月)

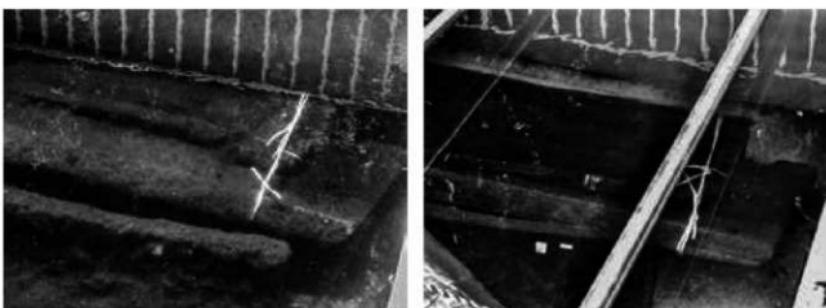


図145 木製造物の一時保管環境改善の効果(左: 改善前 2014年 右: 改善後 2015年)

殖を抑制し、清浄な保管環境を維持できることを示した(図145)。この手法は、奈文研の文化財担当者研修などを通じて紹介しており、導入と運用にかかる経済的・人的負担が小さいことから、現在では各地の機関で採用されている。

3) 木製造物の保存処理を迅速化する手法の開発

一般に出土木製造物の保存処理は、遺物中の水分の一部または全部を常温で固体となる薬剤に置換する含浸工程と、その薬剤の固化により遺物を安定化させる固化工程の2工程からなる。含浸工程では、一般に比較的低濃度に調製した薬剤の溶液中に遺物を浸漬し、液質の濃度を徐々に上昇させることで、遺物内部の水分と溶液中の溶質との置換が図られる。これは、遺物内部と溶液の間に生じる溶質の濃度勾配によって溶質が移動する拡散現

象を利用したものである。一方、このときの濃度勾配が過大になると、浸透圧の作用によって遺物からの脱水による収縮が生じる懼があるため、溶液濃度の拙速な上昇は厳禁とされる。アカガシ重属をはじめとする難含浸性の樹種からなる遺物や、建築部材のような大型遺物の含浸工程では、年単位の期間を要する例も多い。このように、従来の保存処理法における含浸工程は、原理的に長い期間を要することから、その効率化が重要な課題と認識してきた。

そこで、木製造物の保存処理における薬剤含浸について、従来法とは異なる原理を利用して、迅速化させる新たな手法を検討した(図146)。これは、木製造物の一部を保存処理用の溶液に浸漬し、他の部位から溶液のみを蒸発させることで、木材内部に溶液の流れを生じ、液路部から周囲の溶液を速やかに吸収させることを期待したものである。



図146 溶媒蒸発を利用した新たな薬剤含浸法の模式図

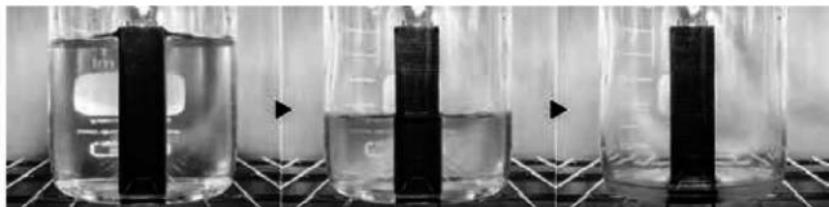


図147 溶媒蒸発を利用した薬剤含浸実験の様子（出土木材試料に顕著な収縮なし）

出土木材を試料とした基礎的な実験の結果、温湿度の制御下において溶液の溶媒を緩やかに蒸発させることで、溶質濃度を上昇させるとともに、溶質を移流により木材内部へ効率よく導入・蓄積させられることが示された（図147）。薬剤固化後の試料の寸法安定性についても、従来法によるもの以上に良好となる可能性が示唆された。今後、本手法の確立と実用化によって、木製造物の保存処理に要する期間の大幅な短縮のほか、廃液や消費エネルギーの削減が期待される。

4) 今後の展望

以上の研究により、出土後に一時保管されている木製造物の劣化を抑制するための手法と、その後の保存処理を効率化する新手法の可能性が提示されたといえる。とくに、木製造物の保存処理効率の向上は、一時保管期間の短縮にも寄与するものである。すなわちこれらの成果

は、より多くの木製造物を、より良好な状態で後世に残し伝えることにつながるものであるといえる。

出土木製造物は、それぞれ樹種や形状あるいは劣化状態などが異なるため、とくに保存処理においては、個々の遺物に合わせた処置を施す必要がある。一方、保存処理に用いる薬剤の種類や含浸期間、固化の方法などの選択は、経験を頼りにおこなわれる面も大きいのが現状である。今後、理論的な裏付けを兼ね備えた、より確実性の高い保存処理法を確立することが、大きな目標の一つであると考えている。

(3) 埋蔵環境下における金属製造物の腐食メカニズムの検討

1) 埋蔵時の金属製造物の腐食研究の意義

鉄製造物や青銅製造物は出土後に劣化が生じるものがある。これは、埋蔵時の腐食によって生じた遺物内部の塩化物塩が起点となって生じる現象と考えられている。埋蔵環境下での塩化物塩の蓄積メカニズムが明らかとななり、出土した埋蔵環境や遺物の状態から発掘後に劣化が生じる遺物を選別することが可能になれば、保管環境の厳密な管理や適切な保存処置法の選択をおこなうことで、その劣化を未然に防ぐなどの対策を講じることができるようになる。また、近年、遺跡現地において遺物を保存する、「現地保存」の事例が認められるようになっている。現地保存の可否を判断するためには、その腐食に及ぼす埋蔵環境の影響を定量的に把握する必要がある。以上の観点から、様々な立地の遺跡での金属製造物の腐食に及ぼす埋蔵環境の影響を室内実験、模擬実験、出土遺物の材質分析から検討した。

2) 遺跡の埋蔵環境を鉛直一次元で再現したカラム実験

遺跡現地において、鉄製造物の腐食を定量的に測定するとともに、水分状態や酸素濃度などを精緻に実測することは現実的に困難である。そのため、遺跡の環境を鉛直一次元で模したカラム実験を実施し、土中の鉄製造物

の腐食に及ぼす水分量と酸素濃度の影響を検討した。実験ではカラムに砂質土を充填し、腐食速度を計測するための腐食センサーを深度ごとに設置した(図148)。本実験ではカラム内の地下水位を一定に保つことで、飽和から不飽和までの遺跡の土中の水分状態を再現した。実験結果から考えられる土中の水分状態と腐食の模式図を図149に示す。遺跡での鉄製造物の腐食速度は地下水位以下の水分飽和領域では、間隙水の溶存酸素の拡散が緩慢であるため停滞することが認められた。地下水位より上の水分不飽和領域で、腐食速度はある深度において極大を示した。カラム内の地下水位より上ではカラム上端に近づくにつれて土中の水分量は低下することから、腐食速度はある水分量で極大を示すと考えられる。水分不

実験温度: 20°C

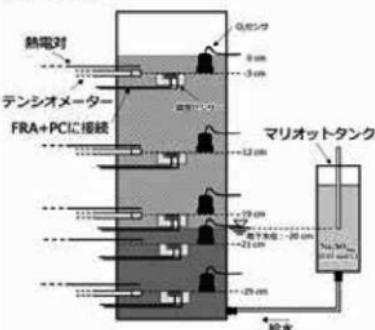


図148 カラム実験の模式図

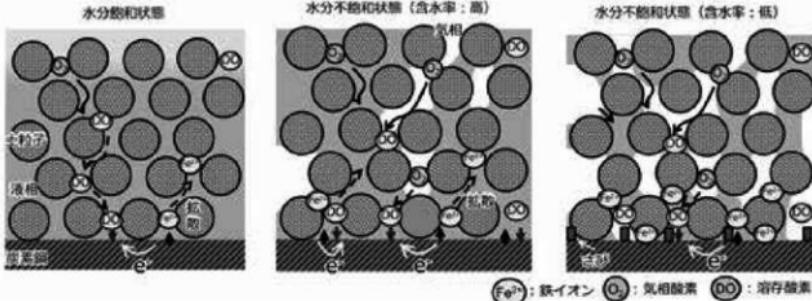


図149 土中の水分状態が変化した際の腐食機構の変化

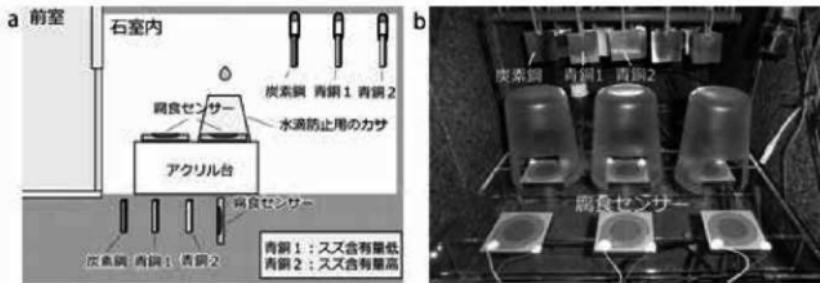


図150 模擬石室内での腐食実験の模式図 (a) と石室内の様子 (b)

飽和領域では腐食センサーへの酸素の供給速度は、土の含水量が低下するにつれて増加する。これは、水分量の低下によって土中の気相が増加し、その気相を介して気相酸素が速やかに移動することで、腐食センサーの近傍で薄い水の膜（以下、水膜と表記）に溶解するためと考えられる。一方で、水分量が低下するにつれて腐食センサーの表面の水と接触する領域は減少すると考えられる。すなわち水分不飽和領域で認められた腐食速度の極大は溶存酸素の供給量の増加と電板の濡れ面積の低下の均衡が保たれた水分状態で生じると考えられる。以上の結果を考慮すると、鉄製造物の腐食は地下水位以下の水分不飽和領域では緩慢である一方、地下水位より上の水分状態では腐食が顕著に進み、さらに水分量が低下すると腐食が緩慢になるとと考えられる。

3) 模擬古墳による古墳石室内での金属製造物の腐食の検討

古墳の副葬品は、埋葬状態自体に遺跡としての価値があることから、現地保存を検討する場合がある。一方で、石室内で副葬品の劣化が急激に進行している場合は、現地保存は困難であり、これを定量的に判断するためには、石室内の副葬品の劣化挙動を把握する必要がある。以上の背景から、京都大学桂キャンパス内に建設された模擬古墳の石室内において腐食試験を実施した。腐食実験では腐食センサー、ならびに炭素鋼、スズ含有量が異なる2種類の青銅からなる金属供試体をそれぞれ石室内と床面の土中に設置した（図150）。

腐食センサーの挙動より、腐食は夏期に顕著に進行し、冬期に緩慢になる傾向を示した。石室内での腐食は金属

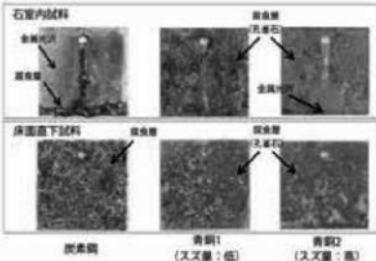


図151 3年間模擬古墳に設置した炭素鋼と青銅試料の状態

製造物の表面に水膜が形成されることで進行する。石室内的環境計測の結果を考慮すると金属製造物の腐食は夏期には遺物自体の結露、冬期においては天井石で生じた結露水が滴下することで水膜が生じ、腐食が進行すると考えられる。すなわち、石室内的金属製造物の腐食は石室内的温熱環境の変化に伴う、遺物表面の水膜の状態の変化によって、季節的に変動すると考えられる。また、炭素鋼供試体は、石室内に比べて床面土中で腐食が顕著であることが示された（図151）。石室内に懸垂された炭素鋼では腐食によって溶出した鉄イオンは水膜中に留まり、沈殿することで、緻密な腐食層が形成されると考えられる。この緻密な腐食層が保護性を有することで、さらなる腐食を抑制したと考えられる。一方で、土中に設置したものでは、溶出した鉄イオンが土中の間隙水を通じて地盤に拡散することで、緻密な腐食層が形成されにくく、高い腐食速度を維持したと考えられる。すなわち石室内的鉄製造物の腐食に対しては、土に接しているか、いないかという埋設状況が大きな影響を及ぼしていると考えられる。また、スズ含有量が高い青銅の腐食がスズ

含有量の少ないものに比べて緩慢であることが認められた。これは、高スズ青銅の方がスズの酸化物、水酸化物からなる緻密な腐食層がより生じやすいため、腐食が抑制された結果と考えられる。

4) 海底遺跡における金属製遺物の腐食と現地保存の検討

海底遺跡から出土した沈船などの遺物は直ちに引き上げることが困難な場合が多く、また、発掘後の保存処理に膨大な時間と費用がかかるため、現地において埋め戻しによって保存を図ることが国際的に推奨されている。国内では、長崎県松浦市に位置する鷹島海底遺跡から2隻の元軍艦が発見され、現地保存が試みられている。海底遺跡から出土した遺物の現地保存法の開発のため、鷹島海底遺跡を調査地として、海底環境のモニタリングを実施するとともに、炭素鋼と銅を供試体とした劣化試験を実施した（図152・153）。劣化試験では発掘以前の環境を想定して低層海水、堆積物中に深度ごとに炭素鋼および銅供試体を設置するとともに、発掘後の埋戻しの差異が遺物の保存に及ぼす影響を検討するため、方法1：土



図152 海底での暴露試験の様子（松浦市教育委員会）

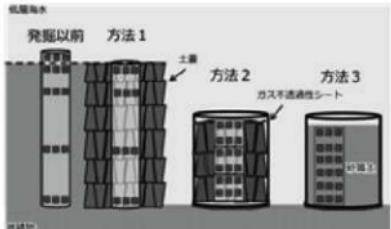


図153 鷹島海底遺跡での暴露試験の模式図

養のみの埋め戻し、方法2：ガス不透過性シートと土養を用いた埋め戻し、方法3：砂質土による埋め戻し、の3つの方法を再現した。以下、炭素鋼の状態に基づいて海底での腐食挙動を説明する。海水中では著しく腐食が進行する一方で、堆積物中では金属の質感が残るほど腐食が緩慢なことが認められた（図154）。また、これらの腐食速度は底層海水中では極めて高い一方、堆積物中では深度の増加とともに急速に低下した。堆積物中では表層から1cm以上深くなると溶存酸素が枯渇していることが確認されており、それ以深での腐食速度の低下は、堆積物がより緻密な状態になることで、腐食に関連する化学種の物質移動が抑制されたことによるものと推測される。

埋め戻しの施工法を検討した劣化試験の結果（図155）、方法1では、腐食速度は顕著に高い値を示した。

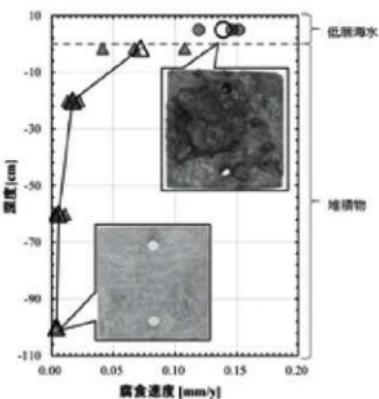


図154 堆積物中に設置した炭素鋼の状態と腐食速度

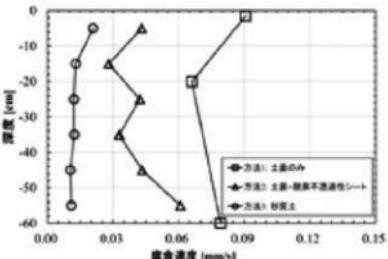


図155 異なる方法で埋め戻した場合の炭素鋼の腐食速度の変化

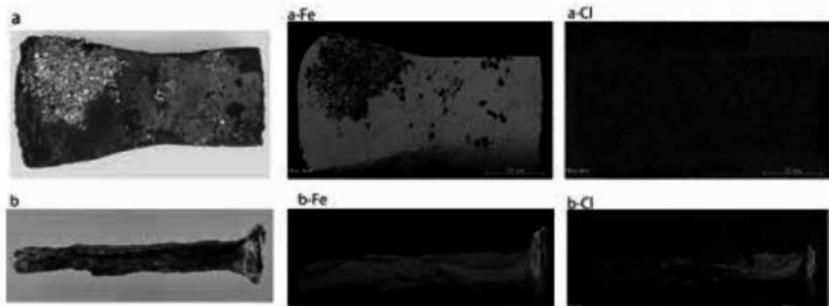


図156 平城宮跡出土鉄製遺物の蛍光X線分析による鉄(Fe)と塩素(Cl)の元素分布
a:還元的な環境下で出土したと推測される鉄製遺物、b:酸化的な環境下で出土したと推測される鉄製遺物

また、方法2では、溶存酸素が枯渇したことにより、方法1に比べて腐食速度は低下するものの、その値は依然として高い値を示した。一方、方法3では、腐食速度が最も低下した。方法2では溶存酸素が枯渇したにも関わらず、腐食が充分に抑制されなかった要因として、腐食反応に関連する化学種が土養間を速やかに移動したためと考えられる。一方、方法3では、砂質土で覆われることで腐食に関する化学種の移動が抑制された結果、腐食が停滞したと考えられる。以上の結果から、埋め戻しによる劣化の抑制には、溶存酸素が枯済する条件に加えて、その表面を砂質土などで覆い物質移動を抑制することが有効であることが認められた。鷹島海底遺跡では、同様に実施した木材の劣化試験の結果も考慮し、遺物表面を砂質土で覆い、さらにガス不透過性シートを併用して埋め戻しをおこなうことで、元軍船の保存が図られている。

5) 平城宮出土金属製遺物の腐食状態の検討

遺跡から出土した鉄製遺物の中には、保管中に腐食が生じるものと、生じないものがある。この劣化は、埋蔵環境中に鉄製遺物内部に集積した塩化物塩が起点になっていると考えられている。鉄製遺物内部への塩化物塩の集積に対する埋蔵環境の影響を検討するため、出土位置が異なる平城宮跡出土の鉄製遺物をX線CT、蛍光X線分析、X線回折分析などの非破壊的な手法で調査した。図156は還元的および酸化的な環境と推測される土中から出土した鉄製遺物の蛍光X線分析による元素マップである。還元的な環境から出土した鉄製遺物(図156-a)では、

表層が剥離した箇所においても塩素は検出されなかった。一方、酸化的な環境下で出土した鉄製遺物(図156-b)では、表面の腐食層が剥離した箇所において、塩素が検出されることが認められた。平城宮跡の地下水観測孔の水質分析結果では、それぞれの出土地点で塩化物イオン濃度に顕著な差異は認められないことから、埋蔵時の遺物周辺の塩化物イオン濃度の差異が直接的に塩化物塩の集積に影響を及ぼしている可能性は低いと考えられる。すなわち、土壤の水分状態や酸化還元状態の差異などの他の環境因子の影響によって腐食機構が変化し、それが塩化物塩の集積に影響している可能性が考えられる。さらに埋蔵環境と鉄製遺物の腐食状態の関係を精査していくことで、その要因が明らかになると考えられる。

6) 今後の展望

埋蔵時の腐食メカニズム研究の今後の進展により、2つの金属製遺物の保存技術が確立されると期待される。まず、埋蔵時における鉄製遺物内部への塩素の集積に及ぼす環境の影響を解明することで、鉄製遺物の発掘後の腐食を予測することが可能となり、より効率的で安全な保存管理システムが構築されると期待される。次に、埋蔵時の腐食をモデル化し、遺跡現地での劣化を数値解析により予測することができるようになると期待される。さらに、腐食モデルの構築により、積極的な環境制御による現地保存という、新たな視点も生じると考えられる。

(4) 出土遺物の材質・構造調査

1) ガラス杯の材質調査と保存処理

愛知県幸田町深溝松平家忠雄墓所から出土したガラス杯（図157）について各種の材質調査を実施した。本資料は、1599年の紀年銘があることに加え、その特徴的な器形や図柄から16世紀末のボヘミアからドイツ南部で製作されたと考えられている。

蛍光X線分析（エダックス社製EAGLE III）による材質調査を実施した結果、「カリ石灰ガラス」と呼ばれるガラスである



図157 ガラス杯

ことがわかった。さらに、マグネシウムやリンを多く含むことから、当該時期の北ヨーロッパでシダやブナなどの内陸の森林植物の灰を原料として製作されていた「森林のガラス（ヴァルトグラス）」の特徴を有していることが判明した。

また、X線回折分析（リガク社製Smart Lab）では、絵柄部分（エナメル彩）の着色剤が明らかとなった。白色不透明部分には酸化錫（ SnO_2 ）が用いられ、黄色や黄緑色部分では、アンチモン酸鉛（ $\text{Pb}_2\text{Sb}_2\text{O}_7$ ）（17世紀以降の絵画では「ナポリ黄」（Naples yellow）として知られる人工黄色顔料）が利用されていることが明らかとなった（図158）。材質調査実施後にはアクリル樹脂による強化処理をおこなった。

2) 飛鳥寺塔心礎出土の真珠小玉

奈良県明日香村に所在する飛鳥寺の塔心礎から出土した埋納物の再整理作業において、白色不透明を呈する材

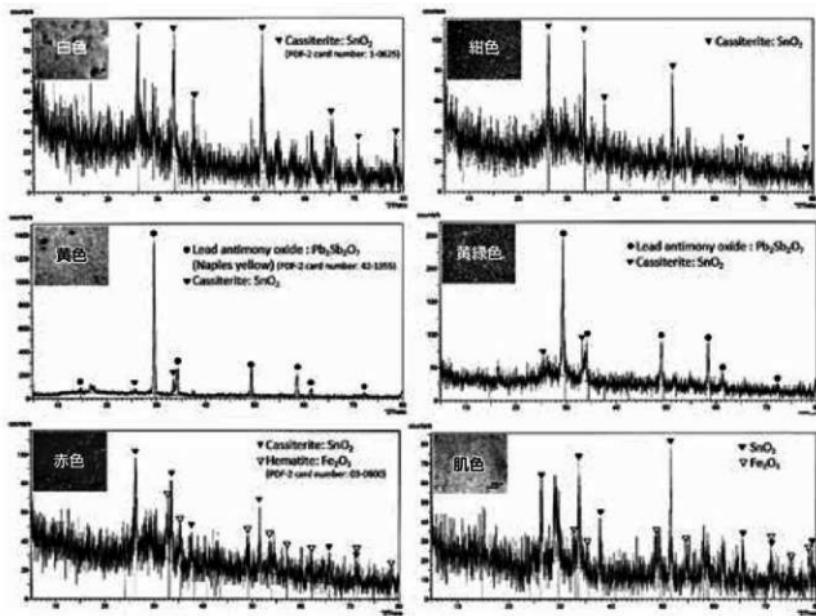


図158 絵柄部（エナメル彩）のX線回折スペクトル

質不明の小玉が少なくとも13点以上含まれていることがわかった。大きさは、直径1.5mm～2mmと極めて微小である。これらの多くは埋蔵中に劣化し、周囲の銅製品に由来する緑色の銹によって汚染されていたが、一部に写真のような光沢を残すものも確認された（図159）。

これらの小玉の材質や内部構造を明らかにすべく、マイクロフォーカスX線CT（島津製作所製）撮影を実施したところ、非常に細かい層構造をなすことがわかった（図160）。さらに、蛍光X線分析およびX線回折分析で材質調査をおこなった結果、炭酸カルシウム（CaCO₃）を主体とする物質であることが明らかとなり、これらの微細な小玉は真珠の可能性が高いと結論付けられた。

また、X線CT画像からは穿孔方法についても明らかとなった。孔径が0.5mmにも満たない非常に微小な孔があげられている。その形状は開孔部から中心に向けて細くなっている、二方向から穿孔されたことがわかる。製品の大きさはやや異なるものの、類似の方法で穿孔された真珠製の玉が正倉院宝物に残されている。

さらに、走査型電子顕微鏡（SEM）（日本電子製JSM-6010PLUS/LA）による微細構造の観察では、典型的な真珠層構造を確認できた（図161）。層厚および層構造から二枚貝に由来する真珠の可能性が高い。

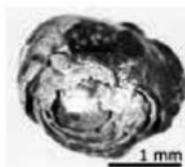


図159 真珠小玉の顕微鏡写真

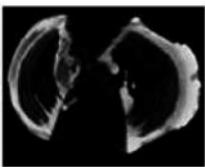


図160 真珠小玉のX線CT画像

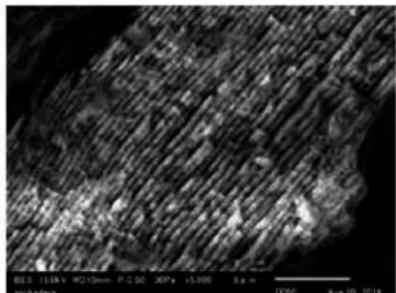


図161 真珠小玉の層断面の二次電子像 (5000倍)

これまで、飛鳥寺塔心礎埋納物は古墳時代的な特徴が強調されてきたが、真珠は古墳の副葬品には例外的にしか確認されていない。一方、仏教において真珠は七宝のひとつに数えられることもあり、今回の発見で飛鳥寺塔心礎埋納物は古墳文化とは異なる仏教施設の荘厳具としての新たな様相も具備していたことが示された。

現在、これら真珠小玉の貝種の同定や他の古代寺院出土品と比較研究を進めている。

3) X線CTによる「さし銭」の調査

滋賀県宮の前遺跡出土の「さし銭」は、大半が重なった状態のまま錯で固着しており、個々の銭文を確認することができない（図162）。このような場合、どのような種類の銭が束ねられていたのかを知るために一枚ずつ取り外されることが多いが、そうすると出土時の形状が失われてしまう。そこで、奈文研新序舎にある文化財用高エネルギーX線CT装置（日立製作所製）を利用することにより、出土時の状況を損ねることなく、どのような銭が含まれているのかについての調査を実施した。撮影した断層画像は、三次元画像に再構築することで任意の断面構造を確認することができるようになる。実際には、再構築したさし銭全体の三次元画像を解析ソフト上でそれぞれの銭の角度に合わせて切っていくことで1枚1枚銭文を確認するという作業をおこなった。

結果を図163に示す。これらの図は、重なっていた「さし銭」を画像上で1枚1枚切り出して並べたものである。画像解析の結果、所々に腐食の影響で銭文が非常に不明瞭なものがあったものの、銭文が確認できるものに関しては、すべて和銅開拓であることがわかった。また、図163では上下の向きだけ揃えて表裏は反転していない。表裏はランダムに出現しており、銭を紐に通した際の表



1 → 40

図162 宮の前遺跡出土のさし銭
矢印の方向に1枚ずつ銭文を確認した

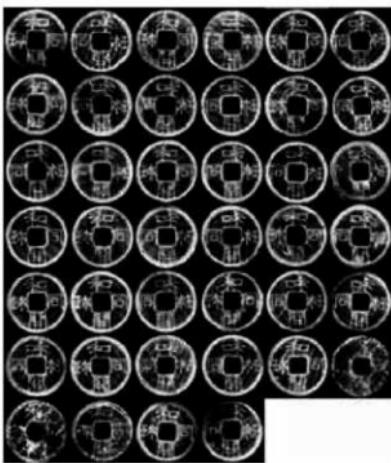


図163 「さし銭」のX線CT画像

裏に規則性はないこともわかった。

さらに、蛍光X線分析による非破壊材質調査を実施した。まず、束状になった銭の中に化学組成の大きく異なる種類が含まれているかどうか大まかに把握することを目的として、元素マッピングを実施した。使用した装置は、ポータブル蛍光X線大型試料測定用元素分析装置(Burker 社製 ELIO)である。結果を図164に示す。ところどころに錫(Sn)、鉛(Pb)、ヒ素(As)が強く検出される個体が含まれていることが分かる。錫、鉛、ヒ素の検



図164 「さし銭」の元素マッピング画像

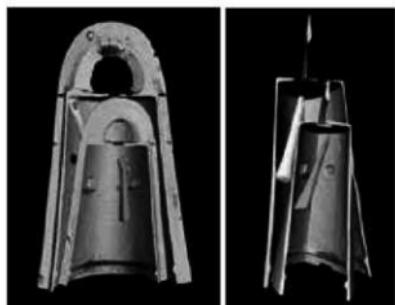


図165 松帆銅鐸(3号・4号)のX線CT画像

出強度には相間が認められる。反対に、これらの元素が強く検出される箇所では銅の検出強度が低い。一部に銅、錫、鉛の含有量比が著しく異なる個体が存在することが分かった。ただし、同一個体内でも各元素の検出強度に大きな差異が存在する場合もある。腐食によって局所的に錫や鉛、ヒ素などが濃化している可能性もあるため、化学組成の取り扱いには十分な注意が必要である。

4)入れ子状態で出土した銅鐸の内部調査

2015年に兵庫県南あわじ市において、石材加工用の砂山から7点の銅鐸が発見された(松帆銅鐸)。これらの銅鐸は大きい銅鐸内部に小さい銅鐸をはめ込んだ「入れ子」状態で発見されたことも話題となった。このうち2組4点について、砂が詰まつたままの状態で奈文研に持ち込まれ、高エネルギーX線CTによって内部調査が実施された。その結果、銅鐸内部に舌が埋存していることが確認された(図165)。銅鐸が舌を伴って出土する例は極めて稀であり、舌の埋納状態まで判明したのは初めてのことである。また。その後、X線CT画像を手掛かりに、入れ子状態にある銅鐸の取り出し作業が実施された。取り出された舌には、舌を銅鐸本体に取り付けた紐が残存していることも明らかとなった。舌や銅鐸に残存する紐やその他の有機質遺物について各種の化学的調査を実施したのち、平成30年度から奈文研の保存修復科学研究室にて本格的な保存処理が開始され、令和3年度末までにすべての銅鐸と舌についての保存処理が完了した。

(5) 年輪年代学の調査研究

年代学研究室では、考古学、建築史学、美術史学、歴史学等の文化財に関わる諸分野の研究に資するべく、出土遺物、建造物、美術工芸品等、多岐にわたる木造文化財を対象とした年輪年代学に関する調査・研究を実施している。各種木造文化財の年輪年代測定だけでなく、従来、主に年代測定の手段として使用されることの多かった年輪年代学を、同一材推定の視点から木簡等への応用を進めている点も、近年の大きな特徴と言えよう。今後、古代史学への貢献が期待されるなど、年輪年代学による調査・研究が発展的に進展するものと考えられる（図166）。

各種木造文化財の年輪年代測定 様々な木造文化財の年輪年代測定を実施したが、ここでは世界文化遺産古都奈良の文化財の一端でもある、国宝薬師寺東塔の解体修理に伴いおこなった調査について紹介する。彩色画が残り建立の最終局面で取り付けられたと考えられる初重の支輪裏板に樹皮が残存しており、天平2年（730）に東塔が建てられたとする『扶桑略記』などの記述と非常に整合性

の高い伐採年が特定された。一方、他の部材の年輪年代測定成果ともあわせると、薬師寺東塔に使用されている主な本部材が平城遷都後に伐採・調達されたものであることも明らかとなった。解体修理の成果などともあわせ、今後の研究の進展と総合的な理解が期待される（図167）。
木簡等の同一材推定 年輪年代測定では、年輪数が少ない小型の木製品にその手法が適用される機会は必ずしも多くなかった。一方、近年の成果として、一括性の高い試料群を対象とすることにより、その試料群の同一材の推定ができる事例が増加した。このような背景のもと、平城宮・京跡から膨大に出土する木簡を対象とするとなど、年輪年代学の多角的な応用を進めている。木簡を対象とした年輪年代学的検討により、木簡やその削屑の同一材関係や、刻まれる年輪の新旧関係を明らかにすることで、例えばこれまで断片的な文字として認識されていたものが、単語や文として意味を持つものになるなど、木簡から引き出される情報の増大につながることが期待されている（図168）。



図166 各種木造文化財の年輪年代調査風景

木材標本の収集 年輪年代測定を文化財に応用していくためには、年輪の形成された年が明確な現生木からさかのぼった年輪変動のデータを蓄積する必要がある。そのため当研究室では、文化財ではなく自然史標本の範疇に入るともいえる年輪年代学用の木材標本を、多数収集している。各地域からの木材標本を収集し、地域ごとの年輪変動をもとにした木材の産地推定をおこなうための基礎研究なども進めている（図169）。

研修・普及活動 木は、私たちにとってとても身近な素材であるため、木器、建造物部材、木彫像など様々な形で

文化財として残っている。しかし、当たり前のように身近にあるためか、その科学的な基礎知識の浸透が不十分で、木造文化財を担当する際にどのように取り扱ってよいのかよくわからない、という声をよく耳にする。そこで、木造文化財を調査する際に必要となる木材科学、年代学、保存科学などの科学的な基礎知識を習得し、担当現場に生かすことを目指す研修や、飛鳥資料館でのワークショップなどを実施した（図170）。



図167 薬師寺東塔の年輪年代調査

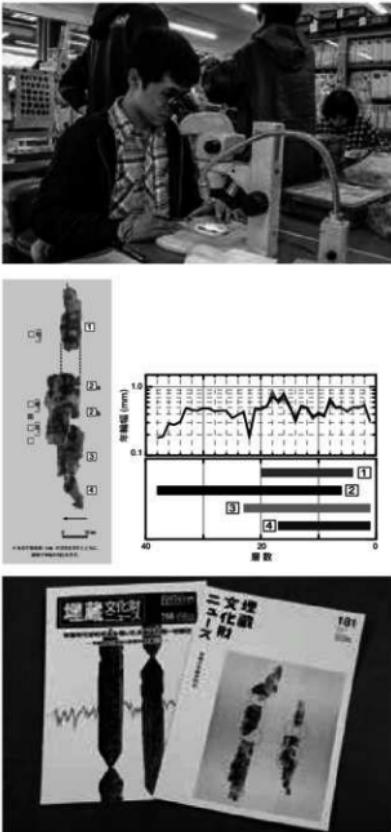


図168 木筋等の同一材推定



図169 木材標本の収集



図170 研修・普及活動

(6) 文化財の三次元計測

1)はじめに

立体物である文化財を三次元のまま記録する三次元計測方法の研究開発は、奈良文化財研究所の創設以来、継続的に取り組んできた課題である（牛川1964）。創立から70年経過した現在も科学技術の進展や社会要請に応えるべく、迅速化・低廉化・簡便化・質の向上・成果活用の多角化を進めている。そこで直近10年の開発研究により文化財の分野で特に大きく進展した3つの三次元計測方法を紹介する。

2) SfM-MVS

SfM-MVSによる文化財の三次元計測は、写真測量(Photogrammetry)の一種であり、この10年で普及した方法である。SfM-MVS(SfM/MVSとも表記する)は、Structure from MotionとMulti-view Stereoの略称の組み合わせである。SfMは、ある対象を撮影した複数の画像から、画像を撮影した位置や姿勢そしてレンズの歪みなどを算出し、画像中の特徴点を疎な三次元点群として生成する。MVSはそのSfMで推定した画像特徴点とステレオペア画像の複数の組み合わせから高密度な三次元モ

デルなどを構築する。

SfM-MVSは、ロボット制御などを目的とするコンピュータビジョンなどの分野由来の技術である。1980年代に理論的研究が進み、ICTの急速な進展による計算速度の向上やインターネットを介したデジタル画像の蓄積が進んだ結果、2000年代には応用研究が急速に増加した（織田2016）。2010年代には他分野に普及し現在では土木建設・

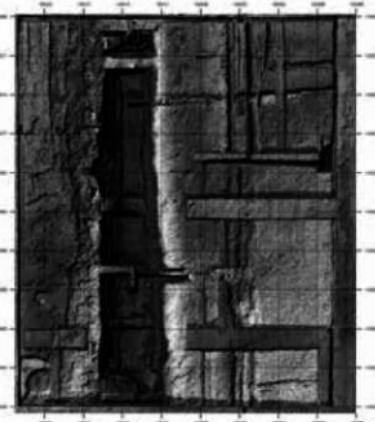


図171 三次元モデルを活用した作図支援



図172 SfM-MVSにより構築した発掘調査区の三次元モデル

農林業・災害による被害の記録など様々な分野で導入が進んだ。SfM-MVSで構築する三次元モデルは、元となる画像から構築するので対象の高精細な質感を再現できるほか、過去に撮影された写真測量用の画像や、赤外線カメラで撮影した画像なども利用できる。

奈文研では、これまでの約70年にわたる文化財における写真測量に関する調査研究の蓄積を継承しながら新たな手法の導入と応用を進めており、SfM-MVSの文化財への応用にもいち早く着手した（金田2014）。SfM-MVSは、三次元モデルの質は画像の質が大きく左右する。そこで精度検証のため、高機能な三次元レーザースキャナーとの計測結果の比較をおこなった。結果、適切な画像を取得して適切に解析すれば、現時点で正確度と精密度の最も高い水準にある三次元レーザースキャナーと比較しても問題ない質のモデルを構築できることを明らかにした（山口2021）。また、土器などの小さなものから遺構、調査区全体といった大きなものにいたるまで、様々な目的と条件下において計測と応用の事例（図171・172）を蓄積し、文化財調査のDX（Digital transformation）を見据えた取り組みに着手している（山口2021）。また、一脚やUAV、電動回転台などの撮影補助機材を導入し効率良く質の高い画像を安全に取得する仕組みを実現してきた。

これまでの計測事例の一部を列挙すると、土器表面に残るイネモミの圧痕、土器・陶磁器、銭・錢籠、木簡・木材などの木製品、石棺や石垣・石碑・磨崖仏などの石造物、出土瓦、古墳壁画、発掘調査により検出した遺構、発掘調査区全体、道路の周辺地形、被災した文化財の詳細な状況記録などがある（山口2018）。

SfM-MVSは、デジタルカメラとコンピューターがあれば誰でも着手できるので文化財調査組織や大学研究室等で導入事例が急速に増加している。しかしその計測の質は、計測者の知識や技術が大きく左右する点が課題である。そこで、奈文研では主に全国地方自治体の文化財担当者に向けた文化財担当者専門研修等で「文化財三次元計測」を実施し、SfM-MVSを利用した文化財計測の基礎の普及を図っている。

3) ハンドヘルド型 LiDAR

LiDARによる三次元計測は、レーザー光を機器から発射したレーザーが対象物にあたり機器に反射したレーザー



図173 ハンドヘルド型 LiDAR を用いた三次元計測

光を利用して対象の三次元形状を計測する手法である。航空機に搭載して地形の測量を実施する航空LiDARや、自動車の自動航行支援などに使用されている。従来の三脚を据えて計測する固定式の三次元レーザースキャナーとLiDARの違いは、移動しながら計測できることである。そのため樹木下など見通しの利かない場所でも迅速に広範囲の計測ができる点に長所がある。またSfM-MVSと比較して解析にかかる時間を省力できる。しかし他方、計測精度は一般的に固定式の三次元レーザースキャナーが2mm程度に対してLiDARは3cm程度である点に注意が必要である。

奈良文化財研究所ではLiDARの文化財調査への応用研究を進めている（金田2018）。ここではすでに一定の調査成果を蓄積したハンドヘルド型LiDARを取り上げる。この機器は半径約100m、水平360度^oと垂直視野30^oの範囲を±約3cmの精度で1秒間に約300,000点計測する。点群の地球上の位置は、LiDAR上部に取り付けた後述のネットワーク型RTK-GNSSで取得するか、別途設けた地上基準点(GCP: Ground Control Point)を用いて算出する。現有のシステムでは色情報は取得できない。建造物群の規模やそれら形状の記録、群集墳や山岳信仰遺跡など広範囲の三次元計測に有効である（図173）。計測したデータのうち樹木など不要部分はコンピューター上で容易に削除することができ、任意間隔での等高線生成なども可能である。現在はより廉価で簡便なシステムの開発研究を進めている。



図174 廉価な高精度GNSSと地中レーダー探査機器との連動

4)廉価なネットワーク型RTK-GNSS

GNSS (Global Navigation Satellite System/全球測位衛星システム) は、米国のGPSや日本のQZSSなどの測位衛星システムの総称である。このGNSSを利用するネットワーク型RTK (Real Time Kinematic)-GNSSとは、現場で取得した衛星データと、周辺の電子基準点の観測データから作成された補正情報を組み合わせ、リアルタイムでセンチメートル級の測量を効率的に実現する方法である(国土地理院2013)。その特徴は、上空が開けている場所でありインターネットを利用できる環境下であれば、日本国内のほとんどの地域で1~2cm程度の精度で地球上の位置を短時間に計測できる点にある。

近年は廉価なGNSS受信機が登場し初期導入費用が格段に下がるとともに、民間の廉価な補正情報配信サービスが開始したので維持運用費用も減少した。その結果、初期導入費用は高機能なスマートフォンの価格程度、1ヶ月当たりの維持運用費用は新聞の朝刊定期購読料と同程度となり、これまで高価だったネットワーク型RTK-GNSSによる計測に手が届くようになった。

この廉価なネットワーク型RTK-GNSSは、文化財調査のための基準点の計測をはじめ、SfM-MVSで構築する三次元モデルに大きさや地球上の位置を与えるためのGCPの計測、前述したハンドヘルド型LiDARや遺跡の中レーダー探査機器の位置のリアルタイム取得などに使用している(図174)。このように汎用性に富み廉価で安定して精度の高い位置情報を取得する仕組みを構築できたので、今後は普及に向けた取組を進めたい。

5) おわりに

文化財の記録は、文化財の理解を深め、これを共有し、未来に残し伝えるための最も基礎的かつ重要な作業である。したがって、限られた環境下でいかにより高い質の記録を実現し、文化資源として活用しつつ継承するかは、三次元計測に限らず今後も重要な課題である。既存の方法を継承し深めるとともに、科学技術の進展や現代の社会課題との関係を意識した取り組みを推進しながら、より良い選択肢を増やすため、さらなる優れた方法を今後も調査開発する必要がある。

参考文献

- 牛川喜幸 1964 「写真測量の文化財調査への応用」『奈良文化財研究所年報1964』pp.24-25
織田和夫 2016 「解説: Structure from Motion (SfM) 第一回 SfMの概要とバンドル調整」「写真測量とリモートセンシング」55 (3), pp.206-209
金田明大 2014 「Structure from Motionによる遺構計測の試行」『奈良文化財研究所紀要』pp.44-45
金田明大 2018 「SLAM技術を用いた森林内遺構の迅速な計測」『第35回日本文化財科学会大会研究発表会要旨集』pp.380-381
国土地理院 2013 「ネットワーク型 RTK測量について」<https://www.gsi.go.jp/common/-/000080891.pdf> 2022年4月20日最終確認
山口歐志 2018 「文化財のデジタル文化資源化: 見たままの姿を伝え、深層を探る」「デジタル技術で魅せる文化財: 奈文研とICT」 クバプロ pp.135-158
山口歐志 2021 「文化財の三次元計測方法による収集データの比較」『日本考古学会第87回総会研究発表会要旨』pp.31
山口歐志 2021 「遺跡発掘調査記録のDXの試行」「日本文化財科学会第38回大会研究発表会要旨集』pp.260-261

(7) 遺跡探査の成果

はじめに 不可視の情報を非破壊的な手法で得る方法を総称して探査と呼ぶ。遺跡探査は主に地中に埋没している遺構や遺物について、その存在を探る方法である。

地中の情報を可視化する効果的な手法としては直接土を除去し、観察する発掘調査があるが、これは不可逆的な行為であり、遺跡の状況を大きく改変させてしまう。遺跡探査の各手法は得られる情報が発掘に比して限られたものであるが、遺跡を改変せずに情報が取得できること、必要や技術の向上に応じて情報の再取得や検討が可能であり、遺跡情報を得る有効な方法として発掘調査とあわせて注目されてきた（文化財保護委員会1966）。

奈良文化財研究所においても、1961年には平城宮跡内の埋没古墳の電気探査などが試みられ（奈文研1962）、1977年からは埋蔵文化財センターによる遺跡探査法研究が進められ、窯跡などで成果をあげてきた。

その後、従来の電気探査、磁気探査に電磁探査(EM法)や地中レーダー探査などの手法も加わってきた。Time-Slice法の開発による地中レーダー探査の平面での異常部の可視化などを通じ（Goodman, et al. 1995）、2000年代に多くの探査法が実用段階に入りつつあり、以降、我が国においても利用が進んでいる。

これらの研究を基礎として10年は遺跡探査の実用化に

ついて更なる検討を進めてきた。ここではその一端を紹介する。

迅速な計測手法の検討 発掘調査に比べて探査手法は短期間に情報の取得が可能なものが多いため、開発等に伴う調査の事前情報の取得など、より迅速かつ高解像度を有する情報取得が普及には必要と考える。このため、現実的に達成可能である迅速な計測手法の検討をおこなった。

探査の現地作業については、調査範囲の選定、基準点の測量、測線の設定の後、機器での計測をおこなうこととなる。ここで現状時間を要するのは測線の設定である。探査においては、対象範囲内を網羅的かつなるべく均等に計測することが必要であることから、この設定は重要な作業である。

地中レーダーについては、GNSS機器が使用可能な場所についてはこれを用いることで効率化が可能であり、廉価で軽量な機器を利用することによって測位時の精度の向上や機器の安定性を図ることができた。これらの利用を進めることで迅速な計測が可能となってきている。農機具などを目的としたナビゲーション機能の出現など、更に効率的な情報収集が可能になりつつあり、検討を進めている。

GNSS機器の利用が困難な森林内などについては、SLAM技術による位置決定技術（金田2018）を利用して位置決定をLiDARと画像という異なる情報からおこなう

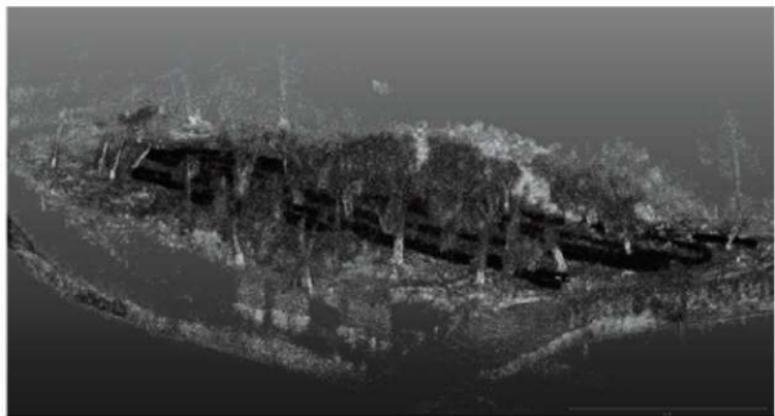


図175 SLAMによる森林内のGPR計測



図176 多チャンネルGPR

ことを試み、成果を得た（Kaneda and Yamaguchi 2019、図175）。実用化は今後の課題になるが、従来計測に時間がかかっていた対象物についても適用できることから、利用が進むと考える。

これらの技術の利用により、煩雑な測線設定を省略したり簡易化した作業工程での技術利用ができる。技術だけでなく、運用を含めて作業を簡素化、定型化することで作業効率を向上させたい。

これらの方針を基に、各地における探査で検証をおこない、課題を整理して次の調査に反映させた。

また、安定な走査とアンテナと地面の接地の向上によるデータの改善を目的として走査用のそりを改良した。

磁気探査については、GNSS機器やトータルステーションとの連携などの活用を進めている。また、窯跡を主な対象とした作業方法の改善も試行錯誤を続けている。岐阜県大垣古窯跡群窯下窯では、急斜面かつ森林内の探査であり、測線の設定に困難があった。このため、計測点に後続する補助者が目印となる竹串を地表に刺し、後それをトータルステーションで計測する方法で計測位置を記録した（金田2017）。計測された点が現地で明示化されることで作業の進行や、欠測点を減らすことに効果があった。

高解像度化への検討 地中内部のより詳細な情報を取得し、確認された異常部の検討を進めるため、探査成果の高解像度化を目的とした研究も進めている。

従来の手法においても、時間と手間をかけることによって達成できるものも多いが、作業効率の悪化を招くため、

新しい研究が必要と考えている。

効率的かつ公開增加については、センサーヤアントナのアレイ化と、連続計測での実施が考えられる。

地中レーダーについては、まず中心周波数200MHzのシステムを導入した（IDSStream-X200）。このシステムは8チャンネルのアントナを2台並列して最大16チャンネルの測線を同時計測可能な機材であり、アントナ間隔0.12m、幅1.8mで探査可能である。基本的には車載して用いることを想定しているため、遺跡探査においてはアントナを1台（8チャンネル）とし、専用に製作したそりに乗せて探査をおこなった。この機器は一般的な遺跡の埋没深度である地表化4m程度までを探査することが可能である。

次いでより高解像度の600MHzの機材を導入した（IDS Stream-C）。これは機械の進行方向に23チャンネルだけでなく、その直交方向に9チャンネルを加えた計32チャンネルのデータが取得可能である。アントナ間隔0.04m、幅0.96mの探査が可能であり、試験を進めている。今後遺跡の計測に合った改良をおこないたい（図176）。

磁気探査でも、4本のフラックスゲート型磁気センサーをアレイ化した機器を導入し、検討を進めている。

実際の探査事例 探査の事例も蓄積されつつある。発掘調査の事前情報収集では平城宮東方官衛地区や興福寺、大官大寺などにおいて対象地の探査を先行して実施し、調査区の設定などに必要な情報を提示している（奈文研2019・2020・2011・2022）。また、平城宮東方官衛地区では発掘調査後、未発掘地の情報収集もおこなった。

藤原宮の南側に位置し、藤原宮で用いられた瓦を焼成した日高山瓦窯では、既知の窯の他にも窯が存在する可能性が指摘されており、磁気探査・地中レーダー探査をおこなった。この結果、従来の範囲外にも磁気異常を有し地中レーダーの反射の強い箇所が存在することが明らかとなり、瓦窯の可能性がある部分を複数個所記録することができた（奈文研2022）。

金沢城では石川県立金沢城調査研究所との共同研究により、石垣内部の状況を地中レーダーおよび電磁探査(EM)法を用いて把握し、従来の知見などとの比較検討をおこない、歴史的な構造物の維持と安全に資する研究を進めている（金田2021）。

震災により石室が大きく改変を受けた熊本県上益城郡嘉島町の井寺古墳では、地中レーダー探査によって埴丘

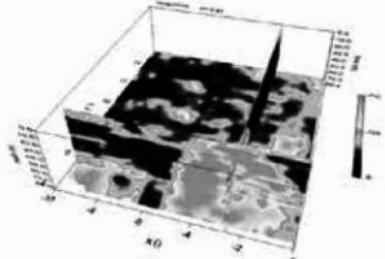


図177 井寺古墳での地中レーダー探査

内の石室構築に関する情報取得を目的とした探査をおこない、構築のための裏込石などの三次元での分布を示すことができた(図177)。

公開と活用 探査技術の適用については、主に遺跡内容の検討、発掘調査の事前の情報収集といった専門的な情報取得の方法としておこなわれているが、非破壊で遺跡の検討を可能とする手法であり、広く一般の活用や、市民科学としての活用も期待できる。

福岡県春日市との共同研究においては、須玖岡本遺跡内に所在する春日北小学校との連携により、授業の一環として校内の地中レーダー探査を児童中心におこなう試みをおこなった。文化財についての学習は歴史や地理など社会科の範疇に留まることも多いが、この試みでは、地質条件や電磁波といった理科の知識、電磁波の反射時間から地中の異常部の距離を計算する算数の知識といった多様な知識を知り、それを組み合わせることによって地下の情報をわかるといった点を伝え、学校での学びが社会の課題を解決する基礎となることを伝えることに重点を置き、好評を得た(図178)。これからも広く市民や学生・児童が文化財を通じて歴史は勿論のこと、研究や学びの



図178 学校との連携(活動を紹介する地域向けパンフレット)

楽しさや意義を感じていただける活動としての利用も進めたい。

参考文献

- 金田明大 2017 磁気・レーダー探査成果 大堂古窯跡群発掘調査報告書1 -平田洞古窯跡・大堂窯下古窯跡-
- 金田明大 2018 SLAM技術を用いた森林内遺構の迅速な計測 日本国文化科学大会研究発表要旨集 35th
- 金田明大 2021 金沢城敷地屋敷地区石垣探査について 金沢城跡石垣保存実態調査報告書2
- 奈文研 2022 日高山瓦窯の調査-第207-3次 奈良文化財研究所紀要2022
- 奈文研 2019 大官大寺南方の調査-第196・199次 奈文研紀要2019
- 奈文研 2020 大官大寺南方の調査-第199・203次 奈文研紀要2020
- 奈文研 2021 大官大寺南方の調査-第203・206次 奈文研紀要2021
- 奈文研 2022 大官大寺南方の調査-第206次 奈文研紀要2022
- A.Kaneda, H.Yamaguchi. 2019 Where am I in the Forest? Application of SLAM/LIDAR Technology to Measurement and Geophysical Survey of Archaeological Sites in Forest. Book of Abstracts 47th Computer Applications and Quantitative Methods in Archaeology.
- D.Goodman, Y.Nishimura and J.D.Rogers. 1995 GPR (Ground Penetrating Radar) Time Slices in Archaeological Prospection. Archeological Prospection 2

(8) 遺跡調査技術研究の動向と将来視点

はじめに、遺跡・調査技術研究室は、それまでの集落遺跡研究室、測量研究室、発掘技術研究室、遺跡調査技術研究室、そして遺物調査技術研究室のあとを受け、2006年4月の機構改編にともなって新たに設立した新しい研究室である。研究室の構成メンバーも設立以来徐々に変化しており、2020年度からは室長、主任研究員1名、研究員2名¹⁾の計4名による編成となっている。業務の主な枠組みは、前述の各研究室の伝統と蓄積を継承しつつ、1) 遺跡調査法そのものの研究や開発と、その調査法を活用した遺跡の調査・研究、さらに2) 文化財調査に関する技術の開発や、その技術を用いた調査・研究を進めるとともに、3) それらの手法や技術、さらに研究成果を活用するための調査・研究基盤の醸成である。本稿では、研究室の活動概要としての業務事例に触れつつ、将来的な指針について述べる。

業務の概要 前述の3つの枠組みに含まれる研究事業は、その性質から「基盤技術研究」と「活用技術研究」の2つに大別される(図179)。このうち基盤技術研究は、遺跡や文化財の調査に際し、基礎的あるいは基盤情報の取得の容易化・効率化を目的とし、その技術の探索や開発、さらに導入・活用までを対象としている。その研究事例の一つとして、発掘調査における調査(土層)断面註記(記載)における堆積物の土壤色相記載への技術開発研究が挙げられる。内容としては、調査現場へ土色計SCR-1(第一合成社製)や、MR(Mixed Reality)機器を導入し、複数測定点の計測、あるいは調査断面から画像デジタルデータを取得することにより、任意範囲の平均土壤色相

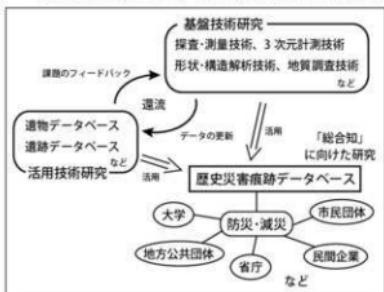


図179 研究事業の概要モデル

を算出する技術の開発を進めている。土壤の色相判定は、原則として新しく露出した土塊の面、または細かく粉碎された土壤を軽くおさえた平らな面についておこなう必要がある²⁾だけでなく、湿土の色と乾土の色を記載する必要がある³⁾。この要件を満たすためには、少なくとも発掘調査を進める中で、調査断面が確立していく段階(湿土状態)で、土色の測定あるいは判定とその記載を進めが必要があり、さらに風乾状態(乾土状態)のときに改めて土色の測定あるいは判定とその記載をおこなう必要がある。この要件は分析条件であるため変更することはできないが、調査現場を運営するうえで、大きな負担であることは間違いない。また土色の判定は、土壤中の有機物、あるいは土壤の1次または2次鉱物の組成、さらに理化学分析によってより正確に測定ができるが、この分析調査工程を確実に進行することも容易ではないだろう。前述の技術の確立と導入は、これらの問題の解決に対し有効であるだけでなく、調査者の間での色彩認識のずれに対しても有効である。このような基盤技術研究として、主に探査・測量技術、3次元計測技術、形状・構造解析技術、地質調査技術の調査・研究を進めている。

一方、活用技術研究は、遺跡や文化財の調査成果全般について情報を集成することによる、研究基盤の形成を目的としている。遺跡や文化財の調査対象は多岐にわたり、そのため多様な専門分野を形成し、その調査方法も成果の質といったものも千差万別である。一方で、分野ごとに評価基準の異なる調査対象も、背景にある社会性や生態系といった、より大きなまとまりのなかで全く異なる評価を得る可能性も多い。この認識は新たな研究視点の醸成を促すものである。たとえば土器の場合、形状や出土層位から型式や編年といった重要な情報だけでなく、構造から製作技法などへの視点、出土状態(症状)や共伴遺物から社会性や文化性、あるいは民族性への視点、さらに胎土や周辺地質との関係から、より大きな社会的力学への視点が生成される可能性がある。このような成果は、いわゆるビッグデータと呼ばれる膨大で様々な質の情報群を形成し、それらを活用するためには、網羅的に、多角的に、あるいは俯瞰的に情報を観察する必要がある。そしてそこには、継続的にあらゆる情報を蓄積したデータベースの構築が必要となってくる。このような活用技術研究として、遺物データベースや遺跡データベ

スなどの構築が進められるとともに、データ項目やデータの抽出方法についての調査・研究が進められている。

これらの研究業務では、基盤技術研究成果による研究方法やデータの更新を、活用技術研究の蓄積データへ反映し、さらにデータベースの構築によって「見える化」された課題を、さまざまな基盤技術研究の課題として吸収するという「還流」を生み出すように進めており、具体的な課題に対する明確な調査・研究を蓄積するよう心がけている。

調査と研究 本項では基盤技術研究と活用技術研究で進められている主な調査・研究技術について触れる（図180）。基盤技術研究のうち、探査・測量技術および3次元計測技術については、発掘調査に先行して遺跡の情報を捉える探査・測量と、発掘調査とともに、遺構や遺物の出土状態の記録技術の研究を進めている。探査・測量では、さまざまな周波数によるGPR（地中レーダー）の複合的解析だけでなく、探査機器についての開発も進む。同時に探査位置の精度を上げるため、GNSS（全世界測位システム）の導入や基地局の設置を進め、平城宮跡や藤原宮跡の発掘調査をはじめ、桜井茶臼山古墳、東大寺、中宮寺（いずれも奈良県）、胡桃館遺跡（秋田県）、台渡里遺跡（茨城県）、天良七堂遺跡、三軒屋遺跡（ともに群馬県）、伊勢国府跡（三重県）、芝生城（徳島県）、大宰府跡（福岡県）、西都原古墳群（宮崎県）、銅山製鉄所、苗代川窯（ともに鹿児島県）など多くの遺跡で、地方公共団体や大学と共同調査をおこない成果をあげた。とりわけ、伊勢国府での試行を基礎に改良を加えたGPR機器は、天良七堂遺

跡での総柱建物の確認、三軒屋遺跡での下層造構の形状の確認、平城宮での建物等の詳細の確認といった成果を生み、様々な地域での高精度な調査が可能となっている。

3次元計測では、SfM-MVS Photogrammetry（SfM多視点ステレオ写真測量）とLiDAR（光による検知と測距）計測の組み合わせによる、遺構と周辺地形の精密測量と記録をおこなうことにより、迅速かつ詳細な調査記録をおこなえるようになり、探査・測量技術と共に様々な発掘調査現場での適用が進む。

形状・構造解析技術では、前述の3次元計測技術に加え、碑文等の記録をより簡易にする「ひかり拓本」技術の開発が進み、対象物の表面形状について容易に迅速かつ高精細なデータが取得・記録できるようになった。加えて2019年の新守舎設立時に導入した高出力X線CTや、マイクロフォーカスX線CTを用いることで、対象物の内部構造についても高精細なデータを取得・記録することが可能となっている。さらには3次元解析アプリケーションや解析用ワークステーションの新規導入により、膨大な容量となるデータについて、高速かつ高精細で解析できるようになった。具体的には、表面形状計測では数μm誤差でデータを取得・解析できるようになり、高出力X線CTでは0.1mm³程度、マイクロフォーカスX線CTでは8~20μm³程度の解像度で内部構造を観察できるようになった。このように表面構造から内部構造までを、高精細に観察・記録できるようになった効果は極めて大きい。その成果事例の一つとして、金井下新田遺跡（群馬県）の事例が挙げられる⁴¹。この遺跡では、火山灰堆積物に半

【基盤技術研究】

探査・測量技術 [GPR（地中レーダー）、GNSS（全世界測位システム）、LiDAR（光による検知と測距）、

3次元計測技術 [SfM-MVS Photogrammetry（SfM多視点ステレオ写真測量）など

形状・構造解析技術 [3Dスキャナ（LiDAR型、SfM-MVS型）、ひかり拓本、顕微鏡（実体、生物、偏向）、

SEM（走査型電子顕微鏡）、高出力X線CT、マイクロフォーカスX線CT、

3D解析アプリケーション（レンダリング、密度解析、ボイド解析）、解析用ワークステーションなど

地質調査技術 [土壌硬度計測、土壌水分計測、土壌色相計測、秤量、灼熱減量計測、粒度組成分析（篩式、レーザー回折式）、

堆積構造解析（低エネルギーX線撮像、高出力X線CT、マイクロフォーカスX線CT）、X線回折（XRD）、

蛍光X線分析（SEM-EDX、XRF）、粒子観察・計測（顕微鏡、SEM）、3D解析アプリケーションなど

【活用技術研究】

データベースの構築と公開：古代官衙・寺院遺跡データベース、歴史災害痕跡データベース

その他：山内清男考古資料

図180 各研究事業における主な研究対象技術

ば埋没した白玉群が出土した。それを堆積物とあわせて高出力X線CTで撮像し、内部の観察と記録をおこなった。その結果、白玉群の3次元的な埋蔵状態や、白玉内部に通された太さ1mm以下のいわゆる「諸然りの紐」と考えられる紐の存在が観察され（図181）、遺物取り上げの際にその存在が目視確認された。このように、文化財の表面形状や内部構造について、非破壊で迅速かつ高精度にデータを取得し、さらに3次元的データとして形状を解析する技術研究が蓄積し、より一層高度な研究が進んでいる。

地質調査技術は、2014年度から開始された比較的新しい研究課題である。遺跡の様々な堆積物に加え、ボーリング・コアなどの地質調査試料から、1) 遺構の性状や堆積環境の変遷、2) 遺跡を含む周辺の景観を明らかにすること、さらに3) そのための技術の導入・開発を目的としている。主な研究技術は多岐にわたる（図180）が、第四紀学や農学、土木工学といった、考古学同様いわゆる「表層地質」を扱う隣接分野の技術と共通する。ただしこれらの技術を考古調査に取り込むことにより、明確な根拠をもって遺構を評価できるようになっただけでなく、遺跡の立地や景観、遺構の性状やその変遷について、周辺の地形発達史のなかで読み取ることができるようになった。その成果は単に遺跡の評価にとどまらず、埋蔵文化財の活用にむけた技術としても重要性を増している。

活用技術研究は、データベースの構築と公開を通じ、研究基盤の形成と新たな人文科学的な研究の醸成を進めている。「古代官衙・寺院遺跡データベース」では、古代の寺院や官衙関連遺跡などの資料の収集整理とともに、

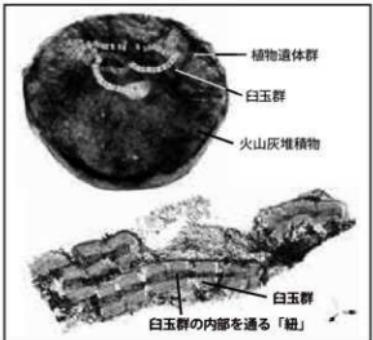


図181 金井下新田遺跡・出土 白玉群の高出力X線CT撮像

遺跡の性格認定の指標や、発掘調査で抽出すべき基本的属性についての研究を進め、研究所のホームページからその成果を一般に公開している。さらに都城発掘調査部と協力して古代官衙集落研究会を開催し、その研究報告成果の編集・刊行を継続している。

また、縄文土器編年の標準資料を含む山内清男氏の研究資料の一部が、本研究所には寄贈されている。この貴重な「山内清男考古資料」を多くの研究者に活用してもらうため、保存整理とともにデータベースの構築を進めている。

これらの人文学的な取り組みに加え、様々な分野や立場の垣根を取り払って課題の解決に取り組む「総合知」に向けた研究も進めている。2014年からスタートした「歴史災害痕跡データベースの構築・公開」事業は、同年の文部科学省の科学技術・学術審議会の建議によって始まった、地震・火山噴火予知研究協議会の「災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画」の一部である。この事業は、地質学の観点から遺跡の研究を進め、過去の災害痕跡を捉え、地域の災害履歴や被災情報を集成したデータベースを構築するもので、遺跡から未来の防災や減災に繋がる知見を得ようとするものである。そしてこのデータベースの構築や活用には、様々な分野と立場の人間が「防災・減災」をキーワードに関わっており、「総合知」の醸成の場となっている（図179）。

新たな取り組みと将来に向けた研究指針 本研究所には、遺跡や文化財の多岐にわたる調査対象に合わせ、様々な分析機器が存在する。現状では、調査の局面ごとに調査者の関心に従ってそれらの機器が使用されるに過ぎない。しかしデータベースの構築を通じ、遺跡であれば位置や深度情報、遺構を構成する堆積物の粒度組成や堆積構造など、遺物であれば表面形状や内部構造の3次元情報などの、共通基盤データが必要となることが課題として見えてきた。そこでまず遺物を中心に、いくつかの分析機器を組み合わせ、調査をする際には形状や内部構造を記録する「見える化ライン」の構築を進めている（図182）。この初期検査にあたる「見える化ライン」で所見を得ることは、その後の的確な調査方針の設定や分析処理に結びつくことになる。またこのように多岐にわたる分析機器（図183）が、1つの場所に集約していることは一般に少なく、将来的な体制として、既存の機器類を組

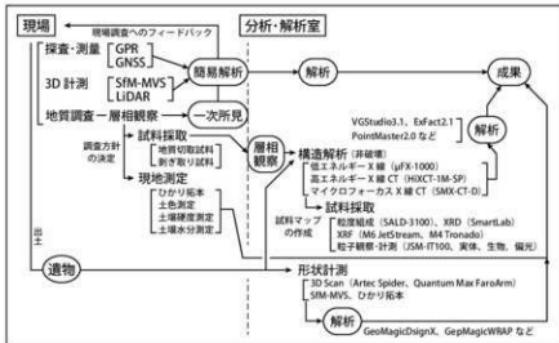


図182 「見える化ライン」のモデル図



図183 「見える化ライン」で重要な主な機器類

み合わせることにより「見える化ライン」につながるさらなるオプションを増やし、対外的組織との連携をはかり、より効率的で生産的な研究プラントの醸成を進めていきたい。

註

- 研究員のうち1名は、独立行政法人国立文化財機構文化財防災センター所属（当研究室は併任）。
- 農林水産省農林水産技術会議事務局監修 2014 「新版標準土色帖 36 版」日本色研事業株式会社。
- 前掲註 2、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖 36 版」。
- 村田泰輔 2021 「8. X 線 CT よる非破壊構造解析の有効性－白玉資料群の事例－」『金井下新田遺跡（古墳時代以降編）』、公益財團法人馬県埋蔵文化財調査事業団報告書、第 689 集、pp.375-384。

(9) 環境考古学の調査研究

環境考古学研究室では、遺跡出土資料の調査研究、発掘調査や整理作業、報告書作成の協力および助言、文化財担当者を対象とした研修などの普及・啓発、現生標本の収集と公開などを行っている。表13は、2012~2021年度の10年間における主要な分析成果である。ここでは、環境考古学研究室がこの10年間でとくに推進した「古代都城に関する研究」、「東日本大震災の復興支援」、「普及・啓発」について紹介する(図184)。

1) 古代都城に関する研究

古代の食 藤原宮造営期の運河から、マダイやサメ類の骨が出土した。マダイの主上顎骨には、刃物による痕跡とみられる切断痕や線状痕が認められた。主上顎骨とは魚類の上顎後方に位置する骨で、頭部を割っていることから、出汁やうま味を取っていたものと推測される。また、ニホンジカやウマの骨にも肉の切除や削ぎ落しをした痕跡が認められた。

平城宮東方官衙地区の廐棄土坑からは、ウニ類の殻板やサザエ、クボガイやコシダカガンガラの蓋や貝殻が見つかった。ウニや海産巻貝が平城宮へ殻ごと持ち込まれる場合もあったことがわかった。

西大寺食堂院の井戸からは箸・杓子などの食事用具、皿・椀などの食器、食料や食材に関わる木簡・植物種実などの食料残滓が出土しており、当時の寺院における食生活がうかがえる一括性の高い資料群として知られる。これらの資料群の中に、コイ科、サケ科、ボラ科、マイワシ、アジ科、サバ属、カサゴ亜目といった多種多様な魚の骨などが含まれていたことが明らかとなった。また、ドブネズミやアカネズミといったネズミの全身骨格がまとまって出土しており、ネズミが食堂や食料貯蔵施設のある食堂院周辺に生息していた可能性がある。

都城造営を担った馬 藤原宮跡の運河SD1901Aは、主に木材の搬入を目的として直線的に掘削された人工的な水路である。この運河から、脚部への過重負担による重度の関節炎(飛節内臓)を患う骨を含む多量な馬の骨が出土したことから、造営資材の運搬を馬が担っていたことが示唆される。出土した馬は、満年齢で3歳以上のオスであり、藤原宮・京は史料にみえる典型的な「馬の利用・消費地」に該当する。同位体分析により、こうした使役に用いられた馬であっても、東日本内陸部で産まれた個体が多いことが明らかとなった。また、出土状況や骨に残る痕跡から、これらの馬は解体され、脳や皮、肉など様々な資源が回収されていた。東京大学との共同研究による成果は、「藤原宮跡出土馬の研究」(奈良文化財研究所研究報告第17冊、2016年)にまとめた。

表13 主要な分析成果

遺跡(所在地)	時代	報告書 刊行年度	研究内容
渡慈童館遺跡 (宮城県)	縄文時代前～中期	2021	季節的に来遊するマグロ属やマイワシなどの回遊魚が多く出土したのに対して、哺乳類や鳥類の出土量が非常に少ないとから、短期的な動物利用の可能性がある。
台の下貝塚 (宮城県)	縄文時代中～後期	2020	近接する渡慈童館遺跡と比較すると、マグロ属の出土量が激減して、イノシシやニホンジカの出土量が増加するという時期的な差異が認められ、集落形態の変化が示唆された。
金井東畠遺跡 (群馬県)	古墳時代	2018	小札、鉄鎌や鉄鋤鋏具、刀子柄など鹿角素材が多用されていた。とくに小札や鉄鋤鋏具は大型の鹿角を素材としていた。
金井下新田遺跡 (群馬県)	古墳時代	2021	火碎流で人とともに被災した馬、鹿角製品の製作に関わる集積した鹿角、食料残滓と考えられるコイ科魚類などが出土した。
前田耕地遺跡 (東京都)	縄文時代草創期	2020	東京都教育委員会の所蔵資料を再検討した結果、集中的に漁獲したサケの頭部を処理した可能性があり、マグロ属やシカ科などを対象とした狩猟もおこなっていた。
六反田南遺跡 (新潟県)	縄文時代中期	2017	廐棄域から出土した大量の焼骨を分析した結果、集中的なサケの漁獲とともに多様な海面漁獲をおこなっていた。
小竹貝塚 (富山県)	縄文時代前期	2013	遺跡至近の淡水～汽水域における狩猟や漁撈が中心であるが、富山湾でイルカ漁も積極的におこなっていた。また、漆製品に鰐の歯を象嵌していた。
保美貝塚 (愛知県)	縄文時代晩期	2016	イノシシやニホンジカを中心とした狩猟活動とともに、遺跡周辺の河口や澗内だけでなく、澗口部も漁場とする漁業活動をおこなっていた。
藤原宮跡 (奈良県)	古代	2015 2017	藤原宮造営期の運河から数多くの馬が出土し、重度の関節炎(飛節内臓)を患う骨も含まれることから、資材運搬を担っていたと推測された。
西大寺食堂院 (奈良県)	古代	2021	食堂院の井戸から、食事用具や食器、食料・食材の木簡・植物種実などとともに、多様な魚類が出土した。また、駆除されたと考えられるネズミも見つかった。

都城以外の様相 古墳時代～古代の出土貝類の報告事例が蓄積されている上総・下総国域を事例として、千葉県域内の91遺跡565遺構から出土した約64万個体の貝類を集成した。沿岸部では基本的に集落周辺に生息する貝類を採集・消費しており、海岸環境の違いを反映して多様性が認められた。そして、大量の殻付き貝類が陸路で内陸部まで運ばれていた。分水嶺を越える新鮮な貝類の運搬は、奈良時代の大規模な開発・移入の影響と考えられる。中核的な遺跡や遺構で他とは異なる貝類が出土することから、地方においても貝類利用の階層差が存在した可能性がある。

製塩遺跡として著名な福井県の浜福遺跡では、古墳時代前期後半～中期前半に製塩活動とともに、遺跡周辺の岩礁域を中心として多種多様な採貝活動をおこなっていた。中期後葉～後期前半になると、貝層規模が増大して、貝種がサザエ・イガイ・アワビに集中する。多種多様な採貝活動から選択的な採貝活動に変わり、「自家消費的な採貝活動」から「供給のための採貝活動」への変化していた。本簡に記載された貝類とも共通のことから、律令制下に若狭国から貢進された海産物は、すでに古墳時代前期後半～中期前半から供給されていた品目であった可能性がある。古墳時代後期中頃になると採貝活動は低調化し、若狭で製塩活動が最盛期となる奈良時代前半には、貝層が形成されなくなるほど採貝活動が停滞した。土器製塩が拡散して盛期を迎えるにつれて、採貝活動は低調化しており、浜福遺跡が製塩活動に特化する様相がうかがえる。**植生復元** 花粉分析を継続的に実施するとともに、奈良県域におけるこれまでの花粉分析の結果を集成した。その結果、古墳時代中期から木本花粉全体が減少はじめ、古墳時代後期～飛鳥時代にアカガシ亜属が減少し、イネ科が増加しており、森林の減少とともに草地の拡大という変化が認められた。また、「花粉分析からみた都城造営と植生変化」(埋蔵文化財ニュース184、2021年)を編集・刊行して、奈良県域だけでなく、大阪府域、京都府域、滋賀県域における花粉分析の集成的な研究成果を寄稿していただき、研究成果を比較検討した。

2) 東日本大震災の復興支援

東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査で求められる支援内容は、発掘調査、整理作業、報告書作成、展示活

用など時間とともに変化した。環境考古学研究室では、発掘調査や整理作業などの現場に対する直接的な支援と、迅速で適切な調査を支えるための間接的な支援という2つの側面から継続的な活動に取り組んだ。

直接的な支援 宮城県気仙沼市(波怒廬館遺跡、台の下貝塚、磯草貝塚)、岩手県陸前高田市(堂の前貝塚、雲南遺跡、中沢遺跡、中沢浜貝塚)の計7遺跡に携わり、約16万点の出土資料を分析・報告した。

発掘調査や整理作業では、一定の水準を確保しながら予定期間内で作業を終了できるように計画を立案した。また、出土した動物遺体や骨角器の分析や報告書作成をおこなうとともに、展示で活用できるような写真を撮影して、展示解説の執筆に協力した。

間接的な支援 復興に伴う発掘調査では、迅速な調査が求められていた。そのため、多くの発掘現場では動植物遺体が出土したとしても専門家に相談する時間も残されていなかった。そこで、動植物遺体が出土した際の具体的な調査方法や留意点をまとめた現場マニュアル(携帯版「現場のための環境考古学」)を作成して、地元職員や全国からの派遣職員へ配布した。

また、震災を機に、地震や津波など、地中に残る過去の灾害痕跡の調査手法を知りたいという要望があつたため、文化財担当者研修で「災害痕跡調査課程」を開講し、灾害痕跡の調査や記録に関する講義も行った。

沿岸部の博物館で多くの所蔵図書が失われた状況に対し、日本動物考古学会員へ協力を呼びかけ、動物考古学に関する論文の別刷やコピー、発掘調査報告書といった約1,300点の文献を岩手県の陸前高田市立博物館と崎山貝塚繩文の森ミュージアムへ寄贈した。各博物館で管理しやすいように目録を作成し、整理した上で送付した。

3) 普及・啓発

現生骨格標本 動物遺体の調査研究には、質・量とともに充実した現生動物の骨格標本が必要になる。現生標本を継続的に製作・収集するとともに、より広く活用されるように標本目録を刊行した(『貝類標本リスト』埋蔵文化財ニュース163、2016年)。この10年間で標本調査に来た国内外の研究者は、延べ人数で約100名に及ぶ。また、遺跡から出土する主要な哺乳類の全身骨格について3次元画像(3D Bone Atlas Database)を奈文研HPで公開した。

2016年からこれまでのダウンロード数は15万を超える、現在でも毎月2,000～3,000件の3次元画像がダウンロードされている。

研修 文化財担当職員に対して、動植物遺体や人骨、低湿地遺跡、災害痕跡、堆積学や地質学、自然科学分析の外注に関する研修を実施した。また、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）の研修に協力し、環境考古学や動物考古学に関する講義を行った。また、研修内容をわかりやすく紹介した『環境考古学研究室の研修紹介』（埋蔵文化財ニュース170、2018年）を作製した。

展示 環境考古学研究室の調査研究を紹介する「骨ものがたり—環境考古学研究室のお仕事」の展示が飛鳥資料館

で開催された（2019年度春期特別展）。『普段は見ることのできない研究の舞台裏を知ることで、歴史や考古学を身近に感じてほしい』というコンセプトで、展示室に研究室を再現し、研究成果よりも研究過程を見せる展示をおこなった。展示やイベントの記録を丁寧に残すことも意識して、展示図録（『骨ものがたり—環境考古学研究室のお仕事』飛鳥資料館第71冊、2019年）とともに、イベント記録（『研究を身近に感じてもらう取り組み—「骨ものがたり」展のイベント記録』埋蔵文化財ニュース180、2020年）、展示準備や会場設営、広報物、アンケート結果などをまとめた記録（『骨ものがたり—飛鳥資料館学芸室のお仕事』飛鳥資料館研究図録第23冊、2020年）の編集・製作にも携わった。



図184 環境考古学研究室の活動

(10) 埋蔵文化財センターの10年

保存修復科学研究室 文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究および調査手法の研究・開発を推進している。

出土遺物等の材質構造調査、埋蔵環境調査および保存処理の開発研究として、標準試料ならびに顔料、ガラス製品、石製品、紙資料のラマンスペクトルの取得、迅速な元素マッピング機能を有する蛍光X線分析システムの考古遺物への応用、木造建造物の塗装彩色調査、金属製造物の埋蔵環境調査および鉄製造物の腐食挙動の研究と新規脱塩法の最適条件の検討、炭化した紙のラマン分光分析による炭化温度の推定、紫外線スキャナの開発研究、古代寺院出土の建築金具の材質・技法調査、考古遺物の新たな材質調査法としてレーザーアブレーションICP-MSの適用可能性に関する検討、木製造物の一時保管中の水質に関する基礎データの収集、出土漆製造物に対するトレハロース含浸法の基礎研究、大型木製造物の薬剤含浸速度を定量的に把握し、向上させるための基礎実験、考古遺物の分析方法の標準化を目指した取り組みといった調査・研究を中心に取り組んだ。

文化財の非破壊材質構造調査法の応用研究として、文化財に用いられている材料のテラヘルツ波分光スペクトルの収集とサブミリ波イメージングによる調査、核磁気共鳴法とテラヘルツ波分光イメージングの比較研究を進めている。

また、保存修復科学研究集会として2012年「古代の織維-古代織技術研究の最近の動向」、2013年「文化財の収藏・展示環境」、2014年「石造文化財の劣化と保存に関する新たな展開」、2015年「出土木製造物の保存に関する最近の動向」、2016年「文化財調査におけるイメージング技術の諸問題」、2017年「金属製造物の調査・研究に関する最近の動向」2018年「同位体比分析と産地推定に関する最近の動向」、2020年「遺跡保存に関する最近の動向」を開催した。

環境考古学研究室 環境考古学研究室では、動物考古学を中心に環境考古学の調査研究を実施し、国内外の発掘調査や整理、現生動物骨格標本の収集と公開、普及・啓発などの諸活動を進めている。

堂の前遺跡、中沢遺跡、中沢浜貝塚（以上、岩手県）、神谷地・小出遺跡（秋田県）、磯草貝塚（宮城県）、南鴻沼

遺跡（埼玉県）、丸山B遺跡（東京都）、町上遺跡（新潟県）、石船戸遺跡（新潟県）、大曲輪貝塚（愛知県）、木曾田遺跡（三重県）、公家町遺跡・相国寺旧境内（京都府）、纏向遺跡、興福寺、旧大乘院庭園（以上、奈良県）、東名遺跡（佐賀県）などから出土した動物遺存体の分析を実施して、報告書を執筆した。

研究成果の発信では、World Archaeological Congress、日本学術会議、日本考古学協会、日本文化財科学会、日本動物考古学会、日本植生史学会、日本哺乳類学会、日本魚類学会、生き物文化誌学会などで発表をおこなった。また社会還元や普及事業として、東京都、新潟県、石川県、福井県、愛知県、三重県、奈良県、大阪府の博物館などで一般向けの講演や、中学生の職場体験、親子のための奈文研たんけんツアーなどもおこなった。

年代学研究室 年代学研究室では、考古学、建築史学、美術史学、歴史学等の研究に資するべく、出土遺物、建造物、美術工芸品等、多岐にわたる木造文化財の年輪年代調査をおこなっている。また、標準年輪曲線の拡充による木造文化財の産地推定や、年輪年代学的手法による同一材の推定、マイクロフォーカスX線CTを用いた非破壊調査手法の活用等、年輪年代学に関する基礎研究や年輪年代学を応用した文化財の科学的分析手法の研究開発もおこなっている。

マイクロフォーカスX線CT装置を用いた木造神像彫刻や木彫仏像の非破壊年輪年代調査の成果を『埋蔵文化財ニュース』150号として刊行した。

遺跡・調査技術研究室 遺跡・調査技術研究室は、2006年4月の機構改編により、遺跡およびその調査法の研究と文化財の調査技術の開発・応用を主要な業務とする研究室として再出発した。過去に存在した集落遺跡、測量、発掘技術、遺跡調査技術、遺物調査技術の各研究室の伝統と蓄積を継承した研究の推進を目的としている。

遺跡およびその調査法として、古代寺院・官衙関連の遺跡、遺構の資料を収集・整理するとともに、抽出すべき基本的属性についての研究、データベース化を実施している。また、古代官衙・集落研究集会を開催した。このほか、文化庁の委託を受けて、「発掘調査のてびき-各種遺跡調査編-」の編集をおこなった。

III. 奈文研MVS

奈文研 MVS2022

はじめに 一いま、なぜ MVS なのか？—

いま、人々は文化財・文化遺産¹⁾に対して多様な価値を見出そうとしています。「わが国の歴史・文化等の正しい理解のため欠くことのできないものであり、かつ、将来の文化の向上発展の基礎をなす国民的財産である」という従来の捉え方にとどまらず、「地域振興やまちづくりの中核に位置付け、地域の文化資源・観光資源としての役割に注目し、積極的に活用していく」との視点の下に、多様な試みが始まっています。同時に、文化財・文化遺産は文化的・社会的資本であるとともに、自然と人間の営みの中で育まれ、相互の絶妙なバランスの下に維持・継承されてきた存在であるといってもよいでしょう。

このように、文化財・文化遺産は多様な価値と機能・役割をもち、人々が文化的に豊かな社会を構築し、それを維持していく上で、かけがえのないものであることから、持続可能でより良い社会の実現を目指す世界共通の目標「持続可能な開発目標」(SDGs)²⁾の理念にかなうものだといえます。つまり、文化財・文化遺産に関する調査研究を進め、それらの価値を明らかにすることが、SDGsの目標である「持続可能な社会の実現」に貢献するものだと言ってよいのだと思います。

文化財・文化遺産は、保存し継承する努力を怠れば失われてしまいます。逆に言えば、文化財・文化遺産も適切に保存・活用し、次世代へと継承する努力をおこなえば、将来にわたり、その価値を享受し続けられることを意味します。つまり、文化財・文化遺産を適切に保存・活用し、次世代へと継承すること自体が、SDGsの理念にかなうものだといえるでしょう。奈文研には調査研究を通じて文化財・文化遺産の価値を明らかにし、適切な保存・活用と次世代への継承に寄与することにより、「持続可能な社会の実現」に貢献することが求められています。

このような奈文研に対する社会的要請の変化とともに、長引く経済的な低迷、人口減少、世界的な環境変動、頻発する災害、新型コロナウイルス感染症の大流行、ロシアのウクライナ侵攻をはじめとする激動の国際情勢など、日本と奈文研をとりまく状況も大きく変化し、不確実性



図185 奈文研の“Mission”, “Vision”, “Strategy”

を増しています。

そのため、奈文研創立70周年にあたり、私たちはこれまでの歩みを振り返り、現状を正しく認識したうえで、①社会的使命を明確にし、②今後どのような姿を目指し、③その実現のために何を行うのかを明らかにしたいと思います。それを、奈文研の①Mission：ミッション、②Vision：ヴィジョン、③Strategy：ストラテジーとして公表することとします。

1. 奈文研の M (ミッション)：使命・存在理由

以下に示すとおり、奈文研は国民からの要請に応え、文化財・文化遺産の価値を明らかにするとともに、その保存・活用の施策に確実に寄与することを通じて、地域社会の持続可能な発展に貢献します。

奈文研は、

- ①わが国の文化財・文化遺産に関する総合的な調査研究を通じて、それらを適切に保存・活用し、次世代へと確実に継承するうえで必要とされる知識・技術の基盤を形成します。
- ②全国の文化財・文化遺産の保存・活用に関する諸施策を発展させるために、ナショナルセンターとしての役割を發揮します。

2. 奈文研のV(ヴィジョン)：10年後のすがた

奈文研は、①サステイナビリティ(Sustainability:持続可能性)、②バランス(Balance:調和性)、③クリエイティビティ(Creativity:創造性)の3つのキーワードの下に調査研究を豊かに発展させ、信頼性の高い成果を地域社会に還元できるよう努め、ミッションを達成します。

そして、文化財・文化遺産を適切に保存・活用し、次世代へと確実に継承していくために、国内外からの要請に応え得る必要不可欠な調査研究センターであることを目指します。

は地域経済の発展に資するプランニング・マネジメント等の社会科学の分野をも視野に入れ、調和のとれた調査研究の基盤を築いてまいります。

③クリエイティビティ(創造性)

文化財・文化遺産の価値を保存し、適切な状態を維持するのみならず、広くそれらの活用をも視野に入れ、新たな価値の創造に寄与する調査研究を行います。調査研究の各分野においては、地域社会への貢献を念頭に置いた多様なテーマを設定し、創造性のある調査研究を目指します。

3. 奈文研のS(ストラテジー)：実現の手法



図186 “SDGs”と3つの“サステイナビリティ（持続可能性）”
—奈良文化財研究所が果たす役割—

奈良文化財研究所は、SDGsの理念・精神を前提として、①～③の確実な維持に寄与し、④の増進に貢献します。⑤が増進すれば、①～④がさらに強化され、結果として奈文研に豊かな実りをもたらすことになります。

①サステイナビリティ(持続可能性)

「誰一人取り残さない」という国際連合の「持続可能な開発目標」(SDGs)の理念・精神を踏まえ、文化財・文化遺産とそれらの保存・活用の施策の持続可能性の維持に寄与し、以て地域社会の持続可能性の増進に貢献できるよう努めます。その過程を通じて、私たち奈文研は自らの組織の体力を向上させてまいります。

②バランス(調和性)

時代に即応しつつ、必要とされる新たな分野を調査研究の対象に組み入れ、全体として調和性のある事業の推進に努めます。考古・歴史等の人文科学の分野に軸足を置きつつ、分析・環境等の自然科学の分野を加え、さらに

A) 文化財・文化遺産の評価と、保存・活用のための基礎的な調査研究の実践

B) 総合知に基づく文化財・文化遺産の研究領域の開拓と調査技術・手法の開発

C) 文化財・文化遺産に関する情報・資料の集積と未来への継承

D) 集積された調査研究及び開発の成果、文化財・文化遺産に関する情報の地域社会への還元・普及及び地域社会との連携・協働

組織経営の分野では、A)からD)の4本の柱の下に調査研究を円滑に進め、ナショナルセンターとしての役割を果たすため、E)の柱の下に体制の整備と施策の計画

的実施に努めます。

E) 奈文研の組織としての体力向上を図り、ヴィジョンの実現を図るために運営体制の整備と諸施策（アクションプラン）の策定・実施

◆調査研究

A) 文化財・文化遺産の評価と、保存・活用のための基礎的な調査研究の実践

これまで奈文研は、古社寺が所蔵する古文書類の記録化、歴史的建造物及び伝統的建造物群に関する詳細な知見の集積をはじめ、発掘調査等による平城宮跡・藤原宮跡の構造及びその歴史的変遷の解明など、さまざまな基礎的な調査研究の分野で多くの創造性のある成果をあげてきました。それらの出発点は、文化財の宝庫である奈良の地の多様なフィールドにあったことも事実です。

このような奈文研がおこなう基礎的な調査研究は、対象とする文化財・文化遺産の価値そのものを明らかにするのみならず、フィールドでの実践を通じ、社会的要請に即応して奈文研自らが開発した新しい調査研究方法及び文化財・文化遺産の保存手法に関する的確な知識・技術等の確立を促し、それらをより良いものへと更新するという役割を担ってきました。そのため、多様なフィールドに恵まれた奈良の地に立地するという奈文研の特性は、調査研究を進めるうえで大きな利点となってきたのであります。今後とも最大限に活かされるべきものと考えます。

また、地域社会では史跡・名勝等の文化財・文化遺産の積極的な活用が試みられており、参考とすべき活用の事例・手法に関する情報が求められている現状に鑑みれば、従前の保存に軸足を置く調査研究に加え、適切な活用に関する知識・技術を確立していくことが求められます。例えば、平城宮跡資料館及び飛鳥資料館をサイトミュージアムの中核施設として位置付け、フィールドを活かした史跡・名勝等の文化財・文化遺産の活用に関する実践的な調査研究を推進することも重要です。

このような基礎的な調査研究は、文化財・文化遺産を適切に保存・活用し、次世代へと確実に継承する観点から、文化財・文化遺産そのものの持続性可能性を維持していくうえで必要不可欠のものであり、奈文研の調査研究活動の根幹をなすものです。

- 1) 歴史資料・書跡資料に関する調査研究
- 2) 建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究
- 3) 史跡・名勝の保存・活用とそのための整備に関する調査研究
- 4) 平城宮跡・飛鳥・藤原宮跡等の発掘調査による古代の都城遺跡に関する調査研究
- 5) 文化的景観の保存・活用とそのための整備に関する調査研究
- 6) 全国の埋蔵文化財に関する基盤的な調査研究

B) 総合知に基づく文化財・文化遺産の研究領域の開拓及び

調査技術・手法の開発

保存科学、年輪年代学、地下探査法、動物考古学、写真測量などのように、奈文研で開拓・開発が進められ、その後、全国に普及していった調査研究及び技術・手法が多くあります。文化財・文化遺産を取り巻く状況が変化し、文化財・文化遺産に求められるものが多様化する中で、奈文研には、考古・歴史等の人文科学の分野のほかに、分析・環境等の自然科学の分野を加えるとともに、地域経済の発展への寄与も考慮し、いかに総合的で調和のとれたプランニング・マネジメントの手法を編み出すのか、という経済学や社会学等の社会科学の分野をも視野に入れるなど、諸科学の融合・変革を通じて生み出される「総合知」によって新たな研究領域を開拓し、調査研究の新しい技術・手法を開発することも求められています。

新たな研究領域の開拓は、文化財・文化遺産がもつ新たな価値を明らかにし、それらのより多面的な評価を可能とするものです。また、新たな調査技術・手法は、それまで不可能だとされてきたことを可能にするとともに、情報を効率的に取得することにより、調査研究とそれに基づく文化財・文化遺産の評価及び保存・活用の施策をより精度の高い的確なものへと充実させる環境をもたらします。

科学・技術の進歩が著しい現在、開拓・開発したものが時代遅れとなり、陳腐化する速度も加速している一方、水中遺跡の保存・活用及び文化財・文化遺産の防災などの新たな研究領域及び三次元計測・「ひかり拓本」^{③)}・情報通信技術を用いた普及・啓発手法などの新たな技術・手法を求める声には依然として強いものがあります。また、保存科学、環境考古学、年輪年代学、地下探査法な

どの既に成熟した分野においても、新たな研究の動向及び応用への模索が続けられているほか、新しい研究手法・分析技術も開発されるなど、常に学術的な進化が見られます。そのため、海外の動向なども踏まえつつ、常に新しい知識・技術をもとに社会的要請に確実に応えていくことが必要です。

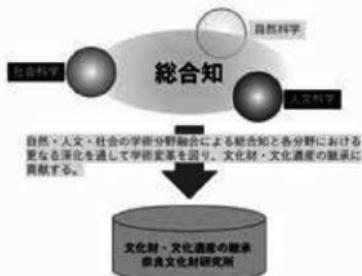


図187 総合知による文化財・文化遺産の継承

- 1) 高精細デジタル撮影で取得された情報から必要な画像を形成する方法等の開発
- 2) 埋蔵文化財の調査手法の開発
- 3) 年輪年代学を応用した木質文化財の科学的分析方法の開発
- 4) 動植物遺存体の分析方法の開発
- 5) 文化財・文化遺産に関する調査研究の成果を社会・教育に実装するための情報通信技術を用いた普及・啓発手法の開発
- 6) 文化財・文化遺産や地質情報等をもとにした防災・減災・復興・復旧の調査研究
- 7) 文化財・文化遺産の保存修復及び保存技術等に関する調査研究
- 8) 水中遺跡に関する調査研究

C) 文化財・文化遺産に関する情報・資料の集積と未来への継承

文化財・文化遺産の持続可能性の維持に必要な知識・技術の基盤を形成するため、文化財・文化遺産に関する情報の集積・継承を効果的に進めることができます。

奈研には既に膨大な量の多様な文化財・文化遺産に関する情報が存在し、さらに増加の一途を辿っています。効率的に情報を収集するのみならず、それらを利用可能な状態に整理したうえで、安全に保管しつつ将来に継承

していくことが喫緊の課題です。そのため、情報学的な研究及び文化財・文化遺産分野における多言語化研究を推進するとともに、近年目覚ましい進歩を遂げた情報通信技術の活用及び情報関連施設・機器の効果的な整備の在り方についても検討をおこなうこととします。また、国内外の諸機関との連携・協力の体制及びネットワークを構築していくこととします。

同時に、奈研自体の調査研究で生み出された報告書などの調査研究・開発の成果物、図面類、文化財画像データなどの文化財情報、出土遺物などの文化財資料も増え続けており、確実に利用できるよう整理したうえで安全に保管するという内なる文化財情報・資料に関する持続可能性の維持に努めることとします。

- 1) 文化財・文化遺産に関するアーカイブや文化財・文化遺産情報データベースなどの情報基盤の整備・充実による文化財・文化遺産に関する情報の集積と継承
- 2) 文化財・文化遺産の調査研究成果の多言語化研究の推進
- 3) 奈研の調査研究過程で生じる文化財写真などの文化財情報、出土遺物などの文化財資料の適切な保管と継承

D) 集積された調査研究及び開発の成果、文化財・文化遺産に関する情報の地域社会への還元・普及及び地域社会との連携・協働

奈研が集積した文化財・文化遺産に関する信頼性の高い知識・技術をバランスよく還元・普及させるためには、社会的な要請に基づきつつ、報告書の公開、研修事業の実施、平城宮跡資料館・飛鳥資料館等における展示・公開、大学等との連携教育プログラムによる若手研究者の育成、Web・講演会等による多元的な情報発信に努めること等が必要です。また、多言語による情報発信を推進することにより、国際社会における知識・技術の還元・普及の障壁ともなっていた言語に関する障壁を低減することも可能となります。さらには、文化財・文化遺産に関するアーカイブ及びデータベース等の情報基盤の整備・充実に努め、Webによる公開を進めることも重要です。これらを実現することにより、奈研が集積した文化財・文化遺産に関する膨大な量の知識・技術を社会に還元・普及することが可能となり、国内のみならず海外も含め

広く文化財・文化遺産の持続可能性の維持に貢献するこ
とが可能となります。

奈文研は、これまで文化財保護行政に資する研究をおこなうことを標榜し、文化庁とも協力して、文化財担当者研修を通じて文化財担当者のトレーニングをおこなうことにより、奈文研が培ってきた多様な知識・技術を還元・普及し、全国の文化財・文化遺産の保護体制の充実に寄与してきました。また、文化財・文化遺産の適切な価値評価のための調査の在り方、適切な保存・活用のための整備の在り方等、国及び地方公共団体が直面する諸課題についても協力・支援を果たしてきました。

これらについては、他の調査研究とのバランスも十分に視野に入れ、奈文研としての十全の役割を果たしていくことが必要と考えます。しかし、文化財・文化遺産をめぐって奈文研に寄せられる社会的要請が多様化し、果たすべきその役割が拡大しつつある今日、奈文研が培ってきた知識・技術の社会への還元・普及をバランスよく推進していくためには、奈文研単独でおこなうことは限界があり、効率的ではありません。国内外を問わず関係する調査研究機関・研究者等との連携・協働を積極的に進めいくことが重要です。

◆組織経営

E) 持続可能な事業展開とヴィジョンの実現を図るための取組
ヴィジョンを実現するためには、調査研究に関するA)～D)の4本の柱を着実に実施する必要があります。それには、常に組織の体力増進を意識した事業展開を組織経営上のストラテジーとして位置付ける視点が重要です。

まず、コンプライアンス（法令順守）に対する高い意識を維持し、不正防止を徹底するための管理体制を整備・強化します。

そのうえで、優秀な人材の確保と育成に努めます。必要な各種研修を計画的に実施し、環境の変化及び多様化する社会に適応可能な質の高い職員を育成し、組織マネジメントのできる人材の確保を目指します。また、就業管理システムの導入（2023年10月予定）を契機として、業務の効率化を図り、超過勤務時間を減少させることにより、介護休暇・育児休暇の取得も含めた職員のワークライフバランスを充実させます。加えて、職員相互の尊重、健康・労働環境への配慮、公平・公正で適切な処遇改善に継続的に努めます。

奈文研がもつ調査研究に関する高度な力量・業績・専門知識を自己財源取得につなげ、外部資金収入を増やす施策も重要です。重点課題に関する大型の科研費を戦略的に取得するほか、情報技術の利活用により、奈文研の研究業績を使用料収入・クラウドファンディング・寄付金等の増額へと結び付けるスキームの整備に努めます。

さらに、様々な分野における外部機関（民間企業・大学・自治体等）との協力・連携の実施及びクロスアボインメント制度の活用等による人材交流を進めます。また、リカレント教育をはじめ、将来的着手人材育成に向けた積極的な情報提供の場を設け、研究員の高い能力を広く社会に還元することにより、これまで以上に社会貢献に努めます。

これらを実現するため、組織のガバナンス効果を十分に発揮し、事業・運営を不斷に評価・検証することにより適切な見直しを図り、内外に対し透明性の高い組織運営を持続します。

- 1) 調査研究の成果及び文化財情報などの多元的発信・公開
- 2) 平城宮跡資料館・藤原宮跡資料室・飛鳥資料館の充実と機能強化
- 3) 文化財担当者研修による奈文研に集積した文化財に関する知識・技術の還元・普及
- 4) 国・地方公共団体・調査研究機関及び大学に対する文化財・文化遺産関係の協力・助言・連携等
- 5) 「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」（仮称）の世界遺産登録に向けた包括的な情報発信のほか、奈良県下の世界遺産の保存・活用に関する施策への協力・助言
- 6) カンボジア西トップ遺跡、中国大足石刻など、海外の文化遺産保護に関する調査研究及び協力事業の推進
- 7) ACCU 研修や文化庁文化遺産国際協力拠点交流事業などを通じた海外における文化遺産保護に関する人材の育成
- 8) 海外諸機関との共同研究の実施や研究者の受け入れなどによる国際学術交流の推進

- 持続可能なガバナンス体制の強化
- 健全な研究所運営に必要となる働き方改革、人材育成の推進
- 財源の多様化及び自己収入額の増額
- 他の調査研究機関及び研究者との連携・協働を積極的に進めるための仕組の整備
- 将来を見据えた持続可能な事業・運営の評価及び見直しを図るための仕組の整備

おわりに 一次のステップに向けて

私たちは、決して「このたびのMVSを作成して終わりだ」などと考えているわけではありません。奈文研MVS2022に基づき、調査研究と組織経営に関するストラテジーの各々を確実に実行していくことはもちろん、さらに5～10年先を見据えつつ、新たな課題を確実に受け止め、MVSの見直し・改定も視野に入れて前進していく必要があると考えています。そのようなプロセスを段階的に

踏むことにより、奈文研は文化財・文化遺産の保存・活用に資する真のナショナルセンターとして、着実な進化を遂げていけるものと確信しています。

註

- 「文化財」とは文化財保護法第二条に規定する6類型の文化財（有形文化財・無形文化財・民俗文化財・記念物・文化的景観・伝統的建造物群）を指し、「文化遺産」とは文化財を含め広く歴史的価値をもつ文化的な所産を指します。
- 持続可能な開発目標（SDGs:Sustainable Development Goals）は、2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載されたものであり、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。17のゴール及び169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない（leave no one behind）」ことを誓っています。
- 「ひかり拓本」とは、石碑など凹凸のある対象について光源を変えて複数の異なる角度から陰影を撮影し、撮影画像を合成することによって表面に刻まれた文字・文様を浮かび上がらせ、判読できるようにする技術。



図188 奈文研の "Mission", "Vision", "Strategy" の段階的展開

IV. データ編

1. 外国人研究者の招聘と来訪

(1) 招聘外国人研究者

年度	国名	所属	期間	目的	経費	備考
2012	中華人民共和国	同濟大学建築系都市計畫学院	2012.5.7~5.10	共同研究打ち合わせ	差方負担	
	大韓民国	文化財研究所	2012.5.27~6.4	日韓共同研究	運営費交付金	
	カザフスタン共和国	アル・ファラビ・カザフ国立大学	2012.6.19~6.26	アル・ファラビ・カザフ国立大学との共同研究	運営費交付金	
	大韓民国	韓国国立文化財研究所 2名	2012.9.3~9.7	日韓共同研究	運営費交付金	
	大韓民国	國立慶州文化財研究所	2012.9.3~11.2	発掘調査実地	運営費交付金	
	大韓民国	文化財府	2012.9.24~2014.9.23	韓国国立文化財研究所による在外研究	差方負担	
	大韓民国	國立扶余文化財研究所	2012.10.14~10.17	秋期特別展借用文化財の開催、展示指導	運営費交付金	
	大韓民国	國立文化財研究所	2012.10.14~10.17	秋期特別展借用文化財の開催、展示指導	運営費交付金	
	中華人民共和国	中國考古学会・考古研究所	2012.10.17~10.21	60周年記念企画および日中韓国際講演会に出席	運営費交付金	
	大韓民国	國立扶余文化財研究所	2012.10.18~10.21	60周年記念企画および日中韓国際講演会で発表	運営費交付金	
	大韓民国	國立文化財研究所 3名	2012.10.18~10.21	60周年記念企画および日中韓国際講演会に出席	運営費交付金	
	大韓民国	國立慶州文化財研究所	2012.10.29~11.1	秋期特別展借用文化財の開催、展示指導	運営費交付金	
	大韓民国	國立文化財研究所	2012.11.4~11.11	共同研究	運営費交付金	
	大韓民国	國立博物館	2012.12.3~12.6	秋期特別展借用文化財の返却時の状態確認、解説	運営費交付金	
	大韓民国	國立文化財研究所	2012.12.3~12.6	秋期特別展借用文化財の返却時の状態確認、解説	運営費交付金	
	大韓民国	國立慶州文化財研究所	2012.12.3~12.6	秋期特別展借用文化財の返却時の状態確認、解説	運営費交付金	
	大韓民国	中韓文化財研究所	2012.12.18~12.21	共同研究	運営費交付金	
	大韓民国	國立扶余文化財研究所	2012.12.18~12.21	共同研究	運営費交付金	
	大韓民国	國立扶余文化財研究所	2013.1.21~11.20	日本学術振興会外国人招へい研究者（長期）	日本学術振興会	
	大韓民国	國立文化財研究所 2名	2013.2.12~2.21	日韓共同研究	運営費交付金	
	ミャンマー連邦共和国	文化考古・博物館・洞窟調査局 3名	2013.2.17~2.23	研究交流	文化庁受託	
	カンボジア王国	文化芸術省文化遺産局 2名	2013.3.27~7.23	研究交流	受託経費	
	大韓民国	國立文化財研究所	2013.3.4~3.6	日韓共同研究	運営費交付金	
	大韓民国	國立扶余文化財研究所	2013.3.4~3.6	日韓共同研究	運営費交付金	
	中華人民共和国	南京古文歴史系	2013.3.12~3.17	科学研究費基盤研究Cに関する研究	伊東科学研究費	
	中華人民共和国	揚州市文物考古研究所	2013.3.12~3.17	科学研究費基盤研究Cに関する研究	伊東科学研究費	
	中華人民共和国	國立博物館	2013.3.12~3.17	科学研究費基盤研究Cに関する研究	伊東科学研究費	
	カンボジア王国	カンボジア王立芸術大学 2名	2013.3.18~3.23	研究交流	運営費交付金	
2013	ベトナム社会主义共和国	ベトナム社会科学会員 8名	2013.5.24~5.31	「タンロン皇城遺跡保存に関する協力事業」による、日本における遺構表示の事例研究のため	運営費交付金	
	大韓民国	國立慶州文化財研究所	2013.8.1~9.27	古代文化遺産の共同研究	運営費交付金	
	ベトナム社会主义共和国	Vietnam Forestry University 2名	2013.8.24~9.1	ベトナム林業大学との拠点交流事業	受託経費	
	大韓民国	文化財府	2013.9.9~9.15	「日韓古代文化的形成と発展過程」に関する共同研究	運営費交付金	
	大韓民国	國立文化財研究所	2013.9.14~9.20	「日韓古代文化的形成と発展過程」に関する共同研究	運営費交付金	
	ミクロネシア連邦	ミクロネシア教育大臣	2013.10.12~10.20	文化庁平成25年度外国人芸術家・文化専門家招へい事業	文化庁	
	中華人民共和国	河南省文物考古研究院 5名	2013.11.18~11.27	「河南古墓葬石質・白河濟三彩窯跡の考古学研究と調査」共同研究	運営費交付金	
	中華人民共和国	中國文化遺產研究院 3名	2013.11.12~11.16	「建始人猿洞遺跡保存国際学術会議」出席	運営費交付金	
	大韓民国	國立文化財研究所 3名	2013.11.12~11.16	「建始人猿洞遺跡保存国際学術会議」出席	運営費交付金	
	中華人民共和国	南京林业大学	2014.1.26~2.15	「中国宋代の木棺」木棺材を用いた年輪年代学の確立と用材選択の意義」共同研究	科学研究費（光谷）	
	ミャンマー連邦共和国	ミャンマー 3名	2014.2.2~2.8	ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業	運営費交付金	
	ベトナム社会主义共和国	Vietnamese Academy of Forest Sciences	2014.2.17~3.1	ベトナム出土木製品保存に関する拠点交流事業	運営費交付金	
	大韓民国	國立慶州文化財研究所	2014.3.3~3.7	日韓共同研究	運営費交付金	
	カンボジア王国	王立芸術大学 2名	2014.3.15~3.21	共同研究	運営費交付金	
	中華人民共和国	南京大學	2014.4.11~4.15	共同研究のため	科学研究費	対応: 年代学研究室
	中華人民共和国	南越王宮博物館	2014.4.11~4.15	共同研究のため	科学研究費	対応: 年代学研究室
2014	中華人民共和国	儀征市博物館	2014.4.11~4.15	共同研究のため	科学研究費	対応: 年代学研究室
	大韓民国	文化財府	2014.7.3~7.8	韓国国立文化財研究所との共同研究のため	運営費交付金	
	中華人民共和国	南京林业大学	2014.8.4~9.6	共同研究のため	科学研究費	対応: 年代学研究室

年度	国名	所属	期間	目的	経費	備考
2014	中華人民共和国	天津大学 5名	2014.8.15~8.30	古代建築および文化財保護・修理に関する研修会	先方負担	対応: 道情研究室課員
	デンマーク王国	デンマーク工科大学	2014.9.1~12.1	保存科学に関する研修	自費	対応: 研究支授課題、国際道情研究室
	大韓民国	国立慶州文化財研究所	2014.9.16~11.7	韓国国立文化財研究所との共同研究	運営費交付金	
	セモア独立国	セモア教育大臣	2014.10.2~10.10	文化財外国人芸術家・文化財専門家招へい事業	文化学習	対応: 国際道情研究室
	中華人民共和国	河南省文物考古研究院 3名	2014.10.27~10.31	共同研究のため	運営費交付金	
	中華人民共和国	河南省文物局	2014.10.27~10.31	共同研究のため	運営費交付金	
	中華人民共和国	河南省財政厅	2014.10.27~10.31	共同研究のため	運営費交付金	
	中華人民共和国	遼寧省文物考古研究所 4名	2014.12.16~12.19	講演会・共同研究の打合せ	運営費交付金	
	ミャンマー連邦共和国	文化省考古博物館	2015.1.18~1.26	ミャンマー文化者との拠点交流事業: 文化財写真ワークショップ	文化学習委託	対応: 国際道情研究室、写真室
	ミャンマー連邦共和国	文化省フィールドスクール 2名	2015.1.18~1.26	ミャンマー文化者との拠点交流事業: 文化財写真ワークショップ	文化学習委託	対応: 国際道情研究室、写真室
	中華人民共和国	西南林业大学	2015.3.14~3.24	共同研究のため	科学研究費	対応: 年代学研究室
	カンボジア王国	王立芸術大学 3名	2015.3.22~3.28	カンボジア文化遺産復興支援事業における招へい研修	運営費交付金	
2015	大韓民国	國立慶州文化財研究所	2015.8.3~10.2	古代文化関連遺跡の共同発掘調査実施	運営費交付金	
	中華人民共和国	南京大学	2015.9.24~9.28	科研「中國漢代の木構・木棺材を用いた年輪年代学の確立と使用材の意義」の日中共同研究	科学研究費	允谷基盤B 分担者: 伊東
	中華人民共和国	美術博物館	2015.9.24~9.28	科研「中國漢代の木構・木棺材を用いた年輪年代学の確立と使用材の意義」の日中共同研究	科学研究費	允谷基盤B 分担者: 伊東
	中華人民共和国	揚州市文物考古研究所	2015.9.24~9.28	科研「中國漢代の木構・木棺材を用いた年輪年代学の確立と使用材の意義」の日中共同研究	科学研究費	允谷基盤B 分担者: 伊東
	中華人民共和国	河南省文物考古研究院 4名	2015.11.16~11.20	日中共同研究	運営費交付金 (滞在費のみ)	運営費: 先方負担
	中華人民共和国	河南省文物局	2015.11.16~11.20	日中共同研究	運営費交付金 (滞在費のみ)	運営費: 先方負担
	ベトナム社会主義共和国	ベトナム移業大学	2016.1.20~1.23	水没木材の保存に関する国際セミナー参加	拠点交流ベトナム	
	ベトナム社会主義共和国	Forestry Association of VFU	2016.1.20~1.23	水没木材の保存に関する国際セミナー参加	拠点交流ベトナム	
	インドネシア共和国	BOROBUDUR CONSERVATION OFFICE	2016.1.20~1.23	水没木材の保存に関する国際セミナー参加	拠点交流ベトナム	
	インドネシア共和国	Laboratory of Wood Conservation & Fiber Faculty of Forest, Gadjah Mada University	2016.1.20~1.23	水没木材の保存に関する国際セミナー参加	拠点交流ベトナム	
	タイ王国	Underwater Archaeology Division Fine Arts Department, Ministry of Culture	2016.1.19~1.23	水没木材の保存に関する国際セミナー参加	拠点交流ベトナム	
	ラオス人民民主共和国	Division of Archaeology, Department of Heritage Ministry, Information, Culture and Tourism	2016.1.20~1.23	水没木材の保存に関する国際セミナー参加	拠点交流ベトナム	
	カンボジア王国	National Committee for World Heritage Deputy Director General, Monuments and Archaeology	2016.1.20~1.23	水没木材の保存に関する国際セミナー参加	拠点交流ベトナム	
	ミャンマー連邦共和国	Minister's Office Ministry of Culture	2016.2.14~2.22	道路の整備と活用に関するワークショップ参加	拠点交流ミャンマー(東文研)	
	ミャンマー連邦共和国	Department of Archaeology and National Museum Ministry of Culture	2016.2.14~2.22	道路の整備と活用に関するワークショップ参加	拠点交流ミャンマー(東文研)	
	中華人民共和国	河南省文物考古研究院 2名	2016.2.29~3.4	科研「河南省呂昌巒出土早期土器の日中共同研究」	科学研究費	加藤基盤
	中華人民共和国	許昌市文化广电新闻出版局	2016.2.29~3.4	科研「河南省呂昌巒出土早期土器の日中共同研究」	科学研究費	加藤基盤
	中華人民共和国	西安南江大明宫遺址博物館	2016.3.1~3.5	遺跡整備活用研究会「長安・洛陽における遺跡の発掘調査及び整備活用の現状」にて発表・参加	運営費交付金	
	中華人民共和国	中国社会科学院考古研究所	2016.3.1~3.5	遺跡整備活用研究会「長安・洛陽における遺跡の発掘調査及び整備活用の現状」にて発表・参加	運営費交付金	
	中華人民共和国	洛陽市文物考古研究院	2016.3.1~3.5	遺跡整備活用研究会「長安・洛陽における遺跡の発掘調査及び整備活用の現状」にて発表・参加	運営費交付金	
	中華人民共和国	洛陽市隋唐城遺址管理處	2016.3.1~3.5	遺跡整備活用研究会「長安・洛陽における遺跡の発掘調査及び整備活用の現状」にて発表・参加	運営費交付金	
	中華人民共和国	洛陽龙门石窟国际旅行社	2016.3.1~3.5	遺跡整備活用研究会「長安・洛陽における遺跡の発掘調査及び整備活用の現状」にて発表・参加	運営費交付金	
	中華人民共和国	遼寧省文物考古研究所 4名	2016.3.21~3.25	日中共同研究	運営費交付金	
	カンボジア王国	王立芸術大学 2名	2016.3.24~3.31	カンボジア文化遺産復興支援事業における招へい研修	運営費交付金	

年度	国名	所属	期間	目的	経費	備考
2016	中華人民共和国	西南林业大学	2016.7.25~7.31	西南林业大学との科経費に基づく共同研究の推進	科学研究費	対応：理政文化財センター
	大韓民国	国立慶州文化財研究所	2016.8.22~10.14	受御硯場の人材交流	運営費：先方負担 審査費：運営費分担	対応：都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）
	カンボジア王国	アブサラ機構	2016.8.26~9.3	第8回世界考古学会での研究報告	科学研究費	対応：企画調整部
	ミャンマー連邦共和国	宗教文化者ミャンマー歴史委員会	2016.8.26~9.3	第8回世界考古学会での研究報告	文化庁委託事業	対応：企画調整部
	ミャンマー連邦共和国	貝殻研究者	2016.8.26~9.3	第8回世界考古学会での研究報告	文化庁委託事業	対応：企画調整部
	ミャンマー連邦共和国	宗教文化者考古博物館ビヨーナー古生物学フィールドスクール2名	2016.8.26~9.3	第8回世界考古学会での研究報告	文化庁委託事業	対応：企画調整部
	中華人民共和国	河南省文物考古研究院 4名	2016.11.28~12.2	共同研究	運営費交付企 (添付費のみ)	対応：都城発掘調査部
	中華人民共和国	河南省文物局	2016.11.28~12.2	共同研究	運営費交付企 (添付費のみ)	対応：都城発掘調査部
	中華人民共和国	西南林业大学 2名	2017.1.5~1.11	西南林业大学との科経費に基づく共同研究の推進	科学研究費	対応：理政文化財センター
	カンボジア王国	ブノーベン王立芸術大学 3名	2017.3.20~3.27	共同研究	運営費交付企	対応：企画調整部
	カンボジア王国	文化芸術省統計計画局	2017.3.20~3.27	共同研究	運営費交付企	対応：企画調整部
	オーストラリア連邦	フリンダース大学	2017.3.31~11.18	日本学術振興会外国人招へい研究者	日本学術振興会	受入研究者：移山
	大韓民国	国立中原文化財研究所 2名	2016.12.12~12.15	共同研究	運営費：先方負担 審査費：運営費分担	
	大韓民国	国立慶州文化財研究所	2016.12.12~12.15	共同研究	運営費：先方負担 審査費：運営費分担	
	大韓民国	国立文化財研究所	2016.12.12~12.15	共同研究	運営費：先方負担 審査費：運営費分担	
	大韓民国	国立羅州文化財研究所	2016.12.19~12.22	共同研究	運営費：先方負担 審査費：運営費分担	
	大韓民国	国立伽倻文化財研究所	2016.12.19~12.22	共同研究	運営費：先方負担 審査費：運営費分担	
	大韓民国	国立慶州文化財研究所	2016.12.19~12.22	共同研究	運営費：先方負担 審査費：運営費分担	
	大韓民国	国立扶余文化財研究所	2017.1.16~1.20	共同研究	運営費：先方負担 審査費：運営費分担	
	大韓民国	国立扶余文化財研究所	2017.1.16~1.20	共同研究	運営費：先方負担 審査費：運営費分担	
	大韓民国	国立海洋文化財研究所	2017.1.16~1.20	共同研究	運営費：先方負担 審査費：運営費分担	
	大韓民国	国立中原文化財研究所	2017.2.6~2.9	共同研究	運営費：先方負担 審査費：運営費分担	
	大韓民国	国立慶州文化財研究所 2名	2017.2.6~2.9	共同研究	運営費：先方負担 審査費：運営費分担	
	大韓民国	国立伽倻文化財研究所	2017.2.6~2.9	共同研究	運営費：先方負担 審査費：運営費分担	
	大韓民国	国立文化財研究所 2名	2017.3.20~3.24	共同研究	運営費：先方負担 審査費：運営費分担	
2017	オーストラリア連邦	フリンダース大学	2017.3.31~11.18	日本学術振興会外国人招へい研究者	日本学術振興会	受入研究者：移山
	中華人民共和国	遼寧省文物考古研究所 4名	2017.6.24~7.1	共同研究遂行にむけた協議、学術交流	運営費交付企	
	大韓民国	国立文化財研究所 3名	2017.7.18~7.22	共同研究	運営費：先方負担 審査費：運営費分担	
	ミャンマー連邦共和国	ヤンゴン大学 3名	2017.8.23~8.27	陶器の調査方法に関する研修に参加	文化庁委託事業	
	中華人民共和国	河南省文物考古研究院 4名	2017.9.11~9.15	共同研究	運営費交付企	
	中華人民共和国	河南省文物局文博資源管理与发展利用室	2017.9.11~9.15	共同研究	運営費交付企	
	大韓民国	国立慶州文化財研究所	2017.9.11~11.2	共同発掘調査	運営費：先方負担 審査費：運営費分担	
	ミャンマー連邦共和国	ミャンマー宗教文化省世界遺産部 2名	2017.10.15~10.21	考古遺跡の調査方法に関する研修に参加	文化庁委託事業	
	ミャンマー連邦共和国	ミャンマー宗教文化者ビヨーナー古生物学フィールドスクール	2017.10.15~10.21	考古遺跡の調査方法に関する研修に参加	文化庁委託事業	
	中華人民共和国	黒龍江省考古研究所	2017.10.23~10.29	「東アジアにおける旧石器・新石器過渡期の基礎的研究」のため	科学研究費	
	中華人民共和国	河北大学歴史系	2017.10.23~10.29	「東アジアにおける旧石器・新石器過渡期の基礎的研究」のため	科学研究費	
	中華人民共和国	脊椎動物古生物研究所	2017.10.23~10.29	「東アジアにおける旧石器・新石器過渡期の基礎的研究」のため	科学研究費	
	大韓民国	国立伽倻文化財研究所	2017.12.18~12.22	共同研究	運営費：先方負担 審査費：運営費分担	

年度	国名	所属	期間	目的	経費	備考
2017	大韓民国	国立慶州文化財研究所	2017.12.18～12.22	共同研究	運転費：先方負担 差旅費：運賃費付全額	
	大韓民国	国立羅州文化財研究所	2017.12.18～12.22	共同研究	運転費：先方負担 差旅費：運賃費付全額	
	大韓民国	国立中華文化財研究所	2018.1.15～1.19	共同研究	運転費：先方負担 差旅費：運賃費付全額	
	大韓民国	国立文化財研究所	2018.1.15～1.19	共同研究	運転費：先方負担 差旅費：運賃費付全額	
	大韓民国	国立羅州文化財研究所	2018.1.15～1.19	共同研究	運転費：先方負担 差旅費：運賃費付全額	
	大韓民国	国立海洋文化財研究所	2018.1.15～1.19	共同研究	運転費：先方負担 差旅費：運賃費付全額	
	大韓民国	国立文化財研究所 2名	2018.1.15～1.19	共同研究	運転費：先方負担 差旅費：運賃費付全額	
	大韓民国	国立中華文化財研究所	2018.2.20～2.23	共同研究	運転費：先方負担 差旅費：運賃費付全額	
	大韓民国	国立文化財研究所	2018.2.20～2.23	共同研究	運転費：先方負担 差旅費：運賃費付全額	
	大韓民国	国立慶州文化財研究所	2018.2.20～2.23	共同研究	運転費：先方負担 差旅費：運賃費付全額	
	中華人民共和国	社会科学院文物考古研究所 3名	2018.2.26～3.2	共同研究	先方負担	
	カザフスタン共和国	国立博物館国家遺産研究所	2018.3.2～3.13	「東アジア旧石器・新石器移行期の基礎的研究」 のため	科学研究費	
	カンボジア王国	国立芸術大学 3名	2018.3.4～3.11	共同研究	運賃費付全額	
	カザフスタン共和国	国立博物館	2018.3.21～3.24	共同研究成果の発表および、来年度調査研究について打合せ	先方負担	国武研関係
	カザフスタン共和国	カザフスタン文書センター	2018.3.21～3.24	共同研究成果の発表および、来年度調査研究について打合せ	先方負担	国武研関係
	カザフスタン共和国	スポーツ・文化省	2018.3.21～3.24	共同研究成果の発表および、来年度調査研究について打合せ	先方負担	国武研関係
	中華人民共和国	中山大学社会学人類学学院	2018.3.25～3.31	広東省で実施している貝塚道路に関する資料調査および、今後の分析研究に関する協議のため	先方負担	理文：菊地将 研助
2018	中華人民共和国	遼寧省文博考古研究所 4名	2018.6.11～6.16	共同研究	運賃費付全額	
	ミャンマー連邦共和国	サンゴ大学考古学部	2018.7.29～8.4	文化遺産国際協力拠点事業による招へい研修： 陶器胎の調査研究方法	文化庁委託事業	
	ミャンマー連邦共和国	ダゴン大学考古学部	2018.7.29～8.4	文化遺産国際協力拠点事業による招へい研修： 陶器胎の調査研究方法	文化庁委託事業	
	ミャンマー連邦共和国	陶磁器研究者	2018.7.29～8.4	文化遺産国際協力拠点事業による招へい研修： 陶器胎の調査研究方法	文化庁委託事業	
	大韓民国	国立慶州文化財研究所	2018.8.6～9.28	発表交流	運賃費付全額	
	ミャンマー連邦共和国	宗教文化学者（著者）スルドヌー 3名	2018.10.4～10.21	文化遺産国際協力拠点事業による招へい研修： 考古遺物の調査方法	文化庁委託事業	
	中華人民共和国	河南省文博考古研究所 4名	2018.11.19～11.23	共同研究	運賃費付全額	
	中華人民共和国	中国社会科学院考古研究所 2名	2018.11.15～12.14	共同研究	運賃費付全額	
	中華人民共和国	復旦大学文化考古博物館学系	2018.12.7～12.13	共同研究	科学研究費	担当：庄田
	大韓民国	嶺南大学	2019.2.10～2.13	東アジア木造建築史研究会での研究発表	科学研究費	担当：節本
	中華人民共和国	中国科学院自然科學研究所	2019.2.23～2.28	研究会「陶器技術の実験考古学」での発表および 共同研究	科学研究費	担当：丹羽
	中華人民共和国	上海博物館	2019.2.23～2.28	研究会「陶器技術の実験考古学」での発表および 共同研究	科学研究費	担当：丹羽
	中華人民共和国	武汉大学歴史学院	2019.2.23～2.28	研究会「陶器技術の実験考古学」での発表および 共同研究	科学研究費	担当：丹羽
	中華人民共和国	中国社会科学院歴史研究所	2019.3.18～3.20	共同研究	科学研究費	馬場耕研
	台湾	台湾中央研究院歴史語言研究所 2名	2019.3.18～3.21	共同研究	先方負担	馬場耕研
	台湾	中央研究院民族文化中心	2019.3.18～3.21	共同研究	先方負担	馬場耕研
	カンボジア王国	王立芸術大学 3名	2019.3.22～3.28	共同研究	運賃費付全額	
2019	中華人民共和国	中国社会科学院考古研究所 執考古研究中心	2019.4.5～4.9	共同研究	科学研究費	担当：庄田
	中華人民共和国	復旦大学文化考古博物館学系 2名	2019.5.30～6.5	共同研究	先方負担	担当：高美
	中華人民共和国	遼寧省文博考古研究院 3名	2019.9.6～9.11	共同研究	運賃費付全額	担当：張瀬
	中華人民共和国	北京大学考古文博学院	2019.9.6～9.11	共同研究	運賃費付全額	担当：張瀬
	トルコ共和国	イスタンブル大学芸術学部	2019.10.26～11.3	トルコの保存修復事業に関する研究会で講演、及び 報告作成の打ち合わせ	科学研究費	担当：彭山
	中華人民共和国	中国社会科学院考古研究所 2名	2019.11.1～12.1	共同研究	運賃費付全額	担当：今井
	中華人民共和国	河南古文博考古研究所 4名	2019.12.16～12.20	共同研究	運転費：先方負担 差旅費：運賃費付全額	担当：丹羽
	中華人民共和国	河南省文博局	2019.12.16～12.20	共同研究	運転費：先方負担 差旅費：運賃費付全額	担当：丹羽
	英國	ヨーク大学	2020.1.5～L1	日本学術振興会外国人招へい研究者（短期）	日本学術振興会	担当：庄田

年度	国名	所属	期間	目的	経費	備考
2019	カザフスタン共和国	カザフスタン国立博物館民族遺産研究所 2名	2020.1.17~1.26	考古遺物の調査・記録・保存方法に関するセミナー	文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業	担当: 庄田
	カザフスタン共和国	カザフスタン国立博物館考古資料必急処置室 2名	2020.1.17~1.26	考古遺物の調査・記録・保存方法に関するセミナー	文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業	担当: 庄田
	カザフスタン共和国	カザフスタン国立博物館保存修復室 2名	2020.1.17~1.26	考古遺物の調査・記録・保存方法に関するセミナー	文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業	担当: 庄田
	リトアニア共和国	ヴィリニュス大学生物考古学センター	2020.1.22~1.27	アドバイザリー・ミーティング	カザフスタンの拠点交流事業	
2020	ドイツ連邦共和国	マックス・プランク人類史料学研究所	2020.1.22~1.27	アドバイザリー・ミーティング	カザフスタンの拠点交流事業	
	カザフスタン共和国	ナザルバエフ大学文化人類学(考古学)科	2020.1.22~1.27	アドバイザリー・ミーティング	カザフスタンの拠点交流事業	
	大韓民国	国立文化財研究所 2名	2020.2.3~2.7	施設・研究交流	運営費交付金	
	大韓民国	国立文化財研究所	2020.2.3~2.7	施設・研究交流	運営費交付金	
2021	英国	日本学術振興会外国人特別研究員项目(ヨーク大学兼任)	2022.3.28~2024.3.27	日本学術振興会外国人特別研究員	日本学術振興会	担当: 庄田
	インド	慶北大学校人文学院独立研究者	2022.5.23~5.24	日本本間共同研究のため	先方負担	担当: 馬場
2022	大韓民国	慶北大学校人文学院	2022.6.27~7.12	共同研究協議・共同分析実験	科学研究費	担当: 庄田(佐藤)
	アメリカ合衆国	カリフォルニア大学	2022.7.11~7.25	研究協力の一環として、資料整理、現地調査および研究会参加	先方負担	担当: 庄田(西屋)

(2) 来訪外国人研究者

年度	国名	所属・職	期間	目的	備考
2012	大韓民国	韓國國立美術史研究所	2012.4.7 ~ 4.14	視察	
	フランス共和国	ギメ美術館	2012.4.13	視察	
	アメリカ合衆国	イニール大学東アジア言語文学部 8名	2012.5.24 ~ 5.28	平成、藤原地区の木簡整理状況などの見学	
	アメリカ合衆国	イニール大学美術史部	2012.5.24 ~ 5.28	平成、藤原地区の木簡整理状況などの見学	
	大韓民国	國立羅州文化財研究所 3名	2012.5.30	遺物足尾	
	キルギス共和国	アメリカン大学中央アジア校	2012.6.1 ~ 7.5	研究・研修	
	フランス共和国	極東文明研究センター	2012.6.1 ~ 2013.5.31	国際交流基金フェローシップ	
	アメリカ合衆国	カルフォルニア大学バークレー校	2012.6.11 ~ 6.13	研修	対応：松井・国際道路研究室
	インドネシア共和国	教育文化省サマリンガ考古遺産保存事務所	2012.6.12 ~ 7.12	ACCU個人研修「本造営物の保存と修復」参加	
	インドネシア共和国	教育文化省文化遺産博物館	2012.6.12 ~ 7.12	ACCU個人研修「本造営物の保存と修復」参加	
	インドネシア共和国	教育文化省マッカナル考古遺産保存事務所 3名	2012.6.12 ~ 7.12	ACCU個人研修「本造営物の保存と修復」参加	
	インドネシア共和国	アンダラス大学文学部	2012.6.18	文字文化財専門家の来訪（国際交流基金）	
	英国	University of East Anglia 4名	2012.7.11 ~ 7.12	平成宮および奈良文化財研究所見学と研究交流	対応：国際道路研究室
	フランス共和国	ルーラン大学	2012.7.16 ~ 8.10	日本考古学について研修	
	アンゴラ共和国	Department of preision and evaluation of environment, Ministry of Environment	2012.7.27	平成24年度集団研修「ODAにおける環境影響評価（持続可能な開発のための環境アセスメント）研修」	
	バングラデシュ共和国	System Planning, Power Grid Company of Bangladesh Ltd.	2012.7.27	平成24年度集団研修「ODAにおける環境影響評価（持続可能な開発のための環境アセスメント）研修」文部省	
	カンボジア王国	Reconstruction Center, Intervention Unit of Public Works, Ministry of Public Works and Transport	2012.7.27	平成24年度集団研修「ODAにおける環境影響評価（持続可能な開発のための環境アセスメント）研修」文部省	
	インドネシア共和国	PT.MRT Jakarta	2012.7.27	平成24年度集団研修「ODAにおける環境影響評価（持続可能な開発のための環境アセスメント）文部省」	
	ケニア共和国	City Council of Nairobi	2012.7.27	平成24年度集団研修「ODAにおける環境影響評価（持続可能な開発のための環境アセスメント）文部省」	
	マラウイ共和国	Environmental Affairs Department, Ministry of Environment and Climate Change	2012.7.27	平成24年度集団研修「ODAにおける環境影響評価（持続可能な開発のための環境アセスメント）文部省」	
	マラウイ共和国	Environmental Affairs Division, Ministry of Environment and Climate Change	2012.7.27	平成24年度集団研修「ODAにおける環境影響評価（持続可能な開発のための環境アセスメント）文部省」	
	ナイジェリア連邦共和国	Environmental Assessment Department, Federal Ministry of Environment	2012.7.27	平成24年度集団研修「ODAにおける環境影響評価（持続可能な開発のための環境アセスメント）文部省」	
	ナイジェリア連邦共和国	Operation Department/JERBA HYDROELECTRIC POWER PLC	2012.7.27	平成24年度集団研修「ODAにおける環境影響評価（持続可能な開発のための環境アセスメント）文部省」	
	パキスタン・イスラム共和国	Environment Afforestation Land SocialNBA	2012.7.27	平成24年度集団研修「ODAにおける環境影響評価（持続可能な開発のための環境アセスメント）文部省」	
	パプア・ニューギニア独立国	NCD Water & Sewerage Limited t/a EDIA RANU	2012.7.27	平成24年度集団研修「ODAにおける環境影響評価（持続可能な開発のための環境アセスメント）文部省」	
	フィリピン共和国	Development Bank of the Philippines	2012.7.27	平成24年度集団研修「ODAにおける環境影響評価（持続可能な開発のための環境アセスメント）文部省」	
	フィリピン共和国	Department of Environment and Natural Resources	2012.7.27	平成24年度集団研修「ODAにおける環境影響評価（持続可能な開発のための環境アセスメント）文部省」	
	スードン共和国	Department of Environmental Affairs, Ministry of Environmental, Forests and Physical Development	2012.7.27	平成24年度集団研修「ODAにおける環境影響評価（持続可能な開発のための環境アセスメント）文部省」	
	ウガンダ共和国	Uganda National Roads Authority	2012.7.27	平成24年度集団研修「ODAにおける環境影響評価（持続可能な開発のための環境アセスメント）文部省」	
	ベトナム社会主義共和国	Department of Environment, Ministry of Transport	2012.7.27	平成24年度集団研修「ODAにおける環境影響評価（持続可能な開発のための環境アセスメント）文部省」	

年度	国名	所属・職	期間	目的	備考
2012	ベトナム社会主义共和国	Department of Environment Appraisal, Ministry of Natural Resources and Environment	2012.7.27	平成24年度集団研修「ODAにおける遺跡影響評価(持続可能な開発のための環境アセスメント研修)」受講	
	米国	Landward Research	2012.8.28	考古学マネジメントについての研究・見学	
	アフガニスタン・イスラム共和国	Department of Historical monuments of Bamyan Province, Ministry of Information and Culture	2012.9.4 ~ 10.4	ACCU集団研修2012「遺跡の調査と保存」参加	
	パンダグダシュ人民共和国	Ethnological Museum Ministry of Cultural Affairs	2012.9.4 ~ 10.4	ACCU集団研修2012「遺跡の調査と保存」参加	
	ブータン王国	Department of Culture Ministry of Home & Cultural Affairs	2012.9.4 ~ 10.4	ACCU集団研修2012「遺跡の調査と保存」参加	
	カンボジア王国	Department General of Cultural Heritage Ministry of Culture	2012.9.4 ~ 10.4	ACCU集団研修2012「遺跡の調査と保存」参加	
	中華人民共和国	University of Science and Technology of China	2012.9.4 ~ 10.4	ACCU集団研修2012「遺跡の調査と保存」参加	
	インドネシア共和国	Heritage Conservation Office in Banten Ministry of Education and Culture	2012.9.4 ~ 10.4	ACCU集団研修2012「遺跡の調査と保存」参加	
	モルディブ共和国	Department of Heritage Ministry of Tourism, Arts and Culture	2012.9.4 ~ 10.4	ACCU集団研修2012「遺跡の調査と保存」参加	
	ミャンマー連邦共和国	Department of Archaeology National Museum and Library, Ministry of Culture	2012.9.4 ~ 10.4	ACCU集団研修2012「遺跡の調査と保存」参加	
	ニュージーランド	New Zealand Historic Places Trust	2012.9.4 ~ 10.4	ACCU集団研修2012「遺跡の調査と保存」参加	
	パキスタン・イスラム共和国	Directorate General of Archaeology Government of Punjab	2012.9.4 ~ 10.4	ACCU集団研修2012「遺跡の調査と保存」参加	
	スリランカ民主社会主义共和国	Department of Archaeology Ministry of National Heritage	2012.9.4 ~ 10.4	ACCU集団研修2012「遺跡の調査と保存」参加	
	タジキスタン共和国	Department of Cultural Heritage Ministry of Culture	2012.9.4 ~ 10.4	ACCU集団研修2012「遺跡の調査と保存」参加	
	タイ王国	The 6th Regional Fine Arts Department, Sukhothai, Ministry of Culture	2012.9.4 ~ 10.4	ACCU集団研修2012「遺跡の調査と保存」参加	
	トンガ王国	Ministry of Education, Women's Affairs and Culture	2012.9.4 ~ 10.4	ACCU集団研修2012「遺跡の調査と保存」参加	
	ウズベキスタン共和国	Institute of Archaeology, Academy of Sciences	2012.9.4 ~ 10.4	ACCU集団研修2012「遺跡の調査と保存」参加	
	ベトナム社会主义共和国	Hue Monument Conservation Center	2012.9.4 ~ 10.4	ACCU集団研修2012「遺跡の調査と保存」参加	
	中華人民共和国	北京大学	2012.9.7	見学	
	ペルム社会主義共和国	ペルム林業大学	2012.9.10 ~ 9.28	出土木本材保存のための修繕	
	米国	ロンドン博物館	2012.9.19	パブリック考古学の研究のため見学	
	米国	イギリス考古学者	2012.9.19	パブリック考古学の研究のため見学	
	大韓民国	韓国政府文化部庁	2012.9.20 ~ 2013.9.19	日本古代都城の調査研究	
	大韓民国	国立歴史文化財研究所 2名	2012.11.6 ~ 11.7	見学	
	ベトナム社会主义共和国	フート=省知事事務官	2012.11.7	見学	
	オランダ王国	文化コンサルタント	2012.11.9	景観研究のため見学	
	インドネシア共和国	ジャカルタ歴史博物館	2012.11.14	視察	
	イタリア共和国	ICCROM 会員	2012.11.29	表敬訪問	
	ミャンマー連邦共和国	ミャンマー文化遺産担当者	2012.12.13	所長表敬・聖母寺現場見学	
	中華人民共和国	天津大学歴史与論研究所	2013.2.17 ~ 2.23	中国における古代建築の調査・研究について情報提供	
	中華人民共和国	天津大学	2013.2.17 ~ 2.23	中国における古代建築の調査・研究について情報提供	
	中華人民共和国	天津大学生田	2013.2.17 ~ 2.23	中国における古代建築の調査・研究について情報提供	
	カンボジア王国	国立アンコール遺跡保存機構 シハーカ・イオン博物館	2013.3.5	見学	
	タイ王国	シリコンバーン大学	2013.3.22	視察	
	中華人民共和国	武漢大学	2013.3.26	視察	
2013	米国	ロンドン大学東洋アフリカ研究所	2013.4.5	ミャンマー考古学に関する情報交換	
	アメリカ合衆国	ゲティ保存修復研究所	2013.4.10	視察	

年度	国名	所属・職	期間	目的	備考
2013	台湾	台南国立芸術大学 16名	2013.4.22	博物館学に関する調査	
	アメリカ合衆国	コロンビア大学建築・計画・保育大学 3名	2013.5.27 ~ 6.7	コロンビア大学との共同研究によるインターンの受入	
	アメリカ合衆国	カリフォルニア大学バークレー校	2013.5.30	視察	
	アメリカ合衆国	University of Houston	2013.6.10	16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション	
	アメリカ合衆国	University of Wisconsin-Milwaukee	2013.6.10	16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション	
	アメリカ合衆国	Louisiana State University	2013.6.10	16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション	
	フランス共和国	INSA Rennes / IRISA	2013.6.10	16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション	
	イタリア共和国	University of Salerno	2013.6.10	16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション	
	美國	Oxford Brooks University	2013.6.10	16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション	
	美國	Nyseger University	2013.6.10	16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション	
	ベトナム社会主义共和国	TUAT	2013.6.10	16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション	
	ベトナム社会主义共和国	Tokyo University of Agriculture and Technology	2013.6.10	16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション	
	イスラエル国	Tel Aviv University	2013.6.10	16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション	
	中華人民共和国	Kyushu University	2013.6.10	16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション	
	ドイツ連邦共和国	DFKI	2013.6.10	16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション	
	ベトナム社会主义共和国	Tokyo University of Agriculture and Technology	2013.6.10	16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション	
	カナダ	Ecole Polytechnique de Montreal	2013.6.10	16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション	
	フランス共和国	フランス世界遺産協会	2013.7.10	世界遺産ワールド活用協議会からの視察	
	キリバス共和国	Ministry of Internal & Social Affairs, Culture and Museum Division	2013.8.1 ~ 8.26	ユネスコ・アジア文化センターが実施する研究への協力	
	キリバス共和国	Ministry of Environment, Land and Agricultural Developments, Land Management Division	2013.8.1 ~ 8.26	ユネスコ・アジア文化センターが実施する研究への協力	
	ドイツ連邦共和国	ベルリン応用科学大学	2013.8.1 ~ 11.25	金属遺物の保存修復について研修	
	大韓民国	公州国立博物館	2013.8.8	視察	
	英國	ロンドン大学東洋アフリカ研究所	2013.8.22	所内研究会にて講演（ヤンマーの文化遺産）	
	パングラデシュ人民共和国	Department of Archaeology	2013.9.3 ~ 10.3	ACCU集団研修・本造建遺物の保存と修復	
	ブータン王国	Ministry of Home and Cultural Affairs, Royal Government of Bhutan	2013.9.3 ~ 10.3	ACCU集団研修・本造建遺物の保存と修復	
	ブルネイ・ダルサーム国	Ministry of Culture, Youth and Sport	2013.9.3 ~ 10.3	ACCU集団研修・本造建遺物の保存と修復	
	インドネシア共和国	Cultural Service Office of Yogyakarta Special Region	2013.9.3 ~ 10.3	ACCU集団研修・本造建遺物の保存と修復	
	カザフスタン共和国	Kazarchaeology LLP	2013.9.3 ~ 10.3	ACCU集団研修・本造建遺物の保存と修復	
	キルギス共和国	American University of Central Asia	2013.9.3 ~ 10.3	ACCU集団研修・本造建遺物の保存と修復	
	ラオス人民民主共和国	Vientiane Capital Department of Information Cultural and Tourism	2013.9.3 ~ 10.3	ACCU集団研修・本造建遺物の保存と修復	
	モルディブ共和国	Department of Heritage Ministry of Tourism, Arts and Culture	2013.9.3 ~ 10.3	ACCU集団研修・本造建遺物の保存と修復	
	マーシャル諸島共和国	Ministry of Internal Affairs	2013.9.3 ~ 10.3	ACCU集団研修・本造建遺物の保存と修復	
	モンゴル国	Ministry of Construction and Urban Development	2013.9.3 ~ 10.3	ACCU集団研修・本造建遺物の保存と修復	
	ニュージーランド	New Zealand Historic Places Trust	2013.9.3 ~ 10.3	ACCU集団研修・本造建遺物の保存と修復	
	パキスタン・イスラム共和国	Directorate General of Archaeology	2013.9.3 ~ 10.3	ACCU集団研修・本造建遺物の保存と修復	
	フィリピン共和国	National Historical Commission of the Philippines	2013.9.3 ~ 10.3	ACCU集団研修・本造建遺物の保存と修復	
	スリランカ民主社会主义共和国	Ministry of National Heritage	2013.9.3 ~ 10.3	ACCU集団研修・本造建遺物の保存と修復	

年度	国名	所属・職	期間	目的	備考
2013	タイ王国	The 12th Regional Office of Fine Arts Department asanasakorn Ratchasima	2013.9.3 ~ 10.3	ACCU 集団研修・木造建造物の保存と修復	
	ベトナム社会主义共和国	Viet Nam Institute of Architecture, Urban and rural planning Ministry of Construction	2013.9.3 ~ 10.3	ACCU 集団研修・木造建造物の保存と修復	
	エジプト・アラブ共和国	大エジプト博物館保存修復センター無機物修復研究室 3名	2013.9.9	文化財保存修復関連機関への視察研修	
	アメリカ合衆国	カリフォルニア大学バークレー校	2013.9.17 ~ 2014.9.16	国際交流基金による研究受入	
	マレーシア	マラカ大学 2名	2013.10.28	視察	
	ハンガリーデューム共和國	Ministry of Cultural Affairs, Department of Archaeology 3名	2013.11.5 ~ 11.28	ACCU 個人研修	
	台湾	台灣教育文化部文化資產局古物遺址組	2013.11.8	視察	
	台湾	台灣教育文化部文化局民族局	2013.11.8	視察	
	台湾	台灣中日經濟文化代表團	2013.11.8	視察	
	スウェーデン王国	ヨーテボリ大学	2013.11.13	視察	
	中華人民共和国	中国古道産業研究室 3名	2013.11.21 ~ 11.22	日本における大型遺跡の保存活用に関する研究調査	
	中華人民共和国	国務院発展研究中心社会発展研究部	2013.11.21 ~ 11.22	日本における大型遺跡の保存活用に関する研究調査	
	オーストラリア連邦	University of Sydney Robert Cawthron Research Center, Siem Reap Cambodia	2013.12.14	アンコール遺跡研究に関する講演会	
	オーストラリア連邦	Australian Research Council	2013.12.14	アンコール遺跡研究に関する講演会	
	英國	セイズベリー日本藝術研究所 所 3名	2014.1.8	視察	
2014	タイ王国	コン깬大学	2014.4.8	コミュニティ考古学についての意見交換	対応: 国際遺跡研究室
	インドネシア共和国	ジャカルタ首都特別区文化財保存センター	2014.5.14	視察	対応: 国際遺跡研究室
	タイ王国	タイ文化省	2014.5.16	代表団の表敬訪問	対応: 小野所長、文化遺産部
	大韓民国	国立民俗文化研究所	2014.6.24 ~ 6.25	「古代宮闈復元研究」のための資料調査	対応: 那須天祖記典部
	大韓民国	伝統文化大学校	2014.6.25	視察	対応: 国際遺跡研究室
	キルギス共和国	国立大学アカミー歴史文化遺産研究所	2014.7.8	文化庁拠点交流事業による研修研修	対応: 小野所長、文化遺産部、国際遺跡研究室
	キルギス共和国	ロシツ・スラブ大学博物館	2014.7.8	文化庁拠点交流事業による研修研修	対応: 小野所長、文化遺産部、国際遺跡研究室
	キルギス共和国	文化情報観光省	2014.7.8	文化庁拠点交流事業による研修研修	対応: 小野所長、文化遺産部、国際遺跡研究室
	アフガニスタン・イスラム共和国	アフガニスタン国立博物館	2014.7.8	文化庁拠点交流事業による研修研修	対応: 小野所長、文化遺産部、国際遺跡研究室
	アフガニスタン・イスラム共和国	アフガニスタン情報文化省歴史的建造物局	2014.7.8	文化庁拠点交流事業による研修研修	対応: 小野所長、文化遺産部、国際遺跡研究室
	アフガニスタン・イスラム共和国	アフガニスタン考古研究所	2014.7.8	文化庁拠点交流事業による研修研修	対応: 小野所長、文化遺産部、国際遺跡研究室
	マケドニア	Museum of the Macedonian Struggle	2014.7.9	地質考古学に関する情報収集	対応: 谷野・瀧井・斎藤各研究室、国際遺跡研究室
	イラク共和国	イラク・スマーリヤ博物館	2014.7.18	視察	対応: 保谷・林原科学研究所、国際遺跡研究室
	バヌアツ共和国	バヌアツ共和国文化センター レフ世界遺産委員会	2014.7.31 ~ 8.21	スキスコ・アジア文化センター(ACCU)が実施する研修(個人研修)への協力	対応: 国際遺跡研究室、都城発掘調査部(藤原現成司、宇佐考吉第二)、岩淵研究室、写真室
	バヌアツ共和国	バヌアツ共和国文化センター 国家登録局	2014.7.31 ~ 8.21	スキスコ・アジア文化センター(ACCU)が実施する研修(個人研修)への協力	対応: 国際遺跡研究室、都城発掘調査部(藤原現成司、宇佐考吉第二)、岩淵研究室、写真室
	アメリカ合衆国	企沢大学所属	2014.8.25	文化財担当者研修制度に関する聞き取り調査	対応: 企沢調整室、国際遺跡研究室
	中華人民共和国	北京故宫博物院 5名	2014.8.28	文化財保護技術の交流のため	対応: 小野、渡邊、高橋、今井、国際遺跡研究室
	ハンガリーデューム共和国	考古局	2014.9.2 ~ 10.3	スキスコ・アジア文化センター(ACCU)が実施する研修(個人研修)への協力	対応: 保谷・林原科学研究所、遺跡調査技術研究室、写真室、国際遺跡研究室
	ブータン王国	文化省文化遺産保護部考古局	2014.9.2 ~ 10.3	スキスコ・アジア文化センター(ACCU)が実施する研修(個人研修)への協力	対応: 保谷・林原科学研究所、遺跡調査技術研究室、写真室、国際遺跡研究室
	カンボジア王国	APSARA局	2014.9.2 ~ 10.3	スキスコ・アジア文化センター(ACCU)が実施する研修(個人研修)への協力	対応: 保谷・林原科学研究所、遺跡調査技術研究室、写真室、国際遺跡研究室
	フィジー共和国	フィジー博物館	2014.9.2 ~ 10.3	スキスコ・アジア文化センター(ACCU)が実施する研修(個人研修)への協力	対応: 保谷・林原科学研究所、遺跡調査技術研究室、写真室、国際遺跡研究室
	カザフスタン共和国	オストロフ・カリム有限公司 サービス科学研究所	2014.9.2 ~ 10.3	スキスコ・アジア文化センター(ACCU)が実施する研修(個人研修)への協力	対応: 保谷・林原科学研究所、遺跡調査技術研究室、写真室、国際遺跡研究室

年度	国名	所属・職	期間	目的	備考
2014	キルギス共和国	キルギス共和国 国家歴史博物館	2014.9.2 ~ 10.3	ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修（個人研修）への協力	対応：保存修復科学研究室、遺跡調査技術研究室、写真室、国際遺跡研究室
	ラオス人民民主共和国	情報・文化・総局文化管理課	2014.9.2 ~ 10.3	ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修（個人研修）への協力	対応：保存修復科学研究室、遺跡調査技術研究室、写真室、国際遺跡研究室
	モルディブ共和国	青年スポーツ者遺産局 国立博物館	2014.9.2 ~ 10.3	ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修（個人研修）への協力	対応：保存修復科学研究室、遺跡調査技術研究室、写真室、国際遺跡研究室
	モンゴル国	文化・スポーツ・観光省 文化遺産センター	2014.9.2 ~ 10.3	ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修（個人研修）への協力	対応：保存修復科学研究室、遺跡調査技術研究室、写真室、国際遺跡研究室
	ミャンマー連邦共和国	文化省考古博物館局	2014.9.2 ~ 10.3	ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修（個人研修）への協力	対応：保存修復科学研究室、遺跡調査技術研究室、写真室、国際遺跡研究室
	パキスタン・イスラム共和国	考古博物館局	2014.9.2 ~ 10.3	ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修（個人研修）への協力	対応：保存修復科学研究室、遺跡調査技術研究室、写真室、国際遺跡研究室
	パラオ共和国	コロール州政府 保護・法務局	2014.9.2 ~ 10.3	ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修（個人研修）への協力	対応：保存修復科学研究室、遺跡調査技術研究室、写真室、国際遺跡研究室
	スリランカ民主社会主義共和国	国会遺産省考古局 北中部州事務所	2014.9.2 ~ 10.3	ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修（個人研修）への協力	対応：保存修復科学研究室、遺跡調査技術研究室、写真室、国際遺跡研究室
	タジキスタン共和国	文化省ヒッサール歴史文化保護局	2014.9.2 ~ 10.3	ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修（個人研修）への協力	対応：保存修復科学研究室、遺跡調査技術研究室、写真室、国際遺跡研究室
	タイ王国	文化省芸術保存科学課	2014.9.2 ~ 10.3	ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修（個人研修）への協力	対応：保存修復科学研究室、遺跡調査技術研究室、写真室、国際遺跡研究室
	ベトナム社会主义共和国	南部社会科学研究所考古学研究センター	2014.9.2 ~ 10.3	ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修（個人研修）への協力	対応：保存修復科学研究室、遺跡調査技術研究室、写真室、国際遺跡研究室
	アメリカ合衆国	大阪・神戸アメリカ合衆国駐在事務所	2014.9.17	視察	対応：研究支援課審査部、国際遺跡研究室
	ブルンジ王国	内務省文化財局跡地保有課 3名	2014.11.11 ~ 12.4	ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修（個人研修）への協力	対応：写真室、遺跡・調査技術研究室
	ベトナム社会主义共和国	ベトナム社会科学科学院都城研究センター	2014.11.24 ~ 11.29	意見交換	対応：国際遺跡研究室、都城発掘調査部
	ベトナム社会主义共和国	ベトナム社会科学科学院都城研究センター	2014.11.24 ~ 11.29	意見交換	対応：国際遺跡研究室、都城発掘調査部
	アメリカ合衆国	カルフォルニア大学バークレー校	2015.2.27	日韓交流の研究のため	対応：国際遺跡研究室
	インドネシア共和国	インドネシア国立考古学研究所	2015.3.6	視察（JICA 依頼）	対応：国際遺跡研究室
	大韓民国	国立文化財研究所	2015.3.12	保存科学分野における調査研究のための視察	対応：保存修復科学研究室
	オランダ王国	ユネスコ世界遺産センター	2015.3.13	文化財防護に関する調査研究	対応：国際遺跡研究室
2015	スリランカ	ペルナン・首相	2015.4.17	遺構展示会場、第一次大統領見学	対応：都城発掘調査部（平城）
	大韓民国	文化財厅	2015.5.20	文化遺産管理体制等実態調査	対応：都城発掘調査部
	大韓民国	ソウル市文化本部	2015.9.24	風神・七曜との関係で、奉安宮跡・平城宮跡の保存・復元方針について視察	対応：都城発掘調査部（都城）、文化遺産部、企画調整部
	ミャンマー連邦共和国	ナホル觀音寺	2015.9.30	JICA 研修の一員として、平城宮跡の維持保存について視察	対応：企画調整部
	ドイツ連邦共和国	Universität Stuttgart	2015.10.2	平城宮資料館・本館の整理状況・平城宮跡等の見学	対応：都城発掘調査部（平城）
	大韓民国	文化財厅	2015.10.13 ~ 10.14	平城宮の発掘・整備・復元・管理・活用。藤原京の発掘調査状況・整備調査事例について視察	対応：都城発掘調査部（平城・復原）、企画調整部
	大韓民国	国立扶余文化財研究所	2015.10.26 ~ 10.29	百济宮城および分区施設比較研究のための現地調査	対応：都城発掘調査部（平城・復原）
	エルサルバドル共和国	観光局 レレーシヨンセンテ	2015.10.27	金沢大学実施 JICA 課題別研修「中米地域資源としてのワヤマ文明遺跡の保存と活用」	対応：企画調整部
	グアテマラ共和国	観光局文化遺産観光部門	2015.10.27	金沢大学実施 JICA 課題別研修「中米地域資源としてのワヤマ文明遺跡の保存と活用」	対応：企画調整部
	ホンジュラス共和国	観光局環境の持続可能性部門	2015.10.27	金沢大学実施 JICA 課題別研修「中米地域資源としてのワヤマ文明遺跡の保存と活用」	対応：企画調整部
	モルディブ共和国	ロアマリゾートモルディブ アットマーミギリ ロアマ博物館	2015.11.16, 26, 27	「博物館等における文化財の管理と展示活用」研修：文化財登録管理の実習	対応：企画調整部、都城発掘調査部（平城）、蔵敷文化財センター
	ネパール	文化観光省考古局 ネバール国立博物館	2015.11.16, 26, 27	「博物館等における文化財の管理と展示活用」研修：文化財登録管理の実習	対応：企画調整部、都城発掘調査部（平城）、蔵敷文化財センター
	スリランカ民主社会主义共和国	国家遺産省考古局博物館課	2015.11.16, 26, 27	「博物館等における文化財の管理と展示活用」研修：文化財登録管理の実習	対応：企画調整部、都城発掘調査部（平城）、蔵敷文化財センター
	フランス共和国	フランス東洋学院	2016.2.23 ~ 2.27	福井県石川研究会で発表	対応：企画調整部
	台湾	文化省政策次官	2016.3.4	研究会で発表および平城宮跡などの見学、文化財保存について視察	対応：企画調整部
2016	大韓民国	国立慶州文化財研究所	2016.4.14 ~ 4.15	平城宮跡調査、城壁・塹・廻廊の発掘・整備担当者との会談	対応：都城発掘調査部（平城）
	ヨルダン	觀音・古代遺跡 ヨルダン古代部	2016.4.23	平城宮跡における遺跡保存の見学	対応：副所長・企画調整部

年度	国名	所属・職	期間	目的	備考
2016	ミャンマー連邦共和国	ホテル観光省計画局	2016.6.3	会員文化財研究所と平城宮跡の概略説明、施設見学	JICA研修 対応：企画調整部
	アメリカ合衆国	カリフォルニア大学バークレー校	2016.6.14～12.15	「韓國3千朝の文字文化と新疆と日本における初期の文字」の研究のため（国際交流基金日本研究フェロー受賞）	企画調整部長・受入
	台湾	台灣中央研究院	2016.8.26	发掘現場（東大寺寺域址）、環境考古学研究室・保存修復科（経験者）、整理室の見学	対応：都城発掘調査部、埋蔵文化財センター、企画調整部
	ルーマニア	第8回世界考古学会議参加者	2016.8.31	平城宮跡資料と平安宮跡の見学（第8回世界考古学会議エクスカーション）	対応：企画調整部
	アメリカ合衆国	第8回世界考古学会議参加者	2016.8.31	平城宮跡資料と平安宮跡の見学（第8回世界考古学会議エクスカーション）	対応：企画調整部
	オーストラリア連邦	第8回世界考古学会議参加者	2016.8.31	平城宮跡資料と平安宮跡の見学（第8回世界考古学会議エクスカーション）	対応：企画調整部
	オランダ王国	第8回世界考古学会議参加者	2016.8.31	平城宮跡資料と平安宮跡の見学（第8回世界考古学会議エクスカーション）	対応：企画調整部
	英國	第8回世界考古学会議参加者	2016.8.31	平城宮跡資料と平安宮跡の見学（第8回世界考古学会議エクスカーション）	対応：企画調整部
	ノルウェー王国	第8回世界考古学会議参加者	2016.8.31	平城宮跡資料と平安宮跡の見学（第8回世界考古学会議エクスカーション）	対応：企画調整部
	ブラジル連邦共和国	第8回世界考古学会議参加者	2016.8.31	平城宮跡資料と平安宮跡の見学（第8回世界考古学会議エクスカーション）	対応：企画調整部
	カナダ	第8回世界考古学会議参加者	2016.8.31	平城宮跡資料と平安宮跡の見学（第8回世界考古学会議エクスカーション）	対応：企画調整部
	中華人民共和国	浙江省古建築設計研究院	2016.9.2	平城宮、大殿殿、朱雀門における保護と展示利用の現地見学	対応：都城発掘調査部
	アフガニスタン・イスラム共和国	アフガニスタン考古学研究所 発掘調査部	2016.9.7.12.13	文化遺産の保護に関する研修 2016（集団研修） －道路（遺構・遺物）の調査と保護－の講義受講（ACCUU）	講師：中村、藤谷
	パキスタンデュシターン 民族共和国	文化省考古局クルナ地域事務所	2016.9.7.12.13	文化遺産の保護に関する研修 2016（集団研修） －道路（遺構・遺物）の調査と保護－の講義受講（ACCUU）	講師：中村、藤谷
	ブータン王国	内務文化者文化財遺産保護課	2016.9.7.12.13	文化遺産の保護に関する研修 2016（集団研修） －道路（遺構・遺物）の調査と保護－受講（ACCUU）	講師：中村、藤谷
	カンボジア王国	アンコール地域遺跡保護管理部 機構アンコール公園遺跡保護課	2016.9.7.12.13	文化遺産の保護に関する研修 2016（集団研修） －道路（遺構・遺物）の調査と保護－の講義受講（ACCUU）	講師：中村、藤谷
	イラン・イスラム共和国	イラン文化遺産工芸技術実験機構 歴史的建造物・道路・都市構成要素研究所	2016.9.7.12.13	文化遺産の保護に関する研修 2016（集団研修） －道路（遺構・遺物）の調査と保護－の講義受講（ACCUU）	講師：中村、藤谷
	オーストリア民主共和国	文化省考古学遺産局考古学部 ・専門職員	2016.9.7.12.13	文化遺産の保護に関する研修 2016（集団研修） －道路（遺構・遺物）の調査と保護－の講義受講（ACCUU）	講師：中村、藤谷
	モンゴル国	モンゴル国立博物館調査研究センター	2016.9.7.12.13	文化遺産の保護に関する研修 2016（集団研修） －道路（遺構・遺物）の調査と保護－の講義受講（ACCUU）	講師：中村、藤谷
	ネバール	ネバール政府ルンビニ地域開発トラスト遺産管理部	2016.9.7.12.13	文化遺産の保護に関する研修 2016（集団研修） －道路（遺構・遺物）の調査と保護－の講義受講（ACCUU）	講師：中村、藤谷
	ニュージーランド 下	ヘリテージ・ニュージーランド	2016.9.7.12.13	文化遺産の保護に関する研修 2016（集団研修） －道路（遺構・遺物）の調査と保護－の講義受講（ACCUU）	講師：中村、藤谷
	パプアニューギニア 独立国	パプアニューギニア管理保護 課・保全公社建築計画・世界 遺産部	2016.9.7.12.13	文化遺産の保護に関する研修 2016（集団研修） －道路（遺構・遺物）の調査と保護－の講義受講（ACCUU）	講師：中村、藤谷
	スリランカ民主社会主義共和国	国家考古学研究所アヌラーダプラ考古博物館	2016.9.7.12.13	文化遺産の保護に関する研修 2016（集団研修） －道路（遺構・遺物）の調査と保護－の講義受講（ACCUU）	講師：中村、藤谷
	タジキスタン共和国	国立古代博物館考古課	2016.9.7.12.13	文化遺産の保護に関する研修 2016（集団研修） －道路（遺構・遺物）の調査と保護－の講義受講（ACCUU）	講師：中村、藤谷
	タイ王国	文化省芸術局第9地域事務所	2016.9.7.12.13	文化遺産の保護に関する研修 2016（集団研修） －道路（遺構・遺物）の調査と保護－の講義受講（ACCUU）	講師：中村、藤谷
	ウズベキスタン共和国	ウズベキスタン科学アカデ ミー考古学研究所石器時代 歴史研究部	2016.9.7.12.13	文化遺産の保護に関する研修 2016（集団研修） －道路（遺構・遺物）の調査と保護－の講義受講（ACCUU）	講師：中村、藤谷
	ベトナム社会主义共和国	フジ念物保存センター科学 歴史研究部	2016.9.7.12.13	文化遺産の保護に関する研修 2016（集団研修） －道路（遺構・遺物）の調査と保護－の講義受講（ACCUU）	講師：中村、藤谷
	台湾	台灣中央研究院歴史言語研究 所	2016.9.8～9.9	共同研究	対応：都城発掘調査部
	カンボジア王国	文化大臣	2016.10.8	奈良文化財研究所のカンボジアにおける活動につ いて意見交換、資料贈呈、大阪殿足見学	対応：研究支援推進部、企画調整部
	大韓民国	慶州国立博物館	2016.10.21	大阪殿、免表差置式修復	対応：都城発掘調査部
	カンボジア王国	文化・藝術省博物館局カンボ ジア国立博物館石像雕刻修復 室	2016.11.16～ 11.29	文化遺産の保護に関する研修 2016（個別テーマ 研修）－博物館等における文化財の調査・記録・ 保存修復・活用－の講義受講（ACCUU）	
	カンボジア王国	Kampong Thom 市文化芸術 局 Kampong thom 文化博物 館	2016.11.16～ 11.29	文化遺産の保護に関する研修 2016（個別テーマ 研修）－博物館等における文化財の調査・記録・ 保存修復・活用－の講義受講（ACCUU）	

年度	国名	所属・施設	期間	目的	備考
2016	ラオス人民民主共和国	ラオス国立博物館教育課 者	2016.11.16 ~ 11.29	文化遺産の保護に資する研修 2016 (個別テーマ 研修) - 博物館等における文化財の調査・記録・ 保存復元・活用への講義受講 (ACCU)	
	ミャンマー連邦共和国	宗教・文化学者古・国立博物 館局博物館	2016.11.16 ~ 11.29	文化遺産の保護に資する研修 2016 (個別テーマ 研修) - 博物館等における文化財の調査・記録・ 保存復元・活用への講義受講 (ACCU)	
	ミャンマー連邦共和国	Kayin 州 Hpa-an 文化博物館	2016.11.16 ~ 11.29	文化遺産の保護に資する研修 2016 (個別テーマ 研修) - 博物館等における文化財の調査・記録・ 保存復元・活用への講義受講 (ACCU)	
	大韓民国	国立文化財研究所建築文化財 研究室	2016.11.16	研究交換	対応: 郡城発掘調査部
	シリア・アラブ共和国	タルボンヌ大学	2016.11.22	奈良文化財研究所訪問、平城宮跡資料館見学	対応: 企画調整部
	レバノン共和国	ニスコ・ペイントル事務所	2016.11.22	奈良文化財研究所訪問、平城宮跡資料館見学	対応: 企画調整部
	ボーランド共和国	ポーランド科学アカデミー考 古学民族学研究所	2016.11.22	奈良文化財研究所訪問、平城宮跡資料館見学	対応: 企画調整部
	エジプト・アラブ共和国	Ministry of Antiquities	2016.11.24	遺跡の探査についての情報収集、平城宮跡資料館 見学	対応: 企画調整部
	大韓民国	国立慶州博物館	2016.12.2	平城宮跡資料館、飛鳥資料館、第一次大晦殿見学	
	中華人民共和国	湖南大学美術書院	2016.12.27	木簡の整理から保存までの状況の観察、平城宮跡 資料館、第一次大晦殿の見学	対応: 郡城発掘調査部
	英國	ロンドン大学	2017.1.11 ~ 1.13	国書資料閲覧	対応: 郡城発掘調査部
	大韓民国	慶州東國大学校考古美術史學 科	2017.1.11	日本古代都城遺跡調査研究及び整備事例研究	対応: 郡城発掘調査部
	美國	セイインズベリー日本芸術研究 所: 文化政策センター	2017.1.11	奈良文化財研究所訪問、打ち合わせ	対応: 郡城発掘調査部
	大韓民国	円光大学人文学科・百済文化研 究所	2017.2.1	平城宮跡資料館、第一次・第二次大晦殿見学	
	ミャンマー連邦共和国	宗教・文化学者古・国立博物 館局発掘・遺物・神社文化	2017.2.14 ~ 2.15	平城宮跡、飛鳥資料館、山田寺跡探査	
	タイ王国	文化省芸術局・スコタイ第6 事務所	2017.2.14 ~ 2.15	平城宮跡、飛鳥資料館、山田寺跡探査	
	カンボジア王国	アンコール地域保存整備機構 アンコール調査記録国際セン ター	2017.2.14 ~ 2.15	平城宮跡、飛鳥資料館、山田寺跡探査	
	ベトナム社会主义共 和国	ベトナム少数民族文化芸術協 会	2017.2.14 ~ 2.15	平城宮跡、飛鳥資料館、山田寺跡探査	
	カナダ	トロント大学・教授	2017.3.8	奈良文化財研究所視察	対応: 郡城発掘調査部(平城)
	イラン・イスラム共和国	文化遺產手工艺觀光厅	2017.3.31	表敬訪問、平城宮跡資料館見学	対応: 企画調整部
2017	サウジアラビア王国	文化観光促進大臣顧問團	2017.4.14	平城宮跡の整備・活用実況視察	対応: 企画調整部
	中華人民共和国	河南省文書建築保護研究院	2017.6.7	平城宮跡見学(茶葉門・大極殿・発掘現場)	対応: 郡城発掘調査部
	大韓民国	国立扶余文化財研究所	2017.6.13	百濟帝景寺跡の調査状況と今後の課題について講 演	対応: 郡城発掘調査部
	中華人民共和国	社会科学院青年研究者代表団	2017.6.30	平城宮跡資料館、大極殿、遺構展示館見学	対応: 企画調整部
	大韓民国	国立文化財研究所建築文化財 研究室	2017.7.12	皇甫寺跡歴史研究のための日本の事例調査と研究 交流および日本古代建築と其研究現況把握のため の基礎資料収集	対応: 郡城発掘調査部
	大韓民国	翰林大学	2017.8.1	文会研の業歴と日本文化財管理・維持・活用 についての質問	対応: 企画調整部
	台湾	台湾区医学大学・副教授	2017.8.9	研究所訪問	対応: 企画調整部
	ミクロネシア連邦	ボーンペイ州知事	2017.8.11	研究所の概要説明、平城宮跡資料館・第一次大晦 殿・遺跡展示館見学	対応: 企画調整部
	フィジー共和国	フィジー博物館考古室	2017.10.23 ~ 10.24	ACCUによる文化遺産の保護に資する研修	対応: 郡城発掘調査部、企画調 整部
	パプアニューギニア共和国	パプアニューギニア国立美術 博物館保存室	2017.10.23 ~ 10.24	ACCUによる文化遺産の保護に資する研修	対応: 郡城発掘調査部、企画調 整部
	ソロモン諸島	文化歴史学者ソロモン諸島國立 博物館考古室	2017.10.23 ~ 10.24	ACCUによる文化遺産の保護に資する研修	対応: 郡城発掘調査部、企画調 整部
	中華人民共和国	復旦大学文物与博物馆学系	2017.10.25	郡城発掘調査部、准成文化財センター訪問	
	台湾	国立台北芸術大学文化資源学 院	2017.12.6	平城宮跡および奈良文化財研究所の見学	対応: 郡城発掘調査部、企画調 整部
	インドネシア共和国	教育文化省世界文化遺産課	2017.12.12	平城宮跡の管理について監察	対応: 企画調整部
	中華人民共和国	成都巣本造史的建造物修復	2017.12.20	文化財修復物をもとにとする文化遺産の保存・活用 研究の取り組みについて監察	対応: 文化遺産部、企画調整部
	トルコ共和国	文化観光部文化遺産博物館局 博物館本部	2018.1.29	JICA国際研修「トルコ博物館及び文化財の自然 災害からの保護に関する能力開発」	対応: 摂成文化財センター
	大韓民国	文化財保护署王京核心遺跡復 元整備事業推進團	2018.2.27 ~ 3.1	第一次大極殿整備地回復実況調査および復 元証認研究	対応: 郡城発掘調査部
2018	大韓民国	江原道文化芸術課	2018.4.19	古文研の遺跡・遺物の保存・抑復・整備など、文 化財の維持管理における取り組み・保全活動につ いて授業	対応: 文化遺産部、郡城発掘調 査部、企画調整部
	中華人民共和国	河南博物館	2018.4.19	古文研の資料の精査化について授業	対応: 企画調整部
	中華人民共和国	中国农业大学	2018.5.1	研究所訪問	対応: 郡城発掘調査部

年度	国名	所属・職	期間	目的	備考
2018	インド	ハイデラバード大学考古学 科	2018.6.5	周邊考古学研究室、保存修復科研究室、北物貿 易室、发掘現場の見学	対応：都城発掘調査部、埋蔵文 化財センター、企画調整部
	大韓民国	国立釜山大学韓国 系	2018.7.18	平城宮跡、キトラ古墳複合施設、飛鳥資料館視 察	対応：都城発掘調査部、埋蔵文 化財センター、企画調整部
	英国	ケンブリッジ大学考古調査課 程学生	2018.7.23	考古科学セミナー「過去の人口変動と法医考古」 での講話	都城発掘調査部
	中華人民共和国	河南省文物局博物館考古處	2018.9.4～9.5	大型遺跡の保存活用状況視察、平城宮跡、高松塚 周辺地区、キトラ古墳複合施設	対応：都城発掘調査部、文化遺 産部、埋蔵文化財センター。企 画調整部
	アフガニスタン・ イスラム共和国	積極文化使者アフガニスタン考 古学研究所 発掘調査部	2018.9.11, 17, 27, 28	ACCU集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」	対応：都城発掘調査部、文化遺 産部、埋蔵文化財センター。企 画調整部
	ザーテン王国	内務文化省文化財遺跡保存課	2018.9.11, 17, 27, 28	ACCU集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」	対応：都城発掘調査部、文化遺 産部、埋蔵文化財センター。企 画調整部
	カンボジア王国	サンボーラ・ブレイ・タック国 立歴史遺跡、考古・保存部建 造物保存課	2018.9.11, 17, 27, 28	ACCU集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」	対応：都城発掘調査部、文化遺 産部、埋蔵文化財センター。企 画調整部
	中華人民共和国	北京市文物考古研究所 考古第一室	2018.9.11, 17, 27, 28	ACCU集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」 （第2章）（遺跡管理・ 保存・展示）	対応：都城発掘調査部、文化遺 産部、埋蔵文化財センター。企 画調整部
	フィジー共和国	フィジー博物館考古室	2018.9.11, 17, 27, 28	ACCU集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」	対応：都城発掘調査部、文化遺 産部、埋蔵文化財センター。企 画調整部
	インド	ダルカル・カングリーハ大学古 代インド史・文化・考古学部	2018.9.11, 17, 27, 28	ACCU集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」	対応：都城発掘調査部、文化遺 産部、埋蔵文化財センター。企 画調整部
	インドネシア共和 国	ハサウエイン大学研究所考古 研究センター	2018.9.11, 17, 27, 28	ACCU集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」	対応：都城発掘調査部、文化遺 産部、埋蔵文化財センター。企 画調整部
	カザフスタン共和 国	カザフスタン国立博物館考古 室・民族学部門考古遺物第1 ラボ	2018.9.11, 17, 27, 28	ACCU集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」	対応：都城発掘調査部、文化遺 産部、埋蔵文化財センター。企 画調整部
	キリバス共和国	内務省文化博物館部門	2018.9.11, 17, 27, 28	ACCU集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」	対応：都城発掘調査部、文化遺 産部、埋蔵文化財センター。企 画調整部
	タオスマニン民主共 和国	タオスマニン大学社会科学部歴 史・考古学系考古学・文化財 マネジメントコース	2018.9.11, 17, 27, 28	ACCU集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」	対応：都城発掘調査部、文化遺 産部、埋蔵文化財センター。企 画調整部
	モルディブ共和国	教育省遺産局遺産課	2018.9.11, 17, 27, 28	ACCU集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」	対応：都城発掘調査部、文化遺 産部、埋蔵文化財センター。企 画調整部
	ニュージーランド 北島事務所	ヘリテージ・ニュージーラン ド北島事務所	2018.9.11, 17, 27, 28	ACCU集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」	対応：都城発掘調査部、文化遺 産部、埋蔵文化財センター。企 画調整部
	パプアニューギニア 独立國	人類・社会・考古学部パプア ニューギニア大学	2018.9.11, 17, 27, 28	ACCU集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」	対応：都城発掘調査部、文化遺 産部、埋蔵文化財センター。企 画調整部
	スリランカ民主社 会主義共和国	スリランカ中央文化基金調査 部・考古専門機関	2018.9.11, 17, 27, 28	ACCU集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」	対応：都城発掘調査部、文化遺 産部、埋蔵文化財センター。企 画調整部
	ウズベキスタン 共和国	ウズベキスタン科学アカデ ミー考古学研究所先史部門	2018.9.11, 17, 27, 28	ACCU集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」	対応：都城発掘調査部、文化遺 産部、埋蔵文化財センター。企 画調整部
	ベトナム社会主义 共和国	ベトナム社会科学院アカデミー 王城研究室所長報・国際協力 課	2018.9.11, 17, 27, 28	ACCU集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」	対応：都城発掘調査部、文化遺 産部、埋蔵文化財センター。企 画調整部
	カンボジア王国	金真文化財研究所シユカリ アツサ研究所	2018.10.15	研究会「カンボジア考古学の最新調査」での発表	対応：企画調整部
	オーストラリア連 邦	フリンダース大学	2018.10.15	研究会「カンボジア考古学の最新調査」での発表	対応：企画調整部
	大韓民国	国立文化財研究所	2018.10.18～ 10.19	日韓共同研究中間成果報告会、平城地区視察	対応：都城発掘調査部
	中華人民共和国	復旦大学・文物与博物館学系	2018.10.30	研究所訪問	対応：都城発掘調査部、埋蔵文 化財センター
	英國	セインズベリー日本藝術研究 室	2018.10.31	講演	対応：都城発掘調査部
	大韓民国	忠淸宮管理所	2018.11.7	企文研の主な事業、研究成果等について情報収集	対応：企画調整部
	大韓民国	昌山の長	2018.11.12	企文研訪問、平城宮跡見学	対応：都城発掘調査部
	台湾	台灣小中研究院 考古學門	2018.11.16	企文研訪問	対応：都城発掘調査部
	大韓民国	国立伽耶文化財研究所	2018.11.19	本部研究観察	対応：都城発掘調査部
	大韓民国	国立文化財研究所 自然文化 財研究室	2018.12.7	共同研究	対応：都城発掘調査部
	大韓民国	国立文化財研究所 海洋 遺物研究室	2019.1.22	共同研究	対応：都城発掘調査部
	中華人民共和国	中央民族大学民族管理学院	2019.1.28	平城宮いざない見学	対応：企画調整部
	キルギス共和国	国立考古学アカデミー歴史文化 遺産研究所	2019.2.1	施設見学（遺物整理室）	対応：都城発掘調査部
	中華人民共和国	西北大学文化遺產学院	2019.2.19	施設見学	対応：都城発掘調査部

年度	国名	所属・施設	期間	目的	備考
2018	フランス共和国	国立古文書大学	2019.2.28	施設見学	対応：企画調整部
2019	米国	セインズベリー日本藝術研究 所	2019.4.2	共同研究打ち合せ	対応：企画調整部
	英國	Queen's College	2019.4.3 ~ 4.10	シンポジウム発表、研究打ち合せ	対応：企画調整部
	英國	ヨーク大学	2019.4.3 ~ 4.13	シンポジウム発表、研究打ち合せ	対応：企画調整部
	台湾	中央研究院	2019.4.4 ~ 4.9	シンポジウム発表、研究打ち合せ	対応：企画調整部
	英國	ケンブリッジ大学	2019.4.5 ~ 4.9	シンポジウム発表、研究打ち合せ	対応：企画調整部
	タイ王国	CRMA サーチセンター	2019.5.14	会文研訪問、ワークショット	対応：企画調整部
	フランス共和国	Collège de France	2019.5.15	会文研訪問、本館見学	対応：都城発掘調査部、企画調整部
	モンゴル国	ハラホリン市議	2019.5.19 ~ 5.21	平城地区、飛鳥・奈良地区視察及び所長面談	対応：満蔵文化財センター
	大韓民国	国立慶州博物館	2019.6.19	平城宮跡、周辺見学	対応：企画調整部
	ブラジル連邦共和国	サンパウロ大学	2019.6.24	国際遺跡研究セミナー参加	対応：企画調整部
	英國	セインズベリー日本藝術研究所	2019.6.25 ~ 6.26	セミナー開催、現地地区・飛鳥地区視察	対応：企画調整部
	英國	ケンブリッジ大学	2019.7.8 ~ 7.19	資料調査	対応：企画調整部
	メキシコ合衆国	考古学研究センター	2019.7.9	本館見学、打ち合わせ	対応：都城発掘調査部
	インドネシア共和国	インドネシア科学院	2019.7.10	国際遺跡研究セミナー参加	対応：企画調整部
	中華人民共和国	西北大学 文化遺産学院	2019.7.18	保存修復科学研究室訪問	対応：満蔵文化財センター
	キルギス共和国	スマイラポート・国立歴史考 古博物館歴史課室	2019.7.25, 30, 31 8~2	ACCU 顧問テーマ研修 2019「博物館収蔵品の記 録と保存活用」	対応：企画調整部
	タジキスタン共和国	タジキスタン国立考古博物館 考古室	2019.7.25, 26, 31 8~2	ACCU 顧問テーマ研修 2019「博物館収蔵品の記 録と保存活用」	対応：企画調整部
	ウズベキスタン共和国	ウズベキスタン国立歴史博物 館貿易調査室	2019.7.25, 26, 31 8~2	ACCU 顧問テーマ研修 2019「博物館収蔵品の記 録と保存活用」	対応：企画調整部
	英國	ケンブリッジ大学	2019.7.29 ~ 7.31	打ち合せ、資料調査	対応：企画調整部
	アメリカ合衆国	プリンストン大学	2019.7.31	表敬訪問、研究交流	対応：都城発掘調査部
	イタリア共和国	ICOM-CC 事務局	2019.9.5	ICOM-CC オフサイトミーティング、施設見学	対応：企画調整部、満蔵文化財センター
	ペトナム社会主義共和国	タシロン・ハノイ文化財保存 センター	2019.9.5	所長会報・施設見学	対応：企画調整部
	中華人民共和国	杭州市都市計画設計研究院	2019.11.26	奈良の文化財の保存、遺跡の保護について視察	対応：企画調整部
	中華人民共和国	天津大学	2019.12.6	平城宮・京における建築史研究に関する意見交換	対応：都城発掘調査部
	大韓民国	元中文化財研究所	2019.12.12 ~ 12.14	研究発表、古代官衙研究会に参加	対応：企画調整部、都城発掘調査部
	大韓民国	中央大学校人文大学歴史学科	2020.1.22	施設・資料見学、研究交流	対応：都城発掘調査部
	中華人民共和国	陝西省考古研究院	2020.2.12	整理室見学	対応：都城発掘調査部

2. 研修事業

(1) 文化財担当者研修の実績

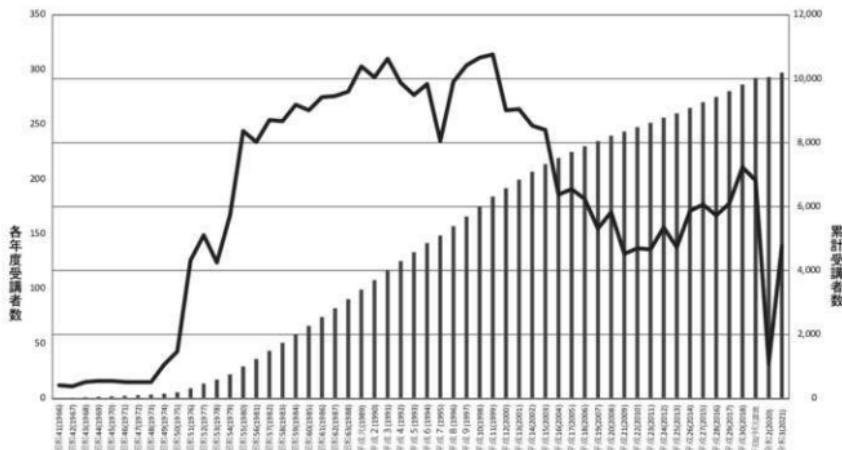
No.	年度	区分	課程名	実施期日	受講者数
1	2012	文化財担当者専門研修	範圍・自然名勝等保存活用基礎課程 建築遺構調査課程	2012.6.6～6.12 6.18～6.22	22 12
2		*	自然科学の年代測定法課程	中止	
3		*	保存科学基礎Ⅰ（金属製造物）課程	10.2～10.11	6
5		*	保存科学基礎Ⅱ（木製遺物）課程	10.11～10.19	6
6		*	遺跡情報記録調査課程	10.23～10.26	9
7		*	上器・周器調査課程	11.12～11.16	17
8		*	遺跡学外注課程	中止	
9		*	文化財写真課程	12.4～12.14	15
10		*	報告書作成課程	12.14～12.21	24
11		*	古文書歴史資料調査管理基礎課程	2013.1.15～1.18	19
12		*	文化的景観調査技術課程	1.21～1.25	11
13		*	生物遺物調査課程	2.13～2.21	5
14		*	保存科学Ⅴ（遺構・石造文化財）課程	2.25～3.1	10
		合計			156
15	2013	文化財担当者専門研修	建築遺構調査課程	2013.6.10～6.14	10
16		*	中近世遺跡調査と発掘課程	6.17～6.21	25
17		*	建物物質保存活用基礎課程	6.24～6.28	16
18		*	報告書作成課程	7.11～7.19	27
19		*	災害痕跡調査課程	9.9～9.13	12
20		*	三次元計測課程	9.30～10.4	8
21		*	保存科学基礎Ⅰ（金属製造物）課程	10.8～10.17	11
22		*	保存科学基礎Ⅱ（木製遺物）課程	10.17～10.25	15
23		*	古代・中近世瓦調査課程	10.28～11.1	14
		合計			138
24	2014	文化財担当者専門研修	建築遺構調査課程	2014.6.9～6.13	9
25		*	植物遺体調査課程	6.16～6.20	10
26		*	範圍・自然名勝等保存活用基礎課程	6.23～6.27	19
27		*	報告書作成Ⅰ（編集基礎）課程	7.7～7.11	15
28		*	報告書作成Ⅱ（応用制作）課程	7.14～7.18	9
29		*	自然科学の年代測定法課程	9.1～9.5	5
30		*	文化財的根拠調査計画課程	9.8～9.12	12
31		*	遺跡学外注課程	9.29～10.3	10
32		*	保存科学基礎Ⅰ（金属製造物）課程	10.7～10.16	9
33		*	保存科学基礎Ⅱ（木製遺物）課程	10.16～10.24	6
34		*	古文書歴史資料調査基礎課程	12.8～12.12	18
35		*	遺跡情報記録調査課程	12.16～12.19	18
36		*	文化財写真課程	2015.1.13～1.23	13
37		*	出土文書資料調査課程	1.26～1.30	6
38		*	保存科学Ⅲ（応急処置）課程	2.16～2.20	12
		合計			171
39	2015	文化財担当者専門研修	建築遺構調査課程	2015.6.8～6.12	8
40		*	災害痕跡調査課程	6.15～6.19	8
41		*	建物物質保存活用基礎課程	6.22～6.26	20
42		*	報告書作成Ⅰ（編集基礎）課程	7.6～7.10	14
43		*	報告書作成Ⅱ（応用制作）課程	7.13～7.17	10
44		*	自然科学の年代測定法課程	7.21～7.24	0
45		*	遺跡情報記録調査課程	9.8～9.11	10
46		*	木器・木製品調査課程	9.14～9.18	11
47		*	三次元計測課程	9.28～10.2	9
48		*	保存科学Ⅰ基礎（金属製造物）課程	10.6～10.15	6
49		*	保存科学Ⅱ基礎（木製遺物）課程	10.15～10.23	6
50		*	文化財写真課程	12.8～12.18	13
51		*	遺跡等発見整備課程	2016.1.12～1.22	14
52		*	保存科学Ⅲ（応急処理）課程	2.15～2.19	9
53		*	埋蔵文化財デジタル写真研修	3.8～3.11	16
54		*	三次元データショット	1.16～1.17	23
		合計			177

第	年度	区分	課程名	実施期間	受講者数
55	2016	文化財担当者専門研修	建築遺構調査課程	2016.6.6～6.10	4
56		*	古文書歴史資料調査基礎課程	6.20～6.24	23
57	*		人骨・動物骨調査課程	7.25～7.29	7
58	*		地質考古調査基礎課程	8.29～9.2	17
59	*		遺跡記録記入調査課程	9.6～9.9	5
60	*		文化的遺跡調査計画課程	9.12～9.16	10
61	*		地質・年代調査課程	9.26～9.30	3
62	*		保存科学Ⅰ（金属製造物）課程	10.11～10.19	10
63	*		土器・陶磁器調査課程	11.14～11.18	16
64	*		文化財写真課程	11.28～12.8	12
65	*		図書書作成課程	12.8～12.16	19
66	*		中近世城郭調査整備課程	2017.1.16～1.20	11
67	*		保存科学Ⅱ（遺構・石造文化財）課程	2.13～2.17	11
68	*		デジタル写真課程	3.7～3.10	13
69	*		報告書公開活用課程	3.13～3.15	6
合計					167
70	2017	文化財担当者専門研修	建築遺構調査課程	2017.6.12～6.16	7
71	*		建築物保有活用基礎課程	6.19～6.23	21
72	*		出土品管理・活用課程	7.10～7.14	22
73	*		災害痕跡調査課程	7.24～7.28	5
74	*		遺跡記録記入調査課程	9.13～9.15	8
75	*		文化的遺跡整備活用課程	9.20～9.22	6
76	*		三次元計測課程	9.25～9.29	14
77	*		保存科学Ⅱ（有機質遺物）課程	10.10～10.18	6
78	*		古代・中近世瓦調査課程	11.13～11.17	10
79	*		文化財写真課程	11.27～12.7	18
80	*		図書書編集基礎課程	12.7～12.14	20
81	*		図書書デジタル作成課程	12.14～12.21	15
82	*		名跡保存活用基礎課程	2018.1.15～1.19	11
83	*		保存科学Ⅲ（応急処置）課程	2.13～2.16	15
合計					178
84	2018	文化財担当者専門研修	建築遺構調査課程	2018.6.11～6.15	8
85	*		古文書歴史資料調査基礎課程	6.18～6.22	12
86	*		近現代建築物保存活用課程	7.9～7.13	24
87	*		本邦文化財の科学的調査基礎課程	7.23～7.27	8
88	*		地質考古調査課程	9.3～9.7	29
89	*		文化的遺跡調査計画課程	9.10～9.14	10
90	*		遺跡記録記入調査課程	9.18～9.21	21
91	*		低地遺跡調査課程	10.3～10.5	8
92	*		保存科学Ⅰ（金属製造物）課程	10.9～10.17	12
93	*		文化財写真課程	11.29～12.6	20
94	*		図書書編集基礎課程	12.6～12.13	15
95	*		図書書デジタル作成課程	12.13～12.20	7
96	*		史跡等保存活用課程	2019.1.15～1.25	21
97	*		出土文字資料調査課程	2.18～2.22	10
98	*		保存科学Ⅱ（遺構・石造文化財）課程	2.25～3.1	6
合計					211
99	2019	文化財担当者専門研修	建築遺構調査課程	2019.6.10～6.14	8
100	*		建築物保有活用基礎課程	7.1～7.5	20
101	*		堆積・地質学基礎課程	9.17～9.20	32
102	*		遺跡GIS課程	9.24～9.27	8
103	*		出土木器調査課程	9.30～10.4	4
104	*		保存科学Ⅱ（有機質遺物）課程	10.15～10.24	11
105	*		文化財三次元計測課程	11.18～11.22	12
106	*		文化財写真課程	11.25～12.5	11
107	*		図書書編集基礎課程	12.5～12.12	24
108	*		図書書デジタル作成課程	12.12～12.19	13
109	*		文化財デジタルアーカイブ課程	2020.1.20～1.24	18
110	*		史跡保存活用計画策定課程	2.3～2.7	16
111	*		文化財防災・減災課程	2.12～2.14	12
112	*		保存科学Ⅳ（材質・構造調査）課程	2.18～2.21	10
合計					199

順	年度	区分	課程名	実施期日	受講者数
113	2020	文化財担当者専門研修	上器・陶磁器調査課程	中止	
114		*	古文書歴史資料調査基礎課程	中止	
115	*		建築遺構調査課程	中止	
116	*		近現代建築保存活用課程	中止	
117	*		木質文化財の科學的調査課程	中止	
118	*		自然科學分析外注課程	2020.9.24～9.25	10
119	*		文化財的観測調査計画課程	9.28～10.2	5
120	*		保存科学Ⅰ（金属製造物）課程	10.13～10.21	8
121	*		地質・考古調査課程	10.26～10.30	9
122	*		文化財デジタルアーカイブ課程	中止	
123	*		文化財写真課程	中止	
124	*		報告書編集基礎課程	中止	
125	*		報告書デジタル作成課程	中止	
126	*		史跡等保存活用計画策定演習課程	2021.1.29	10
127	*		保存科学Ⅱ（遺構・石造文化財）課程	中止	
合計					42
128	2021	文化財担当者専門研修	古文書歴史資料調査基礎課程	2021.5.31～6.4	10
129	*		上器・陶磁器調査課程	6.14～6.18	10
130	*		建築遺構調査課程	6.21～6.25	8
131	*		近現代建築保存活用課程	7.5～7.9	10
132	*		木質文化財の科學的調査課程	7.13～7.16	4
133	*		遺跡調査技術課程	9.27～10.1	10
134	*		保存科学（木製遺物）課程	10.11～10.19	10
135	*		道路GIS課程	11.15～11.19	30
136	*		文化財写真課程	11.22～12.3	8
137	*		報告書編集基礎課程	12.13～12.17	10
138	*		報告書デジタル作成課程	12.30～12.24	10
139	*		史跡等保存活用計画策定課程	2022.1.18～1.24	9
140	*		文化財三次元計測課程	1.27～1.28	10
合計					139
141	2022	文化財担当者専門研修	建造物保存活用計画策定課程	2022.7.4～7.8	15
142	*		文化財デジタルアーカイブ課程	7.25～7.29	68
143	*		遺跡調査技術課程	9.12～9.16	33
144	*		層序学・堆積学・土壤学基礎課程	9.26～9.30	23
145	*		保存科学（材質・構造調査）課程	10.11～10.14	7
146	*		保存科学（遺構・石造文化財）課程	10.17～10.21	7
147	*		中・近世瓦調査課程	11.9～11.11	19
148	*		文化財写真課程	11.21～12.2	
149	*		報告書編集基礎課程	12.5～12.9	
150	*		報告書デジタル作成課程	12.12～12.16	
151	*		史跡等保存活用計画策定課程	2023.1.17～1.23	
152	*		文化的景観調査計画課程	1.30～2.3	
153	*		データベース活用課程	10.31～11.2	
154	*		文化財三次元計測入門課程	未定	
合計					◎2022年度は10月14日現在の実績と予定

(2) 各年度受講者数・累計受講者数

年 度	単年度受講者数	累計受講者数	年 度	単年度受講者数	累計受講者数
昭和41年 (1966)	12	12	平成 6 年 (1994)	287	4,660
昭和42年 (1967)	11	23	平成 7 年 (1995)	235	5,095
昭和43年 (1968)	15	38	平成 8 年 (1996)	289	5,384
昭和44年 (1969)	16	54	平成 9 年 (1997)	304	5,588
昭和45年 (1970)	16	70	平成 10 年 (1998)	311	5,599
昭和46年 (1971)	15	85	平成 11 年 (1999)	314	6,313
昭和47年 (1972)	15	100	平成 12 年 (2000)	263	6,576
昭和48年 (1973)	15	115	平成 13 年 (2001)	264	6,840
昭和49年 (1974)	31	146	平成 14 年 (2002)	249	7,089
昭和50年 (1975)	43	189	平成 15 年 (2003)	245	7,334
昭和51年 (1976)	126	315	平成 16 年 (2004)	186	7,520
昭和52年 (1977)	149	464	平成 17 年 (2005)	191	7,711
昭和53年 (1978)	124	588	平成 18 年 (2006)	182	7,893
昭和54年 (1979)	167	755	平成 19 年 (2007)	155	8,048
昭和55年 (1980)	244	999	平成 20 年 (2008)	170	8,218
昭和56年 (1981)	234	1,233	平成 21 年 (2009)	132	8,350
昭和57年 (1982)	254	1,487	平成 22 年 (2010)	137	8,487
昭和58年 (1983)	253	1,740	平成 23 年 (2011)	136	8,623
昭和59年 (1984)	268	2,008	平成 24 年 (2012)	156	8,779
昭和60年 (1985)	263	2,271	平成 25 年 (2013)	138	8,917
昭和61年 (1986)	275	2,546	平成 26 年 (2014)	171	9,088
昭和62年 (1987)	276	2,822	平成 27 年 (2015)	177	9,265
昭和63年 (1988)	280	3,102	平成 28 年 (2016)	167	9,432
平成元年 (1989)	303	3,405	平成 29 年 (2017)	178	9,610
平成 2 年 (1990)	293	3,698	平成 30 年 (2018)	211	9,821
平成 3 年 (1991)	310	4,008	平成 31 年 / 令和元年 (2019)	199	10,020
平成 4 年 (1992)	288	4,296	令和 2 年 (2020)	32	10,052
平成 5 年 (1993)	277	4,573	令和 3 年 (2021)	139	10,191



受講者数の推移

3. 主な出版物

(1) 奈良文化財研究所学報

- 2012 第90冊 Western Prasat Top Site Survey Report on Joint Research for the Protection of the Angkor Historic Site
第91冊 朝暉地区隋唐墓の整理と研究
第92冊 文化財論叢IV 奈良文化財研究所創立六十周年記念論文集
- 2014 第93冊 奈良山発掘調査報告II
-歌姫西須恵器窯の調査-
- 2015 第96冊 研究論集18 中世庭園の研究
-鎌倉・室町時代-
- 第95冊 日韓文化財論集III
- 2016 第94冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告V
-藤原京左京六条三坊の調査-
- 2017 第97冊 名勝旧大乗院庭園発掘調査報告
本文編 図版・資料編
- 2019 第98冊 東アジア考古学論叢II
-遠西地域の東晉十六国期都城文化の研究-
- 2020 第99冊 章義黄治窯発掘調査報告
本文編 図版編 付論・付表編
第100冊 日韓文化財論集IV (2021)
- 2021 第71冊 飛鳥池跡遺跡発掘調査報告
本文編I、本文編II
第101冊 近世庭園の研究 -安土桃山・江戸時代-

(2) 奈良文化財研究所史料

- 2012 第89冊 仁和寺史料 古文書編一
2013 第90冊 大宮家文書調査報告書
2018 第91冊 藤原宮木簡四
第92冊 本器集成図録 -飛鳥藤原編 I -
第93冊 薬師寺文書目録第一巻
2019 第94冊 仁和寺史料 古文書編二

(3) 研究報告

- 2012 第9冊 第15回古代官衙・集落研究会報告書
『四面廁建物を考える』報告編/資料編
第10冊 文化的景観研究集会(第4回)報告書

「文化的景観の現在 -保護行政・学術研究の中間総括-」

- 2012 第11冊 河南省鞏義市白河窓跡の発掘調査概報
第12冊 第16回古代官衙・集落研究会報告書
『塩の生産・流通と官衙・集落』
- 2013 第13冊 文化的景観研究集会(第5回)報告書
『文化的景観のつかい方』
- 2014 第14冊 第17回古代官衙・集落研究会研究報告書
『長舍と官衙の建物配置』報告編/資料編
- 2015 第15冊 第18回古代官衙・集落研究会研究報告書
『官衙・集落と土器1』
第16冊 キトラ古墳天文図星座写真資料
第17冊 藤原宮跡出土馬の研究
第18冊 第19回古代官衙・集落研究会報告書
『官衙・集落と土器2 -宮都・官衙・集落と土器-』
- 2017 第19冊 第20回古代官衙・集落研究会報告書
『郡守域の空間構成』
- 2018 第20冊 第21回古代官衙・集落研究会報告書
『地方官衙政府城の変遷と特質』報告編/資料編
第21冊 デジタル技術による文化財情報の記録と利活用
第22冊 ユーラシア考古学研究資料1 「カザフスタン後期旧石器文化の研究」
- 2019 第23冊 第22回古代官衙・集落研究会報告書
『官衙・集落と大堀』
第24冊 デジタル技術による文化財情報の記録と利活用2
第25冊 ユーラシア考古学研究資料2 「タジキスタン中期旧石器文化の研究」
- 2020 第26冊 第23回古代官衙・集落研究会報告書
『灯明皿と官衙・集落・寺院』
第27冊 デジタル技術による文化財情報の記録と利活用 -著作権・文化財動画・GIS・三次元データ・電子公開-
- 2021 第28冊 文化財多言語化研究報告
第30冊 第24回古代官衙・集落研究会報告書
『古代集落の構造と変遷1』

第31冊	考古学・文化財デジタルデータの Guides to Good Practice	2017	No.170 環境考古学研究室の研修紹介 No.171 保存科学研究集会 金属製造物の調査・ 研究に関する最近の動向
第32冊	文化財多言語化研究報告2		No.172 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター の最新研究動向
第33冊	デジタル技術による文化財情報の記録 と利活用4		No.173 2016年度 埋蔵文化財関係統計資料
第34冊	文化財と著作権	2018	No.174 保存科学研究集会 同位体比分析と産 地推定に関する最近の動向
(4) 埋蔵文化財ニュース			
2011	No.148 東日本大震災被災文化財レスキュー No.149 2010年度 埋蔵文化財関係統計資料		No.175 研究集会 水中遺跡保護行政の実態 遺跡調査技術集成 水中遺跡調査編I
2012	No.150 マイクロフォーカスX線CTを用いた 木造神像影刻の非破壊年輪年代調査(2) No.151 東日本大震災の文化財レスキュー -奈文研の活動-		No.176 文化財担当者研修の概要紹介 - 2017・ 2018年度の中から -
	No.152 災害時における奈良文化財研究所の支 援		No.177 2017年度 埋蔵文化財関係統計資料
	No.153 2011年度埋蔵文化財関係統計資料	2019	No.178 遺跡調査技術集成 水中遺跡調査編II 研究集会 水中遺跡保護行政の実態II
2013	No.154 全国本館出土遺跡・報告書総覧II No.155 現場のための環境考古学 No.156 奈良文化財研究所が提供しているデー タベース		No.179 保存科学研究集会 遺跡保存に関する 最近の動向
	No.157 2012年度 埋蔵文化財関係統計資料		No.180 研究を身近に感じてもらうための取り 組み - 「骨ものがたり」展のイベント 記録
2014	No.158 埋蔵文化財センターの40年 No.159 保存科学研究集会 石造文化財の劣化 と保存に関する新たな展開		No.181 木簡の年輪年代学
	No.160 埋蔵文化財センターの研究を支える調 査・分析機器紹介	2020	No.182 遺跡調査技術集成 水中道路調査編III 研究集会 水中遺跡保護行政の実態III
	No.161 2013年度埋蔵文化財関係統計資料		No.183 埋蔵文化財センターの成果 - 第4期 中期計画期間
2015	No.162 年輪年代学用現生木材標本リスト No.163 環境考古学11貝類標本リスト		No.184 花粉分析からみた都城造営と植生変化
	No.164 防災・減災を目指した新たな取り組み No.165 2014年度埋蔵文化財関係統計資料		No.185 奈良県出土墨書き書土器・文字瓦集成 上
2016	No.166 年輪年代学的手法を用いた木製品の同 一材検討 - 平城京出土簀串の整理作業 を通じて -	2021	No.186 奈良県出土墨書き書土器・文字瓦集成 下
	No.167 保存科学研究集会 文化財調査におけ るイメージング技術の諸問題		
	No.168 平成28年(2016年)熊本地震装飾古墳 等被災状況速報		
	No.169 2015年度 埋蔵文化財関係統計資料		
(5) 飛鳥資料館図録			
		2012	第56冊 比羅夫がゆく - 飛鳥時代の武器・武具・ いくさ -
			第57冊 花開く都城文化
		2013	第58冊 飛鳥寺2013 第59冊 飛鳥・藤原京への道
		2014	第60冊 いにしえの匠たち - ものづくりからみ た飛鳥時代 -
			第61冊 はぎとり・きりとり・かたどり - 大地 にきざまれた記憶 -
		2015	第62冊 はじまりの御仏たち

- 第63冊 キトラ古墳と天の科学
- 2016 第64冊 文化財を撮る－写真が遺す歴史－
- 第65冊 祈りをこめた小塔
- 第66冊 早川和子が描く飛鳥むかしむかし
- 2017 第67冊 藤原京を掘る－藤原京一等地の調査－
- 第68冊 高松塚古墳を掘る
－解明された築造方法－
- 2018 第69冊 あすかの原風景
- 第70冊 よみがえる飛鳥の工房
－日韓の技術交流を探る－
- 2019 第71冊 骨ものがたり
－環境考古学研究室のお仕事－
- 第72冊 飛鳥－自然と人と－
- 2020 第73冊 飛鳥の石造文化と石工
- 2021 第74冊 屋根を彩る草花－飛鳥の軒瓦とその文
様

(6) 飛鳥資料館カタログ

- 2012 第27冊 飛鳥の考古学2012
- 2013 第28冊 飛鳥・藤原京を考古科学する
- 第29冊 キトラ古墳壁画発見30周年記念 白虎
玄武 朱雀 青龍
- 第30冊 飛鳥の考古学2013
- 2014 第31冊 大和の美仏に魅せられて
- 2014 第32冊 飛鳥の考古学2014
－縄文・弥生・古墳から飛鳥へ－
- 2015 第33冊 飛鳥の考古学2015
－飛鳥の古墳調査最前線－
- 2017 第34冊 飛鳥の考古学2017
- 2018 第35冊 飛鳥の考古学2018
- 2019 第36冊 飛鳥の考古学2019
- 2020 第37冊 飛鳥の考古学2020
- 2021 第38冊 飛鳥の考古学2021

4. 講演会・現地説明会等

(1) 公開講演会

第110回 2012年6月30日

「古社寺修理技師たちの近代和風建築」鈴木智大
「関西の風土と近代和風庭園」高橋知奈津

第111回 2012年11月3日

「古代都城における動物利用」山崎 健
「水分移動解析による遺構の露出展示保存法の検討」
脇谷 草一郎

第112回 2013年6月29日

「日本らしきのはじまり」森先一貴
「海を越えてきたもの、こなかったもの」庄田慎矢

第113回 2013年10月26日

「東日本大震災文化財レスキュー事業における奈文研の取り組み」渡辺丈彦

「仮形埴輪、造形美に隠された世界」和田一之輔
第114回 2014年6月28日

「役人を育てる」桑田調也
「壁画古墳の世界」若杉智宏

第115回 2014年10月4日

「植物種実からみた古代の食生活」芝 康次郎
「文化的景観の味わい方」恵谷浩子

第116回 2015年6月20日

「ガラスからみた東西交易：日本出土のローマ・ガラスの起源」田村朋美

「日本後紀」を考古学で解釈する－弘仁六年正月丁丑条を中心に－」尾野善裕

第117回 2015年11月7日

「古代の盤上ゲーム「博奕」の復元」小田裕樹
「藤原宮から平城宮へ－宮の瓦づくりの移りかわり－」
石田由紀子

「ウマ駆ける古代日本」諫早直人

第118回 2016年6月18日

「平城宮佐伯門前のいま、むかし－奈文研本庁舎の発掘調査成果から－」神野 恵
「復元を学問する－「復元学」の誕生と未来－」
海野 聰
「なんと美しい平城京－都づくりの日々の－コマ－」

山本祥隆

第119回 2016年11月5日

「年輪年代学の新しい可能性を目指して」星野安治
「木製品からみた古代役人の生活」国武貞克

第120回 2017年6月17日

「橋はあったのか？－朱雀門周辺の発掘成果の紹介－」
浦 蓉子

「古代建築にみる近代」前川 歩

「デジタル地図で読む古代人の「旅」」清野 陽一

第121回 2017年11月11日

「藤原宮の造営と下層河岸SD1901A」大澤正吾
「表現された古（いにしえ）の建築」岩戸晶子

第122回 2018年6月16日

「重層する基壇－東大寺東塔院跡の発掘調査－」
山本祥隆

「古代カンボジア・アンコール王朝の終焉～西トップ遺跡の調査成果～」佐藤由似

「入浴の歴史と建築」福嶋啓人

第123回 2018年11月10日

「全国遺跡報告総覧と考古学ビッグデータの可能性」
高田祐一

「シルクロード天山北路の東西交渉－アク・ベシム遺跡の調査成果から－」山藤正敏

第124回 2019年6月15日

「第一次大極殿院南門の復原」前川 歩

「出土木製品の恒久的な保存と一時的な保管」松田和貴
「防災・減災に向けた考古学の新たな挑戦～地域災害履歴を発掘調査から知る」村田泰輔

第125回 2019年11月9日

「土でつくったさげもの－土製模造品からみた古墳祭祀のうつりかわり－」松永悦枝

「デジタル技術で結ぶ人と未来と文化財」山口欧志
「奈文研による今年度の平城宮跡の活用について」
内田和伸

第126回 2021年6月25日

「古代の人形を読み解く」浦 蓉子

「都市ヨークにおける初期中世装飾石彫の製作」
岩永 琳

第127回 2021年11月13日

「神々の住まいの内装－石清水八幡宮本殿の室札について」

山崎有生

「どうして古墳の副葬品は現代まで残るのか？－模擬古墳による金属製品の腐食メカニズムの検討」柳田明進

(2) 特別公開講演会（東京講演会）

2012年10月6日 遺跡をさぐり、しらべ、いかす－奈文研60年の軌跡と展望－

「発掘が塗りかえる古代史－都城の発掘調査60年－」

渡辺 丈彦

「古寺社の古文書が語りだす歴史－南都の古文書調査から－」吉川 聰

「掘らずに土の中をみる－遺跡探査の応用と成果－」

金田 明大

「文化遺産を守り伝える科学技術－伝統の技と科学の力－」

高妻 洋成

「遺跡を現在に活かし、未来に伝える－平城宮跡の保存と整備－」平澤 級

「海外の遺跡をまもる－国際協力としての文化遺産保護－」

石村 智

2013年9月22日 「歴史の証人」木簡を究める

「資料としての木簡、木簡の出土と整理」渡辺見宏

「木簡が明らかにした歴史の諸相」山本祥隆

「木簡の情報を読み取り記録する」桑田調也

「古代以外の、さまざまな地域の木簡」山本 崇

「データベース、木簡の文字」井上 幸

「木簡の科学的な分析、保存処理と伝来環境」高妻洋成

2014年10月25日 遺跡の年代を測るものさしと奈文研

「年代を測るものさしの作り方」難波洋三

「古代土器の年代推定－都の調査・研究成果と地方の視点－」尾野善裕

「時を測るものさしとしての木簡」渡辺見宏

「土器の年代と木簡の年紀」神野 恵

「白鳳か天平か、瓦が解決した『薬師寺論争』」

石田由紀子

「木の年輪で作った年代を測るものさし－年輪年代学の成果－」星野安治

2015年10月24日 発掘遺跡から読み解く古代建築

「なぜ建築史の研究者が発掘現場に？」西田紀子

「発掘遺構と古代建築をつなぐ」西山和宏

「古代建築の復原の手がかり－平城宮朱雀門と第一次大

極殿－」鈴木智大

「東西棟は入母屋か寄棟か－平城宮第一次大極殿院の復原にむけて－」海野 聰

「山田寺倒壊回廊が語る古代建築史」箱崎和久

「出土部材をしらべ、まもり、つたえる」香 光

2016年11月13日 飛鳥むかしむかし

「あすかの宇宙（そら）－飛鳥人のみた星空－」

若杉智宏

「飛鳥・藤原の木簡を紐解く」山本 崇

「藤原宮の轄轄遺構－大宝元年の元日朝賀と儀仗旗－」

大澤正吾

「古代衣装 飛鳥から平城へ」馬場 基

「飛鳥寺の発掘と塔心礎埋納品－飛鳥寺発掘60年－」

諫早直人

「貨幣誕生－飛鳥・藤原の銀銭と銅銭－」松村恵司

「飛鳥を描く」早川 和子、松村 恵司、杉山 洋、山本 崇

2017年10月7日 デジタル技術で魅せる文化財 奈文研とICT

「奈文研のデータベース」森本 晋

「全国遺跡報告総覧と考古学ビッグデータ」高田祐一

「木簡データベースの高次化とMOJIZO」渡辺見宏

「デジタルデータでみる高松塚古墳」廣瀬 覚

「文化財のデジタル文化資源化：見たままの姿を伝え、深層を探る」山口欧志

「発掘された歴史的地震・火山災害痕跡データベース：考古学の新たな挑戦」村田泰輔

2018年10月13日 藤原から平城へ－平城遷都の謎を解く－

「平城京の歴史的位置－遷都とその契機－」渡辺見宏

「建物の移築にみる藤原京・平城京」海野 聰

「平城宮轄轄遺構の発見－平城京遷都と儀式遺構の変化－」

大澤正吾

「平城宮の造営過程－長期にわたる建設事業－」

今井見樹

「平城京を造る－朱雀門と佐伯門前の発掘事例から－」

神野 恵

「古代都市 藤原京の実態」玉田芳英

2019年10月5日 奈良の都、平城宮の謎を探る

「平城宮の地はどうして選ばれたか？」内田和伸

「平城宮のモデルは唐の都長安城か？」今井見樹

「平城宮はどのように作られたのか？」桑田調也

「平城宮の東院はどういう施設か？」小田裕樹
「施釉瓦塙・陶器の出土は何を示すか？」神野 恵
「平城宮で即位した天皇の大嘗宮は？」福嶋啓人

2020年10月23日 奈良の都の暮らし—平安京の生活誌—
「CGでみる平城京－平城京のまちなみ紹介－」前川 歩
「平城宮に住もう人びと－貴族と役人の生活－」和田一之輔
「平城宮に勤める人びと－役人の一日と出世－」桑田 調也
「平城京の暮らし－娛樂と遊戯－」小田裕樹
「平城京の食生活－食材と料理－」森川 実
「平城京の借金事情－月借戻と出舉－」山本 祥隆
「平城京の疫病対策－医療・まじない・祈り－」神野 恵

2021年10月23日 特別史跡山田寺跡 史跡指定100年
「史蹟名勝天然紀念物保存法と山田寺跡の史跡指定」内田和伸
「山田寺の歴史と発掘調査」清野孝之
「建築史からみた山田寺－東アジアとの関連を中心として－」箱崎和久
「出土遺物からみた山田寺－瓦塙類を中心に－」林 正憲
「山田寺の調査研究成果の活用」西田紀子
「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の世界遺産登録に向けて」本中 真

(3) 現地説明会等

【2012年度】

2012年6月23日 平城京左京三条一坊一坪（平城491次）
参加者：652名 調査面積：1,872m²
都城発掘調査部史料研究室 山本祥隆

2012年9月15日 平城京左京三条一坊一・二坪（平城495次）
参加者：635名 調査面積：1,845m²
都城発掘調査部考古第三研究室 川畠 純

2012年11月23日 藤原宮朝堂院朝庭（飛鳥藤原第174次）
参加者：460人 調査面積：1,850m²
都城発掘調査部考古第三研究室 今井晃樹

考古第二研究室 森川 実

2013年1月26日 薬師寺食堂（平城第500次）

参加者：714人 調査面積：1,300m²
都城発掘調査部考古第三研究室 石田由紀子
2013年3月30日 平城宮跡東院地区（平城第503次）
参加者：820人 調査面積：1,015m²
都城発掘調査部考古第二研究室 小田裕樹

【2013年度】

2013年9月7日 甘樺丘東麓遺跡（飛鳥藤原第177次）
参加者：1,122人 調査面積：1,038m²
都城発掘調査部造構研究室 大林 潤

2013年9月28日 興福寺西室（平城第516次）
参加者：885人 調査面積：985m²
都城発掘調査部造構研究室 番 光

2013年12月21日 藤原宮朝堂院庭（飛鳥藤原第179次）
参加者：337人 調査面積：1,430m²
都城発掘調査部史料研究室 桑田調也

2014年2月15日 薬師寺十字櫻塔（平城第519次）
参加者：350人 調査面積：872m²
都城発掘調査部考古第一研究室 庄田慎矢

2014年3月8日 平城宮跡第一次大極殿院地区（平城第520次）
参加者：715人 調査面積：476m²
都城発掘調査部造構研究室 海野 聰

【2014年度】

2014年11月8日 藤原宮大極殿院（飛鳥藤原第182次）
参加者：794人 調査面積：1,450m²
都城発掘調査部主任研究員 森川 実

2014年12月14日 藤原東方官衙（飛鳥藤原第183次）
参加者：622人 調査面積：973m²
都城発掘調査部考古第三研究室 森先一貴

2015年2月28日 国宝薬師寺東塔保存修理に伴う基壇
参加者：1,599人 調査面積：314.16m²
都城発掘調査部主任研究員 青木 敦

【2015年度】

2015年10月12日 藤原宮大極殿院（飛鳥藤原第186次）
参加者：1,112人 調査面積：1,548m²
都城発掘調査部考古第三研究室 清野陽一

2015年11月21日 東大寺東塔院跡
参加者：1,897人 調査面積：713m²
都城発掘調査部史料研究室 山本祥隆

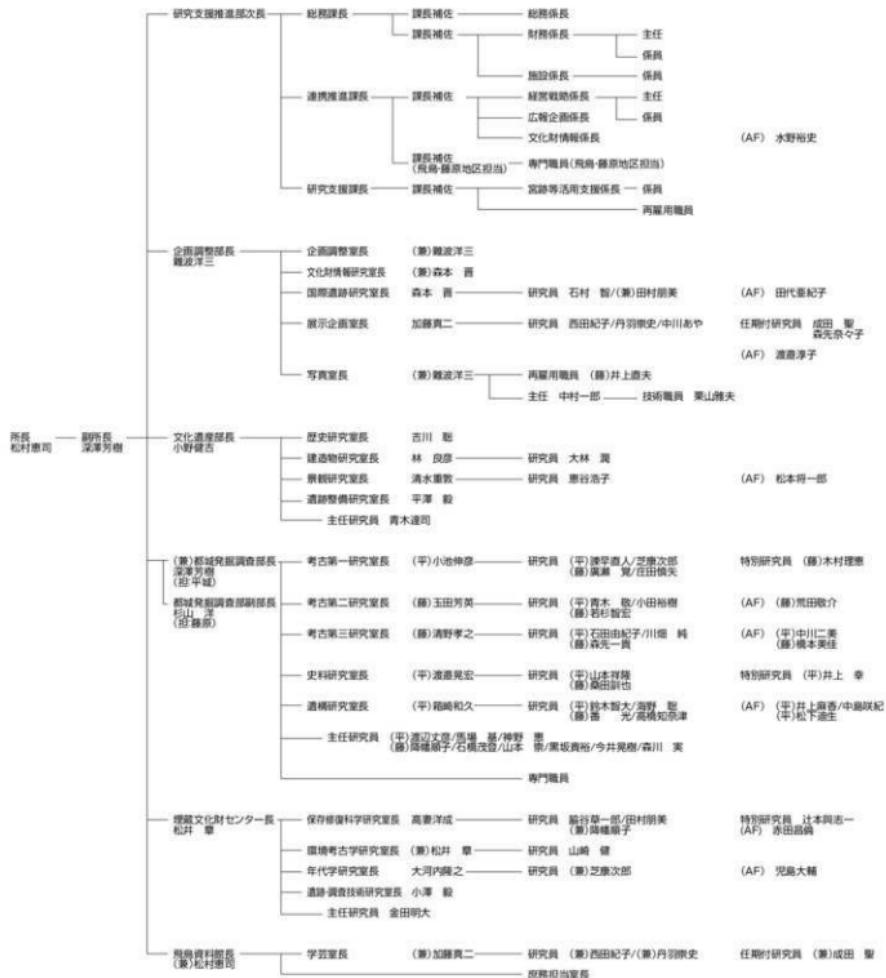
2015年12月20日 興福寺中堂・経蔵・鐘楼（平城第559次）
参加者：1,200人 調査面積：835.5m²

- 都城発掘調査部史料研究室 桑田調也
2016年3月5日 平城京朱雀大路跡（平城第552次）
参加者：680人 調査面積：756m²
都城発掘調査部考古第二研究室 丹羽崇史
- 【2016年度】
2016年5月15日 藤原宮右京九条二・三坊（飛鳥藤原第187次）
参加者：1,753人 調査面積：2,019m²
都城発掘調査部主任研究員 森川 実
考古第三研究室 清野陽一
遺構研究室 前川 歩
2016年6月11日 平城宮二条大路・朱雀大路跡（平城第566次）
参加者：505人 調査面積：684m²
都城発掘調査部遺構研究室 番 光
2016年10月2日 藤原宮朝堂院朝庭（飛鳥藤原第189次）
参加者：1,315人 調査面積：870m²
都城発掘調査部考古第二研究室 大澤正吾
2016年10月8日 東大寺東塔院跡
参加者：1,125人 調査面積：821m²
都城発掘調査部史料研究室 山本祥隆
2017年1月28日 藤原宮大極殿院（飛鳥藤原第190次）
参加者：497人 調査面積：480m²
都城発掘調査部考古第一研究室 和田一之輔
- 【2017年度】
2017年5月21日 平城宮跡東院地区（平城第584次）
参加者：519人 調査面積：1,102m²
都城発掘調査部考古第二研究室 山藤正敏
2017年10月7日 東大寺東塔院跡
参加者：801人 調査面積：628.5m²
都城発掘調査部考古第一研究室 芝康次郎
2017年12月23日 平城宮東院地区（平城第593次）
参加者：823人 調査面積：969m²
都城発掘調査部考古第二研究室 小田裕樹
2018年3月3日 藤原宮大極殿院（飛鳥藤原第195次）
参加者：645人 調査面積：594m²
都城発掘調査部遺構研究室 前川 歩
- 【2018年度】
2018年6月17日 平城宮跡東院地区（平城第595次）
参加者：813人 調査面積：1,512m²
都城発掘調査部遺構研究室 海野 啓
2018年9月15日 藤原宮大極殿院（飛鳥藤原第198次）
参加者：694人 調査面積：1,050m²
都城発掘調査部主任研究員 広瀬 覚
2018年11月11日 東大寺東塔院跡
参加者：1,148人 調査面積：885m²
都城発掘調査部主任研究員 今井晃樹
考古第一研究室 芝康次郎
2018年12月15日 平城宮跡東区朝堂院（平城第602次）
参加者：569人 調査面積：560m²
都城発掘調査部遺構研究室 福島啓人
- 【2019年度】
2019年6月7日 平城宮跡大極殿院（平城第612次）
参加者：180人 調査面積：400m²
都城発掘調査部主任研究員 桑田調也
2019年9月29日 平城宮東方官衙地区（平城第615次）
参加者：892人 調査面積：1,200m²
都城発掘調査部主任研究員 岩戸晶子
2019年10月6日 藤原宮大極殿院（飛鳥藤原第200次）
参加者：971人 調査面積：1,179m²
都城発掘調査部考古第一研究室 松永悦枝
2019年11月10日 東大寺東塔院跡
参加者：850人 調査面積：827m²
都城発掘調査部上席研究員 今井晃樹
考古第一研究室 芝康次郎
考古第二研究室 小田裕樹
史料研究室 山本祥隆
- 【2020年度】
2020年9月28日 興福寺鐘樓・東金堂院（平城第625次）
参加者：606人 調査面積：345m²
都城発掘調査部主任研究員 森先一貴
2020年11月7日 藤原宮大極殿院（飛鳥藤原第205次）
参加者：480人 調査面積：1,505m²
都城発掘調査部主任研究員 若杉智宏
- 【2021年度】
2021年10月2日 藤原宮大極殿院（飛鳥藤原第208次）
参加者：619人 調査面積：1,904m²
都城発掘調査部飛鳥・藤原地区考古第三研究室
岩永 瑞
2021年10月9日 興福寺東金堂院の門と回廊（平城第640次）
参加者：949人 調査面積：260m²
都城発掘調査部平城地区遺構研究室 日黒新悟

5. 飛鳥資料館特別展示・特別陳列

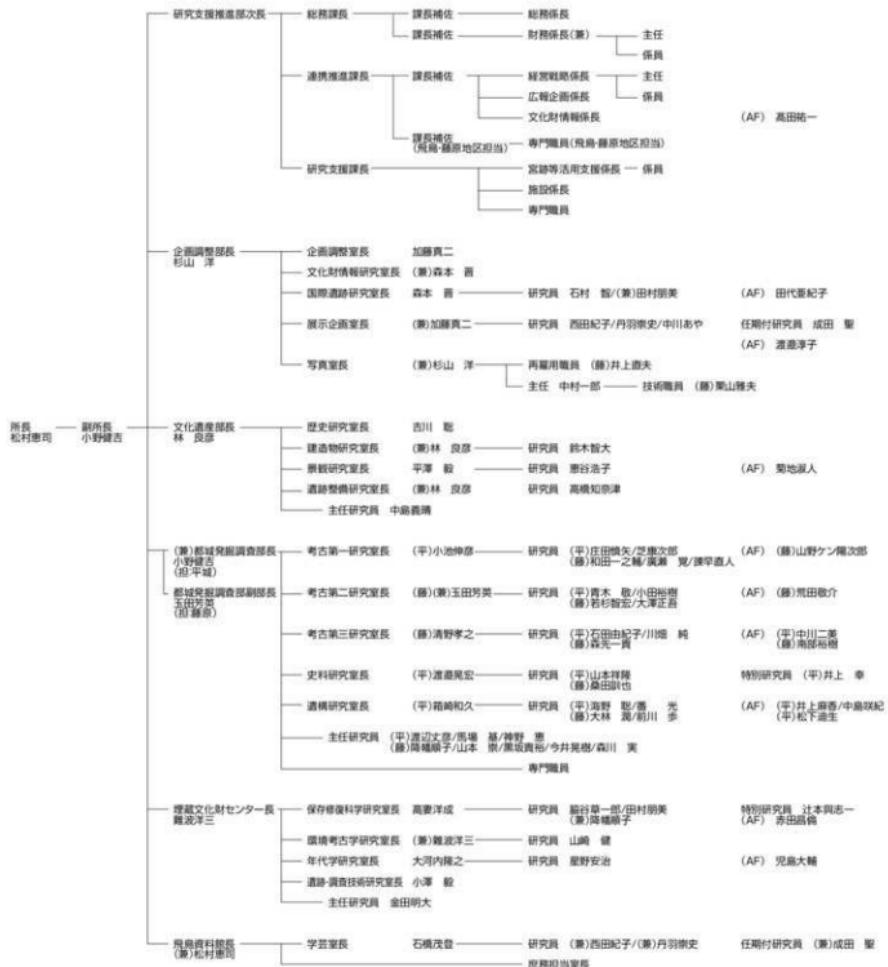
年度	展示名	会期
2012	奈良文化財研究所創立60周年記念 比羅夫がゆく 飛鳥時代の武器・武具・いくさー	春期 4月14日～6月3日
	第2回写真コンテスト「遙かなる車の都」	8月4日～9月17日
	花開く都城文化	秋期 11月1日～12月2日
	飛鳥の考古学2012	冬期 2月2日～3月3日
	第3回写真コンテスト「神々の山 大和三山のある風景」	3月9日～4月14日
2013	飛鳥寺2013	春期 4月26日～6月2日
	「風景の記憶」坂田武嗣	ミニロビー展 5月1日～6月30日
	飛鳥・難波を考古学する	夏期企画 8月1日～9月1日
	第4回写真コンテスト「飛鳥山の廢き」	9月7日～10月6日
	日光男体山のかぐやー山岳信仰奉賽鏡の世界ー	ミニ企画展 9月10日～9月16日
	飛鳥・藤原京への道	秋期 10月18日～12月1日
	発見30周年記念 キトラ古墳壁画特別公開	1月17日～1月26日
	飛鳥の考古学2013	冬期企画 2月14日～3月16日
2014	いにしえの匠たちーものづくりからみた飛鳥時代ー	春期 4月25日～6月15日
	第5回写真コンテスト「飛鳥の巣」応募作品展	夏期企画 7月25日～9月7日
	津田洋 大和の美仏に魅せられて	企画 9月12日～9月28日
	はぎとり きとり・かたどりー大地にきざまれた記憶ー	秋期 10月10日～11月30日
	飛鳥の考古学2014ー織文・弥生・古墳から飛鳥へー	冬期企画 1月16日～3月1日
2015	はじまりの御たち	春期 4月24日～6月21日
	第6回写真コンテスト応募作品展「ひさかたの空いにしえの飛鳥を想ふー」	夏期企画 7月28日～9月13日
	飛鳥資料館開館40周年記念 キトラ古墳と天の科学	秋期 10月9日～11月29日
	飛鳥の考古学2015ー飛鳥の古墳調査最前線ー	冬期企画 1月29日～3月6日
2016	文化財を撮るー写真が遺す歴史	春期 4月26日～7月3日
	第7回写真コンテスト「飛鳥の石」	夏期企画 7月26日～9月4日
	祈りをこめたる祭壇	秋期 10月7日～12月4日
	飛鳥の考古学2016 飛鳥むかしむかし 早川和子原画展	冬期企画 1月24日～3月20日
2017	藤原京を掘るー藤原京ー等地の調査ー	春期 4月28日～7月2日
	第8回飛鳥資料館写真コンテスト「飛鳥の路」	夏期企画 7月28日～9月3日
	高松塚古墳を掘るー解明された築造方法ー	秋期 10月6日～12月3日
	飛鳥の考古学2017	冬期企画 1月28日～3月18日
2018	あすかの原風景	春期 4月27日～7月1日
	第9回写真コンテスト「飛鳥のいきもの」	夏期企画 7月27日～9月2日
	よみがえる飛鳥の工房ー日韓の技術交流を探る	秋期 10月5日～12月2日
	飛鳥の考古学2018	冬期企画 1月25日～3月17日
2019	骨ものがたりー環境考古学の研究室のお仕事	春期 4月23日～6月30日
	第10回写真コンテスト「あすかの古墳」	夏期企画 7月19日～9月1日
	飛鳥ー自然と人ー	秋期 10月11日～12月1日
	飛鳥の考古学2019	冬期企画 1月24日～3月15日
2020	飛鳥の石造文化と石工	8月4日～9月22日
	第11回写真コンテスト作品展「飛鳥の祭」	秋期企画 10月16日～12月6日
	飛鳥の考古学2020	冬期企画 1月22日～3月14日
2021	新収蔵品紹介ー「瓦」と書かれた瓦	ミニ展示 4月23日～5月1日
	第12回写真コンテスト作品展「飛鳥の木」	夏企画 7月16日～9月12日
	屋根を彩る草花ー飛鳥の軒瓦とその文様	秋期 10月15日～12月19日
	飛鳥の考古学2021	冬企画 1月21日～3月13日
2022	飛鳥資料館に寄贈された瓦ー瓦の花咲く飛鳥資料館ー	ミニ展示 4月22日～5月22日
	第13回写真コンテスト作品展「高松塚古墳」	夏期企画 7月15日～9月11日
	高松塚古墳壁画発見50周年・奈良文化財研究所70周年記念 飛鳥美入 高松塚古墳の魅力	秋期 10月21日～12月18日
	飛鳥の考古学2022	冬期企画 1月20日～3月12日

6. 組織の変遷・職員一覧



(平) 平城地区
(第) 飞鸟・藤原地区
(松) 地区担当
(第) 研究
(AF) 特別研究員・准特別研究員・アソシエイトフェロー

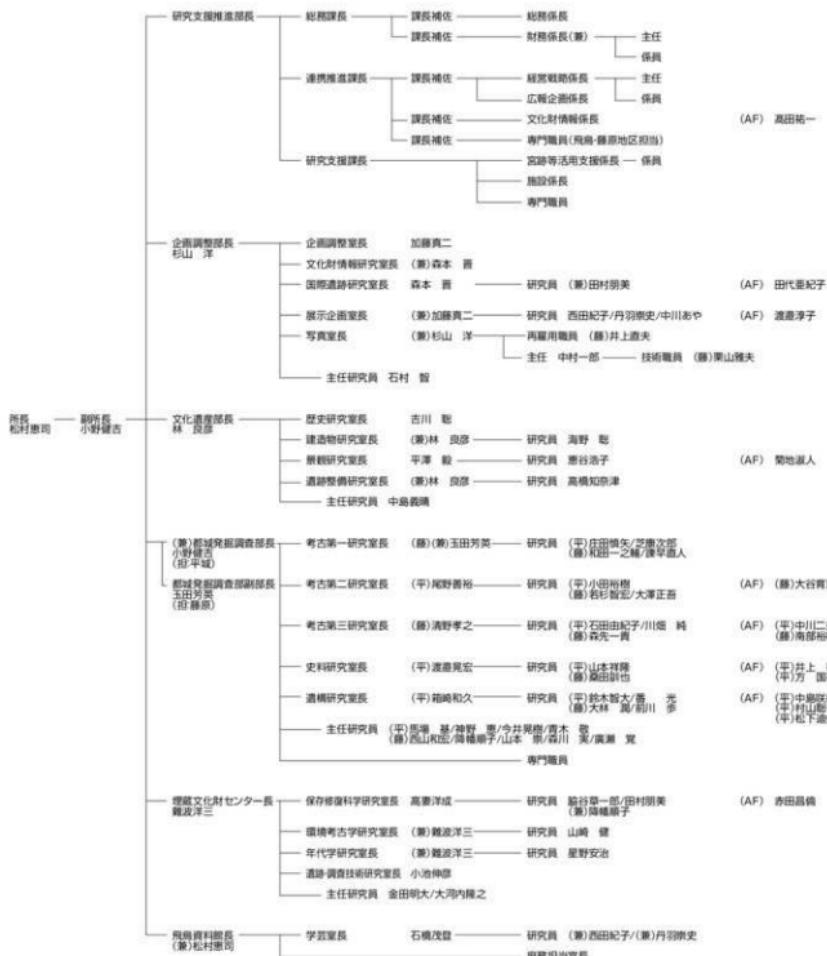
平成24年4月1日現在



- (平) 平城地区
- (藤) 飞鳥・藤原地区
- (担) 地区担当
- (著) 著者
- (AF) 特別研究員・アソシエイトフェロー

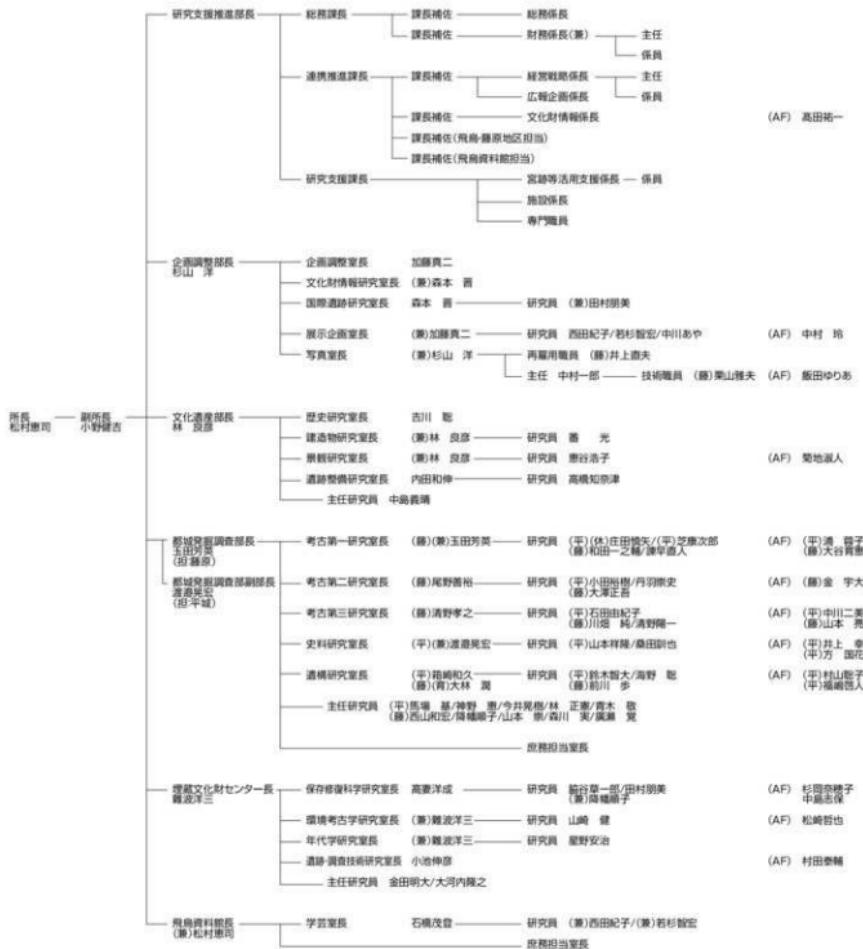
平成25年4月1日現在

秦文研七十年史 161



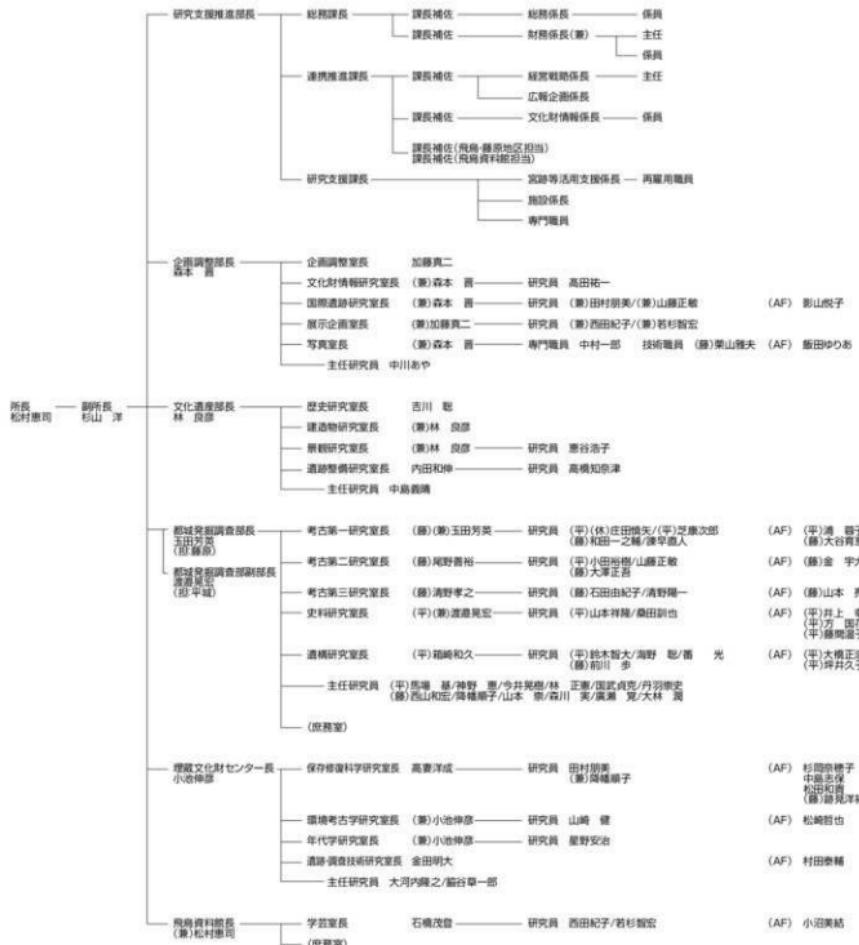
(平)平城地区
(藤)飛鳥・藤原地区
(兼)兼務
(AF)アソシエイトフェロー

平成26年4月1日現在



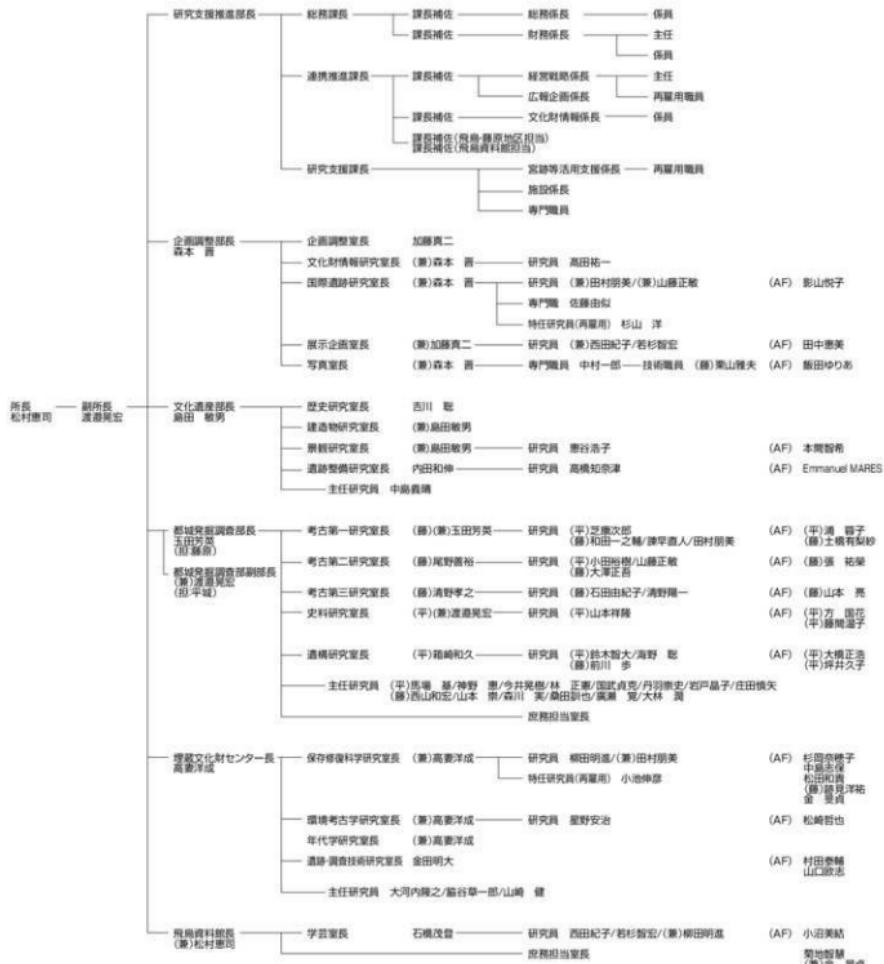
(平) 平城地区
(藤) 藤湖・藤原地区
(兼) 兼務
(AF) アンシエイトフェロー

平成27年4月1日現在

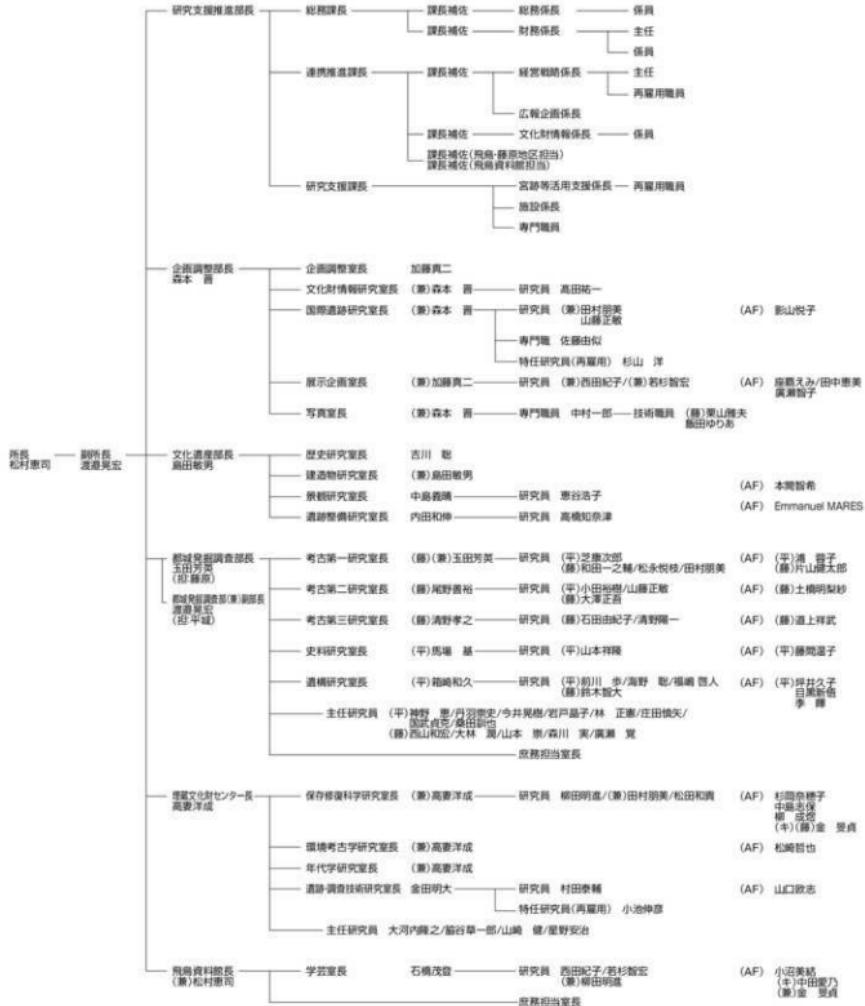


(平)平城地区
(兼)飛鳥・藤原地区
(平)地区担当
(兼)東京
(AF)アソシエイトフェロー

平成28年4月1日現在

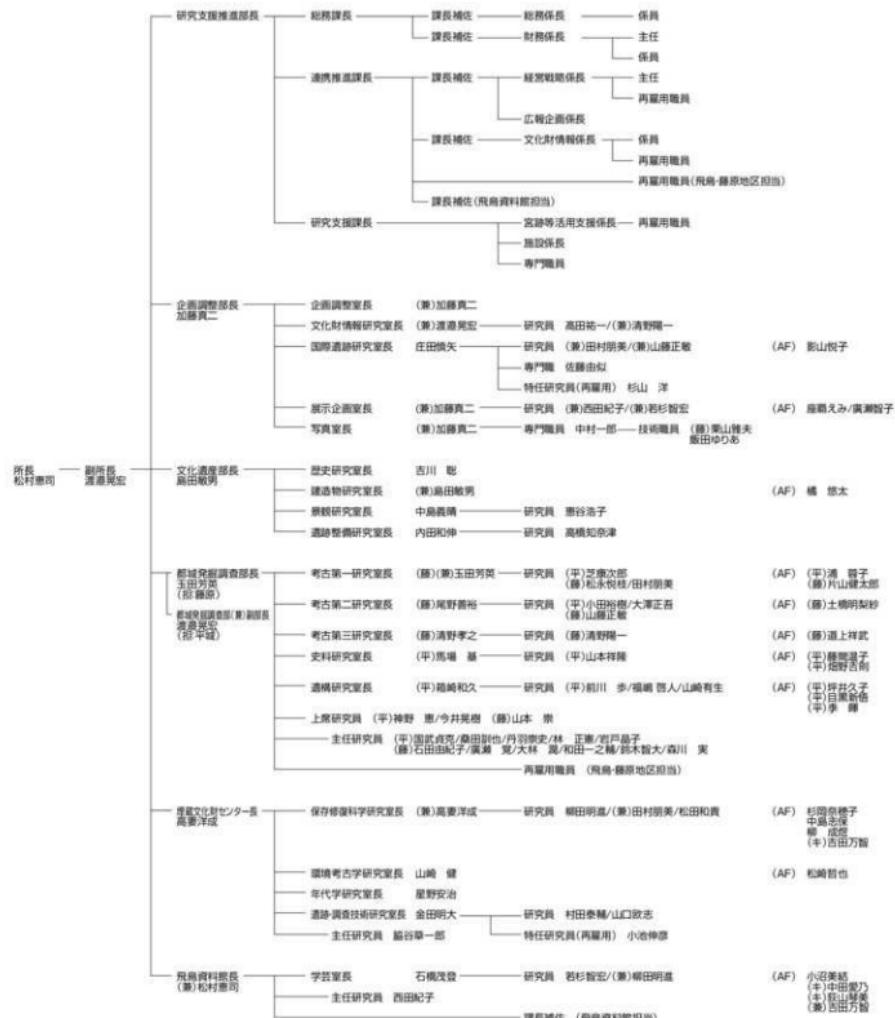


(平):平城地区
(藤):飛鳥・藤原地区
(担):地区担当
(兼):兼務
(AF):アソシエイトフェロー

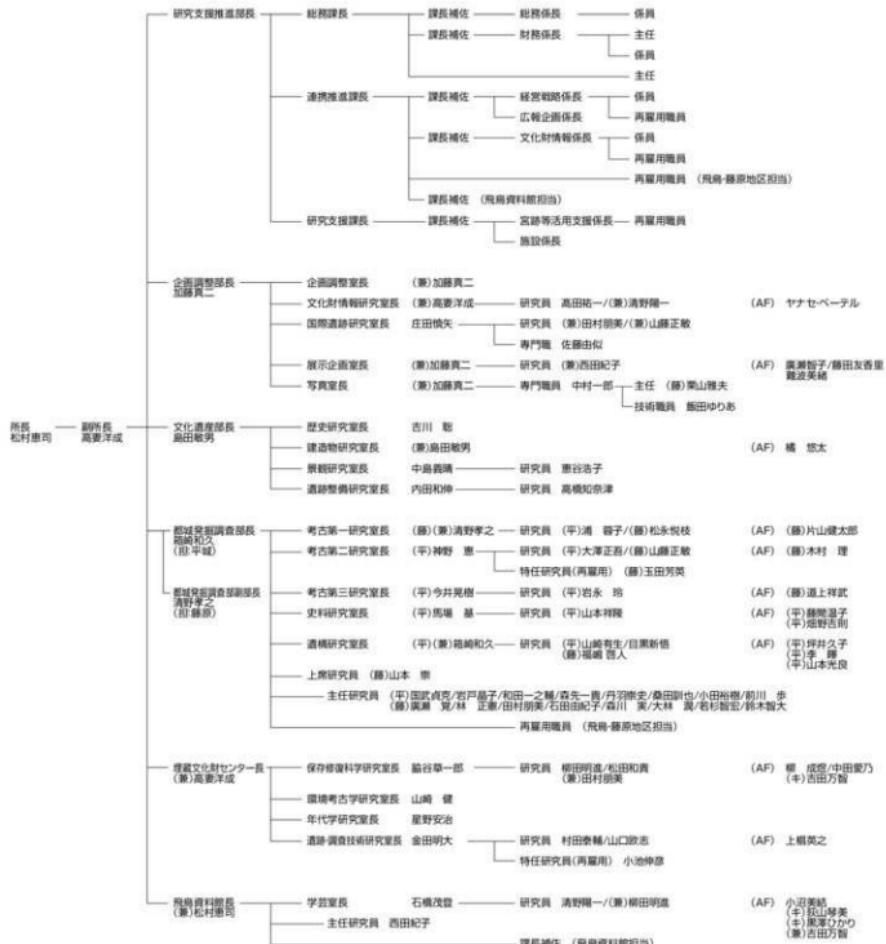


(平) 平城地区
(藤) 飛鳥・藤原地区
(牛) キトラ施設
(担) 地区担当
(兼) 兼務
(AF) アソシエイトフェロー

平成30年4月1日現在

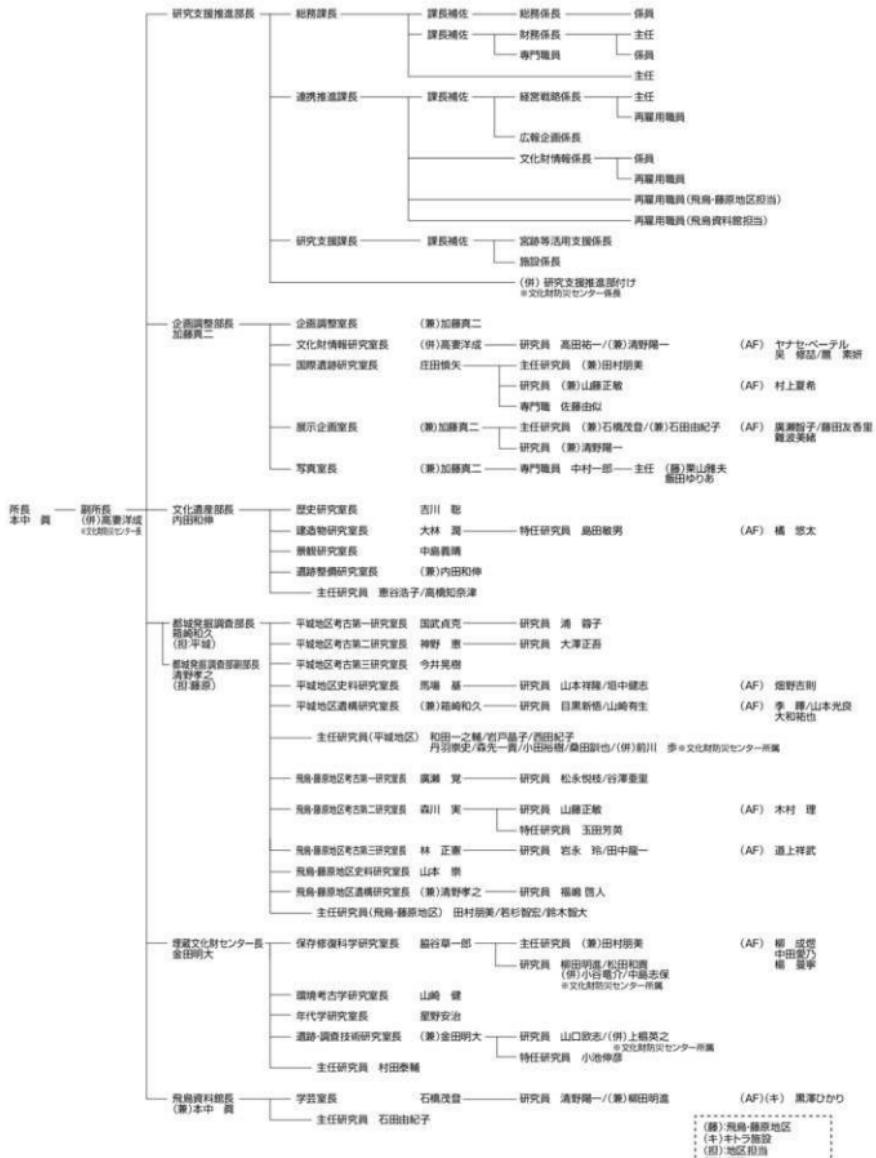


(平) 平成
 (第) 平成
 (藤) 飛鳥・奈良地区
 (中) 地下施設
 (山) 地区担当
 (兼) 著者
 (AF) アシエイトフェロー

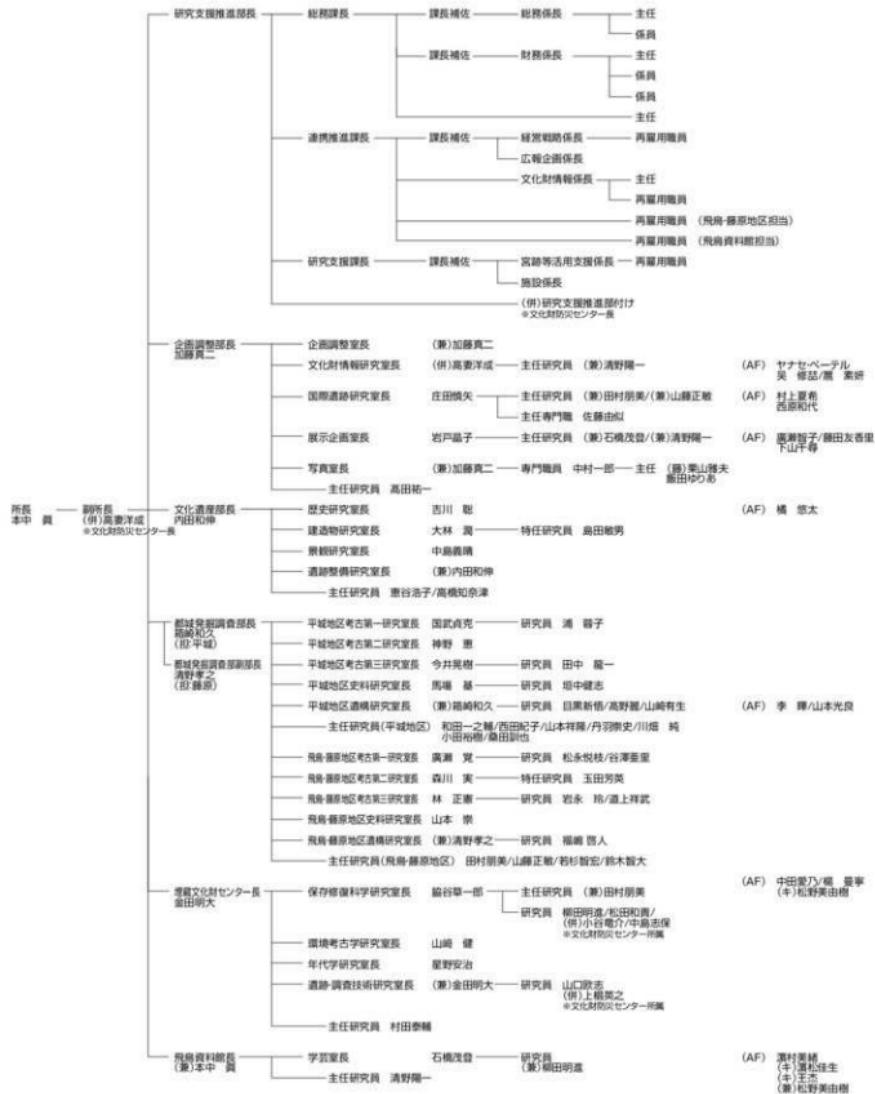


(平)平野
 (兼)飛鳥・藤原地区
 (主)本拠地
 (担)地区担当
 (兼)業務
 (AF)アンシエイトフェロー

令和2年4月1日現在



令和3年4月1日現在
奈文研七十年史 169



(藤):飛鳥・藤原地区
(担):地区担当
(丰):キトラ施設
(桂):西野

合和4年1月1日現在

7. 歴代所長・副所長

所長		副所長	
氏名	在職期間	備考	
黒田 順次	1952.4.1 ~ 1953.2.16	所長事務代理	
田代 勉	1953.2.16 ~ 1959.6.3		
石田 浩作	1959.6.4 ~ 1960.7.31	所長事務代理	
春田 義策	1959.8.1 ~ 1960.12.12		
石田 浩作	1960.12.13 ~ 1961.7.15	所長事務代理	
小林 錠	1961.7.16 ~ 1969.5.26		
麻田 蔦	1969.5.27 ~ 1969.6.30	所長事務取扱	
松下 廉章	1969.7.1 ~ 1972.3.31		
内山 正	1972.4.1 ~ 1974.6.17		
小川 修二	1974.6.18 ~ 1977.3.31		
坪井 清足	1977.4.1 ~ 1986.3.31		
鈴木 審吉	1986.4.1 ~ 1994.3.31		
田中 康	1994.4.1 ~ 1999.3.31		
町田 幸	1999.4.1 ~ 2005.3.31		
田辺 征夫	2005.4.1 ~ 2011.9.30		
松村 忠司	2011.10.1 ~ 2021.3.31		
本中 誠	2021.4.1 ~		

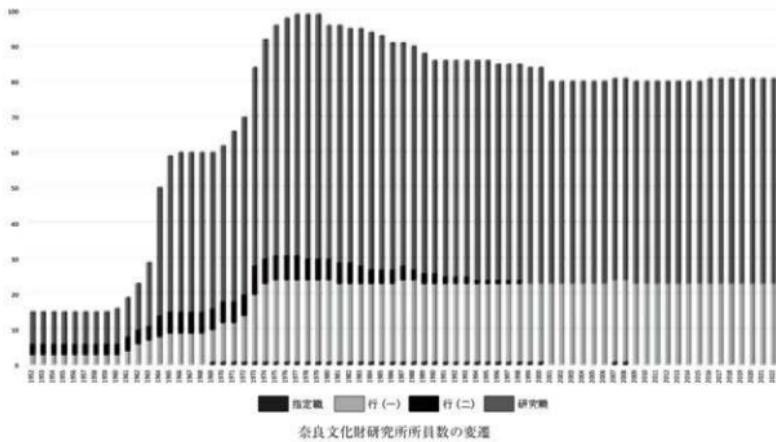
名譽顧問		
氏名	在職期間	備考
左野 博司	2011.7.1 ~	

8. 定員構成の変遷

年度(西暦)	年度(元号)	指定職	行(一)	行(二)	研究職	計	備考
1952	昭和27		3	3	9	15	●文化財保護委員会の附属機関として奈良文化財研究所の名称で発足
1953	28		3	3	9	15	
1954	29		3	3	9	15	●奈良国立文化財研究所と改称
1955	30		3	3	9	15	
1956	31		3	3	9	15	
1957	32		3	3	9	15	
1958	33		3	3	9	15	
1959	34		3	3	9	15	
1960	35		3	3	10	16	
1961	36		4	4	11	19	
1962	37		6	4	13	23	
1963	38		7	4	18	29	
1964	39		8	6	26	50	
1965	40		9	6	44	59	
1966	41		9	6	45	60	
1967	42		9	6	45	60	
1968	43		9	6	45	60	●文化庁の附属機関となる
1969	44	1	9	6	44	60	
1970	45	1	11	6	44	62	
1971	46	1	11	6	48	66	
1972	47	1	13	6	50	70	
1973	48	1	19	8	56	84	
1974	49	1	22	7	62	92	
1975	50	1	23	7	65	96	
1976	51	1	23	7	67	98	
1977	52	1	23	7	68	99	
1978	53	1	23	6	69	99	
1979	54	1	23	6	69	99	
1980	55	1	23	6	66	96	
1981	56	1	22	6	67	96	
1982	57	1	22	6	66	95	
1983	58	1	22	5	67	95	
1984	59	1	22	4	67	94	
1985	60	1	22	4	66	93	
1986	61	1	22	4	64	91	
1987	62	1	23	4	63	91	
1988	63	1	23	3	63	90	
1989	平成元	1	22	3	62	88	
1990	2	1	22	3	60	86	
1991	3	1	22	2	61	86	
1992	4	1	22	2	61	86	
1993	5	1	22	2	61	86	
1994	6	1	22	1	62	86	
1995	7	1	22	1	62	86	
1996	8	1	22	1	61	85	

年度(西暦)	年度(元号)	指定職	行(一)	行(二)	研究職	計	備考
1997	9	1	22	1	61	85	
1998	10	1	22	1	61	85	
1999	11	1	22	0	61	84	
2000	12	1	22	0	61	84	
2001	13		23	0	57	80	●独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所発足
2002	14		23	0	57	80	
2003	15		23	0	57	80	
2004	16		23	0	57	80	
2005	17		23	0	57	80	
2006	18		23	0	57	80	
2007	19	1	23	0	57	81	●独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所発足
2008	20	1	23	0	57	81	
2009	21		23	0	57	80	
2010	22		23	0	57	80	
2011	23		23	0	57	80	
2012	24		23	0	57	80	
2013	25		23	0	57	80	
2014	26		23	0	57	80	
2015	27		23	0	57	80	
2016	28		23	0	58	81	
2017	29		23	0	58	81	
2018	30		23	0	58	81	
2019	令和元		23	0	58	81	
2020	2		23	0	58	81	
2021	3		23	0	58	81	
2022	4		23	0	58	81	

©2001～2006および2009以降、所長は奈文研の定員から除外



9. 平城宮跡解説ボランティア登録者数

期	登録年月日	人数
1期生	1999.10.1	89名
2期生	2000.9.4	31名
3期生	2002.10.1	55名
4期生	2005.10.1	32名
5期生	2011.1.4	73名
6期生	2018.1.1	82名
7期生	2022.5.18	17名

126名(2022年4月現在登録者)

**奈良文化財研究所
七十年の軌跡**

創立七十周年記念

2022年11月30日発行

編集・発行 独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所
奈良県奈良市二条町2丁目9番1号

印刷 株式会社明新社
奈良県奈良市南京終町3丁目464番地

ISBN978-4-909931-90-0



独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所